平成17年度文部科学省・
筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における派遣現職教員の活躍

―帰国隊員報告会―

報告書

主　催：文部科学省、国立大学法人筑波大学
協　力：独立行政法人国際協力機構
平成18年1月7日(土)10:00～17:00
一橋記念講堂(学術総合センタービル内)

平成18年2月

筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)
文部科学省拠点システム構築委託事業
派遣現職教員支援課題

はじめに

文部科学省による青年海外協力隊への現職教員特別参加制度は、平成14年度派遣隊員から実施されました。派遣現職教員による任地における活躍と帰国後の派遣経験の活用方法の共有、活用可能性の拡大を目的に開催される本シンポジウムですが、お陰さまで今年度2回目を迎えました。今回のシンポジウムでは、文部科学省及び国際協力機構による制度と意義の説明の下、「国際教育」推進の中核としての派遣現職教員の役割の重要性が確認されました。そして、帰国した平成14年度、平成15年度の派遣現職教員による帰国報告と帰国後の活動方策の提案がなされました。

シンポジウムの成果として報告書を通して皆様に広くお知らせしたいことの第1は、派遣現職教員が任国において、派遣現職教員の名を馳せるすばらしい活躍をしていることです。お知らせしたいことの第2は、帰国隊員の優れた教育協力経験の活用の必要性が、「国際教育」の推進という国家政策の中で確認されたことです。そして、お知らせしたいことの第3は、帰国隊員がすでに教育実践における派遣経験の活用を模索し、すでに「国際教育」の推進に着手していることです。

シンポジウムは三部で構成しました。開式に際しては、主催者である文部科学省より井上正幸統轄官、協力者である独立行政法人国際協力機構からは松岡和久理事よりご挨拶をいただき、文部科学省初等中等教育局国際教育課斉藤晶子課長補佐より「国際教育の推進」についてご講演いただきました。第1部では、派遣現職教員による活躍として20人の帰国隊員による帰国報告をいただきました。第2部では、「国際教育」推進のための3人の帰国隊員による帰国後の活動事例を共有しました。最後に本事業の活動内容を紹介させていただきました。本報告書は、それらの概要を収めています。

末筆ながら、日本中から集まった171名の参加者にお礼申し上げますとともに、今後とも青年海外協力隊を通して派遣される現職教員支援の輪を、皆様と広げていくことができればたいへん幸いでございます。皆様からのご提案をお待ち申し上げます。

2006年1月31日

文部科学省　拠点システム構築委託事業
派遣現職教員支援課題
代表者　礒田正美

平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

「開発途上国における派遣現職教員の活躍」―帰国隊員報告会―

報告書（平成18年2月発行）

ページ	正	誤
p. 11　標題	「開発途上国における...」	「発展途上国における...」
p. 28後　中表紙	野本純一　教諭　※	野本純一　教諭
p. 29 真ん中あたり	新しく生徒を募集しなければならない。もし生徒が集まったら...	新しく生徒を募集しなければならない。もし生（改行）
p. 39　標題	ベトナム	ベトナム派遣
p. 69　標題	佐伯市立宇目緑豊中学校	大分県佐伯市立宇目緑豊中学校
p. 93　標題	三条市立月岡小学校	新潟県三条市立月岡小学校
p. 129　標題	村上　かおり	村上かおり
p. 157　標題	三野　光雄	三野光雄
p. 197　標題	桑名市立深谷小学校	三重県桑名市立深谷小学校
pp. 211～212	改行時の字下げを1字下げに	改行時の字下げが2字下げの箇所
p. 227　標題	五傳木　浩樹	五傳木浩樹
p. 267　標題	草津市立老上小学校	滋賀県草津市立老上小学校
p. 313　標題	池田　一成	池田一成

平成18年5月1日現在　　（文責　茅野）

目次

プログラム …… 1

挨　拶　文部科学省国際統括官　井上　正幸 …… 3
挨　拶　国際協力機構理事　松岡　和久 …… 11
講　演　「国際教育の推進」 …… 19
文部科学省初等中等教育局国際教育課課長補佐 齋藤　晶子

派遣現職教員の活躍 …… 29

アジア分科会

中山　晴美　(14-1，カンボジア，体育) …… 29
(小諸市立美南ガ丘小学校)
清水　大格　(15-1，ベトナム，小学校教諭) …… 39
(二宮町立二宮小学校)
海老沢　穣　(15-1，マレーシア(西)，養護) …… 57
(東京都立小金井養護学校)
工藤　昭正　(15-1，バングラディシュ，理数科教師) …… 69
(佐伯市立宇目緑豊中学校)
西山　晃弘　(14-1，ネパール，理数科教師) …… 77
(群馬県立勢多農林高等学校)

中南米分科会

野本　純一　(15-1，ボリビア，小学校教諭) …… 93
(三条市立月岡小学校)
金戸　裕美　(15-1，ジャマイカ，養護) …… 105
(富山県立となみ養護学校)
上野　美奈子　(15-1，ホンジュラス，小学校教諭) …… 121
(牛久市立岡田小学校)
村上　かおり　(15-1，エクアドル，小学校教諭) …… 129
(鳥取市立湖東中学校)
櫻井　麻利子　(15-1，ニカラグア，家政) …… 139
(新潟県立白根高等学校)

アフリカ分科会

三野　光雄　(14-1，ウガンダ，理数科教師) …… 157
(大阪府立成城工業高等学校)

谷　昌亮　(14-1，タンザニア，理数科教師)　…… 175
(尼崎市立尼崎産業高等学校)
宮村　香　(15-1，ザンビア，小学校教諭)　…… 197
(桑名市立深谷小学校)
加藤　嘉文　(15-1，ザンビア，養護)　…… 211
(和歌山県立和歌山ろう学校)
五傳木　浩樹　(15-1，ジンバブエ，小学校教諭)　…… 227
(新潟県立佐渡高等学校)
大洋州・欧州分科会
藤田　昌美　(15-1，ウズベキスタン，青少年活動)　…… 257
(長野市立鬼無里中学校)
枝重　美香　(14-1，バヌアツ，小学校教諭)　…… 267
(草津市立老上小学校)
堀口　かえで　(15-1，ルーマニア，ソーシャルワーカー)　…… 287
(大東市立谷川中学校)
荻野　晃子　(15-1，マーシャル，小学校教諭)　…… 303
(岡山市立南輝小学校)
池田　一成　(14-1，ポーランド，体育)　…… 313
(東京都立第一商業高等学校)

帰国後の活動と協同　…… 325
渡部　和江　(久万高原町立美川中学校)　…… 325
(15-1，ガーナ，家政)
永月　明子　(城山町立川尻小学校)　…… 335
(15-1，パラグアイ，音楽)
関野貴之　(秦野市立鶴巻小学校)　…… 347
(15-1，バヌアツ，小学校教諭)

派遣隊員へのe-支援事業等と拠点システムの取り組み　…… 361
筑波大学教育開発国際協力研究センター　礒田　正美

資料
1　「The Independent」記事　(July 24, 2005)　…… 365
2　「The Independent」記事　(July 24, 2005)　…… 366
3　「京都新聞」記事　(平成17年9月28日付)　…… 367
4　「中日新聞」記事　(平成17年9月29日付)　…… 368

5　「神奈川新聞」記事　（平成 17 年 9 月 30 日付）　…… 369
6　「日本教育新聞」記事　（平成 18 年 1 月 23 日付）　…… 370
7　「教育新聞」記事　（平成 18 年 2 月 9 日付）　…… 371
8　「JOCVNEWS」（平成 18 年 2 月 15 日付）　…… 372
9　速報つくば　2005 年 15 号　…… 373
10　速報つくば　2006 年　2 号　…… 374
11　シンポジウム案内　…… 375

平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム
「開発途上国における派遣現職教員の活躍」—帰国隊員報告会—
プログラム

10:00　開会

プログラム1

挨　拶　文部科学省国際統括官　井上正幸

挨　拶　国際協力機構理事　松岡和久

講　演　「国際教育の推進」

文部科学省初等中等教育局国際教育課課長補佐 齋藤晶子

—分科会へ移動—

11:10　プログラム2　派遣現職教員の活躍　4分科会：発表各30分（質疑込み）

	アジア （中会議場1）	中南米 （中会議場2）	アフリカ （中会議場3）	大洋州・欧州 (会議室202＋203)
11:10	中山晴美 教諭 （14-1） 小諸市立美南ガ丘小学校 (カンボジア，体育)	野本純一 教諭 （15-1） 三条市立月岡小学校 （ボリビア，小学校教諭）	三野光雄 教諭 （14-1） 大阪府立成城工業高等学校 （ウガンダ，理数科教師）	藤田昌美 教諭 （15-1） 長野市立鬼無里中学校 （ウズベキスタン，青少年活動）
11:40	清水大格 教諭 （15-1） 二宮町立二宮小学校 （ベトナム，小学校教諭）	金戸裕美 教諭 （15-1） 富山県立となみ養護学校 （ジャマイカ，養護）	谷昌亮 教諭 （14-1） 尼崎市立尼崎産業高等学校 （タンザニア，理数科教師）	枝重美香 教諭 （14-1） 草津市立老上小学校 （バヌアツ，小学校教諭）

—昼食（12：10－13:15）—

13:15	海老沢穣 教諭 （15-1） 東京都立小金井養護学校 （マレーシア(西)，養護）	上野美奈子 教諭 （15-1） 牛久市立岡田小学校 （ホンジュラス，小学校教諭）	宮村香 教諭 （15-1） 桑名市立深谷小学校 （ザンビア，小学校教諭）	堀口かえで 養護教諭 （15-1） 大東市立谷川中学校 （ルーマニア，ソーシャルワーカー）
13:45	工藤昭正 教諭 （15-1） 佐伯市立宇目緑豊中学校 （バングラディシュ，理数科教師）	村上かおり 教諭 （15-1） 鳥取市立湖東中学校 （エクアドル，小学校教諭）	加藤嘉文 教諭 （15-1） 和歌山県立和歌山ろう学校 （ザンビア，養護）	荻野晃子 教諭 （15-1） 岡山市立南輝小学校 （マーシャル，小学校教諭）
14:15	西山晃弘 教諭 （14-1） 群馬県立勢多農林高等学校 (ネパール，理数科教師)	櫻井麻利子 教諭 （15-1） 新潟県立白根高等学校 （ニカラグア，家政）	五傳木浩樹 教諭 （15-1） 新潟県立佐渡高等学校 （ジンバブエ，小学校教諭）	池田一成 教諭 （14-1） 東京都立第一商業高等学校 (ポーランド，体育)

—全体会へ移動（含む休憩）—

15:15　プログラム３　帰国後の活動と協同

・帰国後、派遣経験を生かした教育活動事例報告（20 分×2 件）

渡部和江 教諭（15-1）久万高原町立美川中学校（ガーナ，家政）

永月明子 教諭（15-1）城山町立川尻小学校（パラグアイ，音楽）

・「インターネットライブ授業」の報告（30 分）

関野貴之 教諭（15-1）秦野市立鶴巻小学校（バヌアツ，小学校教諭）

16:25　プログラム４　派遣隊員への e-支援事業等と拠点システムの取り組み

筑波大学教育開発国際協力研究センター　礒田正美

16:40　質疑

16:50　閉会

17:00　懇親会（会費 1,000 円）

プログラム１

挨拶　文部科学省国際統括官　井上正幸

挨拶　国際協力機構理事　松岡和久

講演　「国際教育の推進」

文部科学省初等中等教育局

国際教育課課長補佐 齋藤晶子

国際協力の現状と現職教員派遣への期待

井上　正幸
（文部科学省国際統括官）

皆様おはようございます。本日は文部科学省と国立大学法人筑波大学の共催、それからJICAのご協力により、昨年に引き続きまして、開発途上国における派遣現職教員の活躍というテーマで、途上国に派遣された先生方、又はこれから派遣される先生方、あるいは関係の皆様にお集まりいただきまして、お話を伺う、経験を伺う、という機会をもてたことを主催者として大変喜んでいます。後ほど、どのようなご活躍をされたかという事についてお話があるかと思いますが、私のほうからは挨拶というよりは、国際教育協力の現状がどうなっているのかということにつきまして若干お時間いただき、このシンポジウムのイントロダクションという事にさせていただきたいと思います。

すでに途上国に行かれた方はご存知だと思いますが、世界的に、すべての人に教育を与えるということが大きな国際的なアジェンダになっています。世界で1億人の子どもたちが未就学でありますし、8億人の人たちが字が書けないということが大きな問題になっています。それがサハラ以南のサブサハラと南西アジアに沢山の方々、それから飢えと貧困で毎日2万5千人が亡くなっているというのが世界の現状です。なぜ日本がこういったところに協力を、教育の分野で支援しなければいけないのかということなんですが、一つは貧困の削減を目指すということ、あるいは人間の安全保障とエンパワーメント、あるいは国づくりを支える人材育成、それからグローバル経済と知識型社会に対応する人材の育成を目指す中での教育分野の支援ということが日本のODA海外政策の大きな柱になっているわけです。

その世界的な潮流を見ますと、これは先ほどの話の繰り返しになるんですが、2000年4月にはダカールで世界教育フォーラムが開かれております。それからその年の9月にはミレニアムサミットということで、国連ミレニアム開発目標、ミレニアムデベロップメントゴールが定められています。更には2002年ではG8サミットで初めて教育支援の重要性が確認され、成長のための基礎教育のイニシアティブが始まりました。

日本は今までそのような流れの中でどのようなことをしてきたかと言いますと、従来より開発途上国に対するODAの体制を敷いているわけですが、国づくりと人づくりということをより焦点化しています。各国ともいろいろなニーズがあるし、いろいろな状況があるかと思いますが、もちろん各国が自分たち自身でやることがこの人材育成にとって非常に大事なことだと思います。それをどのように支援していったら良いかということが、ひとつの重要な柱だと思っています。

実はODAというのは予算も非常に厳しくなってきています。外務省が多くのODA予算を持っているところですが、文部科学省のODA予算は政府で第3番目です。第3番目ではあ

りますが、その97%は留学生交流に充てられています。文部科学省はJICAあるいはJBICといったODAの予算と人材がいるところと連携を取りながら仕事をしていくというのが今の状況です。

国際協力をもう少し詳しく申し上げますと、留学生の交流、あるいは学術交流・研究交流というのも大事ですし、それから国際機関との連携、それから先ほど申し上げましたように、JICAとの協力があります。このJICAとの協力では、専門家がJICAから派遣をされておりますし、あるいは途上国から来た研修生を、各種関係機関で受け入れ、研修しております。また、青年海外協力隊事業、現職教員の特別参加制度を通じましてJICAと協力、連携を取りながら仕事をしていくということです。そのほかJBICとの連携ということもございますし、それから国際的な機関UNESCO、世銀あるいは国際連合といったような機関との連携を取りながら仕事をしていくというものです。

文部科学省としては、このような仕事をしていくために、国際教育協力懇談会（文部科学大臣の私的懇談会）の提言を踏まえ、拠点システムの構築、あるいは大学における国際開発協力の推進、青年海外協力隊現職教員特別参加制度、あるいは、紛争終結後の国づくりにおける教育復興の支援を行っています。この国際教育協力懇談会において、これは4年前に開きまして、報告が出されましたが、この現職教員派遣の充実ということ、あるいは拠点システムを充実するということが、この懇談会の一つの成果でありまして、我々はそれに沿って、政策を進めているところです。

この拠点システム構築事業というのは、以前は必ずしもシステマティックではなくて、ある大学のある先生がある国に行って協力をするうえで、どうしても知見、経験というものが集約されずバラバラでありましたことから、この協力経験の蓄積、共有化を図るために、拠点システムによる国際協力を開始し、筑波大学を初めとする拠点大学等に運営していただいているところです。

青年海外協力隊現職教員特別参加制度につきましては、一つは文部科学省からJICAに推薦のあった方々について１次選考の筆記試験を免除すること。もう一つは、訓練および派遣期間を４月から翌々年の３月までの２年間に短縮すること、通常は２年３ヶ月になるわけですが、いわゆる学期、４月から始まって３月に終わるということや、教育委員会等の人事もありますので、できるだけ現職の先生方が参加しやすい条件を整えたということです。その実績を見ますと、平成13年度から開始して、17年度では派遣予定者数が89名になっています。当面これをぜひとも100名にしたいと思っておりますので、各関係の先生方、また教育委員会の方々に是非ご協力をいただければ、大変ありがたいと思っております。

そのほか紛争後の国の教育復興支援につきましては、アフガニスタン、これは2001年のアフガン戦争の後、例えば女子教員の研修を日本の五つの女子大学で実施、JICAを通じて教育アドバイザーを派遣、あるいはカブール大学の復興を支援するなど、アフガンの教育復興に取り組んでいます。

JICAの派遣専門家につきましては、主に教育、保健医療、農林水産などの分野で派遣されています。それから、小中高等学校の先生が全体の中で9名ということですが、この現職教

員特別参加制度で行かれた方々には、その経験を生かして、将来 JICA の派遣専門家になっていただく事もお考えていただければ、大変ありがたいと思っております。

最後に、なぜこの現職教員派遣に意義があるかということですが、一つには、先方の国が利益するということです。ODA による国際教育協力というのは、是非これが必要だと思う日本の人たちの支援がなければできないわけです。文部科学省にとって、日本にとって、どういうメリットがあるのか、という事も考えなければならないし、あるいは、行かれる先生方にとってどういうメリットがあるのかということも考えなければなりません。途上国における様々な体験を学校の中でも、教室の中でも、あるいは学校の外でも還元出来るかと思います。ここに掲げてありますように、コミュニケーション能力の向上、あるいは概念化能力の向上、あるいは日本の教育の再認識、あるいは異文化理解の向上。これが日本の教育現場における効果、つまり途上国での経験というのは、日本の教室よりも分かりやすい授業をどのように行ったら良いんだろうか、非常に難しいところで、問題を解決しながらやってきたわけですから、それをどのように日本の教室で出来るのか、日本の教育のいいところはどこなのか、そして内なる国際化をどのように実現して行ったら良いのかということが、実はこの事業を通じて、日本が、あるいは日本の教育が得る大きな利点なのではないかと思っています。

そういうことで、これから行かれる先生方に、大いに期待をしておりますとともに、帰国された先生方から、ぜひ沢山のことを学びたいと思っています。本日のシンポジウムがそういったことに役立てば、主催者として、大変うれしく思うところです。簡単ですが、ご挨拶に変えさせていただきます。ありがとうございました。

国際協力の現状と
現職教員派遣への期待

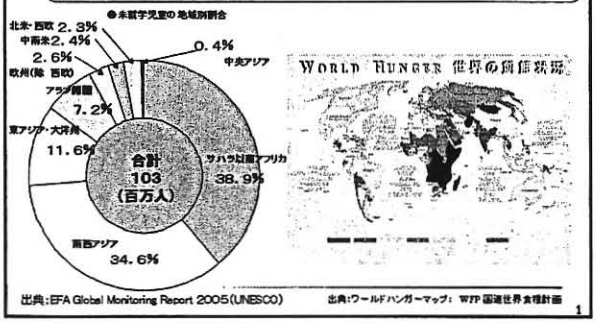
平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム
2006年1月7日（土）　10:00-10:15
文部科学省国際統括官　井上正幸

Ministry of Education,Culture,Sports,Science and Technology
(MEXT)

0

すべての人に教育を

世界では約1億人の未就学児童、約8億人の非識字者がいる。飢えと貧困で毎日2万5千人が亡くなり、5秒に1人の子どもが飢えとその関連の病気で命を落としている。



出典：EFA Global Monitoring Report 2005(UNESCO)　出典：ワールドハンガーマップ：WFP 国連世界食糧計画

1

なぜ教育分野の支援をするのか

- 貧困削減をめざして
- 人間の安全保障とエンパワメント
- 国づくりを支える人材育成
- グローバル経済と知識型社会に対応する

2

教育支援の世界的潮流
「万人のための教育（Education for All）」

世界の未就学児童の数：9930万人・・・・うち、女性が55%
サブサハラ41%　南西アジア30%
世界の成人非識字者：7億7113万人　（約2／3が女性）
（「EFAグローバルモニタリング・レポート2006」より引用）

2000年4月　世界教育フォーラムでの「ダカール行動枠組み」の採択
- 2015年までの初等教育の完全普及
- 2005年までの初等中等教育における男女就学格差の是正など

2000年9月　国連ミレニアムサミット「国連ミレニアム開発目標（MDGs）」

2002年6月　カナナスキスサミットで日本の教育支援策
「成長のための基礎教育イニシアティブ（BEGIN）」発表

3

日本と教育支援

日本は、ODA（政府開発援助）として、開発途上国に対する国際協力を行っており、従来より「国づくり」と「人づくり」を重視。

世界の人々が等しく、よりよい教育を受けられるようになることは、世界共通の願い。
日本は、これからも開発途上国の開発段階やニーズに応じた教育支援を国際協力の重要な柱の一つとして取組んでいる。

4

平成18年度　文部科学省ODA予算（案）

（単位：百万円）

区分	主要事項	平成17年度予算額	平成16年度予定額	対前年度増減額
教育	留学生交流	42,576	42,073	△503
	日本語教育	136	80	△56
	国際教育協力の推進	138	140	3
	調査研究等	33	33	0
文化	芸術文化	52	52	0
	文化財保護	65	65	0
スポーツ	スポーツ交流	10	10	0
国際機関への協力	ユネスコ活動等	533	512	△22
	国際連合大学	219	222	3
	アジア・太平洋経済協力(APEC)	15	8	△6
	その他(国際分担金)	31	32	1
文部科学省所管合計（対前年度比）		43,809 (△1.1%)	43,228 (△1.3%)	△581

※百万円未満四捨五入のため合計に不一致がある。

5

文部科学省関係の主な国際協力①

■ 我が国としての貢献
MDGsの達成等国際社会における我が国の貢献

■ 文部科学省としての貢献
途上国からの教育分野における協力要請の増大への貢献
大学等における国際協力の推進・・・大学等の"知"の活用、大学としての国際貢献
国際協力人材の育成
国公私立大学、教育委員会、小中高校等との連携

1. 留学生交流
受入れ:12万1千人(2005年5月)
海外留学(日本人学生):7万9千人(2002年)
留学生制度を活用した途上国の人材育成
帰国留学生の有効活用
2. 学術交流・研究協力
科学技術アドバイザーの派遣、チュニジア・テクノパーク等への協力、産業創出への協力
3. 国際機関との連携
ユネスコ、OECD、国際連合大学、APEC、EUなどの国際機関等を通した国際協力・多国間協力もますます重要になってきており、教育の分野で高い国際評価を受けている我が国の積極的な取り組みが求められている。

6

文部科学省関係の主な国際協力②

4. 独立行政法人国際協力機構(JICA)事業への協力
◆ 専門家派遣　432人(2004年度)　(参考 697人(1999年度))
[過去の協力分野]
高等教育支援、理数科教育支援、教員養成、指導法改善・指導力向上、学校運営管理改善、地方教育行政改善、医学教育、歯学教育、地域保健強化、母と子の健康手帳、エイズ及び結核対策、農村開発、家畜衛生改善、技術教育・訓練、自動車整備技術教育、遠隔地教育、情報通信技術教育、地震防災対策、教育省教育アドバイザー、科学技術省科学技術アドバイザー　等
◆ 研修員受入れ　大学が受け入れたJICA研修員 540人(2003年度)
◆ 開発調査や事前評価調査、終了時評価調査等への参加
◆ 国内支援委員会への協力
◆ 青年海外協力隊事業への協力 「現職教員特別参加制度」
◆ 技術協力プロジェクトへの協力
◆ 協力協定　3件 (帯広畜産大学、北海道大学、広島大学)
◆ 草の根技術協力への応募
◆ 国際緊急援助隊への協力 大学等の医療関係者や地震火山津波専門家等の派遣

7

文部科学省関係の主な国際協力③

5. 国際協力銀行(JBIC)との連携
◆ 協力協定　9件(立命館大学、立命館アジア太平洋大学、山口大学、早稲田大学、一橋大学、京都大学、名古屋大学、広島大学、筑波大学)
◆ 人材育成事業への協力
「インドネシア高等人材開発事業」
「マレーシア東方政策」
「ウズベキスタン職業高等学校拡充事業」
「中国内陸部・人材育成事業」　等
◆ 円借款事業評価
◆ JBIC提案型調査への応募

6. 国際機関及び国際援助機関との連携
◆ 国際連合、世界銀行、UNESCO等活動への協力

8

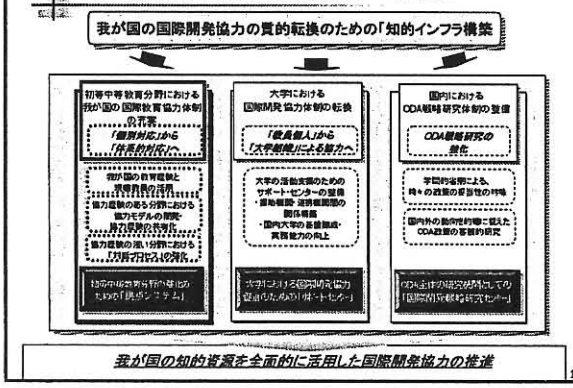
文部科学省における国際教育協力の取り組み

文部科学省では、開発途上国から我が国に対して教育協力の要請が増大していることを踏まえ、外国人留学生の受入れやユネスコ等の国際機関を通した協力を行うとともに、JICA、JBICが実施する人材養成プロジェクト等に協力している。

1. 国際教育協力懇談会(文部科学大臣の私的諮問機関:平成14年7月)
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/kyouiku/main5_a9.htm
(1)拠点システムの構築http://e-archive.criced.tsukuba.ac.jp/images/site_logo01.gif
(2)大学における国際開発協力の推進
「国際開発協力サポート・センター」プロジェクト(SCP)(平成15年7月)
http://www.scp.mext.go.jp/lu/index.htm
・大学のための国際協力プロジェクト受託の手引き
・"I in U" Plan(国際機関等に勤務する邦人職員による大学講義)
2. 青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」(国際教育協力懇談会:平成12年7月)
3. 紛争終結後の国づくりにおける教育復興支援
4. 国際協力機構(JICA)を通じた協力
5. 国際協力銀行(JBIC)を通じた協力　等

9

国際教育協力懇談会の成果

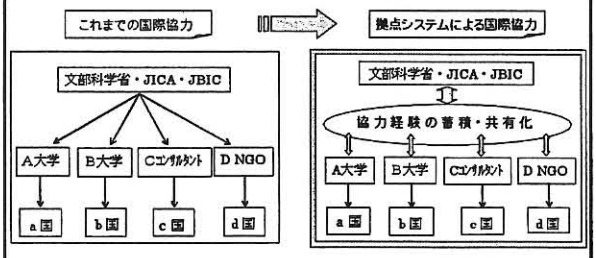


我が国の知的資源を全面的に活用した国際開発協力の推進

10

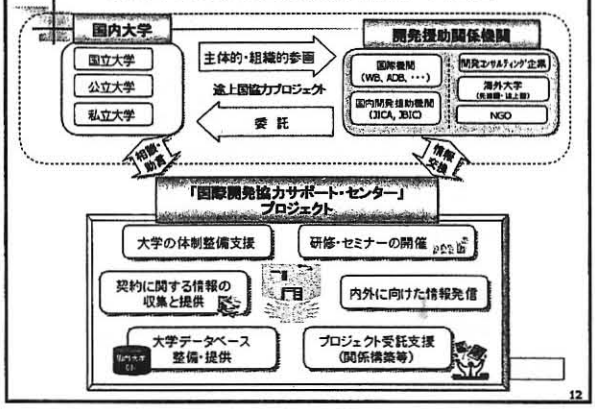
「拠点システム」による教育協力

〈改善点〉 我が国の協力経験やノウハウを整理・蓄積して、
教育協力関係者がこれらを自由に参照・活用できるようにする



11

大学における国際開発協力の推進



12

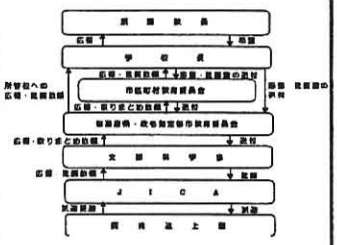
青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」

「現職教員特別参加制度」の特徴

－ 現職教員が参加しやすいよう以下の点に配慮 －

○文部科学省からJICAに推薦のあった者について、一次選考（筆記試験）の免除

○訓練及び派遣期間を4月から翌々年の3月までの2年間に短縮
（通常は2年3ヶ月）



【実　績】

平成13年度募集	平成14年度募集	平成15年度募集	平成16年度募集	平成17年度募集
応募者数　158名	応募者数　177名	応募者数　147名	応募者数　164名	応募者数　183名
派遣者数　63名	派遣者数　56名	派遣者数　64名	派遣者数　83名	派遣予定者数（89名）

13

紛争終結後の国の教育復興支援に関する基本的な考え方

国際教育協力懇談会の最終報告において、紛争が終結した国・地域に対する教育協力についても、平時の対応を応用しつつ、関係機関と連携して具体的な施策を検討することが提言されている。

★ アフガニスタン

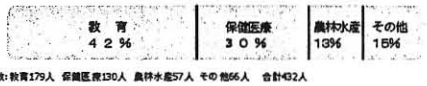
公教育システムの再建のために基礎教育から高等教育に至るまで幅広い支援を行う。
①教育行政の機能強化支援、②教員養成システムの再建、③高等教育の復興

★ イラク

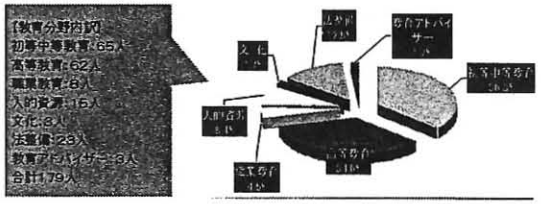
ユネスコ等国際機関との連携を図りつつ、現地の情勢を踏まえながら適切な支援を行う。

14

JICA専門家派遣（分野別実績（教育分野内訳））

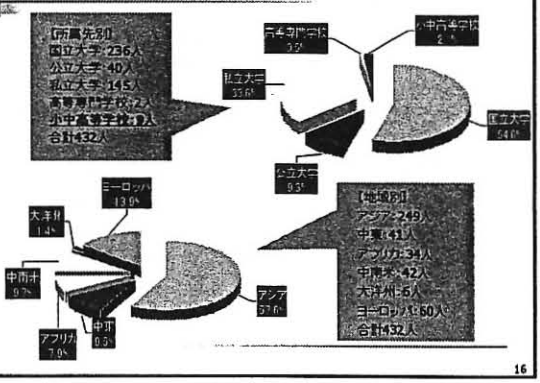


分野別人数：教育179人　保健医療130人　農林水産57人　その他66人　合計432人



15

JICA専門家派遣（所属先・地域別実績）



16

開発途上国における現職教員派遣の意義

現職教員が開発途上国において、言語・文化の壁等を乗り越え、教育協力を実践をすることにより、教員の質が向上し、日本の教育現場においても様々な効果が期待される。

17

最後に

◎現職教員派遣への期待

◆これから派遣される皆様へ

言葉や生活環境に戸惑うかもしれませんが、教員として、青年海外協力隊としての誇りを持って活動していただき、かけがえのない経験を積んできて下さい。

◆帰国された皆様へ

是非、皆様の経験をあらゆる機会をとらえ、子どもたち・同僚・友人・地域等々に伝えてあげて下さい。

16

平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

「発展途上国における派遣現職教員の活躍」

松岡　和久
（国際協力機構理事）

皆様、あけましておめでとうございます。JICAの青年海外協力隊を担当しております松岡と申します。当セミナーについては昨年も出席させて頂き、帰国された先生や、これから派遣される教員の方のお話を聞き大変勉強になりました。

本日は、井上統括官のご説明と重なる部分があるかとは思いますが、現在のJICAの協力の状況等についてご説明させて頂き、私の挨拶に代えさせていただきたいと思います。

こちらは日本政府の協力政策の変遷をまとめたスライドになりますが、最初のODA大綱が92年に制定され、その後90年代にかけて教育関係のODAが増えてきております。そしていわゆるBEGINと呼ばれる「成長のための基礎教育イニシアティブ」がカナダサミットで提唱されまして、2007年までに2,500億円以上の教育分野に対する支援を行うことになりました。この教育重視の流れの背景としては、1990年の「万人のための教育世界会議」が大きなきっかけになっているのではないかと思います。また、2000年の「ミレニアム開発目標」は同様に重要な目標です。この重要な「ミレニアム開発目標」の特徴としては、2015年という目標年次を定めて、2015年までに全ての人に教育を与えましょう、あるいは2015年までに貧困を半減しましょうといったように、具体的な目標値を設定した点が非常に意味のあることではないかと思っております。

次にODAについてご説明します。ODAは、大きく分けて無償資金協力、技術協力、円借款の3つに分けられます。無償資金協力は小学校の建設などがその典型です。そして、技術協力。協力隊の皆様の予算はこちらに含まれています。技術協力のなかにはJICAの専門家や留学生も含まれます。それから、円借款。円借款についてはグラフからわかりますように、年度によって変動があります。この予算配分の実施機関、いわゆる分担については、無償資金協力は外務省が実施、技術協力はJICAが実施、円借款についてはJBICが実施しております。

次にJICAの教育援助方針の変遷についてご説明します。1990年の「Education for All世界会議」を契機として、JICAでの教育援助方針を見直しました。具体的には、従来の高等教育を重視する協力から、基礎教育に重点を置いた援助方針を昨年まとめあげました。重点分野としては、就学率の向上や教育の質の改善、女子教育のformal education、そして教育マネジメントの改善が挙げられます。現職教員の先生方については、教育の質の改善という点で関わっていただけるものと考えております。さらに、教育に対する取り組みは地域によって異なるため、アフリカに対する協力の援助のあり方や、あるいは中南米に対する教育協力のあり方を作り上げました。また、アジアに対する教育協力のあり方も今後作っていく予定です。

こちらは教育分野の技術協力の実績の変化ですけれども、91 年時点で 150 億円くらいの規模であったものが、2003 年では 300 億円くらいに倍増しています。シェアについてもやはり 10%から 20%と、倍増しています。ところが皆さんご承知のとおり、ODA 予算は 1997 年をピークに全体ではもう 3 分の 1 以上削られております。それに伴い JICA 予算も 1997 年をピークにかなり減っておりますが、教育協力につきましては増加しており、ニーズに合わせた予算配分が行われております。こちらは現在の JICA 実績の内訳です。この赤い部分が基礎教育、いわゆる初中等教育ですが、95 年あたりから比べると増加しているということが分かります。これにより、いかに基礎教育を重視しているかお分かりになるかと思います。

地域に対する協力割合を見ると、左側の教育協力全体ではやはりアジアが中心になりますが、基礎教育協力でみていきますと、アフリカがアジアよりも増えていることがわかります。これは主に基礎教育分野ではアフリカが一番進学率も低く、問題も多いためであります。

また、形態別にどのように JICA 予算が配分されているかと申しますと、ボランティアの割合が 43%となり、教育分野ではボランティアが占める割合が大きいことがわかります。技プロというのは技術協力プロジェクト、いわゆる専門家を 3、4 名グループとして派遣して協力する形態を指します。次にこの右の円グラフですけれども、基礎教育部分の半分はボランティアの方々が活躍して頂いており、ここでは皆様のように現職教員の方々の協力により行われているということでございます。

次に青年海外協力隊の説明をいたします。青年海外協力隊は、昨年で 40 周年を迎えました。当初は 5 カ国ぐらいしか派遣していなかったわけですが、現在では 73 カ国に派遣するようになっております。現在年間だいたい 2,500 人くらい現地で活躍しておりまして、その累計では 27,000 人を超えて派遣してきました。教員の派遣については言えば、退職して行かれる方々も含めますとだいたい毎年 200 人から 250 人くらいの方々が海外に出ています。累計では 1,000 人以上の先生方が OB として現場に戻って活躍しているという状況になっております。

こちらは協力隊の派遣実績ですが、最初のころの 29 名の派遣から、今年度派遣した隊員が約 1,300 名となり、2 年間滞在することを勘案すると、およそ 2,500～2,600 名を海外に派遣しているということになります。協力分野については、最初の頃は農林水産分野や自動車整備のような保守操作部門が多かったのですが、最近では、こちらの黄色い教育分野の部分と灰色の保健衛生分野というのが圧倒的に多くなっており、これは現在の途上国のニーズの変化なのではないかと思います。

次に現職教員特別参加制度のお話をします。現職教員特別参加制度では、先生方の給料の 80%を各自治体に対して補てんすることになっております。残りの 20%については各自治体等で負担していただくことになりますが、この 20%が昨今の財政事情の影響もあり、大きな負担になっているということも伺っております。この点につき、ある自治体では、これまで財政上の問題から、合格者全員を派遣することができませんでしたが、今年度から、派遣中は現在の給料を 2 割カットするが合格者については全員派遣すると方針を変更したところ、これまで年間 1 名程度しか派遣できなかったものが、来年には 20 名を超える先生方を派遣す

る予定になっております。

これまでの派遣実績を見ると、63、56、64、82、87名というように、だんだん増加しています。予算的には100名を確保しており、残念ながら目標には至っておりませんが、少しずつこの制度も理解が進んできたと認識しています。現職教員についての分析を行ったところ、協力隊で派遣する20歳から39歳の先生方の割合は、九州各県が多いことがわかります。次に北海道。反対に大都市圏は若い世代が少ない県が多くなっております。

推薦者については、母集団に対する推薦者数という割合になりますと神奈川、京都、奈良、千葉、北海道が多いということです。これが合格者数になりますと、神奈川、静岡、東京の順番となります。参考までにデータをご紹介させていただきました。

私の話は以上でございますが、18年度から隊員として行かれる先生方は、先輩隊員の報告を聞いて勉強して頂きたいと思います。現職教員特別参加制度について、私どもが現在課題として思っておりますのは、現地で活動する隊員をどのように支援していくかという点が一つ挙げられます。例えば一人で活躍している場合に、どうしても応援が必要だというような時にどうするかという問題です。これについては、短期派遣制度を利用して、例えば学校の夏冬休みに、周りの同僚の方々に応援していただくということが考えられます。あるいはシニアボランティアの活用についても今後の検討課題として考えております。さらには、皆さんが隊員として派遣されている間、現地と所属学校の交流に対する支援も積極的に行いたいと思います。先日も北海道の小学校とサモアの小学校との交流授業を行いましたし、筑波大学でも交流授業等々行っているとのことですので、それらに対する支援をさせて頂きたいと思います。

最後に帰国後の現職教員の方々のネットワーク作りも重要です。ネットワークを通して私どもの教育協力に対するアドバイスを頂ける様、引き続きよろしくお願いしたいと思います。

長い間ご静聴頂きありがとうございました。

平成17年度
文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム
「開発途上国における派遣現職教員の活躍」

国際協力機構
理事　松岡 和久

開発途上国の現状

- 小学校に行けない子供の数
  1億3000万人（およそ5人に1人）
- 小学校に入学しても卒業できない子供の数
  1億5000万人
- 文字が読めない人の数
  8億７000万人（15歳以上の約4人に1人）

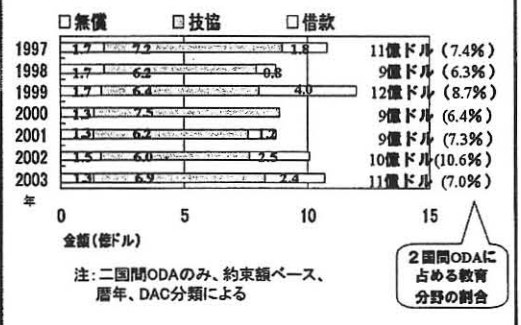
日本の教育援助政策

- ODA大綱（1992年）
- ODA中期政策（1999年）.
- 成長のための基礎教育イニシアティブ BEGIN:
  Basic Education for Growth Initiative（2002年）
  - ✓ G8カナナスキスサミット(6月)で小泉首相が発表、ヨハネスブルグサミット(WSSD)の「小泉構想」にも盛り込まれる
  - ✓ 重点分野：基礎教育の機会の確保、質の向上、マネージメントの改善
  - ✓ BEGINと同時に、今後5年間で低所得国にたいし2500億円以上の教育支援を約束
- 新ODA大綱（2003年）
  - ✓ 11年ぶりの改定（旧ODA大綱1992年制定）
  - ✓ 重点課題：貧困削減(教育、保健、水、農業等)、持続的成長、地球的規模問題、平和構築
- 新ODA中期政策（2005年）
  - ✓ 重点課題：貧困削減(保健、教育等)、持続的成長(人づくり支援)、地球的規模課題、平和構築

日本の教育援助に影響を与えている国際的会合や宣言

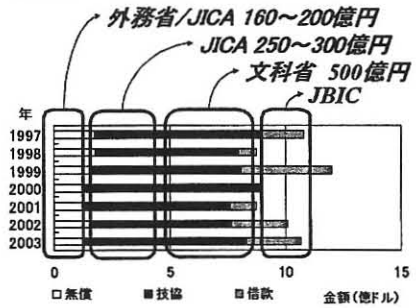
- 万人のための教育世界会議（1990年）
- 北京女性会議（1995年）
- 社会開発サミット：20/20協定（1995年）
- DAC新開発戦略（1996年）
- 高等教育世界会議（1998年）
- 世界教育フォーラム（2000年）
  - ✓ EFA上級会合(2001年ﾊﾟﾘ、02年ﾅｲｼﾞｪﾘｱ、03年ｲﾝﾄﾞ、04年ﾌﾞﾗｼﾞﾙ)
- ミレニアム開発目標（2000年）
- サミットG8コミュニケ（02年カナナキス、. . . . 05年グレンイーグルズ）
- ファスト・トラック・イニシアティブ（2002年）
- G8教育タスクフォース報告（2003年）
- 国連持続可能な開発のための教育の10年
  （2005-2014年）

日本の教育協力実績の推移



注：二国間ODAのみ、約束額ベース、暦年、DAC分類による

日本の教育協力の実施体制

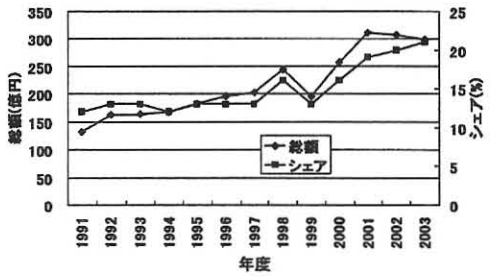


注：二国間ODAのみ、約束額ベース、暦年、DAC分類による

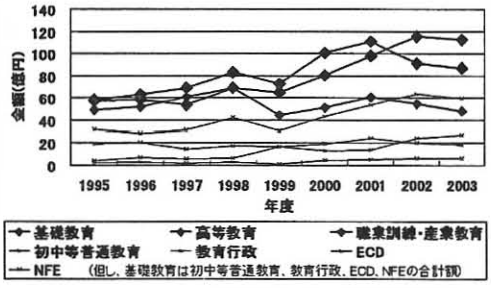
JICAの教育援助方針

- 教育援助研究会報告(1992/1993年)
  - ✓ 教育援助をODA全体の15%にまで増額させる
  - ✓ 基礎教育重視
  - ✓ 相手国の教育段階に応じた教育援助を行う
- 基礎教育協力効果的アプローチ(2002年)
- 高等教育協力効果的アプローチ(2003年)
- ノンフォーマル教育協力援助指針(2004年)
  - ✓ アプローチ:基礎教育拡充/向上、ソーシャルキャップ是正、生計向上、保健衛生環境改善、HIV/AIDS対策、自然環境保全、平和構築
- 基礎教育協力援助指針(2005年)
  - ✓ 重点分野:就学率の向上、質の改善、女子教育、NFE、教育マネジメントの改善
- 地域別基礎教育協力方針(2004年)
  - ✓ アフリカ地域、中南米地域…

JICAの教育分野の技術協力実績 ～経年変化

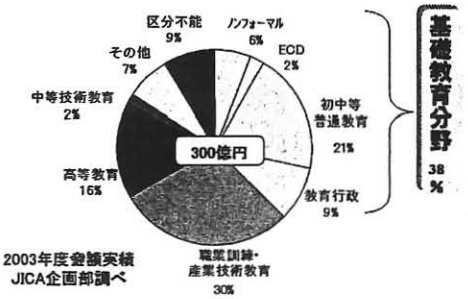


JICAの教育分野の技術協力実績 ～主要サブセクターの経年変化



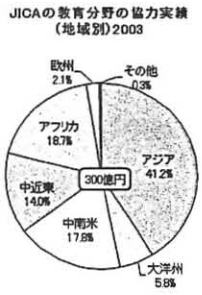
金額実績ベース　JICA企画部調べ

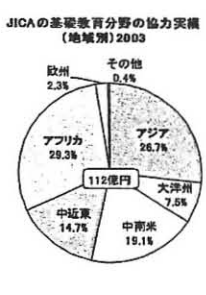
JICAの教育分野の技術協力実績 ～サブセクター別内訳



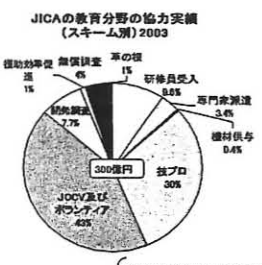
2003年度金額実績
JICA企画部調べ

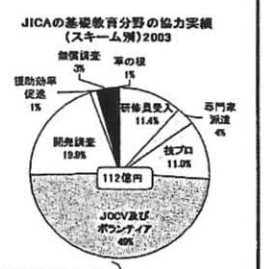
JICAの教育分野の技術協力実績 ～地域別内訳





JICAの教育分野の技術協力実績 ～事業スキーム別内訳





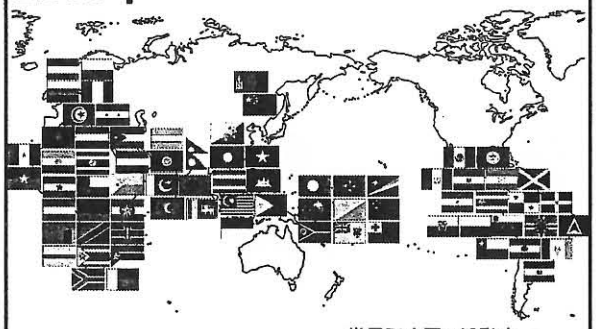
「無償調査」は基本設計調査＋実施促進の経費のみ。
本体予算(約200億円)は外務省所管。

青年海外協力隊について

- 世界73カ国に2,650名（内女性1,500名）派遣（累計27,521名【内女性10,916名】）
- 農業隊員からスポーツ隊員までさまざまな職種が存在（17年度秋募集は124職種）
- 原則2年間の派遣
- 選考試験（筆記試験、面接試験）→派遣前訓練（70日間）→派遣（2年間）→帰国

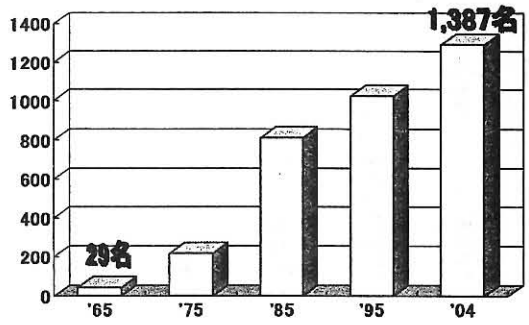
1966年

2005年

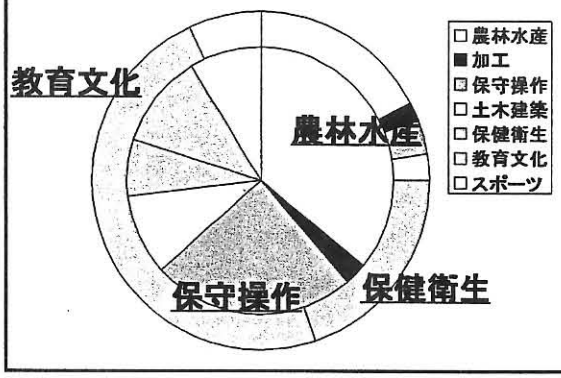


世界73カ国で活動中

年度別派遣実績



分野別比較　1975&2005



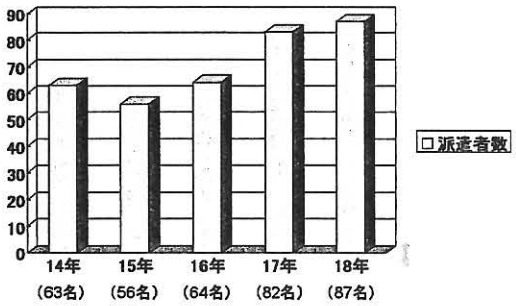
現職教員特別参加制度の概要

（1）学期制にあわせた派遣期間を設定
→4月訓練参加→7月派遣→
2年後の3月に帰国→4月職場復帰

（2）教育委員会、文部科学省からの推薦により
青年海外協力隊の1次試験を免除

（3）派遣される教員の人件費の80%を上限として
JICAから教育委員会へ補填

現職教員特別参加制度の実績



※ 18年については現時点での合格者数

現職教員特別参加制度の分析①

JOCV世代教員の割合が高い都道府県		JOCV世代教員の割合が低い都道府県	
鹿児島（約9000人）	57.6%	大　阪（約7500人）	17.2%
長　崎（約6000人）	50.4%	埼　玉（約9000人）	24.6%
宮　崎（約4500人）	50.4%	神奈川（約10000人）	25.9%
佐　賀（約3500人）	49.9%	和歌山（約2500人）	26.0%
北海道（約21000人）	49.7%	京　都（約4000人）	26.7%

割合 ＝ 20～39歳の教員数 / 全体の教員数

（参考：学校教員統計調査報告書）

現職教員特別参加制度の分析②

順位	推薦率が高い都道府県		累計推薦者数（H13年度～17年度）
1	神奈川	0.68%	73人
2	京　都	0.53%	21人
3	奈　良	0.46%	12人
4	千　葉	0.40%	39人
5	北海道	0.40%	85人

推薦率 ＝ 推薦者数 / 20～39歳の教員数

（参考：学校教員統計調査報告書）

現職教員特別参加制度の分析③

順位	合格率が高い都道府県		累計合格者数（H13年度～17年度）
1	神奈川	0.32%	35人
2	静　岡	0.23%	30人
3	東　京	0.22%	49人
4	岐　阜	0.20%	14人
5	奈　良	0.19%	12人

合格率 ＝ 合格者数 / 20～39歳の教員数

（参考：学校教員統計調査報告書）

JICAにおける教育現場との連携

出前講座

教師海外研修

（サモアの小学校を訪問）

ネット通じ交流学習

秦野・鶴巻小とバヌアツの小学校

ライブ授業に興味津々

神奈川新聞　2005年9月30日付

今後の取組みについて

・短期派遣制度の活用

・シニアボランティアへの特別制度の拡大

・帰国教員のネットワーク化

ご静聴ありがとうございました

国際教育の推進

～国際社会を生きる人材を育成するために～

齋藤　晶子
（文部科学省初等中等教育局国際教育課）

おはようございます。文部科学省初等中等教育局国際教育課の齋藤です。本日は、昨年８月に取りまとめられました「初等中等教育における国際教育推進検討会の報告」と、その報告を受けた文部科学省の取組についてお話させていただきます。

まず、本日の説明の内容でございますけれども、検討会の概要についてご紹介の後、報告の内容について説明します。報告は大きく、「国際教育推進のための基本的視点」、「国際教育に関する現状と課題」、「国際教育充実のための方策」、という３部で構成されております。最後に、本報告を受けて、文部科学省として来年度の予算案に盛り込みました新規事業についてご紹介させていただきます。

それでは、まず「初等中等教育における国際教育推進検討会」設置の趣旨についてですが、初等中等教育における国際性の伸長に関わる分野として、「海外子女教育」、「帰国児童生徒教育・外国人児童生徒教育」、それから「国際理解教育」といった分野がございます。本検討会は、これら国際教育の各分野について新たな情勢の変化に対応した施策の充実を図るとともに、それらの分野の有機的な連携を図り、初等中等教育における国際教育の推進のあり方について、今後とるべき具体的な方策を提言するという目的で設置されたものです。本検討会では委員として小・中・高の学校の先生方、研究者、民間企業の方々やNPO、国際機関、マスコミの関係者にご参加いただき、10回に渡り議論を重ね、昨年８月報告としてまとめられました。

次に、報告についてご説明します。本検討会の報告の性格を一言で言いますと、国際化した社会を生きる人材を育成するため、国際教育推進の基本的な方向性を示すとともに、国際教育を取り巻く現状と課題を多面的に捉えた上で、今後の国際教育の充実のための方策について提言したものということができます。このような検討の背景には、グローバル化の進展、個人レベルの国際化の進展、それから多文化共生社会の到来があります。本検討会では、このようなあらゆる点でグローバル化の進展している社会を、日本と国際社会という関係ではなく、地域社会や日常生活のあらゆる面が国際化していると捉え、国際化している社会と位置づけ、そのような社会においては、国際関係や異文化を単に理解するだけではなく、自らが国際社会の一員としてどのように生きていくかという主体性を強く意識することが必要、という認識を示しております。

次に、このような国際化した社会においてどのような人材が求められているのかについてですが、本検討会では、これまでの中教審の方針等の延長線上に、これからの人材には、「異

文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる力、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる力が求められている」としています。特に、本検討会では、自己を確立し相互理解を深め共生していくためには、３つ目の力を特に重要と考え、主体性や発信力、そして行動力の育成を強調したものとなっています。

ここで、国際教育の定義についてお話したいと思います。本検討会では、国際教育を、「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」としています。ここでご留意願いたいのは、国際理解教育に代わるものとして、国際教育を推進していこうとしているものではないということです。本検討会では、国際化した社会に通用する人材を育成するという観点から、国際理解教育に加えて、帰国児童生徒教育、海外子女教育、外国人児童生徒教育など、各分野の成果を踏まえた教育のあり方として、国際教育の推進を提言しているものです。また各分野の充実を図るためにも、これまでの分野で蓄積された人材や経験、手法、それから教材などを有機的に連携することを効果的と考え、国際教育を推進していく中で各分野としても充実を図っていこうとするものです。

そのような国際教育を推進するために、以下の３つの視点に立って現状と課題を分析し、何をすべきかということについて検討を行いました。すなわち、第１には「学校における国際教育の実践力の向上」と「学びの広がり・深まり」をもたらす授業づくりというのはどうあるべきか、第２に、「外部の人材や組織など国際教育に関わる資源を学校教育で活用するための共有や連携支援のための支援体制の構築はどうあるべきか」、そして第３に海外子女教育について、「海外の先駆的な取組を日本の学校教育に生かす」という視点を持って見直すべきではないかということです。

それでは国際教育を取り巻く現状と課題についてですが、まずは、第１点目として、授業の実践という観点からは、一部の教員任せで、学校全体の取組になっていないという傾向、それから英語をやれば国際理解ができているというような誤解、単なる体験や交流に終わっているといった指摘がありました。第２点目の「教員の指導力」という観点からは、「研修の重要性について認識されていない」、「指導案作成や教材開発といった実践的な研修がない」、それから「国際教育に携わる中核的立場の教員が不足している」といった指摘がありました。第３の海外派遣教員の活用という観点からは、「海外派遣教員の経験や能力が十分に生かされていない」、「海外派遣教員を評価・活用するという方針・方策がない」、それから「海外派遣教員の情報発信を支援するような体制がない」といった指摘がありました。また、「学校の外部資源の活用」という観点から、「外部の人材や組織に関する情報が不足している」、「学校と外部を結びつける機能がない」といった指摘もありました。この他にも、学校の多国籍化・多文化化、それから海外子女教育の観点からも、いくつかの課題が指摘されました。

さて、以上のような基本的視点、そして現状と課題を踏まえ、今後国際教育を充実させる方策についてどのような提言がなされているのかを見ていきたいと思います。本検討会では、今後の方策を３つの観点すなわち、１つ目が「学校教育活動における国際教育の充実」、２つ

目が「国際教育資源の活用と連携のための支援体制の構築」、3番目が「海外子女教育の充実」という観点から検討しております。まず、第1点目の学校における国際教育の充実ですが、これは、まず授業づくりという点について指摘をしております。学びが広まり深まる授業づくりという点では、各教科において国際教育の視点を持って、教科と総合的な学習とを関連づけたカリキュラム編成を行うことを提言しています。そしてそのような授業づくりを支援するため、国際教育に関する優れた実践授業を提供することや、地域の実情に合った学習内容や方法の開拓、インターネットやITの活用、また外国語と国語教育の充実を提言しています。また、第2点目として、教員の実践力の向上について提言しています。そのための方策として、教員養成課程における専門的講座の設置や授業の中身の改善、それから現職教員に対する参加型実践型のワークショップの実施を、NPOや大学等と連携して行うことを提言しています。また校内研修の充実や、教員の海外派遣の拡充についても提言しています。さらに、第3点目として直接的な異文化体験の重視という観点から、留学、海外修学旅行や姉妹提携などの交流活動の推進を提言しています。特に海外からの受入れの充実やアジア諸国との交流の促進のため、優良な交流事例の普及、交流を希望する学校に対する情報提供などを提言しています。

続いて、国際教育資源を活用しつつ、地域の人材や組織の連携のための支援体制を構築するための具体策が提言されています。まず、海外派遣教員の活用という観点では、教育委員会に対して海外派遣教員が国際教育を担当するなど、その経験や力量を生かせるような人事配置を行うことを求めています。また、派遣教員に対しても個々人がその経験や成果を積極的に普及していくことを求めています。そして派遣教員やその関係団体が情報発信できるよう、海外派遣教員のネットワーク化や各種研究協議会における研究発表などを促すことが提言されています。さらに、国際教育を専門とした人がキャリアアップを図っていけるような仕組みが必要ということも提言しております。続いて、地域における協働の促進という点では、学校における国際教育の活性化、多様化や地域の広がりを一層促進するための方策として、地域の国際教育ネットワークを形成し、学校の外部にある組織と学校、教育委員会とを結びつける仕組みや体制を整備し、国際教育資源の掘り起こし、データバンクの整備などネットワーク化を行うことなどにも言及しています。

そして最後に、海外子女教育についても、その成果を検証して情報発信を行うこと、それから実態やニーズを調査した上でそれらを踏まえた充実方策について検討を行っていくことを提言しております。

以上の説明を1枚にまとめたものがポイントを示した図となります。なお、検討会そのものの内容は文部科学省ホームページに掲載されていますので、関心のある方はホームページをご覧いただければと思います。

さて、先程申し上げたような充実方策、改善方策が中程の部分に示されていますが、これら方策を受け、最後に、国として特に学校における国際教育の充実と、地域の国際協力資源の有効活用に焦点を絞り、効果的に推進していくことが盛り込まれています。それが国際教育の総合的な推進の部分となります。これを事業化したものが平成18年度予算に「国際教育

推進プラン」として盛り込まれました。

そこで最後に、この報告を受けた文部科学省の取組について説明させていただきます。文部科学省としては、学校における国際教育の充実と、国際教育資源の有効活用を図るため、平成18年より、新たに「国際教育推進プラン」を実施することとしています。国際教育推進のイメージが、このポンチ絵にあります。まず三角図の上にある先進的な取組の推進においては、中核となる学校を中心に、地域の実情や特色を生かしたモデルカリキュラムや教材の開発を行い、国際教育の質の向上を図ることにしています。次に、三角の下の部分にある国際教育の資源の共有化、連携促進においては、地域の国際教育資源の共有化や連携を促進し、学校における国際教育を支援するための裾野を広げます。このように、質の向上と裾野の拡大を同時に進めることによって国際教育を推進する体制を整備していきます。そして、これらの取組を通じて得た成果を文部科学省のウェブサイトや全国フォーラムを通じて情報発信し、全国へ普及還元し、日本全体の国際教育の振興を図っていきたいと思います。

さて、この「国際教育推進プラン」ですが、平成18年度の予算案においては約5,500万円の規模で実施することにしています。この事業について多少具体的に説明しますと、国際教育を推進する拠点となる地域を８地域指定し、各市町村教育委員会にモデルカリキュラムの開発の実践研究を委嘱することになります。各地域内においては教育委員会それから地域内の学校、NPOや地域国際交流協会などが連携して、中核となる学校を中心とした国際教育の推進体制を整備します。そして、グローバルな課題や地域の特性を取り上げたり、小・中・高一貫した取組を行ったり、ITを活用した国際交流活動を通じた実践を行ったり、カリキュラムや教材開発を行います。それからディベートの導入や、多言語・多文化を活用した指導方法の開発、それから指導目標や資料の開発に取り組みつつ、モデルカリキュラムを各地域において作り上げることになります。また、NPO等を中心にコーディネータ機能の整備、パンフレットの作成を行い、地域の人材や組織のネットワーク化を図り、教員のためのワークショップを開催し、地域の国際教育資源をモデルカリキュラムづくりに活用していきます。今後の本事業の実施については詳細を詰めていくことになりますが、ご関心のある方は文部科学省ホームページにご注目いただきたいと思います。

最後に、青年海外協力隊に現職教員として派遣された皆様、あるいは今後派遣予定の皆様にお願いを申し上げたいと思います。現職派遣教員制度は皆様教員としての専門性を開発途上国のために役立てるということと、それから各国の教育の質の向上、教育の国際化に資することを目的として創設されたものだと承知しております。検討会において、ある委員から、「学校に海外生活を経験された教員がいるということは、その教員自身が何かを教えるということが特別になくても、その存在が学校の中にあるということだけで子どもたちに何かを伝えることができる」という発言がありました。確かにそのとおりだと思います。しかしそれでもやはり、皆様方には、海外の経験を自分の授業改善に生かすだけではなく、さらにそれを学校の中、そして学校を超えて地域全体に還元していくことを、併せてそういう姿勢を持つことをお願いしたいと思います。派遣教員ということでは、日本人学校への派遣教員もおりますし、またＲＥＸプログラム（外国教育施設日本語指導教員派遣事業）により海外の

現地校に派遣され日本語を教えている教員もいます。これらの教員は、全国的な組織を持っています。こういった先生方や、組織とネットワークを持ち、学校現場へ皆様の派遣経験を積極的に還元していただきたいと思います。

本検討会の報告は、学校の国際化、国際理解教育の充実のための方策を包括的に提示していますが、その実現は何よりも教員にかかっていると思います。特に派遣教員には多くを期待しております。文部科学省としては皆さん派遣教員が海外経験を生かしたいと思った時には、それが十分に発揮できるよう国際教育の推進に取り組んで参ります。皆様におかれましても、初等中等教育における国際教育推進検討会の趣旨をご理解いただき、国際教育の充実に、改めてご協力をお願い申し上げたいと思います。

以上で説明を終わります。ありがとうございました。

国際教育の推進

～国際社会を生きる人材を育成するために～

平成18年1月

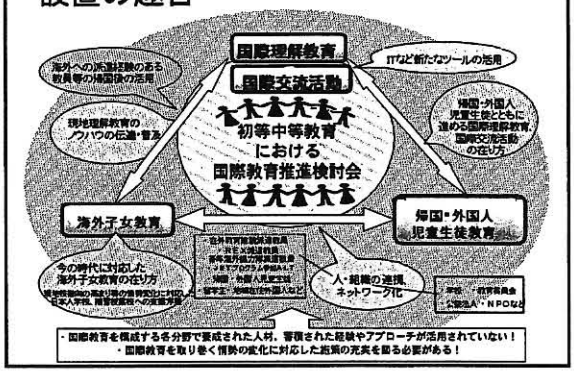
文部科学省
初等中等教育局
国際教育課
課長補佐　齋藤晶子

本日の説明内容

- 初等中等教育における国際教育推進検討会について
- 報告の概要について
  - 国際教育推進のための3つの基本的視点
  - 国際教育に関する6つの現状と課題
  - 国際教育充実のための3つの方策
- 平成18年度新規事業について

1. 初等中等教育における国際教育推進検討会について

設置の趣旨



構成・経過

- 小・中・高等学校、大学等の教育関係、国際機関、民間企業、マスコミから全18名の学識経験者の協力を得て実施。
  - 座　長：池上東京大学顧問・(社)日本貿易会参与
  - 副座長：佐藤郡衛東京学芸大学教授
- 平成16年8月　設置
  9月　第1回
  平成17年7月　第10回(最終会合)
  8月　初等中等教育局長あて報告
- 主な検討事項
  - 海外子女教育の在り方について
  - 効果的な国際理解教育・国際交流活動の在り方について
  - 海外派遣経験を有する教員の活用について
  - 社会人の登用について

2. 報告の概要について

報告の概要

- 国際化した社会を生きる人材を育成するため、
  - 国際教育推進の基本的な方向性を示すとともに、
  - 国際教育を取り巻く現状と課題を多面的に捉えた上で、
  - 今後の国際教育の充実のための方策について提言
- 内容
  - 検討の背景
  - 国際教育推進の基本的な方向性
  - 国際教育を取り巻く現状と課題
  - 今後の国際教育の充実方策

検討の背景

- 世界の相互依存の進展
  - 人・物・資本・情報の移動、地球環境問題の深刻化
- 個人レベルの国際化の進展
  - 海外で活躍するべき機会の増加
- 地域社会の国際化の進展
  - 日本に居住する外国人の増加

⇩

- 国際関係や異文化を単に理解するだけでなく、自らが国際社会の一員としてどのように生きていくかという主体性を一層強く意識することが必要。

いかなる人材を育てるべきか
～国際社会で求められる態度・能力

- 必要とされる能力・態度とは
  - 異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる力
  - 自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立
  - 自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる力
- 国際的に指導的立場に立つ人材に求められる能力の基盤となるもの

国際教育とは

「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成する」ための教育

国際教育推進のための基本的視点

- 国際教育の実践力の向上と「学びの広がり・深まり」をもたらす授業づくりを
- 幅広い経験や優れた知識を有する人材や組織など国際教育にかかわる資源を活用するため、共有の促進や連携のための支援体制の構築を
- 海外子女教育においても、「日本の教育を海外に」という視点に加え、「海外の先駆的な取組を日本の学校教育に生かす」という視点を

国際教育の現状と課題（その1）

- 授業実践という観点から
  - 一部の教員任せ、学校全体の取組になっていない傾向
  - 英語活動の実施＝国際理解という誤解、単なる体験や交流活動に終始
- 教員の指導力という観点から
  - 国際教育に関する研修の重要性が十分認識されていない
  - 指導案作成や教材開発等、授業づくりに役立つ実践的な研修が不足
  - 国際教育に携わる中核的立場の教員が不足
- 海外派遣教員の活用という観点から
  - 海外派遣教員の経験や能力が十分に生かされていない
  - 海外派遣教員を評価・活用するという方針・方策が不足
  - 海外派遣教員の情報発信を支援するような体制が不足

国際教育の現状と課題（その2）

- 外部資源の活用という観点から
  - 外部の人材や組織に関する情報が不足
  - 学校と外部の人材や組織を結びつける機能が不在
- 学校の多国籍化・多文化化という観点から
  - 外国人児童生徒の増加と多様化
  - 日本語指導や学習支援など適応指導充実が必要
  - 不就学や母語の保持など新たな課題が出現
- 海外子女教育という観点から
  - 海外子女教育の成果の検証が必要
  - 海外在留期間の長期化や現地校志向の高まり、子どもの低年齢化など状況の変化への対応が必要

充実のための方策（その1）
－学校教育活動における国際教育の充実

- 学びが広がり深まる授業づくり
  - 各教科等や総合的な学習の時間を関連させた授業づくり
  - 先進的な取組事例の普及
  - 学習内容・方法等の開発
  - 情報通信技術の活用
  - 言語教育の充実
- 教員の実践力の向上
  - 多様な経験を有し、実践的な指導ができる教員の育成
  - 学習指導や教材開発の方法の習得等、参加型・実践型の研修の重視
- 直接的な異文化体験の重視
  - 留学、海外修学旅行、学校間交流などバランスのとれた国際交流の推進
- 外国人児童生徒教育の充実
  - 日本語指導等の一層の充実
  - 不就学等新たな課題への確実な対応
  - 外国人児童生徒と共に進める国際教育の推進

充実のための方策（その2）
－国際教育資源の活用と連携のための支援体制の構築

- 海外派遣教員の活用
  - 海外派遣教員や海外研修経験者の一層の活用・登用
  - 人事配置上の工夫など組織的な活用の促進
  - 海外派遣教員による経験・知識の発信の充実
- 地域における協働の促進
  - 外部資源を活用した学校における国際教育の活性化・多様化の一層の促進
  - 地域の国際教育ネットワークの形成（学校・教育委員会、国際機関、地域国際交流協会、NPO、NGO、企業、学会等）

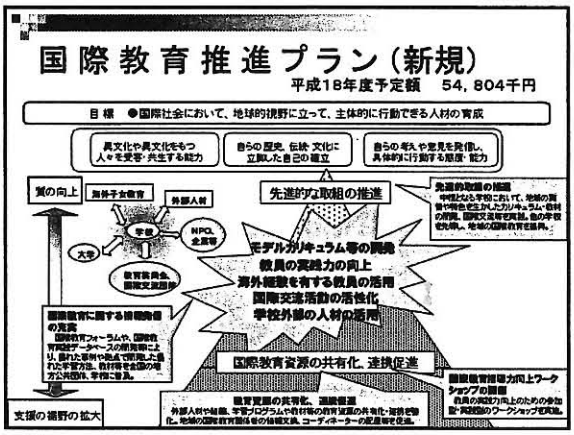
充実のための方策（その3）
－海外子女教育の成果の活用と変化への対応

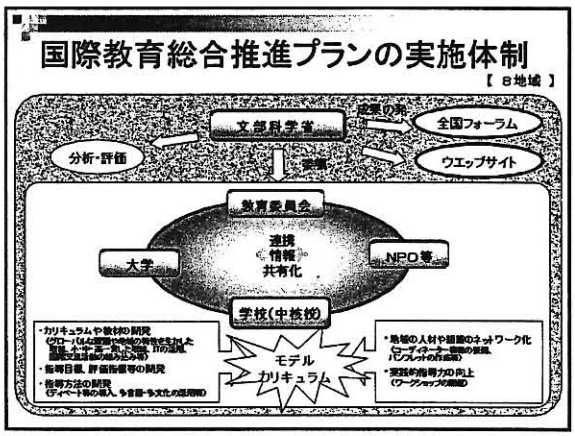
- 海外での成果を日本の学校教育に生かす
  - 外国語教育、交流活動、小学部・中学部併設による乗り入れ授業、保護者・住民・日系企業関係者等の参画による学校運営など、多様かつ豊富な経験
  - 日本の国内教育に生かすという視点から海外子女教育
- 時代の変化に対応した海外子女教育・帰国児童生徒教育
  - 変化や実態を踏まえた海外子女教育の充実方策の検討（例：幼稚園段階の子どもへの支援の在り方、補習授業校における教育の充実など）
  - 特性に配慮した帰国児童生徒教育の充実

初等中等教育における国際教育推進検討会報告（ポイント）

平成18年8月3日

3. 平成18年度新規事業について


国際教育推進プラン（新規）
平成18年度予定額　54，804千円
目標　●国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動できる人材の育成
異文化や異文化をもつ人々を受容・共生する能力
自らの歴史、伝統・文化に立脚した自己の確立
自らの考えや意見を発信し、具体的に行動する態度・能力
質の向上
海外子女教育
外部人材
学校
NPO、企業等
大学
教育委員会、国際交流団体
先進的な取組の推進
モデルカリキュラム等の開発
教員の実践力の向上
海外経験を有する教員の活用
国際交流活動の活性化
学校外部の人材の活用
国際教育資源の共有化、連携促進
支援の裾野の拡大


国際教育総合推進プランの実施体制
【 8地域 】
文部科学省
成果の発信
全国フォーラム
ウエッブサイト
分析・評価
教育委員会
連携
情報
共有化
大学
NPO等
学校（中核校）
モデル
カリキュラム

最後に

プログラム２

派遣現職教員の活躍

アジア	中南米	アフリカ	大洋州・欧州
中山晴美 教諭 （14-1） 小諸市立美南ガ丘小学校 (カンボジア，体育)	野本純一 教諭※ （15-1） 三条市立月岡小学校 （ボリビア，小学校教諭）	三野光雄 教諭 （14-1） 大阪府立成城工業高等学校 （ウガンダ，理数科教師）	藤田昌美 教諭 （15-1） 長野市立鬼無里中学校 （ウズベキスタン，青少年活動）
清水大格 教諭 （15-1） 二宮町立二宮小学校 （ベトナム，小学校教諭）	金戸裕美 教諭 （15-1） 富山県立となみ養護学校 （ジャマイカ，養護）	谷昌亮 教諭 （14-1） 尼崎市立尼崎産業高等学校 （タンザニア，理数科教師）	枝重美香 教諭 （14-1） 草津市立老上小学校 （バヌアツ，小学校教諭）
海老沢穣 教諭 （15-1） 東京都立小金井養護学校 （マレーシア(西)，養護）	上野美奈子 教諭 （15-1） 牛久市立岡田小学校 （ホンジュラス，小学校教諭）	宮村香 教諭 （15-1） 桑名市立深谷小学校 （ザンビア，小学校教諭）	堀口かえで 養護教諭 （15-1） 大東市立谷川中学校 （ルーマニア，ソーシャルワーカー）
工藤昭正 教諭 （15-1） 佐伯市立宇目緑豊中学校 （バングラディシュ，理数科教師）	村上かおり 教諭 （15-1） 鳥取市立湖東中学校 （エクアドル，小学校教諭）	加藤嘉文 教諭 （15-1） 和歌山県立和歌山ろう学校 （ザンビア，養護）	荻野晃子 教諭 （15-1） 岡山市立南輝小学校 （マーシャル，小学校教諭）
西山晃弘 教諭 （14-1） 群馬県立勢多農林高等学校 (ネパール，理数科教師)	櫻井麻利子 教諭 （15-1） 新潟県立白根高等学校 （ニカラグア，家政）	五傳木浩樹 教諭 （15-1） 新潟県立佐渡高等学校 （ジンバブエ，小学校教諭）	池田一成 教諭 （14-1） 東京都立第一商業高等学校 (ポーランド，体育)

※雪害による交通事情等によりご発表頂けませんでした。

かけがえのない日々

中山　晴美
（14-1，カンボジア，体育，小諸市立美南ガ丘小学校）

『出勤初日のできごと』

2002年9月2日(月)待ちに待った初出勤日。学校に着いたら数人の先生が出迎えてくれた。自己紹介をした後、早速活動の話になった。

半年程学校を離れていて、現場での活動を楽しみにしていた私にとって、いよいよ学校での活動が始まるということは何とも嬉しいことで、『あんなことがしたい、こんなことも・・・』とずっと頭の中だけで考えてきたことをやっと発揮できる時がきたと正直わくわくしていた。その期待度が大きかっただけにこの後、校長先生から言われた言葉にショックを受けた。

「授業が始まる前の朝1時間と授業が終わった夕方1時間、球技の指導をしてほしい。彼らは希望者が集まって競技会に向けての練習をするのです。」

校長先生はとても早口で話したので、何かの聞き間違いかもしれないと思い、もう一度聞いてみたが間違いはなかった。そして、校長先生は更に話を続けた。

「去年まではバレーボールとサッカーしかなかった。それも男子だけ。もし、あなたがバスケットボールを指導したいのであれば、新しく生徒を募集しなければならない。もし、生徒が集まったら場所を見つけて練習をすればいい。バスケットボールがいい？？女子生徒がいい？？」

やはり、早口で説明され、最後に質問までされているが、頭の中が混乱していてその質問には答えられなかった。少し時間をかけて頭の中を整理して、私はやっとそれが、いわゆる日本でいう部活動のようなものだと解釈し、校長先生に『体育の授業』をやらせてほしいと伝えた。校長先生は私たちが話をしている部屋の壁に掲示してある時間表を指差して説明を続けた。クメール語で書かれた教科の一つ一つを説明しながら、結局は『時間割の中に体育の授業はない』ということを私に言いたかったのだ。最後に校長先生に「あなたの考えを聞かせてくれ」と言われたが、今の自分の気持ちをクメール語で正確に伝える自信がなかったので、明日説明をさせてほしいとお願いし、初出勤日の活動は終わった。

帰宅後、まず、ただ漠然としていた『あれもしたい、これもしたい・・・』という自分の考えを具体的にしなければならないと思った。現場の実態を見てから・・・とのんびりと考えていたが、現場の実態は私の考えとは全く違うラインにあることがわかった。現場の先生方の考えを大切にしなければならないことも十分承知だが、『体育』というものに関して、この学校の先生方の考えはそれほど深いものではないと察したため、少し強引かもしれないが自分の考えを主張してみようと思った。

期待に胸を膨らませて学校に向かった初出勤の日の日記である。帰国してもうすぐ2年･･･カンボジアでの出来事が少しずつ美化され、楽しいことばかりが思い出されるようになってきている今でも、この日の大きなショックは忘れられない。

『相互理解と自己主張』

9月3日（火）校長先生に二つの考えを伝えた。

一つは、『体育の授業』として、全ての生徒が運動に触れられる機会を与えてほしい。特に普段運動をすることのない生徒に、体を動かすことの楽しさや良さ（健康）を伝えたい。そのため、今までなかった体育の授業を時間割に入れてほしい･･･ということ。二つ目は、競技会に向けての練習は、もちろん指導するが、何を指導するかは生徒の希望を優先させてほしい。バスケットボールをやりたいという生徒がいれば指導をするし、いなければ、バレーボールでも、あまり得意ではないがサッカーでも精一杯指導したいと思っている･･･ということ。

前の日に必死に調べたクメール語で話したので、うまく伝わるか心配だったが、校長先生は一生懸命に聞いてくれ、幾つも幾つも問答を繰り返しながら、私の考えを理解しようとしてくれた。校長先生の私に対する質問が的を射ていたので、しっかり理解してくれていると感じ嬉しかった。長い時間話した後、校長先生が言った「あなたの考えはよく分かった。10月（新年度が始まる）までに教頭先生や他の先生とも相談して考えてみる。また、いろいろ質問をするかもしれない」の言葉に安心した。

次の日、私は行動に出た。これからのカンボジアでの生活がこのままでは納得いかないと考えたからである。

もし、日本にいたら･･･私は、決められた道を何の苦労もなく歩んでいただろう。生徒のことを一番に考えて、自分の意見を主張することなどなかったかもしれない。正直、日本ではそれが楽であり、そんなぬるま湯に浸かったような生活にも何の疑問も感じていなかったからである。

あえて、そこから抜け出して、伝わるかどうかも分からない自分の意見を必死に伝え、何かを変えようとしている自分がそこにいた。新しい自分との出会いであった。

『いよいよ・・・これから！！』

10月1日の入学式を前に、職員全員が集まり職員会議のようなものが行われた。そこで、各学級の担任が発表されたり、校長先生のお言葉があったりした。改めて、私の紹介もしてもらい、簡単な自己紹介をした。最後に、各先生方の受け持ち授業の時間割表のようなものが渡され、解散となった。時間割表を手に先生方は一人、二人･･･と帰って行った。全ての先生にそれが渡り、後は私一人となった時、校長先生が私を呼んだ。校長先生の手元を見ると、きれいに作られた私用の時間割表があり、それを私に手渡しながら説明をしてくれた。

結局、時間割の中に『体育』を入れることは、物理的に無理だったようだ。二部制ということもあり、時間に限りがあるためのようである。そんな中で、なんとか私の考えを尊重しようと、校長先生の出した結論は、午後授業を受けている生徒が午前中に、また、午前に授業を受けている生徒が午後、週１日学校へ来て『体育』の授業を受けるということだった。渡された時間割表には、月曜日から土曜日までの午前中毎日と、午後３日間の体育の授業がびっちりと入っていた。ｸﾞﾚｰﾄﾞ７とｸﾞﾚｰﾄﾞ８の計16クラスを１日２～３クラスずつ受け持つということだった。

問題点はいくつかある。特に、私が一番に主張した『全ての生徒に･･･』という点で、週１日とはいえ昼食をはさんで２回学校へ来なければならないことは、家が遠かったり、家の事情があったりする生徒にとっては困難であるように思われた。校長先生も、そこが一番の問題だと言っていた。しかし、始めてみなければ分からないこともある。私の授業の仕方によっては、全ての生徒の興味を惹くことだってできるかもしれないし、それに向けた努力も必要だと思った。やってみてから、生じた問題点をひとつひとつ解決していくことが今できることではないか･･･また、私の自分勝手な主張を快く理解してくださり、案をだしてくださった先生方の気持ちに対する誠意であるのではないか･･･と思い、この案で新年度を出発することにした。

結局、私の２年弱の活動は、最後までこの形で行われた。始めはやはり、体育の授業の必要性を生徒に理解してもらい、授業に出席してもらうことは難しかった。その頃は『焦るな･･･すぐに何とかなるものではない。長い目で理解してもらうことが大事！』『興味をもって足を運んでもらえさえすれば、生徒は日本もカンボジアも一緒･･･必ず体育の楽しさを分かってもらえるはず。』そう自分に言い聞かせて毎日を過ごしていた。

『生徒に支えられている私』

なかなか　自分の思いが伝わらず、生徒も「暑い」「疲れた」「もう嫌だ」といっては、日陰で休んでしまったり･････女子にいたっては、「運動の格好は恥ずかしくて嫌だ」と、スカートのままやってきたり、そんな日が続いていた。

今日も、少し落ち込んだり、いらいらしたりした気持ちのまま授業を終え、スタジアムの真ん中で一緒にやっているＳ先生とどうしたらいいか話そうとしていた。

Ｓ先生は、一応プノンペンの体育教員養成学校を卒業してきているが、やはり、体育というものへの理解があまりないせいか、その先生自体の性格のせいか、自分でも「授業は好きではない」とか「生徒は怠け者だから嫌いだ」とか言っては、授業に遅れてきたり、時には授業時間にどこかへ出かけてしまったりする。

今日も、結局、二人の意見が合わず、話し合いというよりは　言い合いとなってしまった。その言い合いの中でもＳ先生は「生徒は怠け者だし、みんな運動が好きじゃないから仕方がない」といつものように生徒を悪く言うのだ。

ちょっといらいらしていたこともあり、私もつい、売り言葉に買い言葉で「私はそうは思わない。でも本当にそうだとしたら･･･運動が好きじゃない生徒がいるような学校で、私は働きたくない！」というようなことを言っていた。

結局、その話し合いは何の解決もされないまま終わり、そのＳ先生は帰ってしまったのだが、その後すぐに、その様子を見ていた生徒数人がやって来て、こう言った。

「先生、ぼくたちみんな運動大好きだよ。先生のことも大好きだよ。だから、他の学校に行くなんて言わないで･･･」

いくらいらいらいていたとはいえ、生徒を傷つけるような発言をしたことへの反省の気持ちと、生徒が言ってくれた言葉が嬉しかったことから、言い合いの時にはぐっとこらえていた涙が思わずあふれてしまった。生徒の気持ちは日本もカンボジアも一緒だと気づき、この生徒たちがいる限り、私はここでがんばっていける････と、そこで気持ちを新たにした瞬間だった。

こんな出来事を繰り返しながら、私にも少し自信がつき、生徒たちに向き合う姿勢も変わってきた。そんな私の態度が、生徒たちにも伝わったのか、彼らの授業に向かう姿勢も変わってきた。結局、彼らは、今まで運動をすることの楽しさを知らされていなかっただけなのだ。それを、知らせてあげられる人がいなかっただけなのだ。

そこからは、そうやって目を輝かせて何かを求めている生徒たちに、私にできることをできるだけ伝えようと、たくさん考え、たくさん行動し、たくさん失敗もし、それでもほんの少しの手ごたえを大きな喜びに変えながら、カンボジアでの生活を満喫していった。

『通いなれた道』

私の家から学校まで自転車で約 15 分。何度この道を往復しただろう。暑い日も、雨の日も････時には抱えきれないほどの荷物を積んで･･･時には遅刻しそうになり猛スピードで････時には近所のパン屋さんで買ったパンをかじりながら････。

明日の帰国を前に、すでに授業を終了させた私は、家にこもって荷造りをしていた。ふと、なんとなく休日をはさんでここ２～3 日、あの道を通っていないなあ･････と思い、昼食をとりに出かけるついでにぐるりと遠回りをしていつもの通いなれた道を久しぶりに自転車で走ってみることにした。いつも、私の行動は思いつきだが、今回も本当に単なる思いつきだった。

すると、一人のおじさんが突然道に飛び出してきて『ネアックルー（先生―)』と私を呼んだ。自転車を止め振り返ると、知らないおじさんが手を合わせながら、「家に来てほしい」というのである。その様子が、ただごとではないような気がして戻っていくと、どうやらそのおじさんは、私が教えている生徒のお父さんらしく、ずっと私のことを捜していたというのである。息子である生徒から私がもうすぐ日本に帰ると聞き、お土産を渡したいと思っていたのに、ここ何日か私がこの道を通らないので、もう日本に行ってしまったのではないか

と心配で、昨日も今日も朝からずっとこの道を通るのを待っていたのだというのだ。

『なんという……』単なる思いつきでふらっと出てきただけなのに、もし、私が今日もこの道を通らなければ、彼はずっと私がここを通るのを待っていたのだろうか…直接会って話したことがあるわけでもないこの私を……と考えただけで胸が熱くなった。そして、お土産をいただいて中を見てみると、生徒の名前と私のことが刺繍されたクロマー（カンボジアのスカーフ）だった。クロマーをいただくことは多いが、私のためだけに用意されたものをいただくのは初めてだったので『本当に私を待っていてくれたんだ…』と思いで、更に熱くなるものがあった。

そこからは、いつも通いなれた道なのに、あふれる涙とこんな出会いがあることへの感動で、ちょっと違う気分でペダルをふんでいた。

決していいことばかりではなかったけれど、カンボジアでの最終日のこの出来事で、すべてが素晴らしいものに変わってしまった。

カンボジアでの生活は、私にとって、多くの人と、多くの物と、多くの出来事と…そして新しい自分と出会えることのできた、かけがえのない日々であった。

国際教育協力シンポジウム
帰国隊員報告会

平成14年度1次隊
カンボジア　体育
中山　晴美
（長野県小諸市立美南ガ丘小学校）

発表内容

配属先の概要
配属先での活動
カンボジアでの生活
（帰国後の活動）
最後に・・・

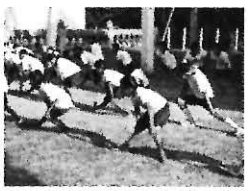
配属先の概要

カンボジア国　シェム・リアップ州　教育・青年・スポーツ省
クメール日本友好　プレ・エンコーサ中学校

＜生徒数＞　約1400名
＜教員数＞　約　60名
＜学級数＞　22学級
（各学年7～9クラス）
＜施設＞　木造1階建
校舎は1995年に日本人の寄付によって建てられたもの
教室数　12

＜履修教科＞
クメール語　英語　フランス語
数学　科学　生物　地学　政治
歴史　地理等

※午前・午後の二部制



配属先での活動

体力テスト

★身長・体重
ⅰ立位体前屈　柔軟性
ⅱ反復横とび　敏捷性
ⅲ腕立て屈伸　筋力
ⅳ上体起し　筋持久力
ⅴ5分間走　持久力
ⅵ立ち幅跳び　瞬発力
ⅶ走り幅跳び　跳躍力

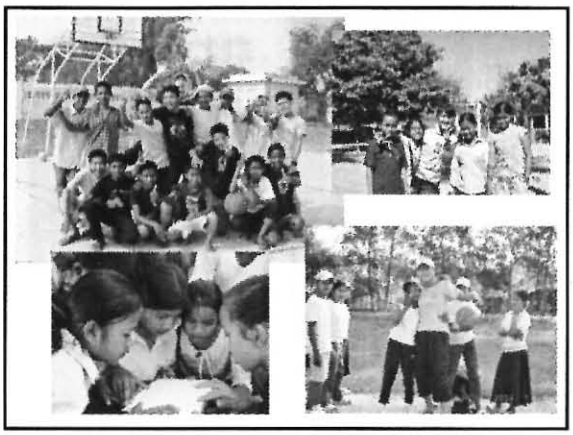
体つくり運動

なわとび運動

保健指導

バレーボール
（課外活動）

バスケットボール

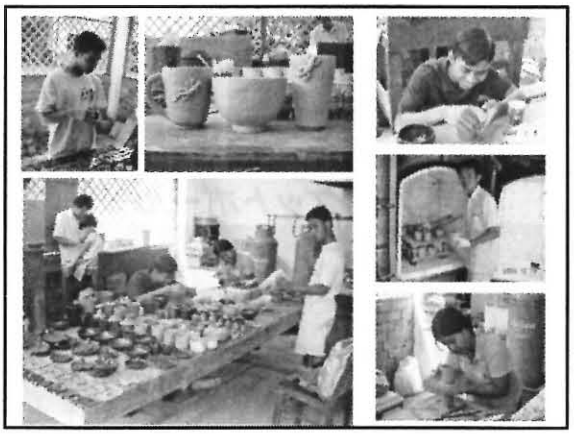


カンボジアでの生活　～余暇の過ごし方～

子どもたちの笑顔

カンボジア通信
日本の子どもたちとの接点

胡弓と陶芸



第一回
インターネットライブ交流会に向けて

**カンボジアのことで知りたいこと
カンボジアの子どもたちに聞きたいことを
質問しよう**

いつも
どんな遊びをしている
のかな
僕たちとは違うのか
知りたい

カンボジアの小学生は戦争に
ついてどう考えているんだろう
そんなことを質問しても
大丈夫かな

クメール語を知りたい
あいさつ等は調べれば
分かるけど、みんなが
言われて嬉しいのはど
んな言葉だろう

インターネットライブ交流会

カンボジア
バッタンバン州
ワットカンペイン小学校
5・6年生

日本
長野県小諸市立
美南ガ丘小学校
5年1組

第一回
インターネットライブ交流会を終えて

子どもたちの感想から

・言葉が違う国どうしの交流で伝えたいことが通じるかすごく心配だったけど、カンボジアから「よくわかりました」と言われたときはほっとしてうれしかった

・交流するまで、カンボジアの人は「かわいそう」と勝手に思っていたけど交流してみて印象が全然違った。仲間だと思った。

・「カンボジアに遊びに来たいですか」と質問された瞬間、私は心の中で「行きたい！」と叫びました。すごく離れていて会うことができないけど、本当はもっと話したいと思ったからです。

・「日本の経済が繁栄しているのはなぜですか」と質問され、はじめは意味さえ分からなかった。そんなことを知っていることに驚いた。日本に興味があるのかな？もっともっと日本のことを伝えたい。そのために自分たちが知らなければならないことがたくさんあるような気がした。

・「私たち日本人が、カンボジアの国のためにできることはありますか」と質問した。どんな答えが返ってくるか楽しみだけど、ただ答えを待っているだけでなく、また、カンボジアについていろいろ調べて、次の交流までに自分でも答えを探しておきたいと思った。

第二回
インターネットライブ交流会を終えて

子どもたちの感想から

・僕は、ふだん機械ゲームで遊んでいることが多かったので、カンボジアの人の遊びを聞いておどろきました。枝・布・石などが、主な遊び道具になるなんて・・・。僕たちがふだん何とも思わない物で楽しい遊びになっているなんてびっくりしました。枝や石、布なども考えれば、楽しい遊びが他にもありそうな気がして、思うだけで楽しくなりました。僕も、カンボジアの遊びをやってみたくなったし、カンボジアにますます行ってみたくなりました。

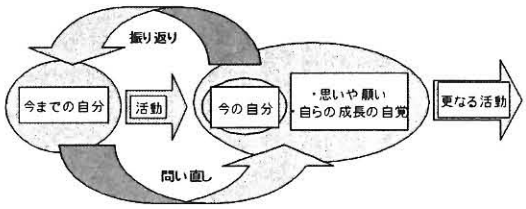
・「今の生活に満足していますか」という質問の答えで、「とても満足している」と言っていてすごいなぁと思いました。私は、あらためて、「日本人はすべてのことにぜいたくすぎる」と思いました。私だったら「とても満足だ」なんて言えないかもしれません。

・ぼくは、カンボジアの人に戦争について質問をしました。でも、ぼくはこの質問をするのがいやでした。どうしてかというと、その戦争を思い出して気にさわるのではないかと考えたからです。でも、オーイ・ソクンティアリーさんは、堂々と「カンボジアの人はもう戦争をする必要はないと考えている」と答えてくれました。僕はそのことがうれしかったです。

・「いわれて嬉しい言葉」は、私なら「ありがとう」とか「上手だね」とか自分をほめてもらうような言葉だと思うけど、返ってきた答えは「家族がすっと幸せでありますように」といった、家族や他の人を思う言葉だった。カンボジアの人は、家族や友だちを大事にしているんだなぁと思いました。

示唆されたこと

子どもたちは、この交流を通して
今まで知らなかった国のことについて知ると共に、
今自分の生活している日本という国について振り返り、
その良さを改めて深く知ることで、より深く広く
人や物事に関わっていこうとするのではないか・・・



最後に・・・

ベトナムでの２年間

清水大格
（15-1，ベトナム派遣，小学校教諭，二宮町立二宮小学校）

１，最初に

協力隊に運良く合格した私は、２００３年度から２年間ベトナムへ派遣された。派遣先は首都ハノイから南に５０ｋｍ、ハーナム省にあるニャッティウ村のニャッティウ小学校である。図画と体育を中心におよそ２年間教えていたことになる。ちなみに、ホン川デルタに位置するハノイは漢字で書くと「河内」、私のいたハーナム省が「河南」となる。まさに読んで字のごとくの立地である。

２，ベトナムでの生活

私のベトナムでの住まいは、村の人民委員会の Thanh（タイン）さん宅、その２階を間借りしたものだった。窓は当然、日本のようなアルミサッシではなく、木を重ね合わせた作りだった。壁はれんが造りで、石壁風とでも言おうか。そのため、屋外と屋内の境があいまいで、部屋では夏は数々のみたことのない虫に出会い、冬は外気と変わらぬ寒さを体験することになった。特に夏のダニと冬の寒さは深刻だった。

写真１　村の風景

ベトナムは南国のイメージから常夏を想像されがちだが、それは南部の話で北部は四季がある。冬はほとんど曇天で気温は１０度～１２度といったところである。もっとも寒い日は7,8 度まで下がる。そんな気候でも、屋内のホットシャワーなどふつうの家にはない。昔の日本のように風呂とトイレは屋外にある。しかも茶緑がかった井戸水がチョロチョロ出てくるのをシャワーとしているのである。そのため、多くの村人は冬にあまり体を洗わない。けれども、私はふろ好きなので１週間に１回は桶に水を張り、熱湯を混ぜて沐浴していた。非常に寒く、こたえたのを覚えている。

飲み水は雨水だった。雨水は井戸水と違って無色透明で飲みやすい。この村の井戸水は深度が浅すぎて、村人は飲食用にはしていなかった。そのため、たいていの家には雨水を貯める貯水槽があった。そして、その中に魚を放していた。魚がボウフラなどの虫を食べてくれるという合理的理由からである。

食事はタインさんのお宅で朝昼晩とお世話になった。銀色の大きなお盆に大きなお皿とどんぶりがあり、それが全員分の一汁一菜である。それを家族みんなで食べた。長男、次男

に小学校５年生のトゥン君と幼稚園年長のトァン君がいた。２人とも肉類は嫌いで、ゆで野菜を好んで食べていた。好ききらいが日本の子と逆なのが印象的だった。一般にベトナムの子は家の手伝いをするのが当たり前で、毎日食事の下ごしらえもする。ある日、トゥン君が空芯菜を切る仕事をやらずに、遊びに行ったことがある。その夜、父親のタインさんが怒り、私に「日本の子どもだって料理の手伝いぐらいするだろう！？」と聞いてきたので困った。片付けはするが、調理の手伝いをする家庭は少ないのではないだろうか。ちなみに、ベトナムは地上波でサッカープレミアリーグが見られる。それが村の大きな娯楽になっており、放映される土日の夜は近所に集まって、みんなで見たものである。

３，ニャッティウ小学校での活動

３－（１）ニャッティウ小学校の環境

私の派遣されていたニャッティウ小学校は日本の援助によって建てられた学校である。ニャッティウ村で最も立派な建物の一つと言っていい。ただし、紙などの消耗品は皆無、体育や図画工作に使用する備品も皆無、という状況だった。先述のように私は体育と図画を教えた。図工ではなく図画なのは、工作に必要なものが手に入らなかったからである。日本では廃品になるペットボトルがそのまま酒屋さんでの小売容器として使われていたり、カップラーメンの空き容器がそのまま植木鉢になっていたり、そんな状況だった。とにかく不要とされるものが少ない環境だった。

この２教科ですが、なるべくベトナムの先生と私の２人で授業をやるようにした。ニャッティウ小では私が来る前は体育と図画は殆ど行われていなかった。時々行われても、体育は気をつけや休め、回れ右などの教練のような内容、図画は教科書の模写のみ、という状況でした。そんな中で、現地の先生に私の授業を見てもらうことは肯定にしても否定にしろ、何らかのヒントになるのではないかと思ったからである。

３－（２）体育の授業

体育は環境に慣れるのに少し時間がかかった。教具がないのは良いとしても、グラウンドには木がたくさん植えられており、児童が動きづらいのである。私自身、慣れない最初のころは授業のやりづらさを感じた。しかし、今まで系統立てて体育の授業が行われていなかった学校なので、その分つくっていく楽しさはあった。現地の状況を踏まえた教材を考えた。なにも物を必要とせず、グラウンドの制約も受けない、身ひとつで楽しめる運動が体育の基本になった。ベトナム語でルール説明するのがまた一苦労だったが、子どもたちはよく行間を読み取って行動してくれたように思う。

写真２　体育授業風景

夕方 5 時からは村の中高生とサッカーをした。暗くなるまで一緒にボールを蹴っていた。

みんなコンクリートの地面で素足である。たくましさを感じた。

３－（３）図画の授業

写真３　図画授業風景

図画は最初のうち現地のやり方にならって、模写の授業ばかりだった。しかし、だんだんと現地の先生と関係ができてきて、外から葉っぱを取ってきて描いたり、友達の顔を描いたり、授業の幅が広がったように思う。実際に私が村の風景などをサラサラと下手なりにスケッチしたり、研究授業で使う挿絵を描いたりしているうちに、徐々に耳を傾けてくれるようになった。もともと私は絵を描く習慣はなかったが、村ではみんながほめてくれるので嬉しくなってたくさん描いた。村の大人も子どもも絵を描く体験が日本人に比べて少ない印象である。落書き帳が自由に手に入る環境は恵まれている環境だということを知った。紙を用意できずに算数のノートの裏などに書いてしまう子どもが多かった。そのため全員分ではないが、紙や鉛筆など必要なものを用意して授業をしていた。

2年目である2004年度からは私と友人が共著で作った越日語版の指導案集をベースにして授業を行った。口頭でねらいや展開を説明してやっていたころに比べて、ずいぶんとスムーズに授業が進むようになった。この指導案集、全100ページで100部ほど作った。近隣の小学校や研究会で配ったりしているうちに、手元には3部しか残らなかった。国語算数以外のこうした本は珍しいらしく、喜んでくれたのがうれしかった。作成にあたり協力してくれたベトナム人の友人とは今もメールで連絡を取り合っている。

４、最後に

ベトナムではいい思い出ばかりではなく、信用していた人に裏切られたり、お金の面で嫌な思いをしたりすることもあった。赴任当初は慣れない生活から体調を崩すこともあった。しかし振り返ってみるとそれらの嫌な思い出も含めてすべてが財産となっている。ベトナム人社会にどっぷりつかった2年間だった。ニャッティウ村に外国人が住んだのは初めてだと聞いた。その間、嫌な体験もしたし、逆に生活者ならではの濃く良い体験もした。仕事上だけでなく、寝食まで共に現地の人とすごせたことは稀有な体験だと改めて思う。

日本にいると、日本人の常識や考えが世界のスタンダードであるかの様な錯覚に陥りがちである。しかし、世界は広く日本のような島国の考え方のほうがむしろマイノリティであることを肌身に感じた。ベトナム人は大陸育ちであるがゆえなのか、非常にたくましく、非常にシンプルな考え方をする。そして何より人生の楽しみ方が上手だと思う。

たった2年間、されど2年間。かけがえの無い経験をした。このような機会を与え、活動を支えてくださった多くの方々に深謝したい。

ベトナム教育事情と協力隊活動

15－1　小学校教員　ベトナム派遣
神奈川県二宮町立二宮小学校
清水　大格

★VIET　NAM★
情熱…全てに熱い国

ホテルは1日10ドルが相場

1ヶ月、ハノイで語学訓練…

同期達との共同生活は続く

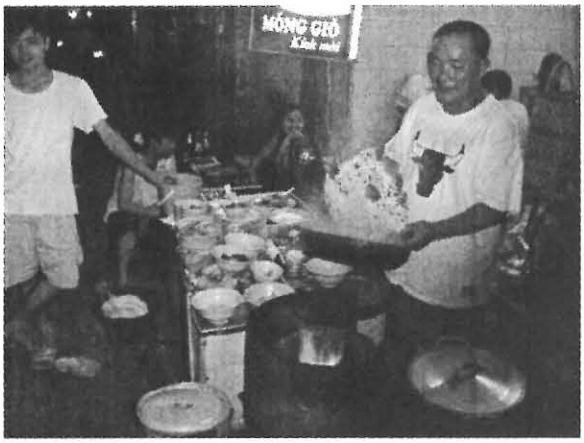
のんびりとした空気

確かに豊かではないかもしれな
い

けれど、目一杯楽しみ

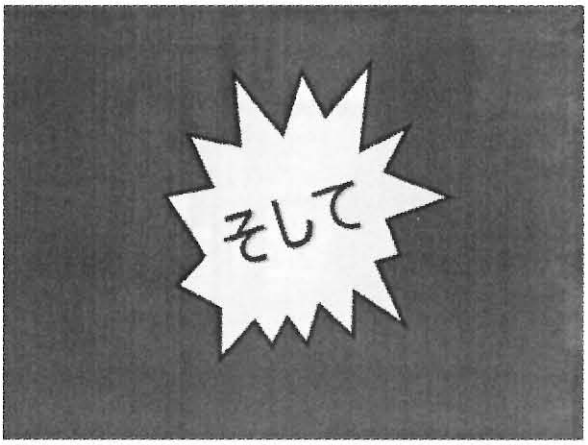
日一杯生きる

MÓNG GIÒ
Kinh mới
そんな人たちの姿から


MÓNG GIÒ
Kinh mới

TRUNG TÂM HỘI
VÀNG BẠC ĐÁ QU
59 ĐINH TIÊN HOÀNG

QUẦY RAU SẠCH
勇気とやる気を与えられ

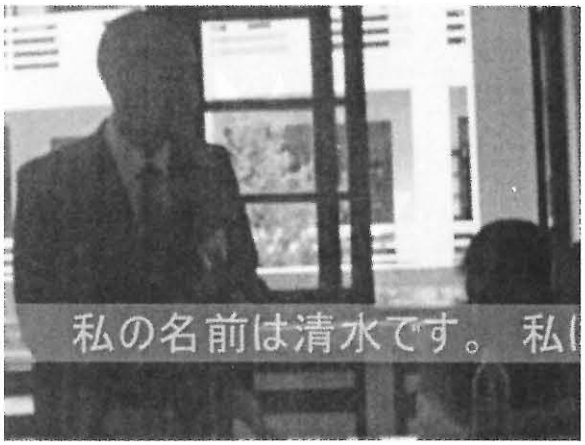


いよいよ仲間と離れ
それぞれの地での
活動がはじまる…

この子たちと

授業を作っていくんだ！

しかし！
大問題が！！


私の名前は清水です。 私

私、私、私

あー…

たどたどしい
ベトナム語

大丈夫かこれで!?

ニャッティウ村
小学校の紹介

3年A組の教室

A組は学力選抜クラス

「こんにちは」「ありがとう」
は全ての児童が覚えている

この日はお客さんがあり、
児童はアンコールをしてくれた

次は5年生のクラス。

ベトナム式の挨拶をして、
校長先生からツッコミが入る

体育の授業

先生の模範演技通りに
やることが求められる

体育の授業が行われること
自体、かなり「まれ」だった

旧校舎での授業

図画は模写が基本

正確に描き写すことが求められ
る

職員室は児童棟の対面にある

職員室は会議室のような役割

職員個人の机は無い

休み時間はこのように
お茶を飲んでくつろぐ

Mien校長先生
公私にわたりお世話になった…

体育の授業提案
の様子

最初の年はベトナム式で体育を
行った

走ったり跳んだり

ゲームをしたり

こうした授業を認めて貰えたのは
2年目からだった。

笛の音の回数に合わせて
体を動かす

日本で言う「ドロケイ」

赤い布片を付けた児童が鬼

道具が無く、敷地が狭いので
できる運動は限られる

でも、子どもは大喜び。

単純で分かりやすい運動が
好評だった。

村での日常

学校が終わってから
サッカーをして遊ぶ

はだし か サンダル

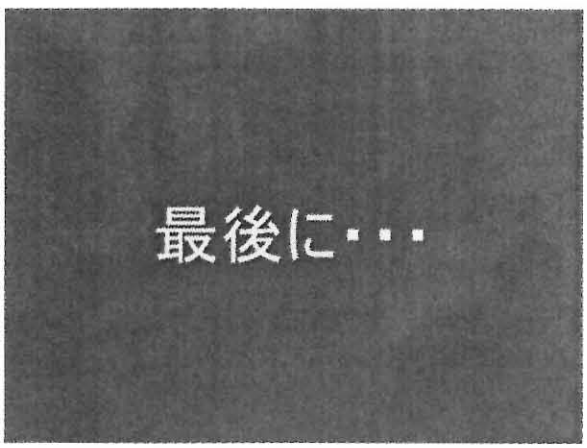
ゴールは石と石の間

村の小学生から大人まで
毎日一緒にやっていた。

村にはグラウンドが無い。

ゴールが決まった喜びは
グラウンドが狭くても関係ない

会議や礼式後の酒宴



※発表はDV(デジタルビデオ)を用いて行われました。この資料は，DV画面をもとにスライド風に編集しなおしたものです。

ベトナム教育事情と協力隊活動

１５－１　小学校教員　ベトナム派遣
神奈川県二宮町立二宮小学校　清水大格

最初に「ベトナム小学校事情」

・ １年生から５年生まで
日本は６年生まで。ベトナムは中学が４年ある。

・ 時間は７時～１０時、１４時～１７時
昼休みが長いのは、昼御飯を家に食べに帰るため。半日しかない日もある。けれど、殆どの日は午後もあり、日本のような放課後という考えはあまり無い。

・ 名目上の教科と実質的な教科
名目上は、技術、自然と社会、体育、図画などの時間があるが、実際は殆ど算数と国語にあてられている。

・ 固定された人事
村で採用されたら多くは定年まで村で教員をする。他村との人事交流は無いに等しい。また、３年生の担任は翌年も３年、のように学年が固定されている。

・ 習熟選抜クラス
３年生から試験結果によって選抜クラスと通常クラスに分けられる。学校行事は殆ど選抜クラスの児童によって執り行われるのが普通。

・ 県、省レベルでの学力調査、大会
前後期にある期末テストは重要。成績優秀者は県でのテスト大会によばれる。さらに、学校ごとの点数も出している。

2.　任地へ赴く～こちらとあちらの行き違い～

・ 自分を振り返ると、意気込みすぎていた
せっかくの２年間、何か残して帰りたい！

・ 向こうは積極的に技術を欲していると思っていた。

↓しかしベトナムサイドは・・・

みんな隊員をどうやって扱うべきか、迷っていた。

3. 見えてきた村の学校の現状

・ やたら酒を飲む。行事は子どもの時間と大人の時間がクッキリ。
子どもの行事の後には大人の打ち上げが学校内で行われ、いっきのみ大会。そのため子どもの行事は長くても２時間以内に終わる。

・ 図画は教科書の模写のみ。
教科書の例を正確に写すことが求められる。

・ 体育は坐学か教練のような内容。
道具が全くない中で行うので、行進や体操、が多かった。

・ 学校対抗とも言えるテスト、余裕の無さ。
学校内、郡内での順位を競っている。
情操教育は学校内でも進級に関わらない科目。

・ 中央、省レベルは情操教育に力を入れ始めているが・・・
実際にはテスト競争があるので現場に浸透していかない。

・ 多くの先生は農業との兼業。
そのため、特に農繁期は空き時間が欲しい。
買い物に行ったり、畑の様子を見に行ったりする。

3. 染まってみよう、リラックスしよう

・ 酒を飲む、休憩を一緒に取るなど、地道な人間関係から

・ 受け持ちのクラスも増え、こちらの提案をやってくれる人もでてきた。しかし、「技術協力」にはこだわりたかった
→教案集など、ベトナム人の力も借りつつ

4. 見えてきた良さ

・ 怒らない

・ 絶妙なリスクヘッジ
Ａがだめでも Ｂがあるよ、という思考を常にしている。

・ 人生を楽しんでいる。良いと思ったことをスッとやってくれる。
指導案集を活用して貰えた。

・プラス思考、娯楽に寛大

マレーシア・トレンガヌ州知的障害特殊学級での教育実践

海老沢　穣
（15-1，マレーシア，養護，東京都立小金井養護学校）

2003 年 8 月から 2005 年３月にかけて、マレーシア・トレンガヌ州にある小学校および中等教育学校の特殊学級で活動に携わった。トレンガヌ州はマレー系の割合が 90%と高く、イスラム色が強い地域である。主な産業は農業・漁業で、その他に目立った産業はなく、マレーシアの中では比較的貧しい地域にあたる。使用されている言語は主にマレー語である。

１　マレーシアの特殊教育について

⑴特殊教育の対象

「特別なニーズ教育に関する行動のための枠組み(サラマンカ宣言)」(1994 年)等の国際宣言の採択をうけ、1995 年に教育省特殊教育局が創設された。その後 199７年に特殊教育に関する施行規則が制定され、全州で本格的に特殊教育が開始される。ここで、特殊教育の対象となるのは、①視覚に問題のある児童・生徒、②聴覚に問題のある児童・生徒、③学習に問題のある(教育可能な)児童・生徒で、いずれの児童・生徒も基本的に日常生活面で自立していることが入学の条件となる。身体障害児（知的に問題のない児童・生徒は通常学級へ)、重複障害児、重度身体障害児、重度知的障害児、は学校教育の対象となっていない。

⑵特殊教育の機関

特殊教育の機関としては以下のものがあげられる。

小学校：６歳以上（６年間）

中等教育学校：１３歳以上(５年間)

→どちらも児童・生徒の実態に応じて２年延長して在籍することが可能である。

2003 年現在マレーシア全州では、

・盲学校・視覚障害特殊学級　(　７校・２４学級)

・聾学校・聴覚障害特殊学級　(２５校・７３学級)

・知的障害特殊学級　　(６６０学級)

の学校・学級が設置されている。知的障害養護学校は設置されておらず、通常校に併設された特殊学級で統合教育(食堂・図書館・体育用具等は通常学級と共有するが、特設された特殊学級にて教育)が行われる。通常学級で健常児と共に学ぶインクルージョンのプログラムも試行されている。知的障害特殊学級は、1996 年に１４７学級であったのが、2003 年には６６０学級と大幅に増加している。

⑶特殊教育の目標

特殊教育の目標としては、以下の事項があげられる（配属されたトレンガヌ州パダン・ヒリラン小学校特殊学級の例)。

・コミュニケーション能力の促進
・対人関係・社会性の促進
・安定した自己の確立や自立へ向けた自己信頼感の育成
・健康と安全への自己意識の育成
・自己や周囲への知覚、記憶、理解を深める力の促進
・身体機能の向上にむけた運動能力の促進

⑷特殊学級の教育課程

学習能力別のグループ編成による授業形態(１グループ５～８名の児童を１名の教師が担当)がとられている（写真１)。教科は、国語・数学・宗教・理科社会・生活・芸術(図工)・音楽・体育・手指の操作スキルに関する学習(Kemahiran Manipulatif)であり、教科担当制で授業が組まれている。そのほか年間行事として、全校運動会、博物館・公園等への遠足、公立プールでの水泳、家族デー、バースデイパーティなどがある。

写真１　特殊学級の授業風景
(パダン・ヒリラン小学校)

２　特殊学級での活動について

隊員活動を進めるにあたって、以下の事項をねらいとした。すなわち、

・特殊学級教員へのアドバイス、教員の技術レベルの向上
・授業アイデアの提案
・児童生徒の指導や授業のサポート
・日本で行われている授業や活動の紹介

である。基本的には、芸術(図画工作)・音楽・体育の各授業を担当し、必要に応じて他の授業や児童生徒の指導に関するアドバイスやサポートを行う形式となった。

⑴配属先

配属された学校はすべて州都のクアラトレンガヌ地区にあり、以下の通りであった。

・パダン・ヒリラン小学校特殊学級(マレー系)
・チュン・ワー・ウェイ・シン(中華維新)小学校特殊学級(中国系)
・プサッ・ブキッ・ブサール小学校特殊学級(マレー系)
・ブキッ・ブサール中等教育学校特殊学級(マレー系)

赴任当初はパダン・ヒリラン小学校のみでの勤務だったが、州の特殊教育課との協議の上、最終的には４校を巡回する形式をとった。

⑵活動内容

各学校での主な活動内容は以下の通りである。担当した教科は、主に芸術(図画工作・美術)、音楽、体育であった。

①パダン・ヒリラン小学校特殊学級

(ⅰ) 芸術(図画工作)

・描画：子どもにとってイメージしやすいテーマを題材に(“乗り物”“動物”“家”など)（写真２）

・道具を用いた作品作り(ハサミ、筆など)（写真３）

・ゲームの制作(“すごろく作り”など)（写真４）

写真２　描画

写真３　「わたしの家」(ハサミを用いた作品作り)

写真４　すごろく作り

(ⅱ) 音楽

・歌唱：マレー語と日本語のうた
(“スラマッパギー（おはよう)”)
マレーの歌
(“バングンパギ(朝起きて)”、“ブニ・ビナタン(動物の鳴き声)”など)　（写真５）

・カセットテープを用いた身体表現活動

写真５　音楽の授業

(iii) 体育

・運動スキル向上のための“サーキット・トレーニング”（写真６）
・動作訓練遊技場での活動（写真７）
・室内での遊びの指導（椅子取りゲーム・風船バレーボール）

(iv)認知学習のための教材作り

・色や形の弁別分類学習のための教材（写真８）

写真６　サーキットトレーニング

写真７　動作訓練遊技場

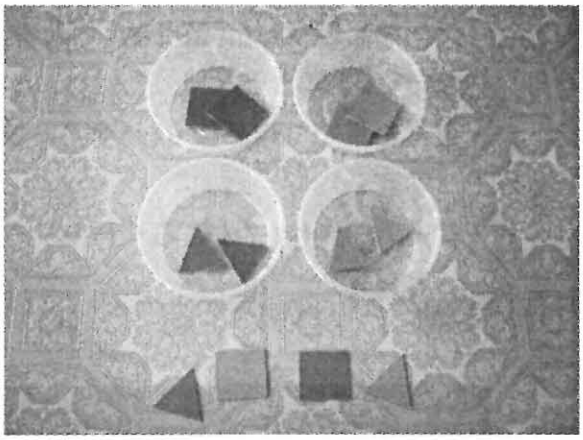


写真８　弁別分類学習の教材

②チュン・ワー・ウェイ・シン(中華維新)小学校

(ｉ)芸術(図画工作)

・描画
・道具を用いた作品作り(ハサミ、筆など)
・ゲームの制作(“魚つりゲーム”“ボーリングのピン作り”など)（写真９，１０）

写真９　ボーリングのピン作り

写真１０　魚つりゲーム

(ii)自閉症児の指導法についてのアドバイス

(iii)通常学級児童対象の折り紙ワークショップ
（写真１１）

写真１１　折り紙ワークショップ

③プサッ・ブキッ・ブサール小学校

この学校では、芸術・音楽の授業を対象に、もう１名の学校隊員との“ティームティーチング”を９ヶ月間試行した。授業展開がしやすく、１人では難しかった活動も取り入れることが可能になり、特殊学級の教員にもアイデアとして提供することができた。

④ブキッ・ブサール中等教育学校

(i)芸術(美術)

描画

道具を用いた作品作り(ハサミ、筆、“ステンシル”など)（写真１２）

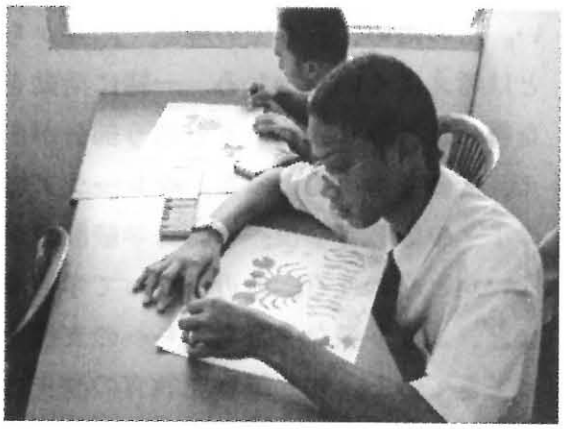


写真１２　ステンシル

(ii) 音楽

歌唱：アルファベットの歌など

カセットテープを用いた身体表現活動

楽器演奏(キーボード、ピアニカ、打楽器など)（写真１３）

⑤音楽ワークショップ

トレンガヌ州障害児のためのキャンプにおいて、音楽ワークショップを試みた。内容は、歌唱、楽器演奏、音楽にあわせた身体表現、日本の歌の紹介、椅子取りゲームなどであった（写真１４）。

写真１３　ピアニカの譜面作り

写真１４　音楽ワークショップ

⑷活動を振り返って

約１年８ヶ月の活動であったが、複数の学校に勤務することで各学校の特色がよく見え、比較的スムーズに活動を進めることができた。どの学校でも先生方や子どもたちは温かく迎え入れてくれ、毎日の授業ややりとりの中で悩んだり試行錯誤をしたりしながらも、自分自身も多くのことを教えられた隊員活動であった。

マレーシアと日本の教育では様々な点で違いがみられるが、文化的な背景による差も大きい。そのため、日本での経験や知見から一方的にアドバイスをしても、それが根付いていくとは考えにくい。むしろ、一緒に活動を進めていく中で、マレーシアの教員側が何かヒントを得られ、取り入れようと思う部分があればそれをアイデアとして生かしてもらえればと考え、活動を進めていった。マレーシアの特殊教育は、インテグレーションの理念を基に地域の小・中等教育学校への特殊学級設置がなされており、今後もその数は増加していくのではないかと思われる。最近になって学習障害児学級や就学前学級なども少数ながら設置されるなど、より多様な子どもたちへの支援を行うために、いろいろな施策が試みられるようになってきている。知的障害児教育の歴史はまだ浅いが、様々な子どもたちへの対応が求められる中で、少しずつ実践の蓄積が進んでいき、授業の内容や質の改善がなされていくであろうと思われる。教員の中には、一定期間休職して大学で特殊教育を専攻したり、学士や修士の学位を取得しようと夜間の大学に通ったりする例もみられており、今後少しずつ教員の質も向上していくのではないかと感じている。

赴任したトレンガヌ州では後任の隊員が活動を継続し、また他州での学校隊員の配置も検討されている。今後もマレーシアと日本両国の障害児教育がさらに発展充実していくことを心から願っている。

参考文献：

Jabatan Pendidikan Khas, Kementerian Pendidikan Malaysia (2003).
Maklumat Pendidikan Khas 2003

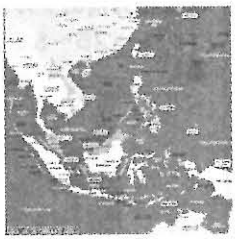
Puan Tan Gweek Eng(2003). Peluang, Syarat Kemasukan dan Halatuju Program Pendidikan Khas(Kursus Pekerja Pemulihan Dalam Komuniti(PDK))

マレーシア・トレンガヌ州 知的障害特殊学級での 教育実践

海老沢　穣
（東京都立小金井養護学校）
（青年海外協力隊平成15年度1次隊・養護）

派遣国：マレーシア

- 日本から飛行機で
  約7時間
- 首都：クアラルンプール
- 人種：マレー系(65.5%)
  中国系(25.6%)
  インド系(7.5%)
- 言語：マレー語(国語)ほか
- 宗教：イスラム教ほか



赴任地：トレンガヌ州

- 州都：クアラトレンガヌ
  （人口：約32万人）
- マレー系の割合が90%で、
  イスラム色が強い
- 主な産業：　農業・漁業

マレーシアの特殊教育について

- 「特別なニーズ教育に関する行動のための枠組み（サラマンカ宣言）」(1994年)等の国際宣言の採択
- 1995年　教育省に特殊教育局を創設
- 1997年　特殊教育に関する施行規則の制定
- 特殊教育の対象
  ①視覚に問題のある児童・生徒
  ②聴覚に問題のある児童・生徒
  ③学習に問題のある(教育可能な)児童・生徒
  →いずれの児童・生徒も基本的に日常生活面で自立していることが条件

特殊教育機関

- 小学校：　6歳以上（6年間）
- 中等教育学校：　13歳以上(5年間)
  →どちらも2年延長して在籍が可能

マレーシア全州(2003年現在)

①盲学校・視覚障害特殊学級　（　7校・24学級）
②聾学校・聴覚障害特殊学級　(25校・73学級)
③知的障害特殊学級　　(660学級)

＊147学級(1996年)→660学級(2003年)

特殊教育の目標

- コミュニケーション能力の促進
- 対人関係・社会性の促進
- 安定した自己の確立や自立へ向けた自己信頼感の育成
- 健康と安全への自己意識の育成
- 自己や周囲への知覚、記憶、理解を深める力の促進
- 身体機能の向上にむけた運動能力の促進

（パダンヒリラン小学校特殊学級）

特殊学級の教育課程

- 学習能力別のグループ編成による授業
  (1グループ5～8名の児童を1名の教師が担当)

(パダンヒリラン小学校特殊学級)

- 教科
  国語・数学・宗教・理科社会・生活・
  芸術(図工)・音楽・体育・手指の操作学習

(パダンヒリラン小学校特殊学級)

- 年間行事
  全校運動会　博物館・公園等への遠足
  公立プールでの水泳　家族デー
  バースデイパーティ など

(パダンヒリラン小学校運動会)

協力隊員要請の背景

- 知的障害特殊学級教員へのアドバイス、教員の技術レベルの向上
- 授業アイデアの提案
- 児童生徒の指導や授業のサポート
- 日本で行われている授業や活動の紹介

トレンガヌ州の特殊教育について

〔トレンガヌ州全体〕
①盲学校・視覚障害特殊学級(1校・1学級)
②聾学校・聴覚障害特殊学級(2校・13学級)
③知的障害特殊学級　(49学級)

〔クアラトレンガヌ地区〕
①盲学校・聾学校(各1校)
②知的障害特殊学級(13学級)

〔協力隊員の配属されている学級〕

・小学校知的障害特殊学級3校
  ①パダン・ヒリラン小学校(PH)
  ②チュン・ワー・ウェイ・シン小学校(CHWS)
  ③プサッ・ブキッ・ブサール小学校(PBB)

・中等教育学校知的障害特殊学級1校
  ④ブキッ・ブサール中等教育学校(SMKBB)

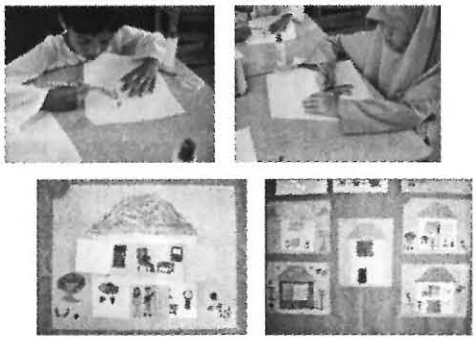
配属先の概要

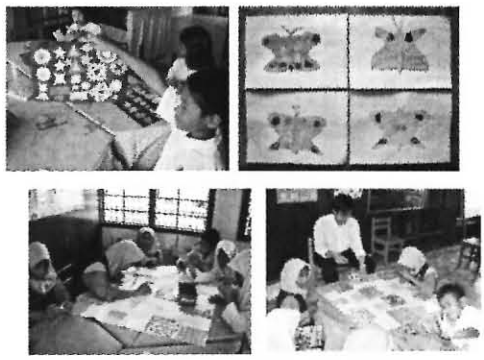
学校名	生徒数	教員数	実　態
①PH	63	12	児童数教員数ともに多く、集団としてまとまりにくい。施設設備が古くなってきている
②CHWS	8	3	中国系、自閉症児・脳性まひ児など実態が多様。マレー語・中国語を並行した指導が行われている
③PBB	22	5	授業や教材準備に熱心な教員が多く、学級集団として比較的まとまっている
④SMKBB	26	6	作業学習・園芸など中高生に合わせたカリキュラム。生徒が落ち着いているせいか、自習的な授業が多い。

活動内容

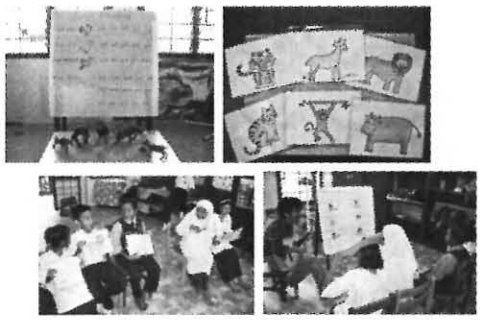
①パダン・ヒリラン小学校(PH)

・ 図工・音楽・体育各授業の担当*(図工)*



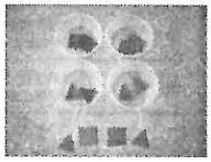


(音楽)



（体育）

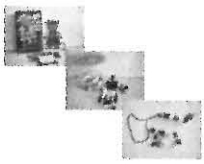
- 認知学習用教材の作成



②チュン・ワー・ウェイ・シン小学校（CHWS）

- 各授業のサポート・アイデア提供

- 自閉症児への対応・アドバイス

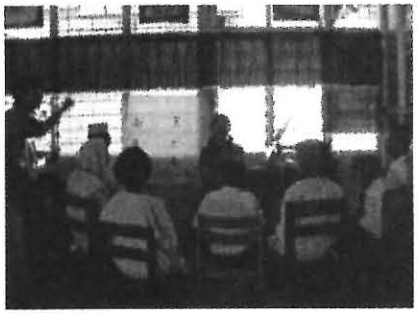


- ワークショップの開催・キャンプへの参加

③プサッ・ブキッ・ブサール小学校（PBB）

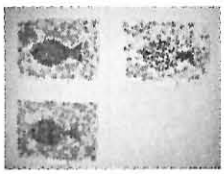
・ ティームティーチング（TT）の導入

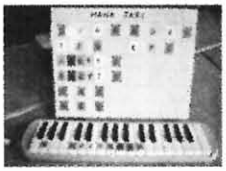
隊員によるTT



④ブキッ・ブサール中等教育学校（SMKBB）

・ 美術・音楽・体育各授業の担当





⑤音楽ワークショップの開催ほか

今後の隊員活動の見通し

- 州特殊教育課への提案
- 後任隊員への引継ぎ
- 他州への隊員配置

SEKIAN TERIMA KASIH

青年海外協力隊に現職参加して

工藤　昭征
（15-1，バングラデシュ，理数科教師，大分県佐伯市立宇目緑豊中学校）

「自分にもできることがあれば、途上国の発展のために役にたちたい。」

大学生の頃から協力隊参加を夢見ていた。その頃の思いを忘れることができず教員生活を続けていたが、教員生活６年目にして初めて受験のチャンスが来た。合格通知を受けとったときに、初めてバングラデシュという国を知った。

任地は首都（ダッカ）より約 40km 北に離れた県だった。日本から飛行機を乗り継いで、上空から見たバングラデシュはまるで大水害にでもあったのではないかというくらい国土が水に浸かっていた。そして、飛行場から出た瞬間から私の戦いの日々は始まったのかもしれない。赴任して、理数科教師として活動をする前に、任国の人混みや臭い、停電生活、濁った水、下痢の連発など任地で生きていくことの難しさを感じた。自分がいかに日本という温室のような国で守られ育ってきたのか、赴任するまでにテレビなどで途上国の様子など見ていたが、想像をはるかに越えていた。そんな中で自分に何ができるのか改めて考え直す必要があった。

私の任地での活動要請は「小学校教員の訓練機関（ＰＴＩ）で身近な物を使った理科実験をカウンターパートと共に教えていく。」という内容だった。この要請にあわせて出発までの１年間準備をしてきたが、現実はまったく違っていた。自分の中で協力隊を美化しすぎていたのか、任地での私の扱いはまさしく邪魔者であった。なぜならお金を持ってこない協力隊は援助大国のこの国では歓迎をされない存在であったからである。任期後半になるとカウンターパートと話をするよりも校長とバングラデシュの教育について話す機会がよくあった。「おまえ達は私たちの言葉を初めはほとんど話すことができず、やっと話せるようになって仕事ができるようになったらすぐに帰っていく。あと数年ここにいて働いてくれればもっとこの国のためになるのに。」という協力隊に対する厳しい意見なども多くいただいた。

そんな状況の中で、現職参加の教員が任地で活動できる日はわずか 20 ヶ月。普通の隊員が２年間の活動期間があるのに対して短い。期間は短いがやりたいことはたくさんあった。任国の現実を見て、整理していく必要があったが、私は現職教師として今まで任国で活動してきた理数科隊員の活動で有用だと思われるものをまとめていくことを活動の軸にしていった。

私の活動の話をする前に、任国の初等教育の状況を簡単に説明すると、バングラデシュの初等教育は 1990 年に義務化され、世界銀行、アジア開発銀行をはじめ様々なドナーからの支援を得て成り立っている。様々なドナーが入ることにより資金は得られたが、そこに一貫性がなく、援助が効果的に進んでいるようには見えない。そのような背景の中、ドナーが協調

して開発を進めていこうという動きもあるが、難航しているようである。そんな中でも初等教育の就学率については一定の成果が見られる。（表１）

（表１）

指標（%）	目　標		実績(1998)		
	1991	2000	全体	男	女
初等粗就学率	76	95	96.5	98.4	94.5
初等純就学率	-	-	81.4	80.0	82.9
初等修了率	40	70	65.0	-	-
成人識字率	35	62	55.9	63.1	48.1

（出所）バングラデシュ初等大衆教育省、EFA The Year 2000 Assessment-Bangladesh Country Report, 1999.
（注）学齢人口に対し、当該年齢外も含む就学者の比率は粗就学率、当該年齢就学者のみの比率は純就学率。

しかし、この数字が正確かどうかはあやしく感じずにはいられない。なぜなら、学校訪問をした際、どの学校も５年生の出席率は１年生に比べて非常に少なかったからである。国内での地域差はかなり見られたが、親が子どもに教育を受けさせたいという希望は全体的に強かった。しかし同時に任国の子どもは重要な労働力であり、学年が上がるにしたがって重要な労働力とされるのが現実である。また、私の活動した県はＩＤＥＡＬプロジェクト（ユニセフのプロジェクト）が小学校現場にかなり入り込んでおり、教材配布や教師へのトレーニングも行われていた。

任地に慣れるまで、とにかく自分の足で歩いて、自分の目で見ることから活動を始めた。私のたどたどしい現地語に興味を持ち聞いてくれる人は少なかったが、とにかく自分で見たもの聞いたものを信じていくことにした。そんな中でなぜユニセフの教材が使われないのか、どういうトレーニングが必要なのか考えていった。この国の教育は暗記中心教育である。たしかに子ども達もいろいろなことを知っているが、知識と経験とが結びつかず、また考えることが苦手で、大人でも深く考えることができていない人が多い。赴任当初は、自分の語学力不足が原因と思っていたがそれが教育によるものではないかと考えるようになった。

任地の生活に慣れ、当初私は「ＰＴＩ内での活動」だけを考えていたが、それだけでは現場のニーズが見えずに当を得た活動ができないのではないかと思い、「ＰＴＩ外での活動」も積極的にしていくことにした。

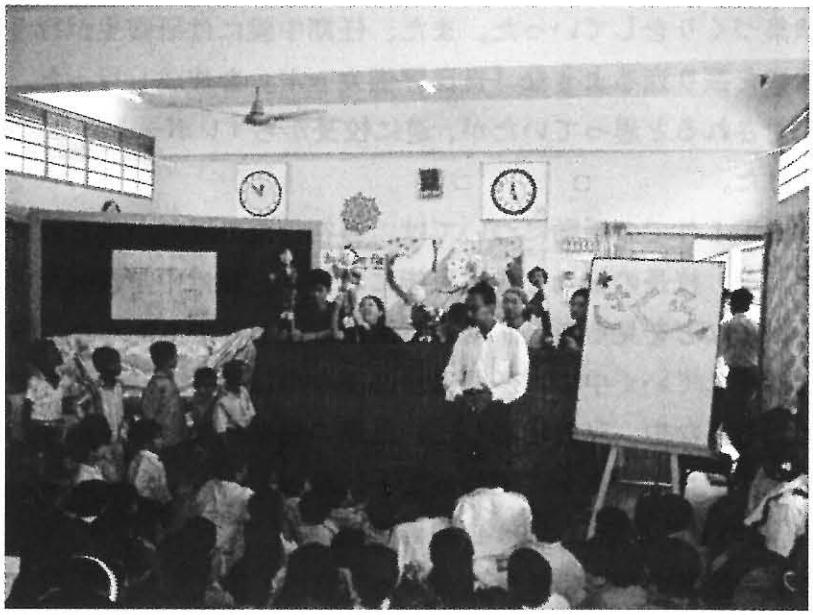
職場では私は３代目にあたりカウンターパートも日本で研修を受けたこともあったので、お互いの短所や苦手な部分をカバーをしながら研修生に授業を行っていった。また、赴任当初より教師への実験集の必要性を感じていたので、任国の教科書を他の隊員と協力して翻訳し、教科書の内容に沿った実

験集づくりをしていった。また、任期中盤には研修生が行う教育実習に注目し、自分たちで授業を振り返るような「自己評価カード」を作成し行った。要請以外の活動なので校長から反対されると思っていたが、逆に校長から「レポートとして提出して欲しい。」という要請を受けた。

ＰＴＩ外での活動については、当初校長の理解が得られず、休日などを利用して活動していたが、校長の転勤を機に可能になった。私は中学教師なのでやはり実験などで子どもの驚く様子などを見ることができる活動は楽しみでもあった。学校訪問などを行い、現地の教師と話をしていく中で、任国に今必要なのは理科よりも数学ではないかと思うようになってきた。そんな中、私の活動していた県の先輩理数科隊員がＪＩＣＡの専門家と行っていた算数ドリルプロジェクトに関わることになった。このドリル活動は98日間毎日継続して算数授業の初めの５分間を使って行うもので、地道にコツコツ行うことが苦手である任国の教師や子どもができるのか当初かなり心配されたが２年目を迎える学校については訪問指導を行わなくてもほとんどの学校が毎日取り組めるようになっていた。なお、この活動についてはＪＩＣＡ・ユニセフ・協力隊とお互いが連携を取りながら今年度も実施されている。

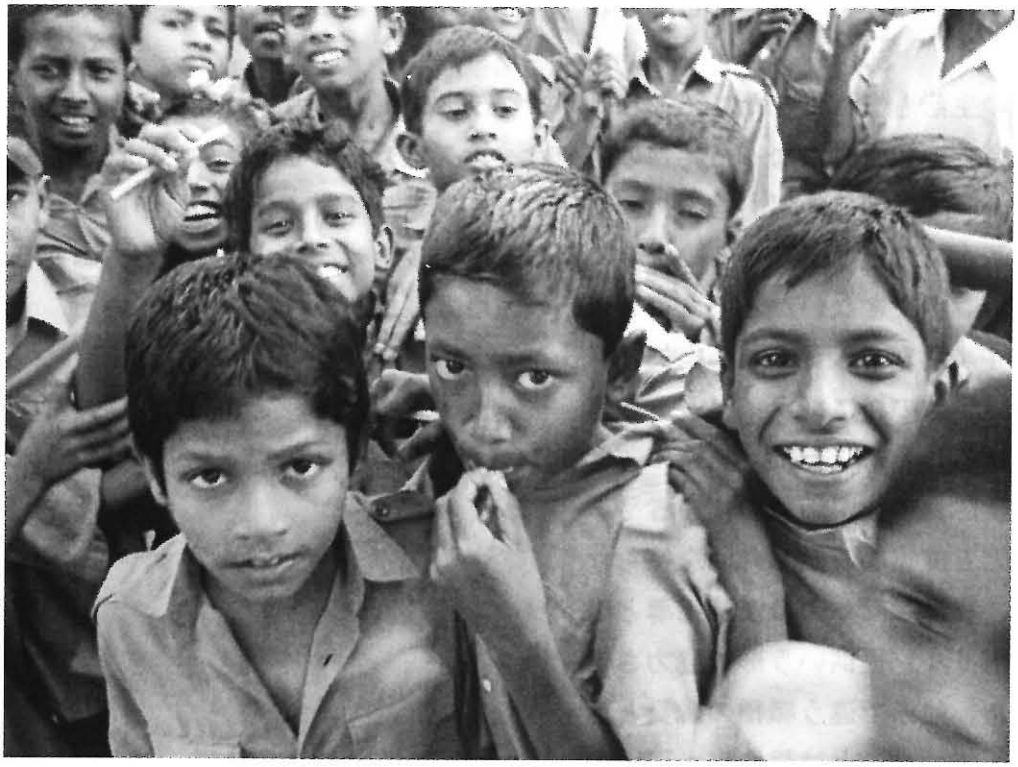
任地での生活も慣れてきたころ、私はバングラデシュの協力隊員で構成されている『子ども教育基金』の担当者になった。この基金はバングラデシュで活動する隊員が自分たちで資金を出し合って任国の子ども達のために何かできることはないかと十数年前から始めたものである。基金立ち上げ当初から物資面に偏る運用が多かったが、もっと協力隊らしく地域に根付いた活動ができないかということでその運用方法などの討議を続けていた。

そんな中で村落普及隊員(15-1 矢野隊員)の提案で、彼の村にプライベート教室を立ち上げることになった。教室の運営は村落普及隊員の彼が地域の権力者や教育機関などと度重なる話し合いを持ちながら行い、私は教師への教授法指導と教材（算数ドリル）提供いう形で協力させてもらった。他県で違う職種の隊員と活動を共にしていくことは想像以上に大変だったがやりがいのある活動となった。



また、任国は宗教教育（イスラム教）はあるが一般的な道徳教育というものはない。他の隊員とその必要性などを討議する中で、「子ども達に生き物を大切にして欲しい。」「自分に正直に生きて欲しい。」などの気持ちを劇にして伝えたいということで学校や施設で人形劇を披露することになった。時には観客が人形劇の舞台裏から劇をのぞき込むようなハプニングもあったが、子ども達の反響はよかった。２年間で９回の上演だったが、一番協力隊らしい活動だったような気がする。

任国で 20 ヶ月ほど活動してきて、任国の人達と喧嘩をしなかった日の方が少なかったが、自分に正直に生きていく任国の人達から学ぶべきことはたくさんあった。また、私が活動を進める上で、自分１人で行った活動がないことに改めて気がついた。任国の人をはじめさまざまな機関の方から機会と支援を与えてくださった方々に深く感謝いたします。



活動発表会

大分県
佐伯市立宇目緑豊中学校

工藤 昭征

15-1 バングラデシュ
理数科教師

バングラデシュ人民共和国

面積 ： 北海道の約2倍
人口 ： 1億2712万人
首都 ： ダッカ
通貨 ： タカ
（1タカ＝約2円）
言語 ： ベンガル語
宗教 ： イスラム教
ヒンドゥー教
仏教
民族 ： ベンガル人

配属先・要請内容

初等教育訓練機関 ガジプール
(Primary Training institute, Joydebpur, Gazipur)

要請内容
「教科書暗記中心の理科授業からの脱却をはかるため、身近な素材を利用した理科実験の推進」

活動の目的（協力隊参加への動機）

1. 任国で自分が受け入れられるか？
（自分への挑戦）

2. 今までの経験を活かして、任国理科教育の発展のために努力をする。

活動内容

【PTI内の活動】
- 実験授業（TTスタイル）
- 実験校での授業（TT、個人）
- 理科準備室の獲得とその充実
- 自己評価カードの作成、利用、改訂
- 授業案の翻訳
- 教科書訳（5年生）
- 小学校学年末テスト翻訳（算数、理科）
- 指導要領の翻訳（3年 理科）
- 理科クラブ
- 理科実験集（第1版、第2版）
- 教師のモチベーション調査
- 上申書（PTIの問題点について）

【PTI外の活動】
- 学校訪問
- 地域における科学祭
- 算数ドリル活動
- PTI相互の連携について
- 理科トレーニング（トライアウト）参加
- サブクラスター研修（理科）参加
- プライベート教室への指導
- 人形劇活動
（道徳教育へのアプローチ）

理科準備室の獲得、管理

〔成果・課題〕
- 旧校長と交渉の結果、赴任後2週間で手に入れることができた。
- 突然の実験授業（訪問客による）にも対応ができるようになった。
- 実験道具のストックができた。
- 実験校の子ども達が科学に触れることができた。

実験授業(Team Teaching 形式)

年	対象	種類	コマ数
2003	2ndshift	2	2
2003	1stshift	10	13
2004	2ndshift	7	3
2004	1stshift	13	13

〔成果・課題〕
・PTIの教科書と小学校の教科書を分析し、いくつかの基本実験を設定したことで少ない実験授業ではあったが、内容は充実した。
・TTの形式を用いて授業ができたので、お互いの不足しているところをうまくカバーしてできた。

・私の要請はPTIでトレイニーに対しての実験授業である。上の数字を見て、充 分な活動ができたと言えるのだろうか？

実験校での実験授業
(TT授業, おもしろ実験授業)

学年	おもしろ実験	TT授業
2	1回	1回
3	2回	2回
4	4回	7回
5	3回	6回

・新校長の提案の元、年間の計画を立て、付属小学校の理科教師とTTで、実験授業を行った。また、実験校の教師が不足した際に、代わりに私が『おもしろ実験』の授業を子ども達に行った。

〔成果・課題〕
・年間を通して、計画通りに行うことができた。
・実験授業を行ったときの子ども達の反応を確認できた。

自己評価カードの作成、利用、改訂

目的: トレイニーが教育実習で授業を行った後に
自分の授業を振りかえることができるような
カードの作成とそのカードの利用

〔1回目〕
・2003年1stshift 対象
・2種類のカード使用
・算数、理科

〔2回目〕
・2004年2ndshft対象
・カード改訂
・算数

〔成果・課題〕
・その場でトレイニーが授業を振りかえることができた。
・授業をする際のポイントを間接的に学ぶことができた。

理科実験集

〔目的〕
任国のカリキュラム内で、実験授業をおこなう為の実験集作成

〔内容〕
①低コストの実験(教科書の内容
②「観察シート」のサンプル
③資料集(顕微鏡写真、天体など)
④おもしろ実験
⑤折り紙

成果と課題

・任国の教育事情を考慮した 実験集が作成できた。
・トレイニーが現場に戻って、PTIで学んだ実験が再現しやすくなった。
・様々な教育機関でJOCVを宣伝する ことができた。

・絵から物事を学ぶことができないということに気がつかなかった。

学校訪問

目的: 現場の小学校の実態調査

期間: 2003年10月～2004年4月 (計16校)

方法: PTIの授業日外に、郡内の小学校へ出向き、学校の様子や理科授業の様子などの調査。場合によっては実験紹介。

成果と課題:
・どの学校もこちらの期待以上に受け入れてくれた。
・現場教師にその場で実験授業を紹介することができた。
・授業以前に学校組織の強化の必要性を感じた。

地域による科学祭

〔目的〕
地域の子ども達に科学に接する機会を提供する。

〔期間・回数〕
2003年10月~2004年10月　計 8回

〔方法〕
休日や学校訪問終了後など地域に出向いて実験紹介などをする。

〔成果と課題〕
・子ども達の科学の楽しさを感じてもらうことができた。
・活動の継続的実施ができなかった。(道具の運搬の問題など)

3MM(3分間ドリル)活動

〔目的〕
・毎日3分間、楽しみながら効率よく計算練習をし、基礎的な計算力(2年生まで)を身につける。
・子ども達の主体的なドリル運営
・集中力強化、学習意欲向上

〔対象〕
ガジプール郡　25校(1昨年度　19校)
小学校3年生

〔方法〕

①修業前にドリルを出して教師を待つ。
②教師の「始め」の号令で一斉に始める。
③教師の「止め」の号令で止め、隣の子どもドリルを交換する。
④相手のドリルを採点する。
⑤最後に得点を発表し、良くできた子どもを褒め合う。

〔子ども側〕
・3分間 → 集中力、けじめ
・お互いにチェック → 主体性、自主性
・基礎的内容 → 落ちこぼれ対策
・遊び感覚のドリル → 学習意欲の向上

成果と課題

・生徒は大変興味を持って取り組んだ。
・集中力・基礎力強化・学習に自主性が生まれた。
・教師は、初めのうちは算数ドリルの運営方法や、生徒のコントロールに困難が生じていたが、慣れるに従って、スムーズに行えるようになった。
・毎日、前向きに取り組んだ教師は教える喜びを感じ、算数ドリルを、他の授業や教育に積極的に役立てようとしている。
・2年目の学校については基本的なドリル運営が定期的な巡回指導を行わなくても実施されていたことである。

プライベート教室への教授法指導

タンガイル県　スヌティア村
村落普及隊員　矢野隊員との共同活動

〔目的〕
プライベート教師への演習授業の教授法指導

〔内容〕
・3MMを用いた基礎力強化
・授業内での演習量倍増計画
・できない子どもへのフォローアップ指導

成果と課題

・短期間による計算能力の向上
・子ども達が板書能力の向上
・教師への積極的な指導

・遠距離からの指導によるきめ細かな指導不足
・できない子どものフォローアップの不足
・プロジェクトの継続性

終わりに

◈ 20ヶ月の任期を終え、活動を振り返り思い出してみると、自分1人でやり遂げた活動がなかったことに気がついた。

任国の人々を始め、他のJOCV、調整員、専門家、JICAスタッフ、ユニセフ職員など様々な人から機会と支援をいただいたことに感謝を述べ報告を終了します。

本当にありがとうございました。

ネパールでの理科教育活動

西山　晃弘
（14-1，ネパール，理数科教師，群馬県立勢多農林高等学校）

1　はじめに（派遣国ネパール）

私が派遣されたネパール王国は世界最高峰エベレスト、ヒマラヤ山脈で有名です。しかし、私の任地は山が全く見えない平原で、ネパール最東部の国境にできた小さな町でした。

ネパールは中等教育終了時に全国統一試験があり、これに合格することが教師・生徒の目標となっています。このため、試験のための「教科書の暗記」が勉強であって、公教育が子供の全人格的な成長を視野に入れているとは思えませんでした。また、ネパールは地域によって教育環境が大きく異なります。私の任地では現金収入がある家庭は子供を私立学校に通わせます。兄弟が多ければ男子だけを、貧しければ長男だけを私立学校に通わせます。社会的要求に流され、初等教育には塾的な私立学校が乱立し、公立学校は軽視され荒廃していました。私の赴任校は６歳から１３歳までの子供がかよう公立学校で、郡内の教師・学校を指導する教育センターが併設された、かつてのモデル校でした。そこには、非常に困難な家庭環境の子供たちが就学していました。子供たちのほとんどが仕事を持っていて、親元から離れて就職して雇い主の善意で就学している子供もいました。

図１　放課後、牛のエサ集めを終えた兄弟

赴任して間もない頃、反政府組織の命令で学校が休校となりました。私が状況を把握しようと学校へ行った帰り道、道端で小雨の中寂しそうにうつむいて座っていた４年生の男の子に出会いました。「今日は、学校が休みだよ。良かったね。」私は元気づけるつもりで声をかけたのですが、彼は意外な言葉を返してきました。「良くない。僕たちは勉強しなければだめなんだ。僕たちには勉強が必要なんだ。」先ほどのしょんぼりと雨に濡れていた姿と対照的に、毅然とした態度で訴えてきました。子供であっても自らの境遇を理解し、勉強の必要性を深く理解していることに驚きました。このことがあったからこそ、現地教師達に迎合することなく彼らと真剣に向き合えることができたと思います。

2　ネパールの教育問題を考察する

現地の親たちが私立学校を選択する理由は英語教育にあります。授業が英語なので英語が学べると人気がありますが、本質は理科、数学、社会等の教科書を教材にした語学学校です。

しかし、ネパールの人々にとって英語力は物質的な豊かさへの近道（外国人から援助を受けられる）であり、英語が話せることが学びの証であり、英語力をひけらかすことの多いネパール社会です。ネパール語での教育を義務づけられている公立学校に就学することは将来が閉じることを意味しているようでした。

図２　子供と語り合う公立学校教師

しかし、母国語で丁寧に教育をされてる子供たちには発想や感情の豊かさがあり、偽りのない・優しい・力強い言葉がありました。反面、理解よりも英語を使うことを優先し教育された子供の特異な人格には怒りさえ感じました。図２は教師と左端の子供が母国語（ネパール語）で語り合っています。それを周囲の子供達が真剣に聞いて、理解しようとしています。言葉がしっかりと生きていますから、外国人の私にも伝わるものがありました。私は２年間ネパールで生活し、母国語を外国語に置き換え、それを知識ある人、カッコイイ姿とし、母国語を軽視する社会を観察してきました。その結果、母国語の鍛錬なしには、文化伝統の継承さえ難しく、母国語を尊重できない人は民族の誇りや人としての道徳心をも失っていくものだと知りました。このような教育が横行するのは、教育の成果が短期間に誰にでも同じように評価できるものと錯覚したこと、教育成果を経済上の利得に求めたことにあると考えます。

戦乱の中、首都カトマンズに引き上げてきた隊員から、開発発展の過程で排除された老教育者の国の将来を憂う嘆きを伝え聞きました。「昔は、大人が子供達を集めて大切なことを教えていた。時代が変わって、学校ができ、先生も来た。でも本当に教えるべきことを教えていなかった。だからこんなことになってしまった。この国はこれからどうなるのだろう。」この言葉から私は教育の目的、責任を考えさせられました。互いに高めあう競争は必要だと考えます。しかし、健全な競争を行うためには競争社会が闘争社会とならないための共通の精神（道徳、礼儀、義務、責任、公正さ、愛国心・・・）を育む必要があり、それが公教育の使命だと考えました。そして、国民を育成する公教育と、現世利益を基盤とする教育が区別されていない点がネパールの教育問題の根源だと考えました。

３　地域社会・学校で、

窓がないためコブラやネズミが入ってくる教室、天井からコンクリートがはがれ落ちてくるほど荒廃した校舎、トイレが少ない、水道がないなど施設面での問題は山ほどありました。地域社会の期待も非常に大きく、最初に依頼されたことは校舎改築でした。権力もお金もない日本の理科教師がボランティアとして来たことを理解してもらうには時間が必要でした。しかし、買い物・炊事・洗濯・掃除・修理など「自分でできることは自分でする」を信条として、懸命に生きている姿を見せたことで地域社会の一員として認めてもらえたと思います。（日々やせていく私への同情も大きかったようです。）

学校の仕事では、私の言動から学校とは、教師とはどのようなものかを知ってもらおうと努めました。学校を勝手に休まない、時間・約束を守る、授業準備をする、ゴミのポイ捨てはしない、自分でできることは自分でする・・・日本では当たり前のことです。「郷に従う」ではなく、日本人として正しい思うことをやり続けました。一つ例を挙げると、学校は朝１０時に国歌斉唱、祈り、体操、掃除から始まります。そこに遅刻してきた生徒は叱りつけ走らせました。遅刻した生徒の後ろを歩いている教師を走らせることはありませんでしたが、同僚教師から「西山先生から走れと怒られた」とよく嫌みを言われました。「生徒は仕事を持っているのだから大目にみてやって」とも言われました。走らない、時間にルーズなのはこの国の文化伝統という日本人もいました。

しかし、学校という制度を導入した以上は、学校の仕組みに従わせるべきと考えました。毎日の多忙な仕事に追われて退学してしまう子供もたくさんいました。自ら学校へと走ることができるようになれば、毎日の仕事につぶされないで、学校を大切に思う気持ちをいつまでも持ち続けられるであろうとも考えました。毎朝、集会中は「遅い、遅い、走れ、走れ」という私の怒鳴り声が響き渡っていました。走るのは格好悪いと抵抗する生徒も、やがて自ら走るようになり、教師の遅刻も目に見えて減りました。幸いなことに素晴らしい同僚達に恵まれ、多くのことを理解して応援してくれました。そして、慣習にとらわれずに良いことはすすんで取り入れようとする校長に助けられ予想以上の成果が上がりました。

４　理科教育　　図４　学校農園での観察活動

（１） 直接体験の必要性

赴任直後の授業では子供達の「見る能力」の未熟さに驚かされました。この地での授業とは、教科書を広げて音読、問題練習です。観察実験であっても教科書の音読、問題練習、教師の体験話です。子供たちにとって「見る」とは記憶を引き出す作業であり、「見たこと」とは教師・大人が教えたこと、教師・大人が見たものであるということでした。また、大人たちも伝聞、私見中心の会話に偏り、私には違和感がありました。ネパールに精通した人からは、これは「文化」であり仕方ないことと教わりました。私にはこの文化と教育を分離しなければ理科教育は根付かないと考えました。

日本であっても直接体験をおろそかにして、間接体験を自己の知識として習得した人には観察実験の意義を説明しきれません。同僚達に理解してもらうよりも子供達を変えなければと考えました。

私が最初に子供達の「見る能力」を回復させるために行ったことは、自由にありのままに「見る」体験をさせること、ありのままに見たことを「描き写す」こと、「観察する」ことです。「見る」体験については図３のように教科書の

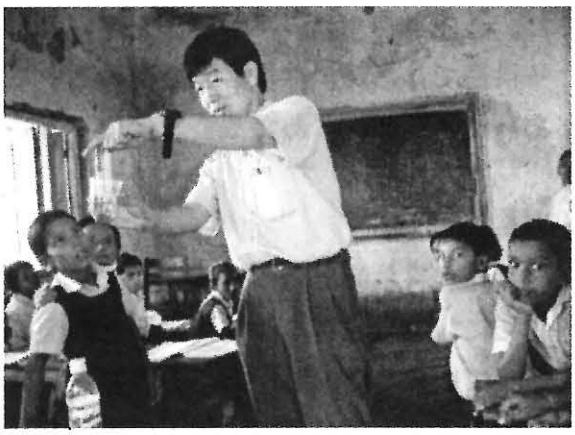


図３　教科書ではなく、実験を見せる

絵ではなく実物、実験を多く見せました。これまでにない視覚からの刺激が子供達に大きな驚き、感動を与えたと思います。「描き写す」作業もまた多くの工夫と時間をかけました。「観察する」については言葉等の問題もあり非常に難しいと考えました。そこで、学校農園と、百葉箱を作り、そこでの活動を通じて「観察する」ことを理解してもらいました。学校農園で育てた作物の観察、学校農園に自生した植物の観察、学校農園に来た昆虫の観察などたくさんの活動をしました。百葉箱での観測活動への理解はなかなか得られませんでした。しかし、自主的に観測し、記録する生徒達の姿をじっと見ていた大人達には何かを残せたものと思います。

図４　学校農園での観察活動

図５　放課後、百葉箱での気象観

（２）探求活動

私は探求活動のなかにこそ他教科には代え難い理科教育の目的があると考えます。日本の実業高校では課題研究として実施しています。私は、現職中に放課後の部活動（理科部）で探求活動を指導してきた経験があり、同じようなことができないかと考えました。そこで、広場に実験場所を確保して探求活動を実践してみせました。次に、昼休み、放課後に子供達だけで自由に実験する環境をつくりました。子供達は非常に好奇心旺盛で多くの観察実験をおこないました。赴任当初、私の実験道具を奪い合っていた子供達でしたが、探求活動を進める中で協力しあって問題解決にあたる姿に変化していました。

図６　協力し合ってソーラークッカー制作

（３）理科教師たちへ

すでに、理科教育を改善しようと外国の援助でつくられた教科書には観察・実験がたくさん載っていました。しかし、その観察・実験をほとんどやっていない現実がありました。そんな状況下で、教科書のすべての実験を現地にあるものでおこなうことを心がけました。ネパールであっても、実験器具施設がなくても、工夫すれば実験ができることを教師達に知ら

せることを意識しました。

赴任して半年間一緒に理科の授業をやってきた教師が「小中学校の給料は安いので高校にいく」と言い残し転勤してしまいました。彼の後、誰が理科を教えるのかで同僚達がもめていました。結局、若い女性の新任教師にすべて押しつけることになりました。この騒動がきっかけでネパールの教師が理科を担当したがらないということを知りました。理由は「理科は難しいし、予習をしなければならないから面倒。他教科ならば経験を話せばよいから簡単に教えられる」とのことでした。ネパールでは理科授業のための教材研究も実験準備も仕事時間として確保されていませんでした。この後、持ち運びができ、提示できる教材作りを中心に活動を進めました。教師も楽しめるように、不本意に理科を担当する教師が少しでも気楽になってもらえればという考えでした

直接体験の真の必要性をネパールの教師に理解してもらうという課題について、私は終始悩み続けました。赴任校には郡内の教師訓練、教育計画等をおこなう教育センターが併設されいて、よく地域の教師達が集まってきました。私はセンターの仕事もおこなっていましたが、理科実験の教師訓練は諸事情から実現しませんでした。そこで、私は実験室の窓、ドアを常に開放し、私の理科教師としての仕事（準備、片付け、子供とのやりとり）を教師達に見てもらうことを考えました。幸い、校長の配慮で用意された実験室はセンターとトイレの間に位置していました。センターに来た教師達は一日数回は実験室を通過することになりました。学校農園、百葉箱もセンターの前に設置しました。興味ある教師は足を止めて見学し、質問してきました。「教育成果を語る」のではなく「何が大切かを語る」私の理科教育活動は、現地教師達にとって受け入れがたいものでした。しかし、いつしか質問してきた教師達に、子供達が熱心に説明をするようになりました。説明を受ける教師達の表情は笑顔から驚きに変わりました。この教師達には発現した教育成果を認識してもらえたと思います。帰国して３ヶ月後このセンターがネパールで最優秀として表彰されることになったと知らされました。

5　最後に

現職復帰し、日本の高校生と向き合う今、幼くとも凛とした態度で私を見つめていた子供達をよく思い出します。日本の清潔で整備された教室と対照的に、ぼろぼろの暗い教室でした。しかし、窓の外には強くまぶしい光が見え、その光に希望を感じることができる子供達であり、教育活動でした。

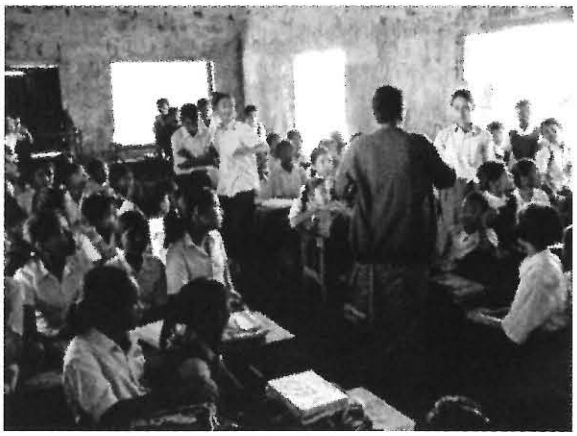


図７　教師の質問に答える少女

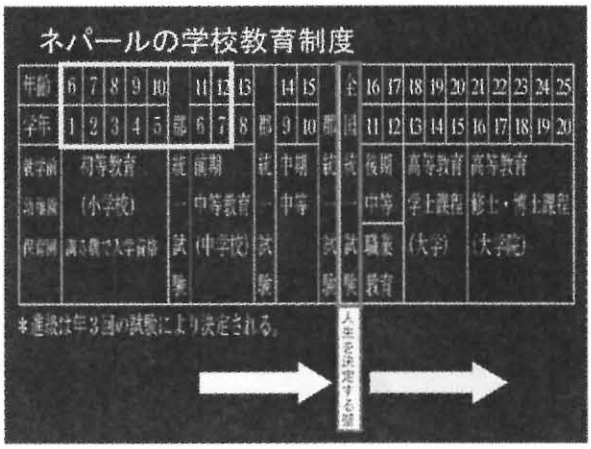
帰国後４ヶ月して再度任地を訪問しました。教師・公務員の子供は公立学校に転校させる命令が地域を支配している反政府組織から出されていました。私立学校から公立学校へ転校させられた娘を持つ同僚が「先生の言葉（ネパール語）が分からないと娘が毎日泣いていた。」と嘆いていました。この内戦が終わり、自らの

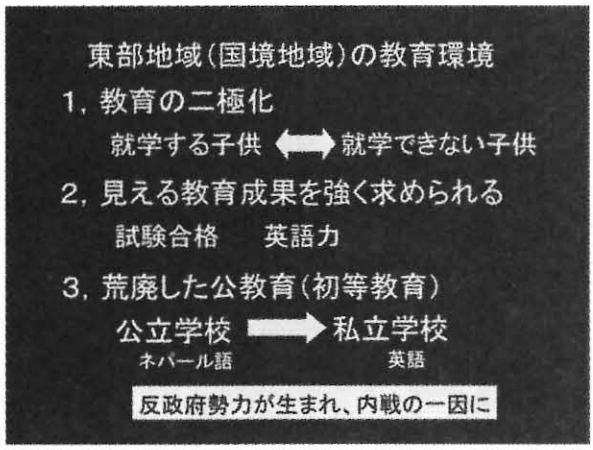
言葉を取り戻し、自国を愛し誇りに満ちた人々が普通であったネパールになることを願っています。素晴らしいネパールの人々に助けられ、学ぶことの多い約２年間でした。任務を終了した今、直接体験を交えた言葉のやりとりこそが教育の要諦であると信じています。
（活動の詳細は http://nishiyama.web.infoseek.co.jp/ をご覧ください）

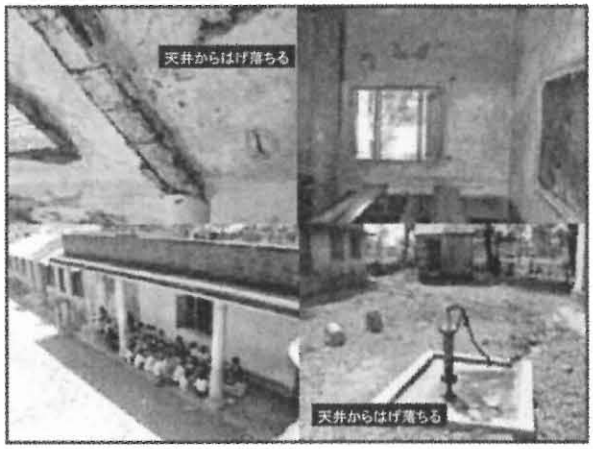
東部ネパール・インド国境
14－1 ネパール
理数科教師
西山晃弘

アフガニスタン
中国
パキスタン
チベット
ネパール
インド
ミャンマー
任地は、東部国境の町

ネパール王国（国教：ヒンズー教）
1990年民主化
2001年国王一家暗殺事件
反政府組織の活動が活発になる。
2003年一時停戦となるが、再び内戦に
タライ平原


ネパールの学校教育制度
年齢 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
学年 1 2 3 4 5 郡 6 7 8 郡 9 10 郡 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
初等教育
（小学校）
統一試験
前期中等教育
（中学校）
統一試験
中期中等
統一試験
後期中等
職業教育
高等教育
学士課程
（大学）
高等教育
修士・博士課程
（大学院）
＊進級は年3回の試験により決定される。
人生を決定する壁


東部地域（国境地域）の教育環境
1，教育の二極化
就学する子供 ⟷ 就学できない子供
2，見える教育成果を強く求められる
試験合格　英語力
3，荒廃した公教育（初等教育）
公立学校 ➡ 私立学校
ネパール語　英語
反政府勢力が生まれ、内戦の一因に


天井からはげ落ちる
天井からはげ落ちる

自分の言葉で先生と語る子供達

感情表現の豊かな子供達

地主の田植え仕事が入る

朝と放課後は牛のエサ集め

住み込みの家政婦の子供
子守のために学校を休む

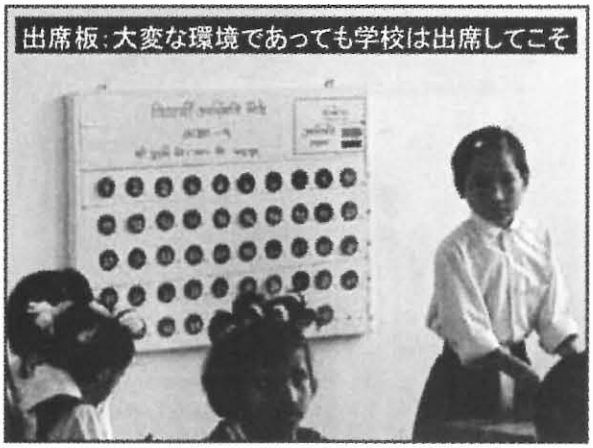
小さくても炊事・洗濯・掃除すべての家事を

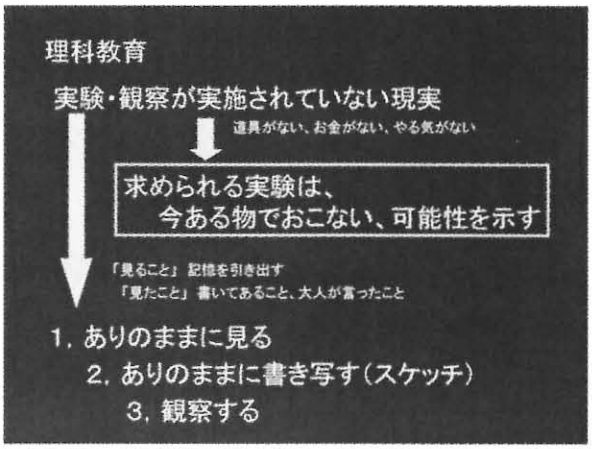
家族で農奴的な生活
長男だけ就学が許された

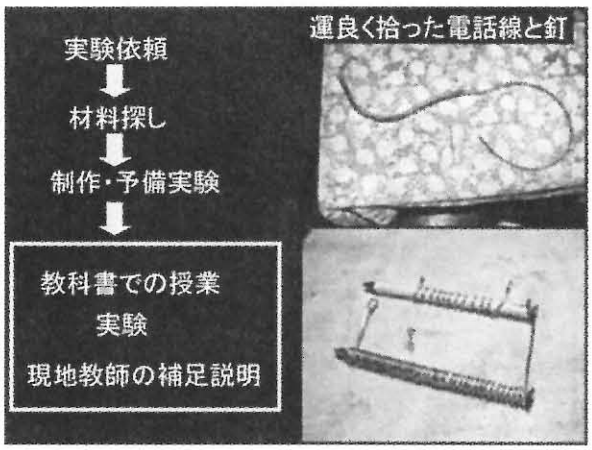
大農園で農奴的な生活をおくる生徒たち
卒業後は、ここで一生働くことに

今も残るカースト制度
仕立屋階級の子供

生徒に遅刻欠席をさせない
走らせる


出席板：大変な環境であっても学校は出席してこそ


理科教育
実験・観察が実施されていない現実
道具がない、お金がない、やる気がない
求められる実験は、
今ある物でおこない、可能性を示す
「見ること」記憶を引き出す
「見たこと」書いてあること、大人が言ったこと
1. ありのままに見る
2. ありのままに書き写す（スケッチ）
3. 観察する


実験依頼
材料探し
制作・予備実験
教科書での授業
実験
現地教師の補足説明
運良く拾った電話線と釘

実験後、生徒が作ってきた電磁石

7年生の授業
シバ先生
小石と神輿

6年生の授業
ジョスナ先生
密度の測定
質量は1円玉天秤で

5年生の授業
シュペリ先生
台所のスチール束子を使って
空気中の酸素を取り除く

4年生の授業
パルワディー先生
教科書にある濾過器を
ペットボトルで作る

自作した顕微鏡で
タマネギの細胞観察

アルカリ電池を分解して
水の電気分解装置

実験用の砂鉄を集める生徒

教科書の図をスケッチ

発芽の条件を調べる実験
結果をスケッチさせ、観察へと導く

教科書に載っていた観察です
周囲を観察し、見た生物をノートに書きなさい。

ノートに書いた生物名を×とされ
頭をかかえる子供、呆然とする子供
見たこと、記憶していることの区別ができない

観察を実践するために
学校農園と百葉箱を作る

百葉箱を作る

学校農園を作る

教室で事前指導した後、畑で観察

観察し採取したものをスケッチ

想像の世界を写している女の子

百葉箱での観測
観測し、記録し、将来を予測する
ついでに、順番を守ることを教える

放課後の観測

探求活動
実験はショーではない

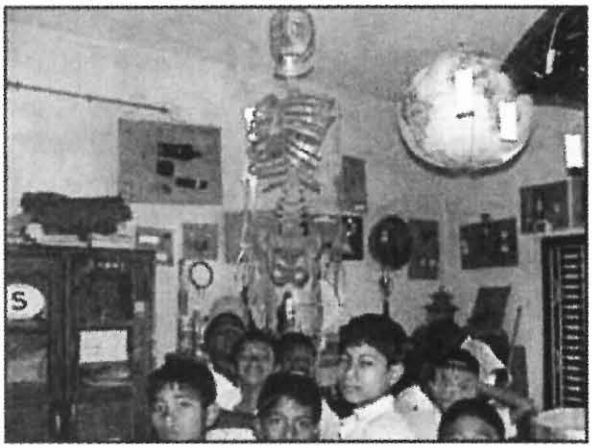
子供達が学んだこと
協力し、譲り合い、教え合い、自分たちで

なぜ駄目なのか、
それぞれが理由を考えています

理科は難しい・面倒という理由で
教師達に嫌われていました
新任の教師が利用しやすい
教材作りを始める

教科書にある図を模型にして
理科室の壁に掛けておきました
腎臓の仕組み
呼吸の仕組み
消化器官の模型

ネパールの星座
生物の心臓模型



理科室は開放しておき、生徒、教師達が
自由に出入りできるようにしました
ミョウバンの結晶を見る生徒

観察実験を始める生徒も

理科は教師に嫌われる

ネパール人教師の言葉
他の教科は知っていること、
教科書を読むだけでいい。
理科は難しいし、実験もあるから大変。

1 教材研究が必要。
（教材研究は仕事として認められていない。）

2 実験準備が面倒。
（校長が割り当てるとき、理科1時間も他教科1時間と同じ。）

3 人事移動に専門性が配慮されない。
（新人、転勤者、弱者が理科担当になりやすい。）

ボリビアにおける算数教育

野本　純一
（15-1，ボリビア共和国，小学校教諭，新潟県三条市立月岡小学校）

１．ボリビア共和国とは

１８２５年８月６日，宗主国スペインからの独立を果たす。人口は約８７０万人（２００２年），国土面積は約１１０万ｋ㎡を有し，日本の約３倍の広さである。９つの県から成り，アルティプラノ（標高４０００m近くの高地），バジェ（標高３０００m程の高原），オリエンテ（低地熱帯雨林地帯）の３地域に大別され，地域により大きく様子が変ることから「３階建ての国」とも呼ばれる。主要言語はスペイン語だが，原住民の間ではアイマラ語やケチュア語も話されている。行政上の首都はラパス，憲法上の首都はスクレであり，スクレは私の任地である。

２．ボリビアの教育事情

義務教育は，日本の小中に相当する初等教育の８年間であり，その後日本の高校に相当する中等教育が４年間ある。就学年齢は満６歳であり，日本よりも１年早い。１９９４年に教育改革（Reforma Educativa）が始まる。具体的な内容として，学校の増設による就学率の上昇，国定教科書の作成，カリキュラムの再編成，教科の変更などが挙げられる。また，学校は半日のみであり，校舎は異なる学校（Unidad Educativa）が共同で（午前・午後・夜間）使うことが多い。

３．配属先：スクレ市教育局　Dirección Distrital de Educación Sucre

スクレ市における公立・私立学校（幼稚園含む）の管理・指導を行っている。先に述べた教育改革を推進する立場にあり，教師への助言やセミナーの開催などの他に，青少年の健全な育成のための指導などの活動も行っている。日本における教育委員会の立場である。

４．実際の活動内容

私の職種は「小学校教諭」だけれども，実際には算数教育の改善のみに活動が焦点づけられていたため，「算数教諭」と名乗ることが多かった。任地であるスクレには，教育局に所属する私の他にも，算数（数学）教諭として，小学校，中学校，高校，教員養成大学にも協力隊が派遣され，当初はグループ派遣の形態であった。それぞれの立場から気づいたことを情報交換することで，問題点がより明確になり，お互いの活動がより円滑に進められたことは大きな長所であった。何よりも，遠い異国の地で同じ目標をもつ同士がいることはとても心強かった。しかし，５人が同時にスクレで活動できたのはごくわずかな期

間で，実際は派遣時期の違いや途中帰国などにより，グループとして機能することは少なかった。

また，私のカウンターパートは多忙な人で，絶えず文書作成や来客者への対応に追われ，一緒に活動できたのはごくわずかであったことは残念である。

【活動①：授業観察・事後指導】

市内の数校に協力を願い，長期に渡り授業観察と事後指導を繰り返した。とりわけ最初の時期は，算数の用語や授業における教師の指示など，語学の力をつけるのにとても有効だった。また，多くの授業，多くの教師と出会うことで，教育が抱えている問題点，教師の悩みなどを一般化することができた。そして，なによりもお互いに打ち解けあうことで，以下に述べる様々な活動がやり易くなったことは事実である。

（授業の様子）

【活動②：アンケート実施】

赴任して２ヶ月が経った頃，算数教育改善のためにどんな活動が求められているのかを知り，自分の活動方針を明確にするために，市内３０校２００名ほどの教師を対象にアンケートを行った。（質問内容は以下の通り）アンケートの集計は，長い夏休みの間に行い，新学期に向けて自分の活動の見通しをもつことができた。その結果，①定期的な授業観察と事後指導の継続，②教師を対象にした研修会の実施，③モデル授業による日本における教授法の紹介，この３つを柱にすることとした。また，取り扱う内容は，特に苦手な子どもが多いという計算領域（特に割り算と分数）に絞ることにした。また，教育改革が推奨する，子どもの意欲を高めるような遊びを用いた教授法もできるだけ紹介することとした

アンケート内容（抜粋）

- ○ 算数教育について，どんな困難がありますか。
- ○ 子どもたちはどんな単元が苦手ですか。
- ○ 研修会でどんなことを学びたいですか。
- ○ ボリビアの教育や教育改革についてなど，思うことを自由に書いてください

【活動③：研修会実施】

多くの学校に出かけて研修会を実施した。普段教師たちは研修会を受ける機会が少ないためか，どの人も真剣に，そして楽しく参加している様子が印象的だった。

（研修会の様子）

【活動④：算数・数学グループによる合同研修会実施】

先に述べたグループ派遣の利点を活かそうと，大規模な研修会を実施した。小学校・中学校・高校の教員を対象として１日ずつ，計３日間開催し，１日当たりの参加者は２００名程度を予定した。どのような内容が妥当か話し合いを重ね，お互いに協力しながら準備を進めた。教育局に所属し，いろいろな学校に面識があったことから，私は渉外活動のほとんどを担当したが，この渉外活動が一番の苦労だった。「約束を守らない」たくさんのボリビア人により，テーブルやいす，放送機器などの借用に時間と手間がかかり，また，各学校への研修会の案内文書も，配布されたのはぎりぎり間近だった。当日，ボリビアでは頻繁に発生する道路封鎖により参加者は１００名程度に減ってしまったが，意欲的な参加者たちに助けられ，チームワークよく無事に３日間を終了することができた。この研修会により，算数・数学グループの活動が認知され，何よりも自分たちにとって大きな自信になった。

【活動⑤：モデル授業実施】

時々ではあるが，日本における教授法を直接紹介するためにモデル授業を行った。直接子どもたちと触れ合える楽しく貴重な体験になった。

（モデル授業の様子）

【活動⑥：学力テスト実施】

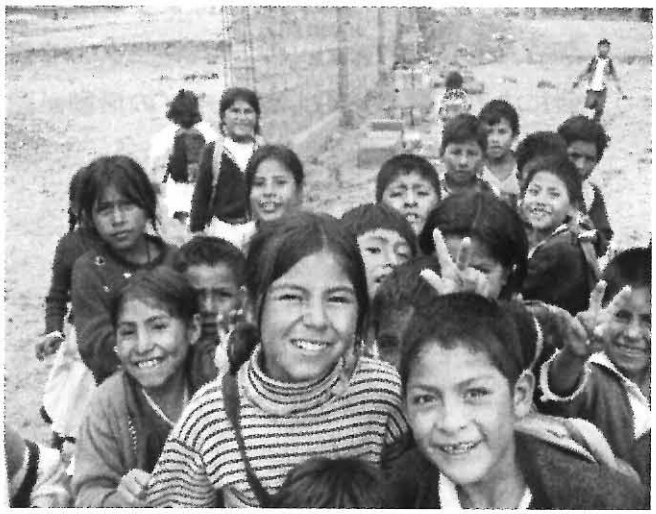
活動の締めくくりとして，市内２２校の５年生を対象に学力テストを行った。問題は計算領域のみ，２０問に絞った。スクレにおける傾向を掴み，また他校の結果と比べることで自校の問題点に気づくことを目標とした。ボリビアでは統一学力テストの類は存在せず，この取組に対してはどの学校も興味を示し，快く協力してくれた。

５．ボリビアにおける算数教育の問題点

小学校や中学校の算数（数学）の授業を見てまず思うことは，教師主導型で，練習問題をひたすら解くスタイルが多いということだ。これでは子どもの論理的思考はなかなか育たない。また，教師の中でも誤った知識がまかり通っている場面をたびたび見かけた。これらの問題は，教師が研修を積む機会が非常に少ないことや，自分たちもそうやって習ってきたという体験などが原因していると思われる。また，経済的に恵まれない学校が多いため，教材不足や劣悪な学習環境により学習活動が思うように展開できないという苦しい現状も見られた。そして，授業習慣の違いも大きな問題だと感じることも多かった。問題をボールペンで解く，計算記号だけ赤ペンで書く，複雑な検算の存在，授業中にお菓子を食べる…挙げたらきりがないが，日本の教育と比べると驚くべきことが多かった。教員によるストライキも深刻な問題であり，年間５０日もストライキで学校がなかった年もあった。

6．活動を振り返って

活動の中で悩んだことや困ったことはたくさんあった。まず困ったのが語学であった。仕事をするために十分なスペイン語を習得するにはだいぶ時間がかかり，言いたいことが相手に伝わらずに悔しい思いをすることも多かった。そして，約束を守らないこと。この，ある種の文化とも言える習慣には公私を問わず悩まされた。日本人である私には到底理解できないことも多かったが，ボリビアにいる以上は，肩の力を抜いて相手のペースに少しずつ合わせてみようと思うことができたとき，ようやく楽になった。ただし，約束を守らないことが，この国の発展に影を落としているのは確かだと思う。


（元気なボリビアの子どもたち）

活動から得たこと，協力隊に参加してよかったと思うこともたくさんあった。まず，たくましく生きる明るい子どもたちとの出会い。がんばって働きながら学校に通うボリビアの子どもたち，物はなくてもキラキラした瞳で一生懸命勉強するボリビアの子どもたち。私はそんな子どもたちが大好きだった。そして，その子どもたちを支えるボリビアの教師たち。たとえ経済的に恵まれなくても，教師として高いプライドをもち，熱心に教えるその姿を見て，私も同じ教師としてうれしくなった。地球の裏側の遠い国にも，意欲に満ちた素晴らしい教師がたくさんいることを誇りに感じる。そして，遠く離れてみたからこそ，改めて日本の教育の素晴らしさを知ることができた。また，文化の大切さにも気づかされた。ボリビアには，老若男女を問わず，各地における歌や踊りが愛され，受け継がれている。私もいろいろな行事に参加して，ボリビアの文化を十分に体験することができた。これからは，ボリビアの文化を紹介しつつ，日本人であることに誇りをもち，日本の文化の素晴らしさについて胸を張って語れる人間になりたい。もう一つ忘れてはならないのは，家族の大切さである。私が，長い任期を無事に終えることができたのは，温かいホームステイ家族に支えられたところが一番大きい。家族で過ごす時間を大切にし，何でも話し合う，共に笑い共に泣く，そんな家族の素晴らしさに出会うことができたことをうれしく思う。

振り返れば瞬く間に過ぎた１年９ヶ月だったが，数多くの貴重な経験ができた。協力隊に参加してよかったと心から思う。

7．終わりに～これから出会う子どもたちへ

私は１年９ヶ月の協力隊の活動体験から，多くのことを学んだが，それを，これから出会う子どもたちやいろいろな人々に伝えていくことが私の役割である。日本とボリビア，子どもと子どもをつなぐ架け橋となって，今後も私にできる活動を続けていきたい。

○学ぶことの大切さ，ありがたさ

普通に学校に通って勉強できることがどんなにありがたいことかを考えてみよう。勉強したくてもできない人の気持ちを考えてみよう。勉強できることにいつも感謝し，支えてくれる人たちに感謝し，一生懸命勉強しよう。

○日本文化，外国文化の素晴らしさ

世界にはたくさんの国がある。その文化に，その素晴らしさに触れてみよう。きっとその国の人の気持ちが見えてくるはず。日本にも素晴らしい文化がたくさんあるので，日本人であることに誇りをもち，どんどん体験しよう，自慢しよう。

○だれとでも仲良く

この世界には，国という境界線はあるものの，住んでいるのは同じ人間。だれもがたくさんの人と仲よくなりたいと思っているはず。相手の気持ちを思いやり，だれとでも仲良くしよう。

○自分にできる国際協力を

困っている人のためにできることはないか考え，どんなに小さなことでもやってみよう。それが自信となり，次の一歩へとつながる。世界のみんながよりよい明日を迎えることができるように，自分にできることをがんばろう。

（ボリビア紹介の様子）

ボリビアにおける算数教育

15年度1次隊　野本　純一
（新潟県三条市立月岡小学校教諭）

1．ボリビア共和国とは

- 1825年8月6日独立
- 人口　約870万人
- 国土面積約110万km²（日本の約3倍）
- 9つの県から成る，「3階建ての国」
- 主要言語　スペイン語　アイマラ語　ケチュア語
- 首都　ラパス（行政上）　スクレ（憲法上）

2．ボリビアの教育事情

- 義務教育は，初等教育（日本の小中に相当）8年。その後中等教育（日本の高校に相当）が4年。
- 就学年齢は満6歳。日本よりも1年早い。
- 1994年，教育改革（Reforma Educativa）が始まる。
- 学校は半日のみ。校舎は共同で使う。
- 教育レベルは相当低い。

3．配属先：スクレ市教育局

Dirección Distrital de Educación Sucre

【主な業務内容】

- スクレ市における公立・私立学校（幼稚園含む）の管理・指導
- 教育改革の推進
- 教師へのセミナー開催
- 青少年の健全な育成のための指導

教育長，主事4名，秘書など，総勢9名

4．実際の活動内容

- 職種は「小学校教諭」だけれども…
- グループ派遣の長所・短所

  ⇒小学校・中学校・高校・教員養成大学・教育局に一人ずつ派遣。
- カウンターパートの協力は…

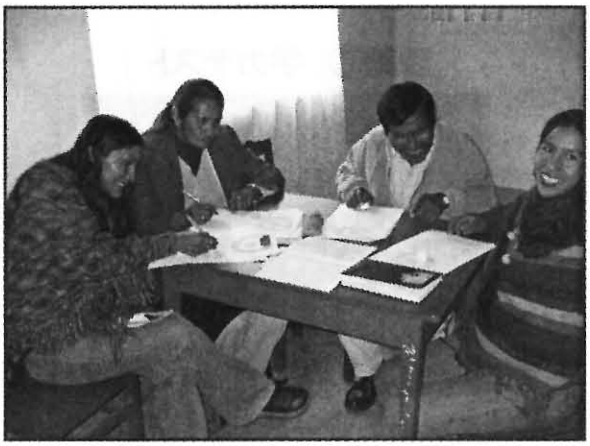
活動①　授業観察・事後指導

活動② アンケート実施

・30校215名の教員を対象
・質問内容
○算数(数学)教育に関して，どんな困難なことがありますか？
○各単元が終わったら，評価(テスト)をしていますか？
○児童(生徒)は，どんな単元が苦手ですか？
○数学教育について研修会で学びたいこと は何ですか？
○ボリビアの教育や，教育改革における数学教育について思うことを自由にお書きください。

⇒自分の活動方針を決定することができた。
(授業観察と指導，研修会，モデル授業を柱に)

活動③ 研修会実施



活動④ 算数・数学グループによる合同研修会

Intercambio de las experiencias de las matemáticas

活動⑤ モデル授業

わり算，あまりのある少数のわり算，
大きな数，最小公倍数…etc.

活動⑥ 学力テスト

5. ボリビアにおける算数教育の問題点

- 教師が研修を積む機会が少ない。
- 誤った知識がまかり通っている。(研修の少なさ，間違いの多い教科書，小さな頃からの積み重ねetc…)
- 教師主導型の授業(難解な練習問題が多い)
- 教材が少ない。教科書がない。
- 授業習慣の違い(80分授業，ボールペンの多用，複雑な検算，お菓子OK？ etc…)
- 教員によるストライキ(年間50日！？)　　など

6. 活動を振り返って

【悩んだこと・困ったこと】
・語学力
・約束って何？
・年上の先生たちを指導すること
【得たもの】
・たくましく生きる子どもたちとの出会い

6. 活動を振り返って

【悩んだこと・困ったこと】
・語学力
・約束って何？
・年上の先生たちを指導すること
【得たもの】
・たくましく生きる子どもたちとの出会い
・意欲のある先生たちとの出会い

6. 活動を振り返って

【悩んだこと・困ったこと】
・語学力
・約束って何？
・年上の先生たちを指導すること
【得たもの】
・たくましく生きる子どもたちとの出会い
・意欲のある先生たちとの出会い
・日本の教育の素晴らしさを再認識
・文化の大切さ（日本文化，ボリビア文化）

6. 活動を振り返って

【悩んだこと・困ったこと】
・語学力
・約束って何？
・年上の先生たちを指導すること
【得たもの】
・たくましく生きる子どもたちとの出会い
・意欲のある先生たちとの出会い
・日本の教育の素晴らしさを再認識
・文化の大切さ（日本文化，ボリビア文化）
・家族の大切さ

7．終わりに～これから出会う子どもたちへ

・学ぶことの大切さ，ありがたさ
・日本文化，外国文化の素晴らしさ
・だれとでも仲良く
・自分にできる国際協力

ボリビアにおける算数教育

１５年度１次隊　　野本　純一
(新潟県三条市立月岡小学校教諭)

１．ボリビア共和国とは

- 独　　立：１８２５年8月６日
- 人　　口：約８７０万人（２００２年）
- 国土面積：約１１０万ｋ㎡（日本の約３倍）　９つの県から成る「３階建ての国」
- 主要言語：スペイン語，アイマラ語，ケチュア語，グアラニー語
- 首　　都：ラパス（行政上），スクレ（憲法上）

２．ボリビアの教育事情

- 義務教育は，初等教育（日本の小中に相当）８年。その後中等教育（日本の高校に相当）が４年。
- 就学年齢は満６歳。日本よりも１年早い。
- １９９４年，教育改革（Reforma Educativa）が始まる。
- 学校は半日のみ。校舎は共同で使う。
- 教育レベルは相当低い。

３．配属先：スクレ市教育局　Dirección Distrital de Educación Sucre

- スクレ市における公立・私立学校（幼稚園含む）の管理・指導
- 教育改革の推進
- 教師へのセミナー開催
- 青少年の健全な育成のための指導　　など

４．実際の活動内容

- 職種は「小学校教諭」だけれども…
- グループ派遣の長所・短所
  ⇒小学校・中学校・高校・教員養成大学・教育局に一人ずつ派遣。
- カウンターパートの協力は…

① 授業観察・事後指導
② アンケート実施
③ 研修会実施
④ 算数・数学グループによる合同研修会
⑤ モデル授業
⑥ 学力テスト

５．ボリビアにおける算数教育の問題

- 教師が研修を積む機会が少ない。
- 誤った知識がまかり通っている。
- 教師主導型の授業
- 教材が少ない。教科書がない。
- 授業習慣の違い
- 教員によるストライキ　など

６．活動を振り返って

７．終わりに～これから出会う子どもたちへ

ジャマイカにおける養護教育支援　－報告－

金戸　裕美
（15-1，ジャマイカ，養護，富山県立となみ養護学校）

1　私の夢

祖母が視覚に障害を持っていたことから、障害児・者にかかわる仕事につきたいと思うようになっていた高校時代。障害児教育を学ぶ中で、教師になろうと決意した大学時代。そして、教師になってますます夢がふくらんだ初任１年目。海外での生活を夢見て、３年間の養護学校での経験をもとに青年海外協力隊に応募し、合格通知を手にすることができた２００２年の夏。それから１年後、３ヶ月の訓練を終えて、不安と期待を胸に、ジャマイカに飛び立った。

2　ジャマイカの国について

ジャマイカは人口２６２万人、面積は秋田県くらいのカリブ海に浮かぶ小さな島である。カリブ海周辺の国がスペイン語圏である中、１９６２年までイギリスに占領されていたことにより、公用語が唯一英語の国である。また、「Broken English」(壊れた英語)と言われるパトワ語を現地語として使用している。例として英語「Later」（レイター）をパトワ語では（リエター)、「Come here」（カム　ヒアー）を（コミヤ）と読んだりする。ジャマイカを代表する「No problem」（問題ないよ）という言葉は、暑い島国でのんびり暮らすジャマイカ人の楽観主義を象徴する。この楽観主義に困ったこともあったけれど、活動を振り返ってみると助けられたことのほうが多かったように思う。しかし、どんなに時間に遅れても「No problem」（問題ないよ）と言えるジャマイカ人には活動の最後まで驚かされた。もしジャマイカ人に時間通りに来てほしい場合には、大げさかもしれないが３時間前の時間を集合時刻として伝えることが望ましいだろう。

3　ジャマイカの養護教育

私が配属された「ジャマイカ知的障害児協会（JAMR)」は「スクール・オブ・ホープ」という特殊教育機関を運営している。これはジャマイカで最も古い特殊教育機関（１９５６年設立）であり、規模も最大である。また、ろう学校(JAD)が各地方に設置されており、ジャマイカ最東端のポートアントニオでは、知的障害の養護学校と聾学校が併設されている。

4　隊員としての活動

（1）任地での活動（スクール・オブ・ホープ　ポートアントニオ校）

私は、このポートアントニオ校で重度重複障害児童生徒の作業学習や自閉症児童生徒の個

別学習を担当、さらに情操教育を充実させるために「図画工作」を全児童生徒に指導してきた。

①言葉の壁を乗り越えるために

英語が苦手な私にとって、子どもたちが話すパトワ語はほとんど理解できなかった。教科に「英語」があるため、パトワ語は教育において使用しないことが原則であったが、教師自らが指導する上でパトワ語を使用し、子どもたちもその方が馴染みやすいため、学校で（いやジャマイカで、といっても過言ではない）「英語」を耳にすることはほとんどなかった。そんな中、言葉の通じない私が展開した授業方法は、図画工作を始め、あらゆる面で見本を見せながら「Like this」（このように）という方法であった。聴覚障害児には、英単語やパトワ語と同時に手話（アメリカ手話とジャマイカ手話が合わさったもの）を獲得し、指導していった。どちらかといえば、私にとって手話のほうが獲得しやすかった。言葉が分からなくても身振り手振りが言葉の意味を教えてくれたからである。自閉症の子どもたちにとって言葉が通じない中で手がかりになるものが視覚刺激であることを、自分が海外生活の中で体験していたように思う。

言葉の壁を乗り越えるために努力したことは、分からないことは曖昧にしないこと、伝えたいことは間違えてもいいからとことん話すこと、この２つの信念を持って臨んだことが私のジャマイカでの生活を大きく支えてくれた。

②養護隊員として重点をおいて支援したこと

まず、養護隊員として私が重点をおいたことは、子どもが興味関心のあるもの、子どもができること、子どもから能力を引き出せるものを教材として使用したことである。また、ボランティアとして重点をおいたことは、私が去ったあとも現地の教員が継続していけるもの、モノがない中で、現地のモノを利用していくことであった。特に、モノがない中での教材の研究は大変ではあったが、やりがいも大きかった。日本から資金を援助してもらい購入する、または送ってもらう、この支援方法はお金で解決するため簡単ではあるが、継続はできない。私が去ったあとも継続して指導していくためには、現地教員や児童生徒が容易に手に入れる廃材を使うことが一番重要なことだった。

③モノがない中での教材の工夫

作業学習や図画工作の指導では、古い雑誌を使った三角クラフト（写真１・２）や新聞紙を使ったアンデルセン、古い紙をちぎって漉して作るリサイクルペーパー（写真３）やはりこ（写真４）など数々の作品を児童生徒とともに作ってきた。活動の終盤には、地域の人や保護者に児童生徒の様子や作品を見てもらうために作品展示・販売会（写真５・６）を行った。日本円にして約８０００円の売り上げがあり、その後の教材購入の資金にとても役立った。児童生徒にとって作品が売れた、ということは次に作品を作る意欲にもつながっていった。

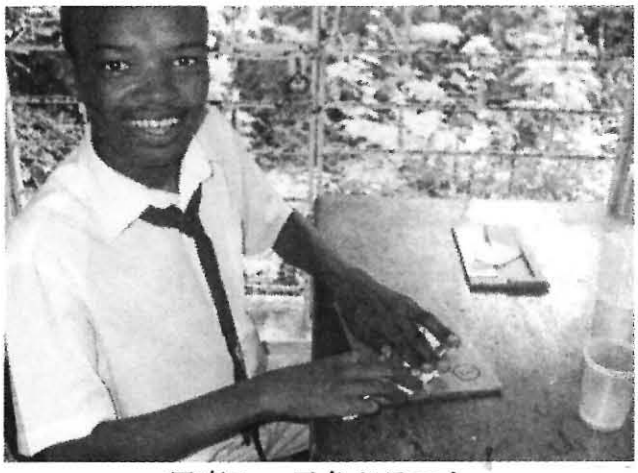


写真１　三角クラフト

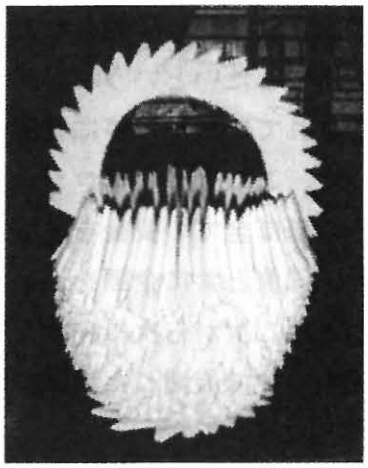


写真２　三角クラフトで作ったバスケット

写真３　リサイクルペーパー

写真４　はりこ

写真５　作品展示会

写真６　作品販売会

④図画工作プロジェクト

活動が始まったころから３つの大きなプロジェクトを考えていた。１つ目は子どもたちが経験したことのない共同宿泊学習を２泊３日で企画し、狭い教室では体験できない図画工作の指導をしたこと（写真７・８）。２つ目は作品展示・販売会、３つ目は看板もない、さみし

い場所に設置されている学校をなんとか地域の人々の目につく場所にしたいという私と同僚の希望で、学校の前に設置されていたバス停に壁画を描いたこと（写真９）だった。この３つのプロジェクトは今後も継続できるようにほぼ全ての資金を地域から寄付を募って集めたこと、同僚と共に企画を進めたこともあり、大成功に終わった。次から次にやりたいことは出てきたが、短い任期の中で展開した活動に悔いはない。

写真７　２泊３日の共同宿泊学習
巨大なペイント

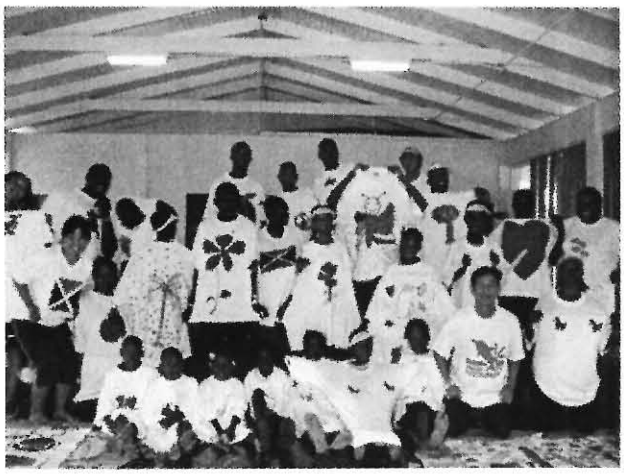


写真８　２泊３日の共同宿泊学習
オリジナルＴシャツづくり

写真９　バス停に壁画（人物画）

（２）現地教員向けのワークショップ

任地での活動と並行して、現地教員に向けて資質の向上や技術提供をするためのワークショップを行ってきた。このワークショップは赴任して言葉もままならない２００３年９月からすぐに始まった。この活動の目的は、任地校だけではなく、ジャマイカ全土に技術を広げていきたいということだった。

①ジャマイカと日本の養護教育の比較

教育的アプローチ方法の違いとして、ジャマイカは暗記・模倣的な教授法を取り入れていた。さらに、国語と算数に重点を置き、情操教育の受ける機会が少ないこと、日本に比べて教員のアイディアや教材が不足していることが特徴としてあげられた。

②「図画工作」の模擬授業

私がジャマイカに赴任して養護隊員が４人そろった。そこで、チーム・テーチングの指導形態をとって図画工作中心の模擬授業を各任地で展開していった(写真１０)。各任地をまわることで、それぞれの学校の特徴が見られ、自分の学校を振り返ることができた。また、各隊員と共同して授業をすることにより幅広くアイディアを得ることができた。徐々にワークショップの活動形態が定まり、首都に拠点をおいてワークショップ（写真１１）を進めていくことになった。首都でのワークショップは模擬授業、講義、図画工作の実演をまじえて展開し、参加者も徐々に増えていった。

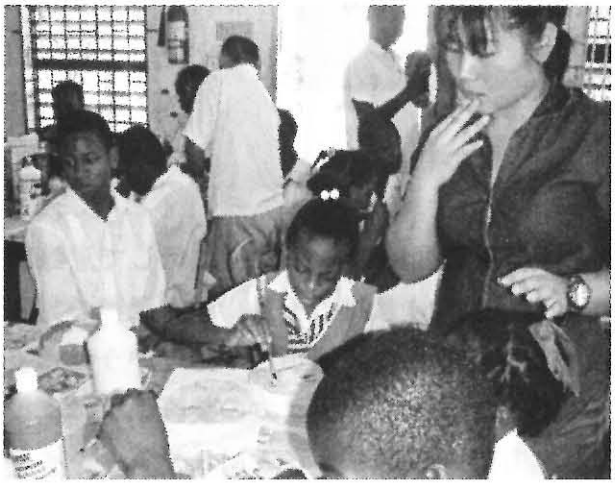


写真１０　各任地でのワークショップ

写真１１　首都でのワークショップ

③　公式「自閉症児者のためのワークショップ」

図画工作中心のワークショップがJAMR（知的障害児協会）から認められ、赴任して１年経ったころには、ＪＡＭＲから要望された「自閉症児者」に限定した公式のワークショップを開催することになっていた。ボランティアとして常に考えることは、隊員が去ったあとも継続されていくことである。ワークショップも継続されるように、確実に技術や内容が伝わるように工夫していった。参加者を自閉症児者１０名、その保護者１０名、その自閉症児者に関わる教育者（スーパーバイザー、担任）１０名にしぼった。そして参加者は５回継続してワークショップに参加することとした。内容としては、４回までは教材などを提示しながら私たちが模擬授業を展開した。そして、「自閉症」という障害の特性を理解し、個別の指導計画を作成して確実な実態把握を繰り返し、構造化・視覚化を利用した授業内容の構成、教材の工夫について講義を重ねた。最後の１回のワークショップでは、模擬授業や講義を踏まえた上で、現地教員による研究授業をしてもらった。ここから分かるように、受身的なワークショップから実践・参加型の積極的な、質の高いワークショップになっていった。最後に、JAMRが評価し、参加者（スーパーバイザー・担任）１０名のうち、６名が認定証を授与された（写真 12)。授与された６名が今後のワークショップを引き継ぐ代表となった。このようにして、ワークショップが私たち隊員の手から現地教員に引き継ぐ形を取ることができた。

写真１２　認定証授与

（３）今後のジャマイカ養護教育支援

ワークショップ終盤から現地の教員をはじめとする教育関係者や保護者に対して意識調査を実施した。そこで課題としてあがってきたことは、設備や教材の不足、教育課程の見直しの必要性、教育関係者との連携が不十分、重度重複障害者への支援が不十分という４点であった。そこで、今後派遣される後任隊員がどのような方向でジャマイカの養護教育に支援していくべきかを明確にするため、ＪＩＣＡ（国際協力機構事業団）、ＪＡＭＲやジャマイカの教育省も交えてＰＤＭ（プロジェクト・デザイン・マトリックス）を作成した。そして以下の４点について方向性が定められた。

① 継続したワークショップの開催を通して、教材のアイディア提供、環境や設備の構造化を図ること

② 障害の特性を把握した教育課程について、見直し、検討すること。

③ 隊員や中心となる現地の教育関係者がチームを組んで地方に出向いて「ワークショップ」を開催すること。

④ 首都に養護教育の専門家を派遣し、常にＪＡＭＲや教育省と連携し、さらに重度重複障害児者への支援に取り組んでいくこと。

５　活動のまとめ

これまでに、成功した活動や自己満足した活動について述べてきたが、成功に導くまでには数々の困難があったこと、その解決に努力したこと、そして、まだ残っている問題点があることを忘れてはいけない。

最後に、私がジャマイカに行ってみて感じたこと、それは、訓練期間を含め、２年間活動できたことは自分ひとりの力ではない、ということである。家族をはじめ、応援してくれた日本の同僚や友達、そして隊員の仲間や温かく迎えてくれた現地の同僚の支えがあったからこそ活動を無事終了し、日本に帰国することができたと実感している。どんな場所にいても決して自分ひとりでは生きられない、常に守られ、支えられて生きていることを２年間通し

て学ぶことができた。また、日本とジャマイカ、話す言葉や住む生活環境、文化が違っても同じ人であることに変わりはない。私が２年間一緒に学んできたジャマイカの子どもたちはこれからも私の大事な児童生徒（写真１３）であることに変わりはない。ジャマイカは私にとって第２の故郷である。この２年間の中で会えたさまざまな人の輪を大切にしながら、これからもいろんなことに挑戦していきたい。「夢は必ず叶うもの」そう信じて、新たな夢を持って生きていこうと思う。さらに、自分の経験を多くの人に伝え、日本に還元していきたい。海外に出向いて支援することだけが国際協力ではなく、次は、日本でできる国際協力に努めたいと思う。今まで応援し、支えてくれた仲間に感謝し、２年間の活動のまとめとしたい。

写真１３　ジャマイカの児童生徒と同僚とのお別れ会

ジャマイカ任地での活動
スクールオブホープ　ポートアントニオ校

知的障害養護学校（28名）　ろう学校（7名）

作業学習1
（重度重複障害児童・生徒の指導）

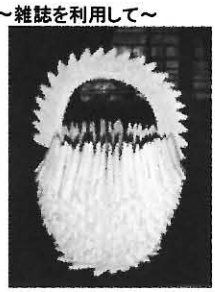
はりこ～新聞紙を利用して～

作業学習2
（重度重複障害児童・生徒の指導）

リサイクルペーパー～使い古した紙を利用して～

作業学習3
（重度重複障害児童・生徒の指導）

三角クラフト　～雑誌を利用して～

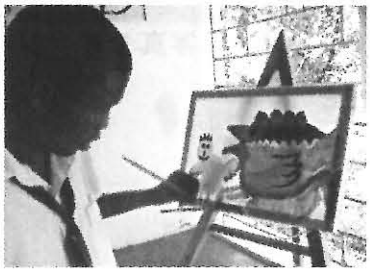


個別指導1
（自閉症児童・生徒の指導）

マッチング～教室環境を構造化した中で～

個別指導2
（自閉症児童・生徒の指導）

絵画指導～興味関心のある活動を生かして～



個別指導3

（自閉症児童・生徒の指導）

編み物・三角クラフト　～単純作業の繰り返しを利用して～

図画工作の指導1

チーム・ティーチング

図画工作の指導2

共同宿泊学習（2泊3日）

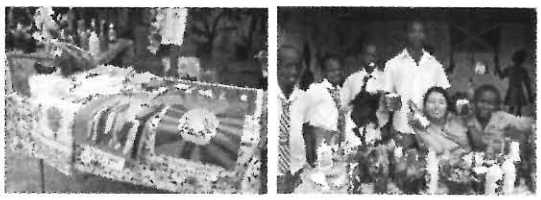
～巨大人物画とオリジナルTシャツ作り～

図画工作の指導3

～バス停に壁画（人物画）～

作品展示・販売会

作業学習や個別指導、図画工作の指導を通して作った作品



教師・保護者向けのワークショップ

～学校と家庭の連携つくり～

スペシャル・オリンピック

異文化交流会

～ジャマイカと日本の文化～

現地教員向けのワークショップ

ジャマイカ養護教育の問題点

- 教育的アプローチの問題
  （教授法による教育方法ー暗記、模倣）
- 教育を受ける機会の減少
  （国語と数学への重点化、情操教育の削減）
- 教師のアイディア不足、教材の不足
  （単調な活動の繰り返し）

ワークショップの目的

(1)児童生徒主体の授業を展開することで、児童生徒が生き生きと活動する様子が見られるようになり，意欲的に活動できるようにする。
(2)教員が障害についての理解を深め、より適切な指導を行うことができるようにする。
(3)教員に対してモデル授業を展開することにより，効果的な教材教具の活用法等の習得、教員の指導力向上を図る。

ワークショップの内容

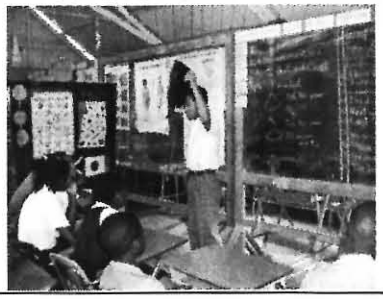
1 チーム・テーチングによる模擬授業
　（図画工作を中心とした情操教育の授業）
2 日本の教育システムの紹介、教材の紹介
3 図画工作のアイディア提供（体験）

（対象）隊員の任地で勤務する教師
　首都に勤務する教師（10名程度）
（回数）隊員の任地校（4回） 首都（3回）

「図画工作」模擬授業1
マンデビル校（新聞紙遊び）

「図画工作」模擬授業2
スパニッシュタウン校（折染め）

「図画工作」模擬授業3
ポートマリア校（パラシュート）



「図画工作」模擬授業4
ポートアントニオ校（はりこ）

「図画工作」模擬授業5～7
首都　キングストン校（三角クラフト）

ワークショップの結果

- JAMRとの連携が深まった。
- 日本の教育方法（チーム・テーチング）が取り入れられた。
- 養護教育の課題が明確になった。

①教員の児童生徒の障害に対する理解をより促すこと。

②児童生徒の実態に応じた支援を展開し、教材教具を効果的に活用すること。

③児童生徒の実態に応じた教育課程を編成すること。

公式「自閉症児者のためのワークショップ

（対象）

自閉症児童生徒（10名）保護者（10名）

担任、地方と首都校のスーパーバイザー（10名）

（内容）

5回の段階を踏んだ、継続的なワークショップ

1　模擬授業

2　「自閉症」に関する講義（障害特性、実態把握、指導方法、個別の指導計画の作成、教材の工夫など）

3　研究授業（最終回）－現地の教員が4回のワークショップを踏まえて、最後に授業を展開する。

4　評価、認定証授与

自閉症児者のためのワークショップ
パート1（2004. 10. 7）
小麦粉粘土と形遊び

自閉症児者のためのワークショップ
パート2(2004. 11. 4)
色のマッチングと形合わせ

自閉症児者のためのワークショップ
パート3(2004. 12. 9)
ステンシルとクリスマスツリー作り

自閉症児者のためのワークショップ
パート4(2005. 1. 13)
体の部位を知ろう(マッチングと着せ替え)

自閉症児者のためのワークショップ
最終回(2005. 2. 17)
現地教員による研究授業

認定証授与式

自閉症児者のためのワークショップ
結果と反省

- 障害の特性を把握することができたため、教育課程の見直しの必要性が出てきた。
- 受身的な「ワークショップ」から実践・参加型の積極的な、質の高い「ワークショップ」の開催に努めるようになった。(児童生徒の実態に応じた教材づくり、指導内容や方法の検討、個別の指導計画の活用)

重度重複障害児・者施設における ワークショップ

ジャマイカの養護教育に対する意識調査の実施
（養護教育関係者・保護者対象）

1 設備や教材の不足
2 教育課程の見直しの必要性
3 教育関係者との連携が不十分
4 重度重複障害児者への支援が不十分

「プロジェクト デザイン マトリックス（PDM）」の作成 （添付資料）
(Project Design Matrix about Special education in Jamaica)

今後の支援の方針を隊員で検討し、JAMR、そして国際協力機構事業団(JICA)の再検討のもとPDMを作成した。

今後のジャマイカ養護教育への支援

1 継続したワークショップの開催を通して、教材のアイディア提供、環境や設備の構造化を図ること。

2 障害の特性を把握した教育課程について、見直し、検討すること。

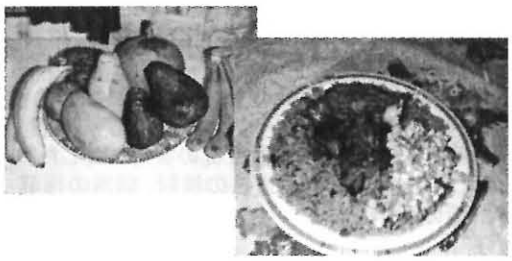
3 隊員や中心となるジャマイカの教育関係者がチームを組んで地方に出向いて「ワークショップ」を開催すること。

4 首都に養護教育の専門家を派遣し、常にJAMRや教育省と連携し、さらに重度重複障害児者への支援にも取り組んでいくこと。

協力隊に参加して・・・

・日本から海外に出てみて感じたこと
・日本とジャマイカの養護学校を比較して考えたこと
・これから、どんな活動を日本で取り組んでいきたいか？

ありがとうございました！



分科会　中南米（１５－１　ジャマイカ　養護）

富山県立となみ養護学校　　金戸　裕美

「ジャマイカにおける養護教育支援」

1　ジャマイカの国について

○独立年	1962 年　英国から独立（カリブ海英領植民地で最初）現在も英連邦加盟	○主要産業	鉱業(ボーキサイト)、農業(コーヒー、砂糖、バナナ)、観光業、工業(アパレル、食品加工)
○面積	11,424 平方キロ	○GNI	7,738 百万米ドル(2004)(世銀)
○人口	262 万人	○一人当たり GNI	2,900 米ドル(2004)(世銀)
○人種	アフリカ系 91%、黒人系混血 7%(91 年国勢調査)	○経済成長率	2.3%(2003)
○言語	英語、パトゥア	○物価上昇率	14.1%(2003)
○政体	立憲君主制	○失業率	13.1%(2003)
○元首	英国女王エリザベス 2 世(総督はジャマイカ人)	○主要貿易品目	
○議会	二院制(上院 21 名、下院 60 名)	輸出	アルミナ、ボーキサイト、砂糖、衣類
○政府	議員内閣制、行政の長は首相 閣僚のうち 2 乃至 4 名は上院議員、その他は下院議員 現首相:パーシヴァル・J・パターソン 現外相:キース・ナイト	輸入	原材料、消費財、資本財
		○主要貿易相手国	米国、カナダ、オランダ、英国、ノルウェー
		○通貨	ジャマイカ・ドル 1 米ドル＝63.875 ジャマイカ・ドル(2005 年 11 月現在)

＜対日関係近況＞

（1）　ジャマイカは英語圏カリブ地域の中心国であり、92 年に在京大が設置され、95 年に我が方大が実館化、96 年に駐神戸名誉領事館が開設されたことにより関係が益々緊密化。97 年、秋篠宮同妃両殿下が皇族として初めてカリブを御訪問された。98 年 10 月にはパターソン首相が公式実務訪問賓客として訪日する等要人往来も活発。2000 年 11 月、東京で初めての日・カリブ閣僚レベル会議が開催され、ロバートソン外相が出席した。2001 年 1 月には平沼経済産業大臣がジャマイカを訪問した。

（2）　ハネムーナーを中心に日本人観光客が急増(89 年の約 3 千人→96 年の 2 万人強)したが、現在は減少傾向。

（3）　ジャマイカ音楽のレゲエも日本で根強い人気。

（4）　ジャマイカでしか産出しない世界最高級のブルー・マウンテン・コーヒーを我が国が約 8 割輸入。

（5）　経済協力については、有償資金協力及び無償資金協力を主とした援助を実施している他、文化無償協力及び草の根無償協力も実施。技術協力については保健・医療、行政等の分野で研修員を受入れており、89 年より青年海外協力隊の派遣も行っている。

2　ジャマイカにおける養護教育

養護隊員が配属された「ジャマイカ知的障害児協会（JAMR＝Jamaica Association for Persons with Mental Retardation)」は「スクール・オブ・ホープ（School of Hope)」という特殊教育機関を運営している。これはジャマイカで最も古い特殊教育機関（１９５６年設立）であり、規模も最大である。知的障害児の養護学校を設置、基礎学習や職業訓練を行っている。養護隊員の活動先はすべて「スクール・オブ・ホープ」が運営する養護学校である。また、ろう学校(JAD＝Jamaica Association for the Deaf）が各地方に設置されており、ジャマイカ最東端のポートアントニオでは、知的障害の養護学校と聾学校が併設されている。

3　ジャマイカ任地での活動　―スクールオブホープポートアントニオ校―（P.2~4）

4　現地教員向けの「ワークショップ」（P.4~7）添付資料（PDM　P.8）

5　まとめ

＊子どもの作品集やその他、詳しいジャマイカでの活動内容を HP に掲載してあります。時間があればぜひ立ち寄ってみてください。また、何か質問などありましたら、HP の掲示板やメールを通してご連絡ください。お待ちしております。　http://www.geocities.jp/hi_rok0320/index.html

ホンジュラスにおける
算数指導力向上プロジェクト（PROMETAM）での活動

上野　美奈子
（15-1，ホンジュラス，小学校教諭，牛久市立岡田小学校）

1　算数指導力向上プロジェクト（PROMETAM）の背景

ホンジュラスの初等教育には，留年があり，多くの子どもたちが，６年生まで進級できず，卒業できない。そして，留年のほとんどの要因が，国語と算数の理解力不足である。ホンジュラスの算数指導力向上プロジェクト（以下 PROMETAM とする）は，この算数における留年率を下げることを最終的な目的としている。そのためには，ホンジュラス現職教員の算数指導力を高めていくことが必要であった。なぜならば，子どもたちが，もっとも理解が難しいと感じている教科が算数であり，現職教員の基礎的な学力が低い教科もまた，算数だからである。

2　PROMETAM の概要

PROMETAM は１で述べたホンジュラス初等教育の背景を受けて，現職教員の算数指導力向上を目的としたプロジェクトとして発足された。PROMETAM は，算数の指導書を作成する「教材作成班」と，教員研修を行う「研修班」の２つで構成されていた。

「教材作成班」が目指す指導書は「どんな教員でもその指導書を使用すれば，同じような算数の授業を展開することができる」というものであった。「研修班」は，その指導書の具体的な使用方法や算数の知識を補うために，現職教員に対して研修（以下 PROMETAM 講習会とする）を行うことを担っていた。講習会は６つの地域で開催され，１つの地域で２～３人の隊員が活動していた。

PROMETAM 講習会の大きな特徴は，この講習会が短大や大学資格取得コースである継続教育プログラムの一つとして位置づけされていることであった。ホンジュラスの現職教員は，ほとんどが高校卒資格までしか持っていない。学校に勤めながら継続教育プログラムを受講して，短大・大学卒の資格を取得していくのが一般である。

3　活動の実際

（１）活動の流れ

任期の１年９ヶ月の間に，PROMETAM 講習会は３回行われた。１つの講習会の期間は２～３ヶ月。その期間中の各週土日約１２日間，時間にして約５０時間の授業を受け持った。１つの講習会で１学年分の内容を扱い，私が担当したのは３年生，１～３年生全般，４年生であった。

講習会の前は，PROMETAM の隊員・シニア隊員・専門家が首都に集まり，準備会議を行

った。６地域で行う講習会の内容に差が出ないように，その回の講習会で重視する内容，流し方を中心に話し合った。講習会後は，ホンジュラス人スタッフも交えて，講習会の運営の仕方，授業内容等について反省を持った。このような会議のために１～２ヶ月に１度のペースで首都に行かなくてはならなかったので，首都から離れた地域で活動している隊員にとっては，移動に時間をとられ，時間的にも体力的にもなかなかハードなものがあった。

講習会や会議を除いた時間は，自己研修・講習会の準備に充てた。また，それと平行して，任地の小学校を訪問し，算数の授業観察を行った。ホンジュラスの算数の授業の実態を知ること，講習生が，どれだけ講習会で学んだことを現場で活かすことができているかという講習会評価を，授業観察のねらいとした。

（２）講習会

①授業を行う難しさ

○言葉の壁

当然ながらスペイン語で授業をするということは，難しいことであった。活動前に語学研修を受けているとはいえ，任地に赴任して間もない頃は，台本を読むような授業しかできなかった。突然の質問，自分の予想外の講習生の反応に何度も冷や汗をかいた。

○日本人の授業への不安・不信感

先にも述べたように，この講習会は，現職教員のための短大・大学資格取得コースの一つとして位置づけされていたので，講習生が，日本人の授業を望んで受けに来ているわけではなかった。単に資格を取得したいと思ってコースを受講した中に，たまたま日本人の授業があったというだけである。だからなぜ，自分たちがスペイン語もろくにできない，年齢・教職経験数も若い日本人に算数を教えてもらわなくてはならないのかという不信感が，授業を行っていても伝わってきた。それがまた、授業を行う上で大きなプレッシャーとなった。

○ホンジュラスの現職教員の算数知識の低さと，講習内容の多さ

ホンジュラスの現職教員の算数の基礎学力は，日本の小学生よりも低いかもしれない。小数や分数の概念・小数や分数の大小等，まったくわかっていなかった。そして，間違った知識を平気で学校で教えていた。そのような講習生に短い期間で，１学年分の内容を伝えるのは，本当に至難の業であった。その上，私が受け持った地域は，ホンジュラスの中でも基礎学力が低い地域であり，ラテン色も強かったので，やる気を起こさせるという点でも大変であった。

○ホンジュラスの国民性（時間・きまりのルーズさ・カンニング）

ホンジュラス人は，時間やきまりに対してとてもルーズである。授業の開始時刻に遅刻したり，休み時間の後なかなか教室に戻ってこなかったりというが度々あった。教室に飲み物や食べ物を持ち込み，飲みながら食べながら授業を受けようとする講習生もいた。驚くべきことは，カンニングが当たり前ということである。講習会の一番最後に単位認定のためのテストを行うが，講習生はテスト勉強よりも，どうカンニングをするかという相談のほうが，熱心だったかもしれない。

②心がけたこと

○名前を覚える・名前で声かけをする

いい授業を行うには，講習生とのいい人間関係を作っていくことが何より大切である。日本人授業への不信感を取り除く意味でも，まず，信頼関係作りに力を入れた。当たり前のことかもしれないが，４０人の講習生の名を覚え，できるだけ授業の中でも名前を読んだ。また，授業以外の場面でも，講習生に声をかけ，コミュニケーションをとるように心がけた。

○あくまで先生という立場

どんなに仲良くなっても，講習生の時間・きまりのルーズさには，あくまで先生と言う立場をとり，厳しい態度で接した。カンニングに対しても，座席の指定，座席の間隔を広く取る等して，物理的にできないように工夫した。

○リーダーを作る・グループ学習

すべての授業内容を全員が理解するような授業を行うことは難しい。そこで，グループ学習を取り入れ，講習生がお互いに教え合う雰囲気づくりに努めた。その日のリーダーを決め，授業の中でも隊員の協力をしてもらった。日本人の説明だけでは全員の理解が難しいとき，理解した講習生が隊員の代わりに説明をするといった場面も出てきて，授業がスムーズに展開できるようになった。

○内容を詰め込みすぎない・簡単なミニテストで自信を

受講生のやる気が損なわれないように，授業で取り扱う内容を出来るだけ厳選し，見てすぐ理解できるような視覚に訴える教材作りに力を入れた。また，簡単な確認テストを繰り返し行い，全員全問正解することで達成感を味わわせ，自信に繋がるようにした。

（３）授業観察

講習会と同様に重視した活動が算数の授業観察である。授業観察に行くことは，ホンジュラスが抱えている算数教育の問題を知る上で，大変役だった。また，自分たちが行った講習会の成果を感じることもできて，自分たちの励みにもなった。

講習生４０人全員の授業観察に行ったが，どの講習生も指導書を読み込み，教材研究を熱心に行ったことが伺える授業であった。もしかしたら，そのとき限りの授業だったのかもしれないが，ホンジュラスの教員は，他の人に自分の授業を評価され，そのために熱心に教材研究をすることがないので，それだけでも，教員にとっては大きな意味をもつものになったであろうし，授業に対する意識も変わってきたのではないだろうか。授業を見終わった後の，私からの感想・アドバイスにも熱心に耳を傾ける姿が見られ，授業を評価する大切さを感じた。

４　課題

PROMETAM で作成した指導書が全国配布になり，PROMETAM 講習生以外の教員も使用することになった。資格取得コースとしての講習会が，昨年１１月に終了した今，いかにこの指導書を授業の中で活用していってもらうかが，課題となる。そのためには，PROMETAM

講習生のように，指導書を熟知しているものが，他の教員に伝えていく役割を担うことが必要となってくる。そういったホンジュラス人の指導者の育成を支援していくことが大切なのではないだろうか。また、各教員の授業を評価したり，教員同士が研修するシステム作りの手助けをすることも，これからのPROMETAMの役割になるのではないか。

ホンジュラス
算数指導力向上プロジェクト
（PROMETAM）での活動

15年度1次隊　上野美奈子

PROMETAMの背景

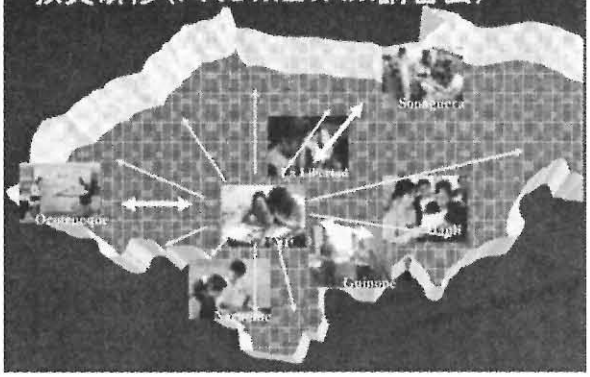
- ホンジュラス初等教育の留年率の高さ
  （国語と算数が主な原因）
- 現職教員の算数の基礎学力の低さ
  →現職教員の算数の指導力向上
- 旧算数プロジェクト（個人派遣）の成果の限界

PROMETAMとは

- 教材作成
- 教員研修（PROMETAM講習会）
  【短大・大学資格コースとしての位置づけ】

教員用指導書

教員研修（PROMETAM講習会）



活動の流れ

2003年
- 7月 ホンジュラス国に赴任
- 8月 ホームステイをしながらの現地語学訓練
- 9月 任地ソナゲラに赴任　講習会準備
- 10月 プロメタム講習会【短大資格コース・最終】
- 11月
- 12月 プロメタム会議（反省会）

2004年
- 1月 プロメタム会議（講習会準備）
- 2月　個人研修・講習会準備
- 3月 プロメタム会議（講習会準備）　授業観察
- 4月
- 5月 次回講習会のための研修会（プレ講習会）
- 6月
- 7月 プロメタム講習会【大学資格コース①】
- 8月
- 9月　授業観察
- 10月 プロメタム会議（反省）　後期・成績処理・任地及び会
- 11月 プロメタム会議（講習会準備）　講習会準備
- 12月 プロメタム講習会【大学資格コース②】

2005年
- 1月　後期・成績処理・任地及び会
- 2月 プロメタム会議（反省）
- 3月 帰国

授業を行う難しさ

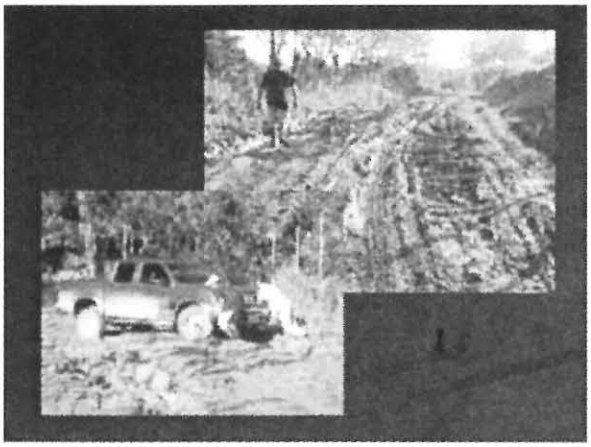
- 言葉の壁
- 日本人の授業への不安・不信感
- 講習生の教員としてプライド
- 現職教員の算数の知識の低さ
- 講習会内容の多さ
- 任地ソナゲラという地域性（他の地域との差・評価）
- ホンジュラスの国民性（時間・きまりのルーズさ，カンニング）

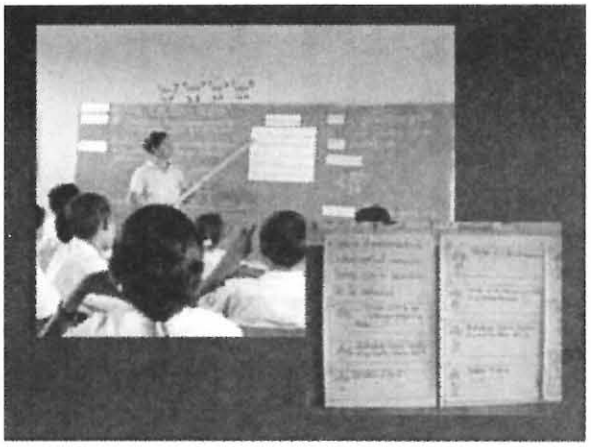
心がけたこと

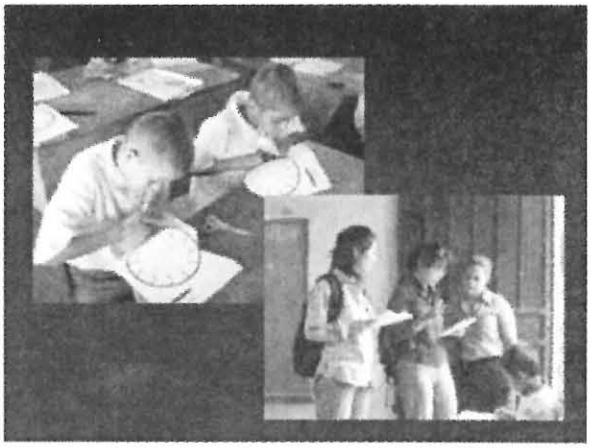
人間関係づくりと効率的な授業

- 名前を覚える・名前で声かけをする
- あくまで先生という立場・服装・隊員同士の呼び方
- 詰め込みすぎない・簡単なミニテストで自信を
- リーダーを作る・グループ学習
- 視覚に訴える教材・板書

授業観察







課題

現状　講習会終了・指導書の全国配布
→いかに指導書を活用させるか

- ホンジュラス人の指導者の育成
- 授業の評価・教員同士が研修するシステム

ありがとうございました

隊員活動から得たもの

村上かおり
（15-1，エクアドル，小学校教諭，鳥取市立湖東中学校）

青年海外協力隊員として2年間活動することを、周囲が心配しつつも了承してくれたことは、とても幸せなことでした。しかし、活動を終えた今だからこそ、周囲もそして私自身も協力隊とは何かということをきちんと理解はしていなかったのだと思うのです。「海外の貧しい人々のために、共に生活しながら援助するのだ。」ということは分かっていましたが、隊員になるまではそれ以上を想像することはできませんでした…。

1　隊員活動について

私が活動したのは、南米エクアドル、アンデス山脈に囲まれた、標高3000mにある小学校です。村人のほとんどは先住民（インディヘナ）で、山の斜面にとうもろこしやりんご、なしを作り、それを近くの町まで売りにいって生計をたてていました。5歳から12歳の小学校の子供たちは、紫外線のためにほほを赤黒くさせ、大きな目でいつも私を見つけると「セニョリータ！」と走ってきては抱きついて、ほほにキスをしてくれました。

私の活動要請は、“全校生徒を対象に音楽の授業を担当し、音楽の専門的な教育よりも、音楽の楽しさを生徒に伝える。また図工の授業も受け持つ。”ということで、教員不足の代替としての授業を担当することが求められていました。

子供たちに音楽や図工の授業を楽しんでもらえるように、そして子供たちの集中力を続かせるように、様々な活動を取り入れて授業を行いました。私がキーボードを弾き始めると子供たちはそのリズムにあわせて行進したり、動物をまねて歩いたり。自由に場所をとって体の力をぬいて発声練習をして挨拶の歌を歌う。新しい曲を聴けば踊りだし、1ドルのリコーダーはおもいっきり吹いてもなかなか音がでない。子供たちの描く絵には、子供たちの夢がたくさん出てくる。子供たちは見たことのない海や飛行機を描き、家族みんなで暮らせるお

城のような家を描いては夢を語る…。そんな子供たちの姿が私にいろいろなことを教えてくれました。そして楽器がなくても材料がなくても、そこにあるものを使って子供たちといっしょに授業をしていく楽しさを学びました。

ただ、活動をはじめてからずっと気になっていたことがありました。それは、自分が帰国したらだれがこの子達に音楽を教えるのか…ということ。図工は、教育委員会から派遣されている先生が週3回通っていたので時間数は少なくても継続されるだろうと思っていたのですが、問題は音楽の授業でした。私を含め、3名の協力隊員がこの学校には派遣されていました。しかしいつまでも協力隊に頼っていけるとは限らず、なんらかの解決策を模索すべきではないのか…そう考えるようになりました。そこで学校長に提案して、担任の先生に音楽の授業方法を学んでもらうために、授業をＴＴ（ティーム・ティーチング）授業で行うようにしました。毎時間指導案と教材を担任の先生に渡して打ち合わせをします。何より、先生たち自身が音楽の授業を受けたことがありませんでしたので、とても不安がっていました。でも、私がピアノ伴奏をしているときにはタンバリンをたたいたり、新しい歌の歌詞を子供たちと音読したり、子供たちがリコーダーを吹くときは指一本でキーボードを弾いたりするなど、少しずつ授業へのかかわりの場は増えていきました。毎時間の授業案も少しずつ担任の先生に考えてもらうようになり、そんな担任の先生の姿を他の学校の先生たちに見てもらうことになりました。

エクアドルでは音楽の授業は専科の先生の仕事ですが、音楽教師の不足で音楽の授業が行われていないのが現状です。でも「楽器が弾けないから」「音楽は専科の教員の仕事だから」などといって何もしないより、音楽の授業の大切さを感じるのならば、エクアドルの先生たちにがんばってほしいと思いました。そのために私達隊員がその手助けをすることを伝えたくて、隊員仲間とともに、公開授業や講習会を開催しました。その公開授業で、楽器の弾けない担任の先生による授業を、私の学校の先生が行うことになったのです。音楽の授業は、音楽の知識や経験がなくても教えることはできる、音楽を教えようとする気持ちと他の教科を教えるのと同じ指導力や工夫をすれば可能であることを、他の学校の先生にも知ってほしかったのですが、一番の成果は、何よりも私達自身が打ち合わせのためにそれぞれの校長や同僚と普段以上に会話をする機会を多くもつことができたことでした。交通費のことや日程のこと、現状報告の仕方、私は公開授業を行う担任の先生と指導方法や教材内容を相談する時間が自然と増えました。だからこそお互いに分かり合えるようになったと思います。そし

てこの公開授業をともに行った担任の先生は、他の学校の先生から「まるで音楽の先生かと思うような授業だった」と言ってもらい、それが大きな自信となり、私がいないときも音楽の授業を進めてくれるまでになりました。

私が活動を終えた今、担任の先生たちが20分でも10分でも子供たちと音楽を楽しんでいてくれることを願っています。

2　現職教員として

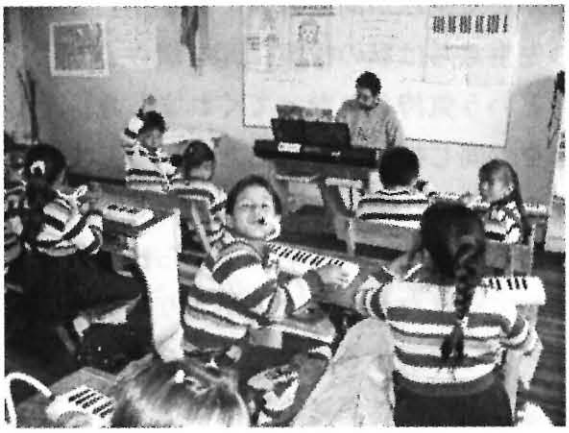
活動中、現職教員であることはあまり意識していませんでした。というよりも、それを忘れて新鮮な目でエクアドルの小学校で活動したいと思っていました。しかし教員としての経験があることがいろんな場で生かされたことも事実でした。

何よりも「授業する」ことには早く慣れたと思います。もちろんスペイン語の不安はありましたが、相手がエクアドルの子供たちであっても、授業の組み立方も発問の仕方も子供たちの反応をイメージして授業案をつくることも、日本で経験したいろいろなことが参考になりました。また、私が同じ教員であるからこそ、同僚の先生たちは私の提案に耳を傾け、技術を学ぼうという気持ちになってくれました。そして私自身も同じ担任を経験した一人として、担任の先生たちの仕事の多さや担任としてのプライドを理解できました。初めのころ、音楽の時間になると担任の先生が教室から出て行ってしまったり自分の仕事をしたりして、全くフォローしてくれなかったことがありました。腹も立ちましたが、一人の教師として赴任していれば一人で授業するのは当然のことですし、「あなたのクラスの子供たちは行儀が悪い」といえば、たとえそれが事実でも担任としてはとても気分が悪いはずです。担任であったころを思い出したとき、担任にとっては授業数が増えるような私の提案を受け入れ、協力してくれている同僚に感謝の気持ちでいっぱいになりました。だから、「いつもあなたは私に協力してくれる」「あなたは子供への指示が上手だ」「あなたのクラスの子供たちはとてもリズム感がいい」などという声かけていると、同僚も「今日の指示はよかっただろうか」「私のクラスの子供たちはどうだろうか」などと尋ねてくれるようになったのです。

そんな中で強く現職教員であることを意識したことが二つありました。一つはよい意味でも悪い意味でも「先が見通せる」ということです。こんなことがありました…。小学校で音楽を教える新卒の隊員たちから『音楽指導書』を作成したいという話があがりました。日本で『指導書』がどういうものか、どう作成されているかを知っているからこそ、他の現職教員の隊員からは「無理だ。」「そんな甘いものではない。」と言われました。でも、「先が見通せる」からあきらめるより、エクアドルの小学校の音楽を変えるものとなる可能性があれば、失敗してもやってみてもいいのではないかと思ったのです。そうやって挑戦できるのが、協

力隊のよさなのではないでしょうか。「先が見通せる」ために、もしかしたら二の足をふんでいることがあるかもしれない…そう思いました。『音楽指導書』は付属のＣＤとともに約 10 ヶ月をかけて隊員仲間と作成しました。エクアドルの先生たちに役に立つのかどうかは分かりませんが、どんどん改良が加えられて、エクアドルの音楽教育の足がかりになってくれたらと思います。

そしてもう一つは、あたりまえのことですが、私達現職教員は同僚と同じ「教師である」ということです。つまり共通の専門をもっているのです。担任の先生と音楽の授業をしていく中で一番課題となったのは、担任の先生がもつ指導力の問題でした。音楽の授業をする上で最も大切なことは、音楽の知識があることや楽器が弾けることよりも、子供たちの興味関心を高める言葉がけがどれだけできるかとか、子供たちの技術や能力を高めるために同じ教材でどれだけ工夫ができるかという指導力なのです。私が毎時間用意する授業案をもとに担任の先生に授業をしてもらっても、それぞれの先生で異なりました。ある先生は子供たちの想像を膨らまして意欲を高め、先生自身のアイデアをどんどん私にも提示してくれました。一方ある先生との授業では、紙を配ってノートに張るように指示をするだけだったり、指示に時間を要し、その間に子供たちの集中力が切れてしまい、がまんしきれず私が指示をだしたりすることがありました。授業者の指導力で、同じ教材を扱っても子供たちの動きは全く変わってしまいます。常に指導力の向上に努めていかなければならないことは、日本であってもエクアドルであっても同じ教師として共通の課題ではないかと思うのです。そしてそれは、教科の独自性はあっても、算数や理科、音楽や体育など教科の枠を超えて、国境を越えてともに専門性で繋がっているということを強く感じました。だから、私は隊員として技術を伝える、と考えるより、同じ教師としてともに専門性を磨きあうものだと考えるようになりました。



3　協力隊員として

隊員として参加するまでは、「開発途上国の人々に何かしてあげたい」、そう考えていました。でも、助けられていたのは私自身でした。日本人のいない街で私が生活できたのは、私を家族のように心配してくれる同僚がいたからですし、街を歩けば声をかけてくれる人々がいました。悩んでいれば話を聞いてくれましたし、下手なスペイン語でも子供たちは一生懸命に聞いてくれました。だから私は「エクアドルのために隊員として生活する」のではなく「同じ職場の仲間として働き、一人の住人として街を歩く」ことにしました。「エクアドルのために何かしよう」そう考えていたから、欠点ばかりが気になって「時間にルーズだ」「アジア人を差別している」などと腹を立てていたのかもしれません。同僚と相談したり食事をしたりしていると、私がこの学校に来ることになったいきさつや教師間のグループの存在など

を知ることができました。子供たちと村を散策したり市場やお店の人と話したりすると、エクアドルの習慣や解決しにくい貧富の差が見えてきました。エクアドルの人々のそばにいようとすると、そのままのエクアドルが見えてきて、エクアドルを好きになっていました。だから、「何かしてあげたい」から「一緒に何かをしたい」と思うようになりました。

協力隊の活動は、「現地の人々とともに生活しながら援助すること」ですが、私はそのうわべだけしか理解していませんでした。しかし「現地の人々とともに生活しながら…」とは、その国を知ること、その国の人々を知ること、そしてその人々のそばにいること、それが何よりも大切であることを示していました。そして私はそれを経験する中で、その人々を好きになりました。ボランティアとは、その国を、その国の人々を好きになってはじめて、そこに何が必要なのかが見えてくるものではないか、そう考えるようになったのです。現地の人々と同じところに住み、同じものを食べ、同じことを喜び、悲しめる…そして私達が好きになった人々のことを伝えられるのが、協力隊なのだ…そう、今私は強く確信しています。

青年海外協力隊に参加して
～隊員活動から得たもの～

平成15年度1次隊　エクアドル
村上かおり

発表内容

1　隊員活動の紹介

2　現職教員としてできること

3　隊員として得たもの

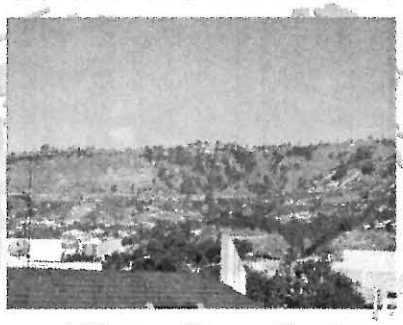
4　これからの協力隊へ

1　隊員活動

派遣国　エクアドル

住んでいた街　アンバトAmbato（標高２５００m）

1　隊員活動　徒歩とバスで通勤



家から任地アンバティージョ村を見る

1　隊員活動

任地　アンバティージョ村
（標高3000m）

1　隊員活動

任地　アンバティージョ村

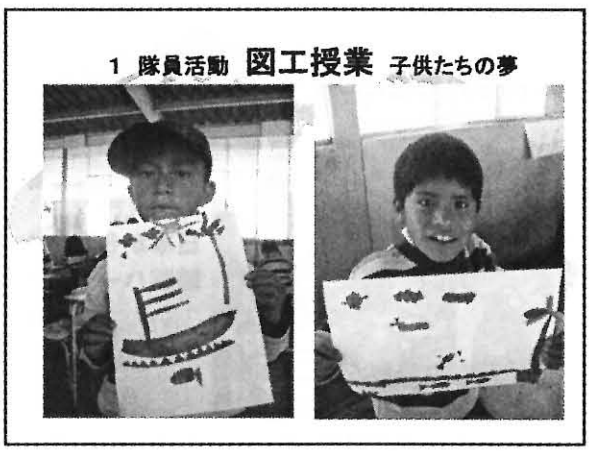
1隊員活動　ホセ・ホアキン・オルメド小学校
Escuela José Joaquín Olmedo

1　隊員活動
ホセ・ホアキン・
オルメド小学校
児童数　264人
（1年生～7年生）
教職員数　21人
校長室
普通教室
理科室
倉庫
調理小屋

1　隊員活動
時間割
El horario
1時間目　7：45～　8：30
2時間目　8：30～　9：15
3時間目　9：15～10：00
休　憩　10：00～10：30
4時間目　10：30～11：15
5時間目　11：15～12：00
6時間目　12：00～12：45
下　校

1　隊員活動　活動要請
3代目の隊員として、小学校教諭として
・授業を通して
子供たちに音楽の楽
しさを伝える。
・図工専科と授業を
分担する。

1　隊員活動
図工授業
あるものを使う


1　隊員活動　図工授業　子供たちの夢

1 隊員活動 図工授業

がんばりや独自性を
褒める

1 隊員活動 音楽授業

音楽を楽しむ（歌、楽器づくり、リズムあそび、鑑賞ｅｔｃ）
ペア・グループ活動　　授業形態

1 隊員活動 音楽授業への提案

（1） 担任の先生に音楽授業を学んでもらう。

（2） 隊員のいる他の学校の先生たちにも
音楽授業の理解と協力を広げていく。

1 隊員活動
(1)担任の先生との授業

担任の先生に
楽器をさわって
もらう

1 隊員活動
(1)担任の先生との授業

日本から届いた
鍵盤ハーモニカ
の授業

1 隊員活動 (2)音楽授業への理解と協力

現地の先生との公開授業・講習会

1日目　午前　公開授業
　　午後　講習会
2日目　午前　ＪＩＣＡ主旨説明
　　隊員提案
　　質疑応答

2 現職教員として

・授業に早く慣れて、経験を生かせる。

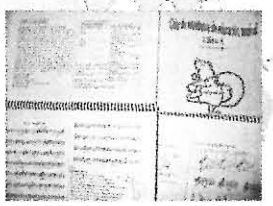
・同僚の立場が理解しやすい。

・技術移転をするうえで同僚への説得力がある。

2 現職教員として

・先を見通せる。だから二の足をふむこともある。

・隊員としてより一教員として同僚とともに研修ができる。



3 協力隊員として

多くの人との関わりの中で
その国を好きになる

3 協力隊員として

「してあげる」から
「一緒にしよう」へ

4 これからの協力隊へ

★ＪＩＣＡや事務所、仲間とともにビジョンを語り合う。

★自由な発想でいろんなやり方を試していこうとする。

ニカラグアの教員養成に携わって

櫻井　麻利子
（15-1，ニカラグア，家政，新潟県立白根高等学校）

1　ニカラグア共和国概要

ニカラグア共和国は北をホンジュラス、南をコスタリカと接し、日本の１／３ほどの面積を持っている。平均気温は約２８℃であるが地域や季節により異なる。乾季は水事情が悪く任地では１週間～１０日に一度しか水道水が供給されなかった。公用語はスペイン語。農牧業が主要産業となっている。スペインから独立後も内戦を繰り返して政情が安定せず、大地震やハリケーンなどの自然災害にも見舞われ、内戦が終結した現在もハイチに次ぐ中米最貧国となっている。

2　ニカラグアの学校教育

ニカラグアでの学校教育は小学校６年・中学校５年（前期３年・後期２年）・大学５年が基本である。小学校就学は６歳が基本であるが家庭の事情等で早まったり遅くなったりする場合が多く、各学年とも成績不振の場合は進級できないため、年齢には個人差がある。都市部の貧困層および地方の僻地を中心に就学経験のない子供、中退した子供が多くいる。小学校は午前・午後・成人向けの夜間、中学校と大学は午前・午後・夜間・土曜・日曜というようにそれぞれの学校が多くのコースを設けている。中学校５年卒業は日本の高等学校卒業にあたり、就職や進学に重要な意味を持っている。

3　配属先概要

（１）教員養成学校の位置づけ

配属先のフィガルパ師範学校「グレゴリオ・アギラル・バレア」（チョンタレス県フィガルパ市）は全国に８校ある国立の小学校教員養成学校の１つで卒業すると小学校教員免許を取得できる。

全日制課程は中学３年修了後に３年間学ぶコースと中学５年卒業後に２年間学ぶコースがあり、約３５０名が在籍している。中学校（前期３年）も併設しているが２００５年度より募集を停止した。年次経過により将来的には中学校と中学３年修了後に３年間学ぶコースはなくなり、中学５年卒業者しか入学できなくなる予定である。これは近隣国との足並みをそろえ、教員の質を高めるための教育文化スポーツ省の計画である。

通信制課程は無免許の現職教員を対象としており約１１５０名が在籍している。約２ヶ月ごとに１週間、および学校が休暇になる１２－１月に集中講義を受けなければならず、全日制課程よりも就業年数が１年長い。

また、現職の幼稚園・小学校教員や指導主事らを対象とした研修施設の役目も果たしている。

（2）履修科目

表1のように日本の大学の小学校教員養成学部・学科とほぼ同様の履修科目であるが、ニカラグアでは多くの小学校が夜間に成人学級を持っており、地方の僻地ではほとんどが複式学級であるため「複式学級及び成人学級教育法」は重要である。教育実習は毎週1回4時間の観察実習と卒業学年後期の半年間であり、日本に比べ大変長い。

表1　教員養成コースの履修科目

一般科目	スペイン語　社会（地理歴史・公民・倫理・政治・経済・社会学）　数学　理科　保健体育　情報　実技教科（音楽・ダンス・美術・図画工作・技術・家庭）
教職科目	教育学　心理学　教育心理学　教育法一般　スペイン語教育法　社会科教育法　算数教育法　理科教育法　体育教育法　実技教科教育法　幼児教育及び障害児教育　複式学級及び成人学級教育法学校経営　評価統計技術　調査研究技術　教育実習　卒業論文

4　活動内容

配属先同僚教員はすべて大学卒で、県内外の幼稚園・小学校教員に対して研修等も行う指導的立場にある。しかし「家庭」「美術（図画工作）」「音楽」等の分野についてはほとんどの大学がその学科を持たないため、担当教員の専門性は低い。長年の経験から自分なりの指導スタイルを持ってはいるが知識・技術とも曖昧な部分が多い教員もおり、特に実習において実物見本や手本を見せながら指導することが少ないため生徒が戸惑っている様子も見られた。書物が少ないため有効な教材のアイディアも不足していた。紙や布などの材料を個人で用意することが困難な生徒もおり、一斉指導ができない状況もあった。

以上のことから「家庭」「美術（図画工作）」「幼児教育」「音楽」分野における実習授業の改善が私の主な活動となった。

（1）授業における教材・アイディアの提案と実践

継続的に授業観察をしながら「家庭」「美術（図画工作）」「幼児教育」分野においては布を使った小物作り、刺繍、かぎ針編み、色紙・画用紙・身近な廃材を使った工作、教室用の飾り等、教育実習時からすぐに授業で使えるものと教員として身につけておきたい技術を中心に教材を提案し実践した。実習の準備・見本製作・授業での指示等は私が中心となって行うが、準備・授業中の机間巡視や指導等は担当教員に手伝ってもらい、ティーム・ティーチングで行うようにしていた。

写真１　巾着袋・刺繍の基礎・かぎ針編みの財布（生徒作品）

「音楽」分野では担当教員が苦手とする楽譜の読みとりや正しい音程を取りながらの歌唱指導の場面で実技指導をした。また歌詞だけで楽譜のなかった幼児・児童向けの曲を担当教員に歌ってもらい私が楽譜に起こし、授業で使用した。

（２）選択授業の開講

選択授業として「リコーダー」と「手芸・工作」を開講した。

「リコーダー」は配属先が所有していたリコーダーを用いて初歩から練習を始めた。校内行事でステージ発表をした生徒たちもいた。必修授業の音楽では楽器を弾く機会がないので生徒の興味関心はとても高かった。授業に出席し一定以上の技術を身につけた６８名には「世界の笑顔のために」プログラム（ＪＩＣＡ）で新潟県立白根高等学校から寄贈された中古のリコーダーを全校集会で修了証と共に学校長から渡していただいた。卒業後各地の小学校での音楽授業に役立ててくれることを期待している。

写真２　リコーダー指導（中学１年生）

「手芸・工作」は参加生徒の希望を取り入れ、クリスマスなどの季節にちなんだ工作やマクラメ編みのブレスレット等を教材とした。たいていは午後に行っていたので、教育実習中

の最終学年の生徒たちもたびたび参加し、教材やアイディアを実習先の子供たちに実践していた。これは私にとって大変嬉しいことだった。

写真３　クリスマスのモビール（生徒作品）

（３）現職教員への研修

幼稚園・小学校教員、市町村教育省事務所の指導主事らが対象の研修会において講師のひとりとして「工作」「手芸」「リコーダー」を担当した。「工作」「手芸」では子供たちと作って遊べるもの、教室装飾に使えるもの、保護者への指導に役立つもの等を教材とし、講義に偏りがちな研修会に簡単で実用的な実習を数多く取り入れることができた。任期中にのべ４２日間の研修を行い、約１７０名の参加者があった。

私が関わる工作・手芸等の研修会や授業では、はさみやのり等必要な道具は生徒・受講生が持参するが、材料はまとめて購入し１人分ずつに分けてセットし、レジメをつけて実費を徴収するようにしていた。従来はすべて各自が材料を持参していたため、準備不十分で全員が一斉に実習をすることができなかったり、材料や金銭に無駄が生じていたのである。普段から授業中にテスト問題用紙や参考資料のコピー代などをたびたび徴収しておりそれと同程度の金額であるので問題はなかった。この方法は担当教員にも生徒や受講生にも大変好評であった。

写真４　誕生日の壁面装飾（幼児教育専門研修）

5　学校教育と生徒の理解

地域内の幼稚園・小学校で授業観察をしたいと考えていたが日々の時間割が詰まっていてほとんど実施できず、学校現場の様子は師範学校の教員、教職に就いた卒業生、様々な出身地の生徒や研修会の参加者、主に僻地の小学校に勤務しつつ通信制で学ぶ生徒たちとの関わりの中から理解していった。研修会での研究発表や生徒の卒業論文などからも学校教育が抱える課題や問題点を知ることができた。

活動をスムーズにするために特に努力したのは教職員と生徒の名前を覚えることだった。休み時間や放課後にも教室や校庭、図書室や寄宿舎などに顔を出し、日常生活や出身地の様子、将来のことなど生徒とは常に会話をするようにしていた。

また、授業だけでなく、行事の観察・参加、教員対象の研修会や会議への参加、時間割作成や成績処理方法の観察など学校業務全般に関わるようにしていた。生徒と一緒にダンスの授業を受けて伝統舞踊の練習をし、学校行事で他の教員と共にステージ発表もした。

仕事が入っていない週末や長期休業中はニカラグア人の友人たちと日帰り旅行をしたり、生徒の出身地や自宅を訪ねる旅もした。生徒の半数以上は様々な面において利便性の高い、学校のある県都以外の出身である。地元のバス停等で待っていてもらったり、休暇で帰省するのに同行したり、日帰りが困難な場合は家に泊めてもらうこともあった。多くの生徒たちが電気・水道・ガスのない地域でどんな家に住み、何を食べ、どのような生活をしているのかを身をもって体験した。日本でも生徒の家族と会ったり家庭訪問をすることで学校では知り得ない新たな発見があるが、ニカラグアではそれ以上にいろいろなことに気づかされた。県都で都市型生活をする生徒たち、それとは異なる生活環境の僻地で教員をしようとする生徒たちに何をどんなふうに教えたらいいのかと考えさせられた。このようにしてニカラグア人との時間をたくさん持ち、深く生活を知ることで、彼らに近いところで良い関係を保ちながら活動ができたと感じている。

6　ニカラグアの教員養成に携わって

着任翌日から授業での指導を始め、最終日も授業をして終わった。毎日通常授業終了後にも選択授業の指導をし、土日や長期休業中に行われる研修会や集中講義も手伝った。学校長を始め多くの教員たちから「いつも学校にいるわね」「本当に生徒たちが好きなのね」と言われており、その通りだった。ニカラグアの教育制度や小学校教員養成についての理解、同じ教員としての同僚たちとの交流、現職小学校・幼稚園教員への研修会、後輩を育てている気持ちにさせられる教員養成コースの生徒たちへの指導と交流により毎日充実した気持ちで活動することができた。

大学の教育学部で家庭科教育と小学校教育を学び、現在は高等学校の家庭科教員である私にとって教員養成学校はとても興味深く、協力できる分野がたくさん存在していた。教科指導だけではなく、学級担任、生徒指導、学校行事の企画運営、その他様々な学校業務の経験から、労働条件や給料体系、学校教育が現在抱えている課題の理解まで、日本での教員経験のすべてが活動に生かされたと言える。教員をめざす多くの生徒が在籍し、現職教員の研修

センター的な役割も果たす教員養成学校を拠点として日本が教育分野で技術協力できることはまだまだいろいろとあるように思われた。

協力して様々な授業を共に実践してきた配属先の同僚たち、いつも友好的に接してくれた生徒たちに深く感謝し、今後は日本の生徒たちの目を広く世界に向けさせ、また日本をしっかり見つめさせることに経験を生かしたいと思っている。

ニカラグアの教員養成に携わって

青年海外協力隊15年度1次隊　ニカラグア共和国　家政

新潟県立白根高等学校教諭　櫻井麻利子

ニカラグア共和国

一般事情

面　積：13．0万平方キロ
　　日本の1／3　中米で最も大きい

人　口：563万人（2004年）

首　都：マナグア市（約100万人）

気　候：熱帯（雨季・乾季）　平均気温28℃

民　族：メスティソ　70%　白人系　17%
　　その他　インディオ　黒人

公用語：スペイン語

宗　教：主にカトリック

主要産業：農牧業（コーヒー・牛肉・サトウキビ・トウモロコシ・米・バナナなど）

歴　史：1821年　スペインから独立宣言
　　1838年　完全独立
　　政情安定せず
　　1972年　マナグア大地震
　　1979年　サンディニスタ革命
　　内戦勃発　激化
　　1990年　内戦終結
　　1998年　ハリケーンミッチ

所得が1日1ドル未満の人口割合：45．1%
（2002年）

成人識字率：76．7%（2002年）

初等教育就学率：82%（2002年）

失業率：11．7%（2004年）

配属先

名 称: フィガルパ師範学校
"グレゴリオ アギラル バレア"

Escuela Normal Regional
"Gregorio Aguilar Barea"

所在地: チョンタレス県フィガルパ市

ニカラグアの学校教育

教育課程

全日制 Cursos Reglares 約350名在籍

通信制 Cursos Profesionalizacion 約1150名在籍
免許未取得の現職小学校教員対象
スクーリング授業(集中講義)
4地区で実施
約2ヶ月ごとに1週間ずつ
12・1月の長期休業中に3週間
全日制より1年長い修業期間

履修科目(中学校前期課程)

- スペイン語
- 社会(地理歴史・公民)
- 数学
- 理科(生物・化学・物理)
- 保健体育
- 英語
- 情報
- 技術・家庭

履修科目(教員養成課程)

<一般科目>
- スペイン語
- 社会(公民・倫理・政治・経済・社会学)
- 数学
- 理科
- 保健体育
- 情報
- 実技教科
(音楽・ダンス・美術・図画工作・技術・家庭)

<教職科目>
- 教育学
- 心理学
- 教育心理学
- 教育法一般
- スペイン語教育法
- 社会科教育法
- 算数教育法
- 理科教育法
- 体育教育法
- 実技教科教育法
- 幼児教育及び障害児教育
- 複式学級及び社会人学級教育法
- 学校経営
- 評価統計技術
- 調査研究技術
- 教育実習
- 卒業論文

校　時

45分授業8限が基本　月・金に全校朝会

7:00～　1～4限　休憩なし
10:00～　休憩15分間
10:15～　5～8限　休憩なし
13:15～　昼休み45分間
14:00～　9限～

活動内容

1　授業における教材・アイディアの提案と実践

2　選択授業の開講

3　現職教員への研修

1　授業における教材・アイディアの提案と実践（2003・9月～）

実技教科　Actividades Prácticas

中学校前期課程
「家庭」分野
教員養成課程
「家庭」「図画工作」「美術」「音楽」
「幼児教育」分野

カウンターパート

＜全日制課程＞
A教諭（専門：社会）
家庭・技術・美術
B教諭（専門：社会）
家庭・技術
C教諭（専門：幼児教育）
幼児教育・音楽・家庭・図画工作

＜通信制課程＞
D教諭（専門：社会）
家庭・技術・美術・図画工作
E教諭（専門：スペイン語）
音楽

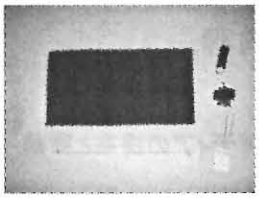
課　題

① 担当教員の専門性の低さ
→ 曖昧な知識と技術
見本をみせることができない
適切な教材設定ができない

② 材料購入が困難な生徒の存在
→ 一斉指導ができない

解決に向けて

① 教材・アイディアの提案
継続的な授業観察
実習題材の提案と教材化
材料準備方法の提案
参考資料の紹介　等
② 授業実践（ティームティーチング形式）
③ 実践集の作成



2 選択授業の開講

① 工作と手芸

② リコーダー

「世界の笑顔のために」プログラム（JICA）
リコーダー提供申請　15・16年度分

- 新潟県立白根高等学校より中古品130本
- 優良生徒個人に贈呈
  → 練習意欲の向上に効果大
  卒業後の音楽教育実践に期待
- 師範学校の備品として寄贈（アルト20本）

3 現職教員への研修
（2003・12月～）

師範学校
||
現職教員の研修施設

小学校・幼稚園教員
市町村指導主事 対象

現職教員研修会 複式学級指導

・現職小学校教員 約50名
（2003年12月 3週間）

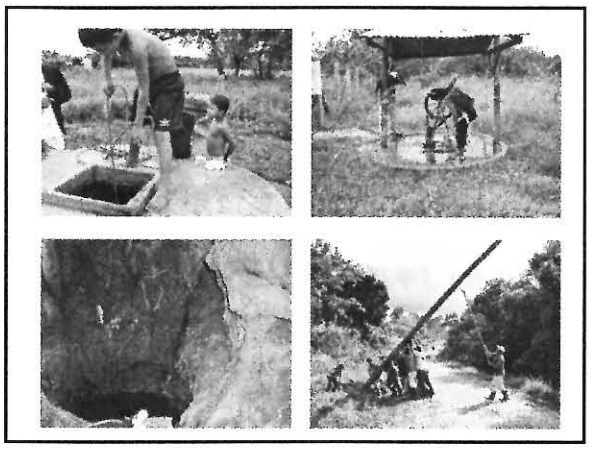
・「工作」「手芸」「リコーダー」 指導

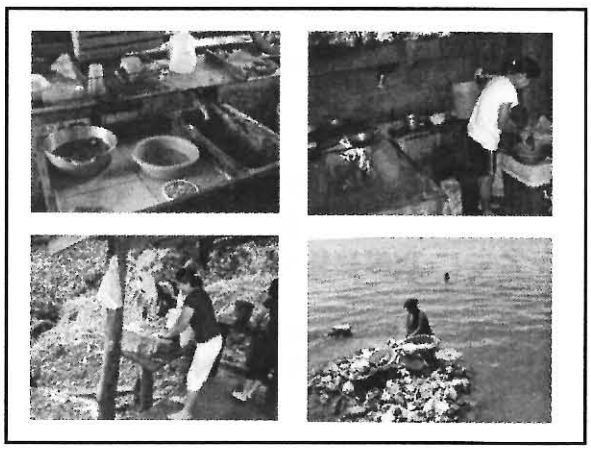
現職教員研修会 幼児教育専門研修

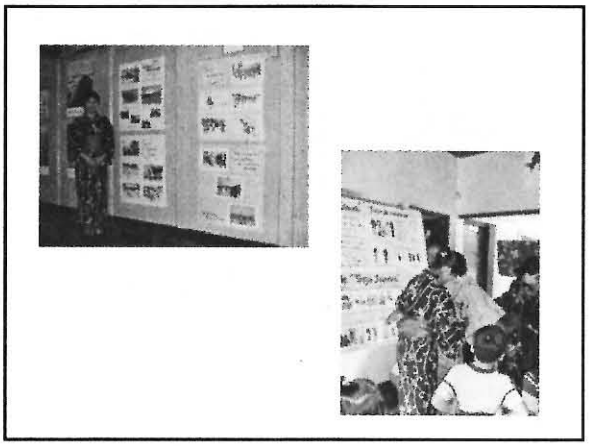
・現職幼稚園教員・指導主事
約80名（2003・12～2004・5 8日間）
約20名（2003・ 7～12 9日間）
約20名（2004・11～12 10日間）

・「工作」「手芸」 指導

生徒理解のために







勤務先のフィカルパ師範学校

小学校教員養成学校である

中学1年生の家庭科
巾着袋作り

「はじめに線を引きなさい。もう
終わった？」「はーい」

一人一人にアドバイスする

「最初に1cm内側に
線を引かなきゃ。ね？」

「もう一回このあたりに線を
引いて縫いなさい」

かぎ針編み

ペンケースと巾着袋

短大1年相当の
調理実習

学生寮の食堂の調理場を
借りて実習を行う

鶏のトマトソース煮・ピラフ・
サラダの出来上がり

画用紙を使った工作

クリスマスツリー

母の日のメッセージカード

選択科目　リコーダー
中学3年

左手は上手に
扱えるようになった

学校行事で演奏することもある

意欲のある生徒は
地元の民謡も演奏
できるようになった

修了証を受け取った生徒たち

小学校教員の研修会

小学校教員の研修会

幼稚園教員の研修会

幼稚園教員は地域の女性に
手芸などを教えることもある

幼児教育担当教員と
共同で教えている

月に一回の研修で
手芸・工作を教えている

毎週月・金に
校庭で集会を行う

短大1年相当
ダンスの授業

行事で発表する機会が多い

※発表ではDV(デジタルビデオ)も用いられました。この6ページ分の資料は，DV画面をもとにスライド風に編集しなおしたものです。

ウガンダにおける活動

三野光雄
（14-1，ウガンダ，理数科教師，大阪府立成城工業高等学校）

１．はじめに

私は、２００２年７月から２００４年３月までの１年９ヶ月間、現職教員特別参加制度を利用して青年海外協力隊に参加しました。活動先は東アフリカのウガンダ共和国にあるジンジャ小学校教員養成学校で、職種は理数科教師でした。

ウガンダは赤道直下ですが、１０００メートル以上の高地のため気候は年中とても快適です。１９６２年の独立ですが、１９８６年まで政変や内乱が続いていました。

ウガンダでは２００１年から青年海外協力隊の派遣が始まりました。私はウガンダで理数科教師として始めて派遣された隊員だったので、教育事情等の予備知識が少なく、自分で見て自分で考えて活動することになりました。もちろん新規要請つまり前任者なしです。そして後任の要請もしなかったので、ジンジャ小学校教員養成学校での活動は私一代だけで終わりました。後任を要請しなかった理由はウガンダの協力隊の歴史は始まったばかりで活動上の知識や経験を蓄積することが必要であり、約４０校ある小学校教員養成学校のうち１校に続けて隊員を派遣するよりも、できるだけ多くの学校に隊員を派遣することが必要と判断したからです。

２．配属先の概要

ウガンダの教育制度は、小学校７年間→中学校４年間→高校２年間→大学２～４年間です。小学校教員になる方法は、中学校卒業後、高校の代わりに小学校教員養成学校で２年間学び、教員資格の国家試験に合格するのが一般的です。

私の配属先は国が授業料を負担する２年制、共学、全寮制の学校で、３６０人の生徒が教員資格国家試験めざして勉強しています。生徒の年齢層は１８歳から３０歳代までいました。学習内容は、教育に関する科目と小学校各科目の復習とその教え方、さらに日本でいうと中学校から高校１年程度のレベルまでを学習し教育実習も実施します。教員は１４人で、１クラス８０人から１００人程度です。ときには２クラス合同で２００人の授業をしていたこともあります。

私の配属先は教員数が少ない中ですが、国家試験の合格率でも比較的上位の成績を残し、また、課外活動に力を入れています。全国の音楽・ダンス・ドラマコンクールで２年連続優勝しました。そして迎えた３年目、生徒たちは一生懸命練習していましたが、なんと教育省の予算がなくなり突然コンクールが中止になってしまいました。また、全国の体育大会でも活躍する選手がいましたが、大会が中止になり、活躍の場を失ってしまいました。

このように、いつも「お金がない」というのが決り文句のように使われ、様々な企画が実現できずに終わります。国家予算の半分を援助国に頼り、賄賂(わいろ)や不正もあります。教員の給料が遅れたり、学校の運営費がないため学期始めを遅らせることが毎回あります。国も学校も人々もお金がない中ですが、工夫しながら自信と誇りをもってやっています。

全国的な問題として、正規の教員数を増やすことと資質の向上が求められています。小学校教員の給料が低く、特に村落においては教員不足は深刻です。また、教員が生活のため他の仕事も掛け持ちしなければならず、教育活動に専念できないとか、優秀な人材は中学校や高校の教員また教育長などの役職に上ってしまうので、小学校では優秀な教員が不足しています。教員資格をもっていない教員もおり、資格をとらせるための講座や学校を巡回する指導員の配置などの対策がとられています。

教員の資質ということで言えば、理数科の科目が弱いということが問題になっています。例えば、多くの生徒たちは私が黒板に書いた図形を正確に写すことができませんでした。これではピタゴラスの定理を暗記していても、どれが斜辺かわからずに問題を解くことができません。理科においても実験せずに結果だけを言葉で暗記しています。また、原子の構造について「原子核の回りを電子がまわっている」と言葉で覚えていますが、それを図に書くことのできる生徒はあまりいません。頭の中にイメージがないのです。理数科を完全に暗記科目にしてしまっています。そして、この生徒達が卒業後小学校の教員になっていきます。このような理数科の苦手な教員に教えられた子供たちは理数科がわからないまま暗記だけして卒業していきます。そしてこの子供たちの中から次の世代の教員になる人が出てきます。その教員に教えられた子供たちは・・・今ウガンダはそういう悪循環の中にあります。

教員の資質向上のために、私の配属先（小学校教員養成学校）は非常に重要な役割を担(にな)っています。

３．赴任当初のとまどい

私がウガンダに来てショックを受けたことは、人々が時間を守らず、約束を守らないことです。必ず約束した時間から１、２時間遅れてきます。また、来ないこともありましたが、次の日に会っても何の言い訳もありません。物やお金を貸してもほとんど返ってきません。大工さんに仕事を頼んだときも何日たっても仕事を始めず、追加のお金を要求します。なんといい加減な人々だろうと思いました。

配属先の状況にも驚きました。教員がいつも５人位しか来ていません。生徒は自習しているのに教員は職員室でお茶を飲んでゆっくりしていたりします。時間割はあっても全く守られていません。教えたい人が教室に入れば授業ができるシステムだったので、誰も教えない日もあれば、教えたい人が重なって教室の取り合いになる時もありました。突然生徒集会や健康診断が入って授業ができなくなりました。なぜ前もって言ってくれないのだろうと思いました。定期的な職員会議はありません。突然会議が設定されますが、何時間待っても教員が集まらず流会になったりしました。各教員が打ち合わせなく自分の教えたい項目を教えているようでした。こんな調子ですから、シラバス（指導要領）や国家試験の出題範囲の項目

であっても教えられないものが多くありました。

赴任当初学校の概要についての十分な説明がなく、すぐに授業してくれと言われました。教科書も授業計画も評価基準も知らないでは教えることができないし、日本式の授業のスタイルでいいのかもわからなかったので、しばらく待ってもらうことにしました。

年間計画もきちっと決まっていません。試験や学期始めや学期終わりもすぐに変更になります。学校案内や成績のつけ方（内規）等のきちんとした文書もありません。たまらず「こんなの学校じゃない」と日本語で文句を言っていました。自分でいろいろ質問しながら学校の概要をつかんでいきました。そして、同僚の授業を見学させてもらいました。皆自信があり堂々と授業していました。毎日毎日、「今日は俺の授業を見ろ」と誘ってくれました。これが私にとっても非常によい勉強になりました。それと理科と算数の教科書を小学校１年生の分から順番に読んでいきました。これもたいへんよい勉強になりました。

あとは、生活面での不安がありました。赴任からしばらくすると電気がなく、夜は石油ランプでの生活になりました。トイレは外です。風呂がなくタライで水浴びをしました。ゴキブリやネズミ、コウモリの駆除もしなければなりません。赴任当初は、たまらず首都の隊員の家にお世話になったこともたびたびありました。

しかし、半年もするとすっかり慣れてしまいました。電気のない生活で暗闇でも目が見えるようになりました。環境は人を強くするなあと感心しました。時間にいい加減なのは、交通や通信が発達していないので約束してもそのとおりにいかないことが多く、約束した時間よりもいつも遅れるのが当然なので、待たされても全然怒らないのが彼らの文化なのです。また、物を返さないのはお互いさまで、私がペンを持っていない時は快く貸してくれたり、ペンをくれます。きっと物を所有するという意識が少なく、必要な人が使うように共有しているような感覚が彼らの文化だと思います。その考えでいくと一緒に食事をしてもお金を持っている方が出すのが当然なのも納得できます。近所の人は私に食事を分けてくれたり、同僚がジュースを私に買ってくれたりすることもあります。

学校の年間計画が決まっていないのは、国の予算がなく常に変更があり決められないということが原因でしょう。文書類が少ないのは、学校にはタイプライターと手回しの輪転機しかないので、何でもかんでもコピーして大量の資料を作る日本のようにはいきません。人々が仕事をきっちりしていないように見えるのは、子供が１０人もいると生活することが大変で、お金がなかったり、病気になったりと様々なことがあります。何があっても仕事を優先するという文化はウガンダにはないからです。生徒たちに教員が授業を休講することについて文句はないか聞いた時、生徒たちは教員にも生活があり事情があるので問題ないと言っていました。

このように人々の行動様式の背景にある理由が自分なりにわかったのでイライラすることがなくなり、すっかりウガンダの文化に馴染(なじ)んでしまいました。こういう文化もいい面はあると思います。帰国後私は、逆に日本の職場で苦しんでいます。

４．配属先での活動

まずは毎日学校に行き、同僚や生徒たちと話をすることから始めました。学校に慣れるに従い、試行錯誤しながらですが授業以外にも様々な活動を行なうことができました。

(1) 授業

私は、数学と総合理科を担当しました。シラバスを全て教えることができるように、どの分野を誰が担当するか同僚と打ち合わせをしました。小学校・中学校の復習から教員資格国家試験レベルまで引き上げなければならず、授業時間は不足しがちでした。私は授業時間を確保するために、自分の時間割を守り、さらに自習している教室があれば私が授業をさせてもらいました。そして突然授業がなくなることのないように、職員室に予定表と黒板を設置し、行事の計画を皆がわかるようにしました。

生徒たちは教科書を持っていないので、授業のノートが彼らの教科書になります。教員は黒板をほとんど使わないで、生徒が書きやすいように何度も同じ文章を読んで聞かせます。生徒はそれを口述筆記します。これがウガンダでの典型的な授業スタイルです。私の場合は、できるだけイメージを持ってもらいたいので図を多く描くのと、私の発音が生徒にはわかりにくいので全部黒板に書いて授業をしました。毎回の授業の準備は大変でしたが、小学校の復習から始めたので生徒にもよく理解できたと思います。

(2) 黒板の修理と製作

教室の黒板が破損していたり不足していたので、黒板の修理と製作をおこないました。材木と黒板用ペンキをの購入には隊員支援経費を申請し認められました。生徒たちも手伝ってくれて、どの教室にも黒板が整備されました。黒板は使わないと言っていた同僚も喜んで黒板を使ってくれました。

(3) 図書室の整備と本棚の製作

私が赴任したときの図書室はダンボール箱を積み上げた倉庫のような所でした。本を探すにはダンボールを空けなければならず、ほとんど利用されていませんでした。１０年前の本でも一度も読まれずに保存されていました。最初に私が本棚に本を並べようと提案した時、同僚から反対されました。本は非常に貴重だから、本棚に並べたら本がなくなってしまうというのです。私は何ヶ月もかけて話をしてようやくこの計画が認められました。

新しい部屋の整備と材料の運搬は学校の予算でおこない、隊員支援経費で本棚の材料を購入し本棚を生徒たちと製作することにしました。調整員と相談し私が拘(こだわ)ったのは同僚の理解を得ることと、学校にもそれなりの金額を負担してもらうこと、そして本棚を買うのではなく作ることです。物が簡単に手に入ったのでは、すぐに援助に頼るようになってしまうと思ったからです。自分たちで工夫し努力する姿勢を持つことが基本です。

設計図を書き、材木を購入しました。材木は乾燥すると曲がってしまうので、板と板の間に棒を挟(はさ)んで隙間を空けながら積み上げて、１ヶ月乾燥させました。この辺のことは、職業訓練学校で木材加工を指導していた JICA の専門家に教えてもらいました。その後、職業訓練学校の設備を利用して、板を電気カンナで平らにし、必要な大きさに切りました。組立ては生徒たちが行ない、１４本の本棚と４本の理科教材用のロッカーが完成しました。本

が本棚に並べられ、立派な図書室ができました。生徒たちの中から司書を決め、生徒たちが本を読んだり、借りたりできるようになりました。

同僚も生徒たちも大喜びでした。実は私はこんな大掛かりな木材加工をしたことはなく、この成果に自分でも驚いています。本当に必要になると力は出てくるのだなと感心しました。また、協力していただいた専門家の人には大いに感謝しています。

(4) コンピュータ指導

私は日本にいるときは工業高校で情報技術を担当してたので、コンピュータを見たことのない生徒たちに何とかコンピュータを触らせたいと思っていました。いくつかの教員養成学校にはコンピュータ室があると聞いていましたが、私の配属先にコンピュータ室ができるのはずっと先のことになるでしょう。そこで、将来のためにコンピュータの指導について同僚たちに経験してもらうためにも、隊員支援経費で買ったコンピュータ３台を私の活動している間借りて、放課後の課外活動でコンピュータの指導をすることにしました。

私はまず生徒たちの中から１０人ほどのインストラクターを募りました。そしてインストラクターにコンピュータの使い方と教え方を指導しました。次に、インストラクターが一般の生徒を指導します。私は後ろで見ていました。１回目・２回目はコンピュータの起動と終了、マウスの操作の練習のためにペイントでお絵描き、ファイルの操作、３回目・４回目ワード文字の入力に絵を貼り付けたり文書の体裁を整える。５回目以降エクセルやインターネットについても予定していました。毎日のように講習をやっていましたが、生徒は３６０人いますので、最終的に１人３回～４回くらいの講習しか受けることができませんでした。それでも生徒たちは喜んでくれました。特にインストラクターの生徒たちは教員に代わって学校の文書を作ったりできるまでになりました。

同僚たちもコンピュータに慣れることができました。しかし、生徒のコンピュータ指導に関わってくれるまでには至りませんでした。私が帰国する時にコンピュータは引き上げ、今は別の学校で隊員の活動に役立てています。

(5) サイエンスフェア

１クラス８０人では演示はできても生徒が自分で実験することができません。何とか実験の機会を作りたいということで、サイエンス・フェアを企画しました。生徒を４０以上のグループに分けて、各グループでテーマを決めて発表し会う文化祭みたいな行事です。同僚と話し合って、よしやろうということになったのですが、計画がなかなか進まずどうなるかと心配しました。しかし、土の研究、人体の研究、天秤の製作、ボルタの電池、カエルの解剖など短期間の準備にもかかわらず多くの優れた発表があり何とか大成功に終えることができました。

そうすると次の学期には、数学の同僚が中心となりマス・フェアを開催しました。位取り記数法、数学の有用性、立体図形、円の面積など多くの発表がありました。

(6) 講義録冊子と国家試験過去問題集を作成

授業でやりのこした部分や今後の資料として役立てるために理科の講義禄と理科と数学の過去問題集を作りました。講義禄は、時には徹夜をしてコンピュータで作成しました。紙を

節約するために文字数を少なくするよう工夫しました。輪転機のマスターに細かい穴をあけるために、ドットマトリックス・プリンターをポケットマネーで購入しました。講義録の印刷は学校の手回し輪転機を使い、配属先の全生徒に配布されました。過去問題集は、何１０冊かコピーして図書室で閲覧できるようにしました。

講義録等は近日中に拠点システム電子アーカイブスに登録する予定です。

５．最後に

１年９ヶ月の活動を思い返すと、最初の半年くらいは異なる文化へのとまどい、そして学校の様子への驚きの時期でした。しかし、同僚たちは私に手取り足取り指示することはなく、結果的に私は自分で考え行動することになりました。

やがて私は学校に慣れると、さまざまな活動を考えつき、同僚たちに相談しては協力を求めました。しかし、前もって理解してもらうことは非常に難しく、ともかくやらせてほしいと訴えました。中には了解を得るのに半年かかったこともありますが、大抵は好きにさせてくれました。本当は同僚たちと協力して活動するべきですが、まず私の取り組む姿勢を同僚たちや生徒たちに見せたかったのです。成功しても失敗しても。

人間関係もそうですが国際協力は一方通行ではなく相互に協力しあうことが必要です。お互いに学び会えば異なる文化が混ぜ合わさって化学変化をおこすのです。活動期間は短いですがあせらずに半年は様子を観察し、相手から学ぶことが必要だと思います。私は、ウガンダで人に対する寛容さを学ぶことができました。

自分の専門とは違うことが要求されることがあるかもしれません。完璧にできないかもしれないけれど、ともかく一緒にやってみる。何でもできることを工夫してやってみる。その姿勢が必要だと思います。私にとって本格的な本棚を製作することは初めての経験でした。でも、あえて挑戦したのは、同僚や生徒たちから諦(あきらめ)めるのではなく自分たちで努力する姿勢を引き出したかったからです。本棚というものを与えるのではなく、本棚を一緒に作りたかったのです。たとえ誰も手伝ってくれなくても、作る姿を見せたかったのです。それが協力隊の活動する意義だと思います。物を残すのではなく心を残したいと思って活動していました。

私がいなくなってから、同僚や生徒たちが自分たちで問題の解決に向かって一歩踏み出すことができれば、それこそが活動の成果だと思っています。協力隊の活動の成果はすぐにはわかりません。それは１０年後、２０年後になるかもしれません。教育も同じことです。こんな話を聞いたことがあります。教育がよかったかどうかはすぐにはわかりません。それは何１０年たって学校で習ったことを全て忘れてしまって、それでも何か残っているものがあるとすればそれが教育の成果ですと。

ウガンダでの経験をこれからの教育活動にも役立てていきたいと思います。

６．質疑応答

(1) ケニヤなどの近隣国の理数科隊員との交流はありましたか？

ケニヤで大統領選挙があり、避難のためにケニヤの隊員がウガンダに来て研修を行ないました。その時に理数科隊員とも交流し、サイエンス・ショーや教育プロジェクトの話を聞くことができました。また、任国外旅行でタンザニアに行った時には、多くの理数科隊員の学校を訪問し、授業を見せてもらいました。近隣国の隊員が日々の授業以外にもさまざまな活動を行なっている様子を見聞きして私は衝撃を受けました。それらのアイデアを取り入れて、隊員支援経費の活用、サイエンスフェアの企画、講義録の編集、隊員機関誌の創刊、教育関係隊員の懇談会（分科会）の開催など私の活動にも幅を広げることができました。

(2) 事前にどんな準備が必要ですか？

語学はもちろんですが、身近にある材料で簡単な実験ができるよう準備をしておいた方がよいと思います。ただ、日本からいろいろな実験器具を持ち込むよりも、現地調達した材料を使う方が同僚たちにとって参考になるでしょう。

事前にもっと情報が欲しいと思うでしょうが、事前の情報は参考程度にしておいて、柔軟に対応できるように心づもりをしておいた方がよいでしょう。それは、同じ国の中でも活動先が都市部にあるのか村落地域にあるのかで、生活や学校の様子が全然違いますし、事前に聞いていた情報が当てにならないことがよくあります。例えば、教員が不足していると聞いていたが、隊員が派遣された時には十分な教員がいた。物理を担当すると聞いていたが生物を教えてほしいと言われた。コンピュータを指導してほしいと言われたが、コンピュータは古くて故障していた。極端な場合は、配属先が変更になる場合もあります。

隊員を要請してから実際に隊員が派遣されるまで１年から２年かかり、その間に状況が変わってしまうことはよくあります。そういうときは事前の要請にとらわれずに、そこで自分にできることは何かを考えて活動すればいいと思います。また、配属先の人々が問題を整理して理解していないという場合もあると思います。そういうときは、だからこそ隊員が要請されたのだとらえて、じっくり腰を据えて観察することから始めてください。

持って行くものとしては、私の場合は日本の参考書が役に立ちました。日本語で理解できていないものは、英語の本を読んで分かるのに時間がかかります。あと、日本の写真や文化を紹介するようなもの、例えば折り紙、剣玉など。雪の降らない国に行く人は日本の雪景色の写真を見せてあげるといいでしょう。

ウガンダにおける活動

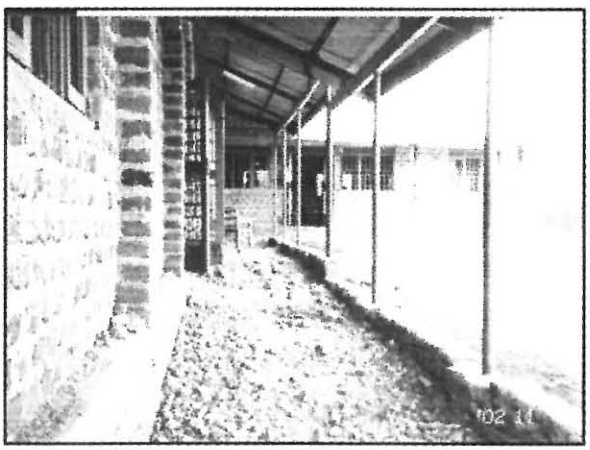
大阪府立成城工業高等学校
情報技術科教諭　三野光雄

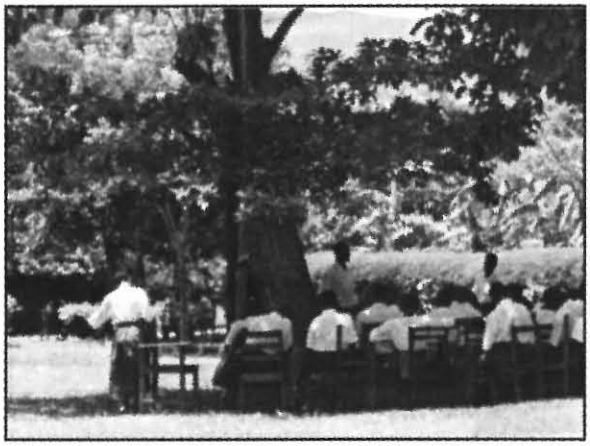
1．はじめに

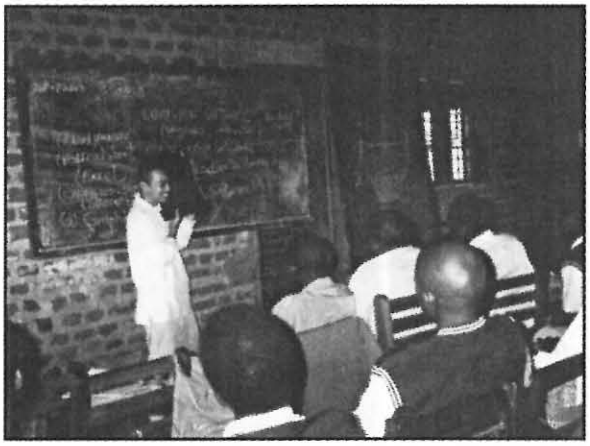
- 活動期間　2002年7月から
  2004年3月まで
- 活動場所　ウガンダ共和国
  ジンジャ小学校教員養成学校
- 職　　種　理数科教師
  新規、後任なし

ウガンダ

ジンジャ小学校教員養成学校



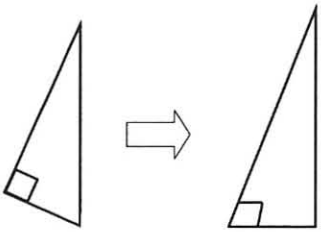




2. 配属先の概要

- 小学→中学→小学校教員養成学校
  →教員資格国家試験
- 2年制、共学、生徒数360、教員数14、
  1クラス80人
- 音楽、体育、国家試験で活躍
- お金がない
- 全国的に理数科が弱い

斜辺はどれ？



3. 赴任当初のとまどい

- 時間、約束、貸し借りにルーズ
- 教員の様子
- 学校の概要がつかめない
- 電気のない生活

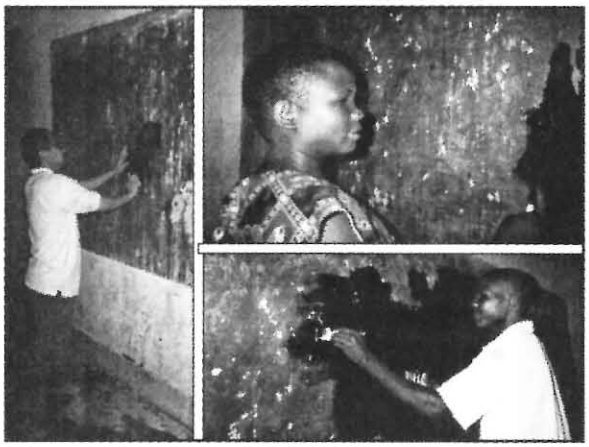
半年くらいで慣れてしまった

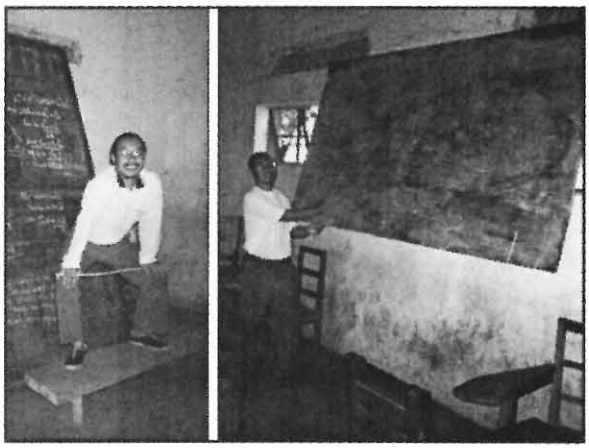
4. 配属先での活動

- 授業
- 黒板の修理と製作
- 図書室の整備と本棚の製作
- コンピュータの指導
- サイエンスフェア
- 講義録・問題集

黒板塗り

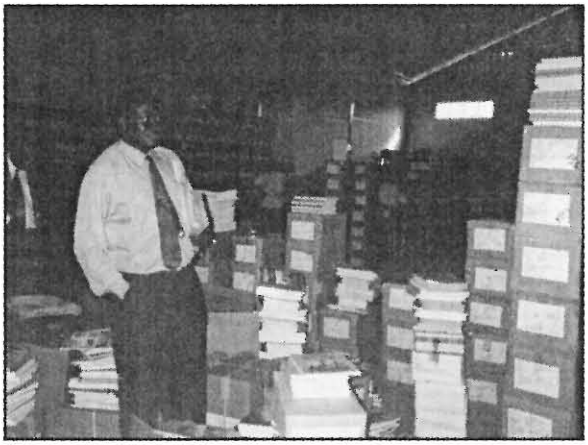
隊員支援経費を利用





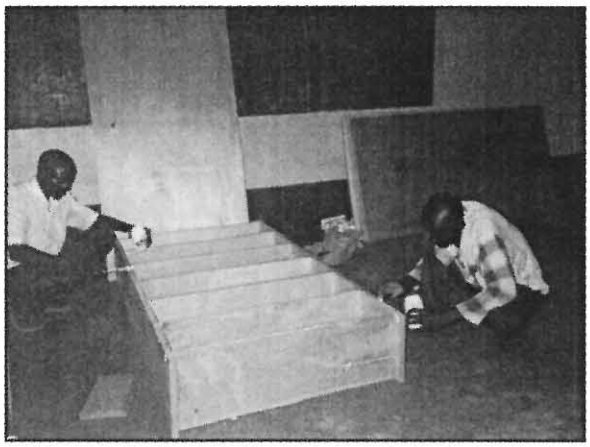
図書室の整備

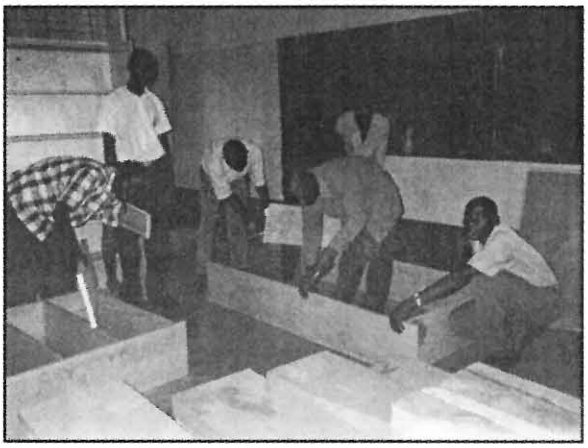
隊員支援経費を利用



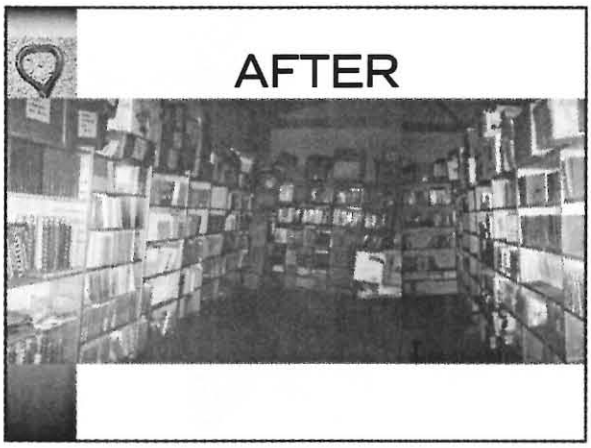
材料の用意

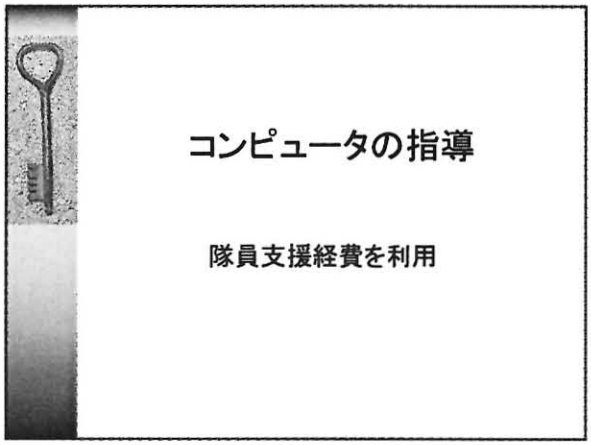
製作風景

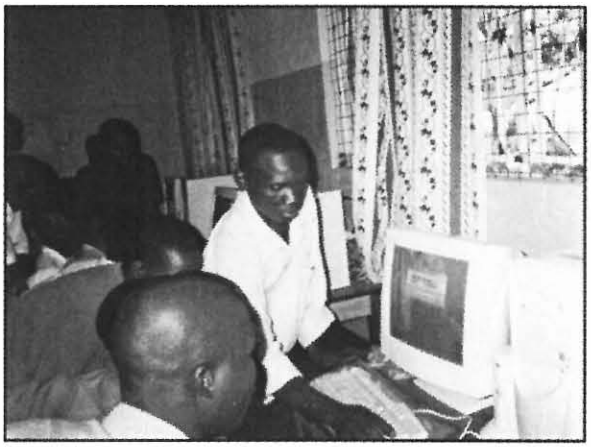


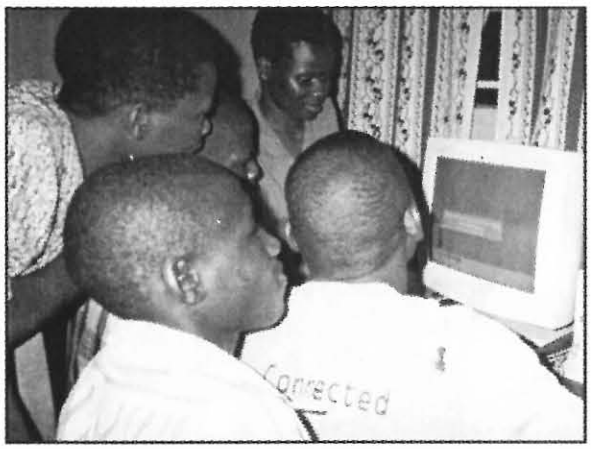


完成！


AFTER


コンピュータの指導
隊員支援経費を利用





サイエンス・フェア

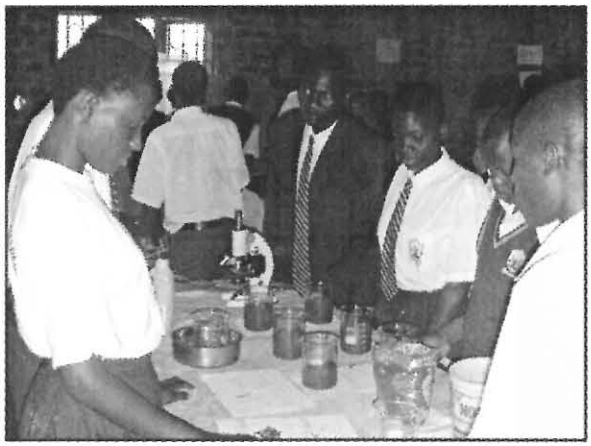
サイエンス・フェア発表グループ

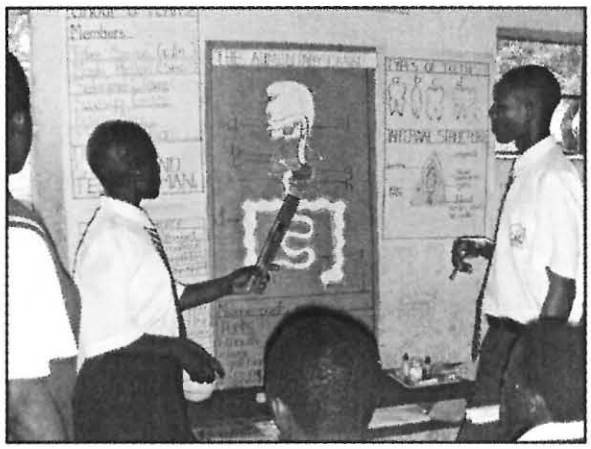
YEAR ONE

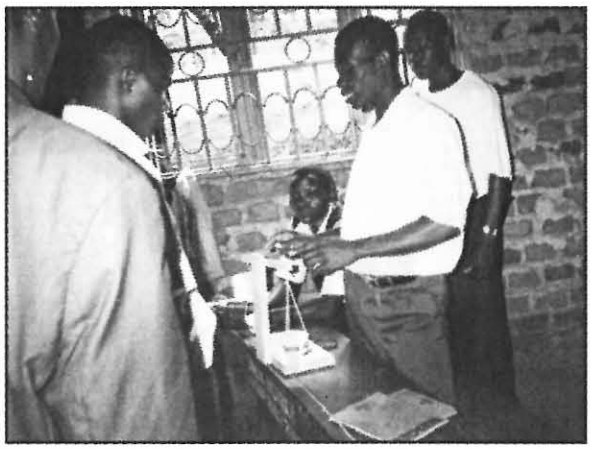
J-1 : Respiratory System and Diseases
J-2 : Plants (Flowering Plants)
J-3 : Plants
J-4 : Ears
J-5 : Magnetism and Electricity
J-6 : Parts of a Plant
J-7 : Diarrhoea
J-8 : Digestion System and Teeth
J-9 : Heat Transfer
J-10 : List of Living Things
J-11 : Electricity (Making Battery Cells)
P-A : Measuring π and
Proof for Pythagoras Theorem
P-B : Circulatory System
P-C : S.T.D.s
P-D : Environmental Conservation,
Soil Layer and Types of Soil
P-E : Properties of Air
P-F : Making a Weighing Scale and Seesaw
P-G : Spectrum
P-H : Measuring Voltage and Current
P-I : Crystallised Salt
P-J : Light (Sources of Light, Show How
Light Travels in a Straight Line)
T-1 : Germination of Seeds + Microscope
T-2 : Flowers
T-3 : Classification of Living Things
T-4 : Food
T-5 : Magnetism
T-6 : Lungs
T-7 : Food, Nutrition and Balanced Diet
T-8 : Dispersing Seeds, Fruits and Flowers
T-9 : Rain Formation
T-10 : Communicable Diseases

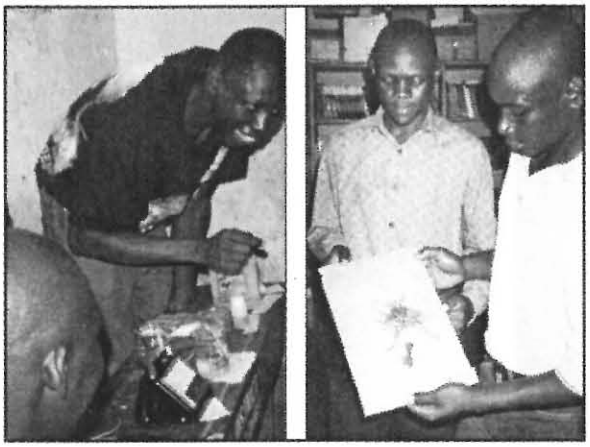
YEAR TWO

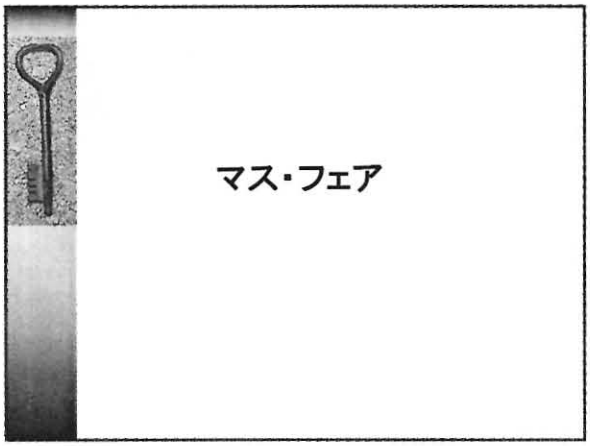
H-1 : Eyes
H-2 : Alcohol
H-3 : Electromagnet
H-4 : Refraction and Glass Block
H-5 : Endocrine System
H-6 : Digestion
H-7 : States of Matter
H-8 : Food Preservation
H-9 : Wind Sock and Rain Gauge
H-10 : Reproduction
H-11 : Rabbits
H-12 : Periscope
H-13 : ORS
H-14 : Heart
H-15 : Soil
H-16 : Immunization





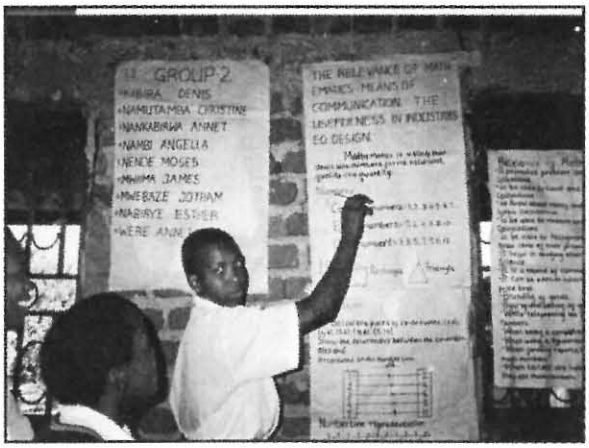


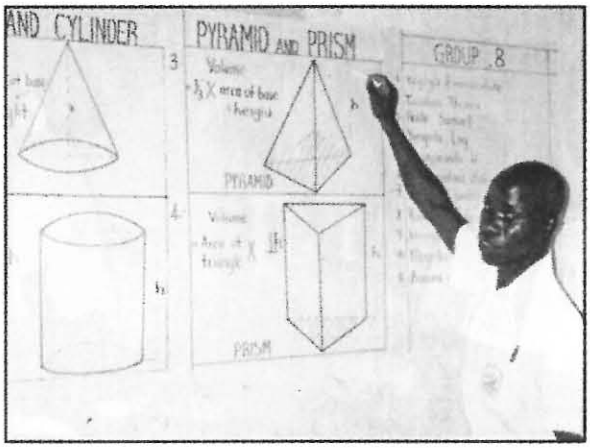




マス・フェア

PLACE VALUE


GROUP 2
THE RELEVANCE OF MATH
EMATICS MEANS OF
COMMUNICATION THE
USEFULNESS IN INDUSTRIES
EG DESIGN


AND CYLINDER
PYRAMID AND PRISM
GROUP 8
PYRAMID
PRISM

講義録冊子

17.Energy-3

(4)Light Energy:a form of energy emitted by luminous objects like the sun, visible part of the electromagnetic spectrum

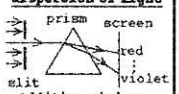
-Spectrum (Spectral colours) The seven spectral colours in order of increasing frequency:
red, orange, yellow, green, blue, indigo, violet
R O Y G B I V
White light is mixture of spectral colour

-Primary Colours :Red, Green, Blue
Our eyes detect three primary colours and our brain recognise secondary colours
Eg, yellow = R + G, magenta = B + R
cyan (peacock blue) = G + B, white = R+G+B

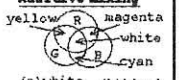
-Luminous objects emit visible light. Non-luminous objects produce no light. But we can see them because of reflected light from luminous objects.
(a)White object reflects all spectrum of light.
(b)If an object absorbs all spectrum of light and no reflection, it is black. (c)An object which reflects R and B and absorbs 5 spectrum is yellow.

-Light travels straight line.
-Light travels very fast. Light speed: 300,000km/s =7.5 times going around the earth in a second.
-Light can travel through a vacuum.
-Light behave like a wave but the other time like a stream of particles.

dispersion of light



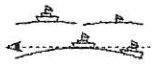
Additive mixing



(a)white (b)black
reflect
absorb
white (seven spectrums)
(c)yellow (R+G)
5 colors absorbed

23.The Earth-1

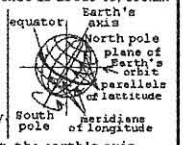
(1)Characteristics of the Earth



-Shape:The earth is curved (not flat) because when a ship goes away, its body disappears and you can see only the sails before it completely goes out.
The earth is like a sphere, but slightly flattened at the poles.

-Size:Its radius is about 6,400km, its circumference is about 40,000km.

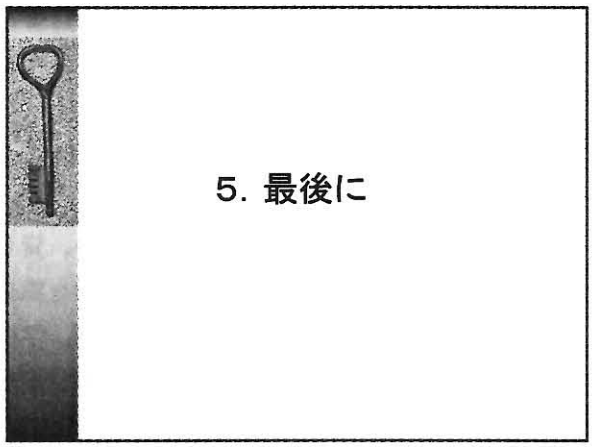
-Spin:The earth turns (rotates) on its axis. It takes 24 hours for one complete turns. That is why the sun, moon, stars seems go around us every day. Also day & night are caused by the rotation of the earth on its axis.



-Revolution:The earth go around the sun (The earth is the 3rd nearest planet from the sun). It takes 365.26 days to orbit the sun completely. The leap year has an extra day to adjust the 365-day calendar. As the earth moves on its orbit, the earth's axis leans at an angle of 23½°. That causes seasons every year on the earth.

-Location:A point on the earth's surface are defined by lattitude and longitude. The latitude is its distance from the equator in degree (north or south). The longitude is its distance around the earth's circumference in degree (east or west). The altitude is distance above sea level.

-Surface:The earth looks blue because 75% of its surface is covered



5. 最後に

２００６年1月７日

派遣現職教員の活躍　アフリカ分科会

ウガンダにおける活動

大阪府立成城工業高等学校
情報技術科教諭　三野光雄

１．はじめに

(1)　活動期間　　２００２年７月から２００４年３月（１年９ヶ月）

(2)　活動場所　　ウガンダ共和国　ジンジャ小学校教員養成学校

(3)　職　　種　　理数科教師、新規要請（＝前任者なし）、後任なし

２．配属先の概要

(1)　小学校（７年）→中学（４年）→小学校教員養成学校（２年）→教員資格国家試験→教員

(2)　２年制、共学、全寮制、生徒数３６０人、教員数１４人、１クラス８０人～

(3)　音楽コンクール全国優勝、体育大会でも全国レベルの活躍、国家試験でも上位の成績。

(4)　国も学校も人々もお金がない中、自信と誇りをもってやっている。

(5)　全国的に理数科が弱い（丸暗記）　理数科苦手な生徒→その中から教員が出る→悪循環

３．赴任当初のとまどい

(1)　時間を守らない、約束を守らない、貸した物を返さない

(2)　教員が５人位しか来ない、時間割を無視、シラバスをカバーしていない、職員会議も流会

(3)　きちんと決まっていない年間計画、学校の概要がつかめない。

(4)　電気のない生活、外のトイレ、風呂がなく水浴び

→　生活に慣れ、人々の行動様式には理由があることがわかり、イライラしなくなった。

４．配属先での活動

(1)　授業・・・数学と総合理科を担当、小・中学校の復習から教員資格国家試験レベルまで
　　生徒たちは教科書を持っていない。私は小学校１年生の教科書から読み始めた。

(2)　黒板の修理と製作　　（隊員支援経費を利用）

(3)　図書室の整備と本棚の製作　（　　〃　　）

(4)　コンピュータ指導　　（　　〃　　）

(5)　サイエンスフェア

(6)　講義録冊子と国家試験過去問題集を作成

５．最後に

(1)　異なる文化が相互に影響し合うこと

(2)　形のないもの（心）こそ重要。活動の成果は１０年後、２０年後。

JINJA PRIMARY TEACHERS' COLLEGE - WANYANGE
SCIENCE FAIR TOPICS

2nd September 2003

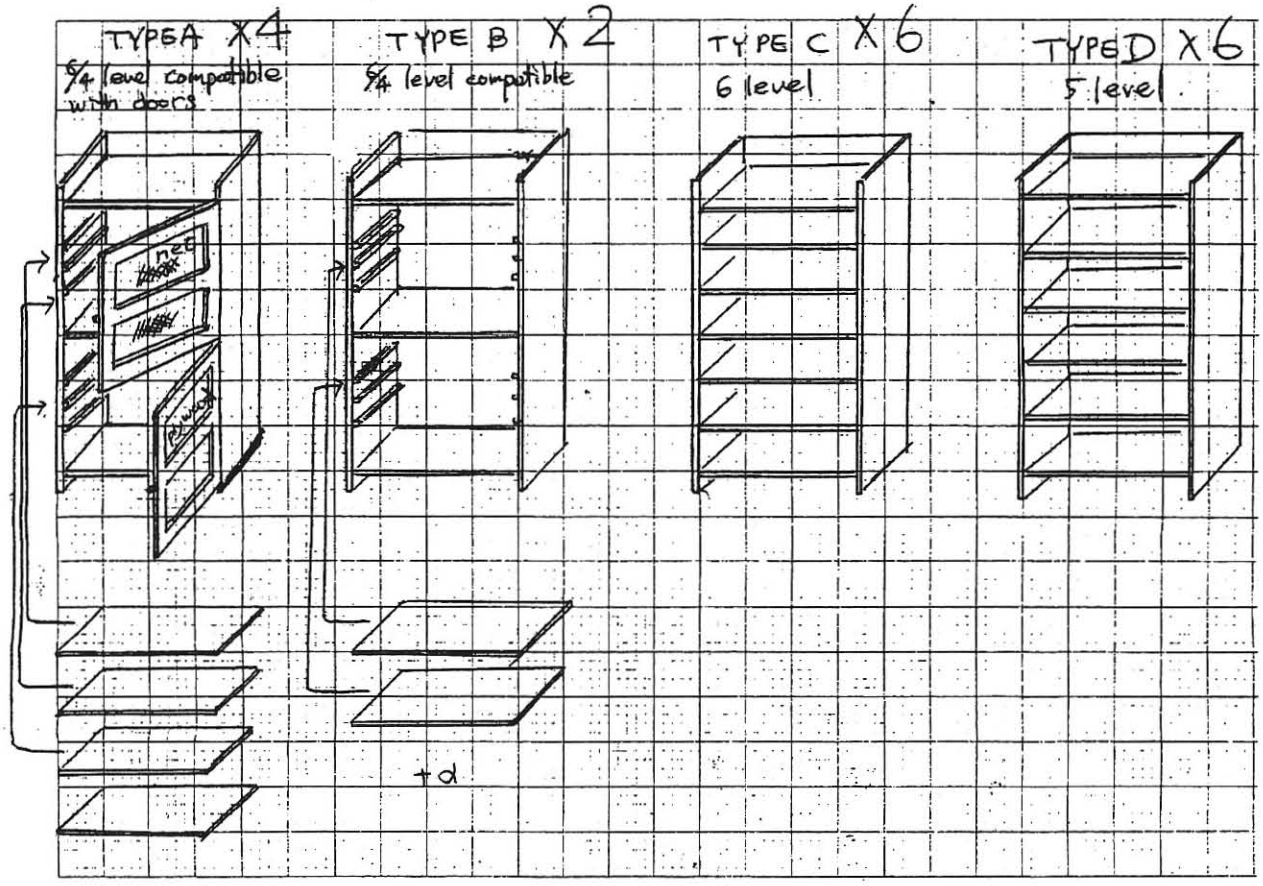
YEAR ONE

J-1 : Respiratory System and Diseases
J-2 : Plants (Flowering Plants)
J-3 : Plants
J-4 : Ears
J-5 : Magnetism and Electricity
J-6 : Parts of a Plant
J-7 : Diarrhoea
J-8 : Digestion System and Teeth
J-9 : Heat Transfer
J-10 : List of Living Things
J-11 : Electricity (Making Battery Cells)
P-A : Measuring π and
Proof for Pythagoras Theorem
P-B : Circulatory System
P-C : S.T.D.s
P-D : Environmental Conservation,
Soil Layer and Types of Soil
P-E : Properties of Air
P-F : Making a Weighing Scale and Seesaw
P-G : Spectrum
P-H : Measuring Voltage and Current
P-I : Crystallised Salt
P-J : Light (Sources of Light, Show How
Light Travels in a Straight Line)
T-1 : Germination of Seeds + Microscope
T-2 : Flowers
T-3 : Classification of Living Things
T-4 : Food
T-5 : Magnetism
T-6 : Lungs
T-7 : Food, Nutrition and Balanced Diet
T-8 : Dissecting Seeds, Fruits and Flowers
T-9 : Rain Formation
T-10 : Communicable Diseases

YEAR TWO

II-1 : Eyes
II-2 : Alcohol
II-3 : Electromagnet
II-4 : Refraction and Glass Block
II-5 : Endocrine System
II-6 : Digestion
II-7 : States of Matter
II-8 : Food Preservation
II-9 : Wind Sock and Rain Gauge
II-10 : Reproduction
II-11 : Rabbits
II-12 : Periscope
II-13 : ORS
II-14 : Heart
II-15 : Soil
II-16 : Immunisation

ロッカー本棚設計図



タンザニアでの教員経験を通して

～青年海外協力隊の活動より～

谷　昌亮

（14-1，タンザニア，理数科教師，尼崎市立尼崎産業高等学校）

1　ポレポレなタンザニア

見出しの「ポレポレ」はスワヒリ語で「ボチボチ」の意味。日本語と何か共通するところがあるようで、学校への通信のタイトルとしていました。

さて、私が赴任したタンザニア国を少し紹介させてもらいます。映画ライオンキングの舞台と言われているセレンゲティ国立公園等の自然と動物が共存している所が多く残され、アフリカ最高峰キリマンジャロ山が高くそびえています。また青いさんご礁の海を持つインド洋の島々は、奴隷貿易で栄えた面影を今もなお残しています。このように観光資源としては豊富なタンザニアですが、当然いろいろと困難な問題を抱えています。重責務最貧国というレッテルを国際社会からはられているタンザニアは、GNP が２８０ドル、平均寿命４０歳強、乳幼児死亡率は日本の３０倍、HIV 感染率は２割程度と言われています。コンゴやソマリアに代表されるタンザニアの周辺国はこれに内戦や飢餓があることを考えると、タンザニアは平和で、農作物が豊富な分、食べていけるということで、人々はたいへん陽気で親切です。いろいろと困難な問題はありますが、「Hakuna matata」「問題ないよ！」と気軽に考えていける国民性には尊敬の念さえ感じていました。

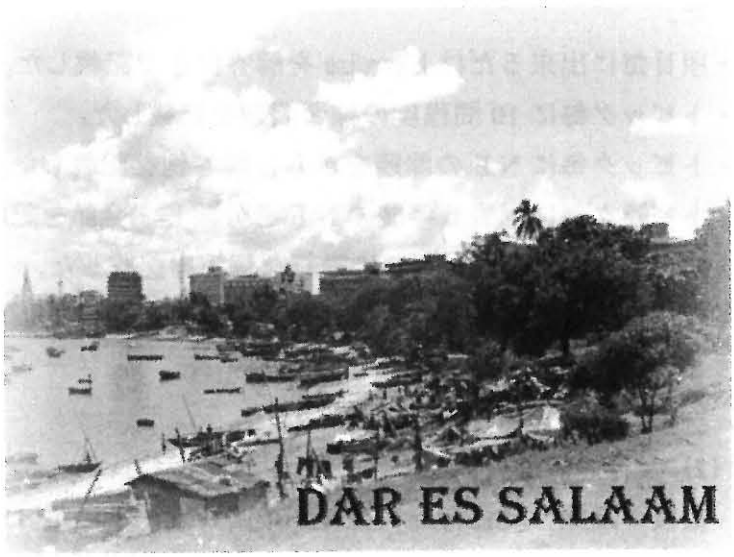


写真１　首都ダルエスサラームの風景

2　現地での活動を通して

(1) 理数科教員として

私は理数科教員として首都近郊の歴史ある Pugu Secondary School に赴任しました。実はこの学校、タンザニアでも一番有名な学校と言ってよく、初代大統領が勤務していた学校であり、現大統領の母校でもあります。Ａｄｖａｎｃｅ-level 校（日本の高校程度）は原則全寮制であり、国家試験の点数と希望とを考慮して全国にある公立校（160 校程度）に生徒を振り分けます。この作業を各校長が１ヶ所へ集合し、１ヶ月近くかけてするそうです。この A-level

校の問題というと第一に教員不足です。A-level 校を担当する教員は大卒以上というのが条件ですが、これは相当な高学歴ということになります。できればもっと待遇の良い職場、職種へと変わりたい希望をいつも持っています。まだ Pugu は首都近郊でもあり教員達も希望して勤務するはずですが、数学、物理で慢性的な教員不足でした。私が赴任した時は Form5 を担当する物理の教員はゼロで、当初より 4 クラス約 200 人を担当しました。また A-level には教科書というものはありません。シラバスに記載されている参考テキスト等を参考にしながら、学習を進めていくというのが生徒の標準的なやり方です。私が教えたクラスでは、約 8 割の生徒はテキストと呼べるものを持っていませんでした。またテキストを持っていて、それを参考に学習を進めている生徒でも、その参考書はシラバス通りの順番には並んでいませんし、すべてを網羅している訳でもありませんので、個人的に学習するには非常に困難を要します。私自身、自分のレッスンノートを作成するに当たり、5 冊の参考書を購入し、一番分り易いものはどれかを調べながら、シラバスに沿って作成しました。ある程度内容を理解している私ですら、骨の折れる作業なのですから、全く内容を理解していない生徒にとって、それを自ら行うことは困難です。また国家試験の得点がすべてという現実があり、理論よりも問題の解法という予備校形式の授業を求める生徒たちに答えるためにテキストと問題集を作成しました。このテキストの作成にあたり工夫した点を紹介します。

・シラバスをより意識しながらできるように、各トピックの始めにシラバスの目標を記載した。
・項目毎に出来るだけ Exercise を解答付きで記載した。
・トピック毎に 10 問程度の練習問題を記載した。
・トピック毎に N.E.の問題を示し、解答例を記載した。
・トピック毎に過去 6 年間の N.E.を分類し、全部を記載した。
・すべての練習問題、N.E.に詳細な解答を記載した。

学校にはこれを数冊製本、寄贈し大変喜んで頂けました。唯一の目に見える成果かと思います

(2) 生徒の評価

最後の授業の時に行った生徒へのアンケートの集計結果を紹介します。私の英語の能力についてと、主に日本人教師は生徒達にどう映っていたかをアンケートしました。特にコメントは付けませんが、前述したテキストに対する評価が高いのは非常に嬉しい限りです。ちょっと英語が不正確なことはありますが、意を汲み取っていただければと思います。

(Q1)Could you understand my English speaking?

☐all understanding [50%] ☐almost[34%] ☐sometimes[16%] ☐seldom[0] ☐never[0]

(Q2)Do you think any difference between my lesson and Tanzanian teacher's one?

☐Yes[51%] ☐sometimes[34%] ☐No[15%]

If you answer "yes", please write any different point.

(Note: T.T. means Tanzanian Teacher and J.T. means Japanese Teacher)

/Your explanation bases on how to apply physics in the for example technology but Tanzanian teachers teaches how to answer questions of NECTA and tricks to pass physics and not how is it able to the normal life.

/Language and you make things more summary.

/J.T. are more advanced on teaching especially on how to make the student to understand more.

/Your lesson you use more practical examples and you want the student to set ideas how to answer the questions.

/T.T. because they are Tanzanian. They have enough experience about Tanzania teaching example, they know much to concentrated during teaching but you, you are just directed by syllabus and your experience is not the same as them but you tried a level best.

/You have the spirit of being a teacher like some few T.T.

(Q3)Did my text book help your study?

☐Yes[98%] ☐sometimes[2%] ☐never[0%]

(Q4)Did Calculations help your study?

☐Yes[98%] ☐sometimes[2%] ☐never[0%]

(Q5)If there are enough teachers in Tanzania, what do you think about Japanese teacher?

☐Need[83%] ☐Not to need[17%]

Please write your comment about this question, if you have.

[Need] /We learn their attitudes, ideas and life experiences which are important to us.

/This is to bring relationship to Tanzanian and Japanese and also help to learn more things concern Japanese.

/Giving us a different ideal from Japanese and it is important for developing man.

/Presence of J.T has greater influence since we share ideas and ideology, this is more important in improving students ability.

/We need J.T. but not many. The T.T. would satisfy our aims. We need some teachers from Japan because it is better to change the teachers from various places because they have different techniques of teaching.

[Not to need]

/T.T knows how education is difficult in our county. But J.T. does not aware of this, they make things easy.

/T.T will fail to get employment since there are J.T. But if T.T have got no enough teacher we invite many J.T. to come and teach our students.

(Q6)Have you known something about Japan and Japanese though my working period?

□a lot of[54%]　□something[42%]　□nothing[4%]

Please write something what you have known about this, if you have.

/Sense of responsibility, keeping time, being charming to student if I will be a teacher.

/I have known that keep time and usually sacrifice for the benefit of others.

/They are hard worker and kindly.

/Culture and language and Hiroshima destruction etc.

/To keep the promise and to take care and to follow timetable and to fill full the mission at the time required.

写真２　授業を教えていた生徒たち

（3）英語と母国語の問題

①英語と母国語

タンザニア国における中等教育は概ね英語で行われます。日本で言うと中学校へ入って英語の勉強が始まり、それと同時に他の教科の勉強を英語で行うというものです。特に理数科の教科はそれ自体が難解なものであるにも関わらず、その上、生徒達には英語の負担もかかり、２年生の終わりにある国家試験でも特に数学の不合格者数が際立って多く、問題となっています。このことを教員や行政の担当官と話したのですが、やはり一番の問題は、「スワヒリ語の教材がないこと」、「英語は公用語で国際語である」、というのが決まった答えです。１番目の問題は大学を始め、その気になればそんな難しいことでは無いという事を返答するのですが、なかなかかみ合った議論にはなりません。私がなぜこの議論がかみ合わないかを考えるとき、この国ではまだまだ中等教育は、ある一部の優秀な子供達のためのものであって、等しく機会が与えられ、この国の底辺の底上げを担うという考えかたでは無いのだろうと思います。世界からのサポートもあり、２年ほど前から小学校が無償、全入となりましたが、その子達が数年後中等学校に入学を希望するとき、これらの問題の答えが迫られると思われます。また英語は国際語という意見は、全く異論の無いところです。ただこの国のスワヒリ語は、英語を話すことなく２年間過ごす隊員もいる程、国の隅々まで行渡っています。これについては日本では当たり前のことなのですが、特にアフリカにおいては、もともと部族語

があり、そこに英語、フランス語やポルトガル語等の占領言語が公用語として使われているケースが多くあります。他のスワヒリ語を使うケニア、ウガンダにおいても事情は違い、ケニアは部族間の対立の根が深く、今なお、英語、スワヒリ語、そしてそれぞれの部族語が混在しているとのことです。周りの国々から訪れる隊員達が言語について口を揃えて言うのが、「どこへ行ってもスワヒリ語だね。でも英語は自分の国に比べると通じないね。」　これは偶然ではなく、海岸地域で使われていたスワヒリ語を、国語の教師であった初代大統領ニエレレが国を統一するにあたり、政策としてスワヒリ語化を図った結果だそうです。同じ国の人たちが同じ言葉を喋れる、日本では全く当たり前のことが、すごく意味のあることですし、この国の大きな財産であると言っても過言ではないと考えます。日本においても、言葉の問題「喋れる英語教育」と「しっかりとした日本語の教育」という背反するような問題が取り上げられて久しいですが、何かこの国の問題と重なるところがあるようにも思えます。

②生徒の英語力

さて、英語での教育をある意味勝ち抜いてきた、私が教えていた A-level 校の生徒は、基本的に、英語の能力については問題無いということになっています。生徒からすると英語の流暢さがそのまま教師の教科指導の力量の大きな判断基準になっているのも事実です。それには、さして異論は無いのですが、自分が若干英語について余裕が出てきたころから、実際の生徒の英語力について少々疑問を感じることが出てきました。例えば、授業中彼らからの質問を受け、私自身が質問を聞き取れないことがありました。その時は違う生徒に彼の質問が理解できるかと質問するようにしていました。その答えが NO のことが結構あるのです。そのやり取りに多くの時間を割かれることもありましたが、良いコミュニケーションの場と思って、辛抱強くやっていました。

また練習問題を解法するにあたり、私が常々生徒に「問題を正確に理解して、まずは問題の状況の判断を的確に行うこと」、と言っていました。問題の状況を尋ねるとき、一つであるはずの問題の理解が、幾多も出てきたことに驚きました。解法を行う以前であることは言うまでもありません。下に問題と生徒の状況認識の例を紹介します。この問題は単にボールを投げるという運動的もしくは物理的な難しさは全く無いことを考えると、これは彼らの英語力の不十分さが大きな原因と言えると思います。

[問題　投射運動]

A ball is thrown upward with initial velocity Vo=15m/s at angle of 30° with the horizontal the thrower stands near the top of a long hill which slopes down ward at an angle of 20°.When does the ball strike the slope?

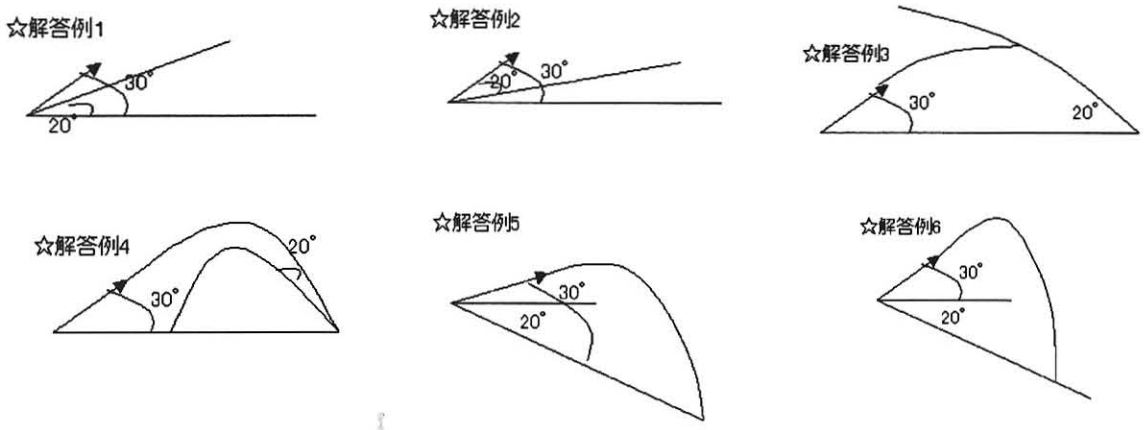


図１　投射問題の状況解答例

（4）他の教師隊員たちとともに

①タンザニア教育研究会での活動

タンザニアでの隊員派遣の実績としては、約 30 年にわたり、1000 人の隊員が派遣されてきました。現在でも約７０人の隊員が広いタンザニア全土に散らばり活動を行っています。近年は、教室型と呼ばれる学校派遣隊員が半数以上を占め、そのなかでも、理数科教員が 30 名を超え、断トツの派遣職種となっています。そんな状況において、主に学校派遣隊員が自主活動として組織しているのが、タンザニア教育研究会です。年 2 回、お互いの経験をもとに、情報交換を行ったり、研修会を開催し,各自のティーチングスキルの向上や、タンザニア人教師やまたアメリカの同職種ボランティアとの意見交換を行っています。私自身は現職の教員として参加ですが、赴任当初は、この国の学校の状態や体制、教科の教授内容、進度、国家試験の情報等、活動を行う上で知りたい情報は山ほどあり、非常にスムーズに各学校での活動を始められることが出来ました。ただ、隊員というのは 2 年間限定で、また年間３隊次の入れ替えがあり、何かを継続していくというのは、非常に労力を費やすことでもあります。

②奨学金事業

タンザニア教育研究会のもう一つの大きな活動として、タンザニアの生徒に対して奨学金の給付を行っています。タンザニアには勉強熱心で、成績優秀であるにもかかわらず、経済的理由により、学業の継続が困難な生徒がたくさんいます。実際に彼らの長期休暇は次学期の学資作りに追われているようで、遅れて学校に戻ってくる生徒に聞くと、学資を作るために、仕事をしていたという答えが返ってきます。学校で働くどの隊員にも、その様な状況にある生徒たちをなんとかサポートしてあげたいとの思いが強くあり、10 年ほど前に、有志が集まり、成績が優秀で、経済的理由により就学の継続が困難な生徒への資金援助を目的とし、この事業を設立しました。以来、合計 150 名を超える生徒の就学の継続をサポートしてきました。

私も、活動中3名の生徒を推薦しました。応募資料の中には、家族構成や収入を記入する欄があるのですが、3 人とも無収入と書いてきました。もちろん全く収入が無い訳ではないのでしょうが、農家で生計を立てている家庭（タンザニアではほとんどが農家）では特に、決まった現金収入が無いのが、生徒との会話からも良く分りました。また将来の夢という作文も書いてもらうのですが、一人は医者になり、地方に地域診療所を作り、出来れば無料で診療活動をしたいと書いてありました。この国の大きな死因のマラリアやエイズの根絶に尽力したいということでした。選考を通して、学校以外での生徒の置かれている現状をより深く理解できたのを記憶しています。

私自身、この事業運営に直接関わりました。決して大きく展開していけるものではありませんが、「自分達の目の前にいるタンザニアの子たちの就学をサポートして行きたい！」、「彼らの可能性という木を枯らすわけにはいかない！」という先輩諸氏の初心を大切にし、受け継がれている活動です。

3 家族を残して

(1) 協力隊は単身が条件

協力隊は単身が条件であり、派遣中の帰国は許可されていません。ただし家族を持つ隊員には、派遣中2週間家族の呼寄せ制度があります。私は妻と3人の子供を日本に残しての参加でしたので、2003年8月に、家族がタンザニアを訪問しました。その時にまた違ったタンザニアが見えました。

(2) 子供には国境の壁はない？

20時間以上、初めての飛行機に乗りやってきた子供達は、さぞかし疲れていることだろうと心配していましたが、全くその必要はなく、着いたその日から、近所の子供達と一緒に遊びまわっていました。もちろん我が子達は日本語で、近所の子達はスワヒリ語で。家族が帰ってからも、近所の子供達は、「とも、まー」と子供達の名前を呼んで、「また来ないのか？」という質問が1ヶ月くらい続きました。

真3　子供たち1

写真4　子供たち2

(3) 脱臼事件

滞在中、とにかく子供達の病気や怪我を心配していましたが、なんとか何事もなく、最終日を向かえ、いつものように近所の子供達と最後まで遊んでいましたが、突然、４歳の一番下の子が、泣いて家のなかに入ってきました。見ると肘を脱臼したようで、どうしようとアタフタしていると、見送りに来てくれた同僚が、いろいろ助言をくれました。助言とはこんなものでした。まずは、落ち着かせなさい。もし、鎮痛剤があれば飲ませよ。それから、落ち着いてきたら、体位を変えて寝かせました。それから、待つこと１０分くらい、子供の方も泣き止んでおり、また座らすと脱臼の方は、元通り入っていました。これを通して、私達はすぐに病院、病院と言ってアタフタしましたが、救急車や病院が十分に整備されていないこの国では、自分達で苦しんでいる子供達になんらかの処置をしなければならなくて、その一番は落ち着かせこと、痛みを和らげてやることであり、逆に言うとそれしか出来ないのがこの国の実情なのだろうと思いました。

写真５　子供たち３

ここに来たときに家族を置いてきたというと、何でそんなことをするのか。自分には信じられない、と幾人からの同僚から言われたことを思い出します。それが私達のルールなんだ、なんて答えても何の解決にもなりませんでした。家族を通してのタンザニアの人達との関わりで、また違ったものを感じられたような気がしました。

帰国の時、「またタンザニアに来るか？」という質問を多く受けましたが、いつも決まって、こう答えていました。「自分は難しいと思うよ。ただ3人の子供のうち1人くらいは戻ってくるかもしれないから、その時はよろしく。」

４　最後に

(1) アフリカでの生活を通して

このアフリカでの体験を通して、よく何が日本と違いましたか？と聞かれますが、違った点よりも同じ点を発見するほうが、多かったように思います。特に私が勤務した学校のシステムなどはたくさん共通点がありました。若干時間的なルーズさやズレはありますが、人の親切さ、親近感は日本が忘れてしまったものなのかなあと思ったりもしました。

写真６　卒業式にてソーラン節披露

また協力隊に自ら志願してアフリカに行った私でさえ、アフリカに対する偏見がありました。初めてアフリカ大陸に降り立ったとき、空気が同じ！と安心した思い出があります。本当に当たり前のことですが、それを自分が実感・体験するまでは、自分のものになっていないということです。「百聞は一見にしかず」という諺がありますが、これだけテレビやインターネットが普及し、映像としてどこの場所でもみることができますが、それはある抽出されたワンカットであり、それからすべてを知ることは出来ないということを強く思います。そういう観点で言えば、これからは、「百見は一実感・一体験にしかず」の方が適当な気がします。

最後になりますが、次の時代を担う生徒達の、「学びたい」、「何かを吸収したい」という純粋で強い気持ちが、タンザニアや他のアフリカの国々の多くの困難な問題を解決し、発展の原動力となることを期待してやみません。

(2) 帰国後の日本の生徒たちへ　「日本は本当にいい国ですか？」

帰国後、日本の生徒への報告会を幾度が行いました。その中で一番理解してもらいたいことは、「タンザニアという国があることとそこでたくましく生きる人たちがいること」と、「日本は本当にいい国なのだろうか？」ということです。私が見た開発途上国タンザニアの現状は映像や数字を交え報告しますが、それに対峙する日本はどうなのかは、生徒自信の体験を通して考えていけることだと思います。その答えを探すために、自分自身で動いてくれるきっかけになってくれればと思っています。最後に現在の勤務校で行った報告会よりある生徒の感想文を紹介したいと思います。

[参考]

日本は幸せですか？と言われて、私は、話を聞くまで、日本が一番幸せだろうと思っていました。アフリカのタンザニアの人達は、きれいな水や満足なご飯、他にもいっぱい私達が普通にしてきていることが出来ません。それを聞いて、やっぱり日本人でよかったと思いました。タンザニアに住む人達は、小学生・中学生・高校と上がるにつれて、学校に行くことの出来る人数が減っていき、しかも、卒業をしてもそれがどんなに頭がいい人でも就職が出来ないと聞いたとき、私は、じゃあどうして学校に行くの？と思ってしまいました。でも、学校に行っている生徒は、授業が終っても夜にまた勉強している映像を観て、自分たちでどうにかして自分の道を切り開こうとしていることに、すごく胸を打たれました。その映像を観終えて、私は最初の質問に、日本で生まれて幸せだけど、でも生まれ変わったとしたら、アフリカのタンザニアでいいかなって思えました。タンザニアの人達は貧しくても、十分食事を取ることができなくても、自分達はそれでも幸せだというあの笑顔が目に焼きついています。ハクナ　マタタ（問題ないよ）（本校2年生女子、2004）

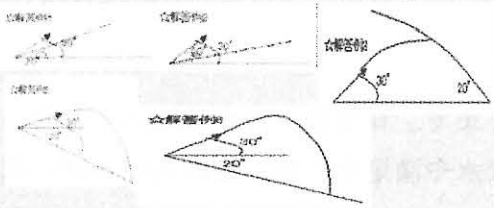
参考文献

・尼崎産業高校人権教育講座　「タンザニアの大地より」の感想文 2004年7月 2年生女子

現地での主な活動

- 高校生に物理を週20時間程度担当
  - 日本の授業は何語を使うの？
  - 究極の予備校授業
  - テキスト・問題集
- 課外活動
  - ラグビー
  - 日本語教室(ソーラン節披露、文通)
- タンザニア教育研究会活動
  - 奨学金事業

- [問題　投射運動]
- A ball is thrown upward with initial velocity Vo=15m/s at angle of 30° with the horizontal the thrower stands near the top of a long hill which slopes down ward at an angle of 20° .When does the ball strike the slope.



Past Examination 2002. Paper2

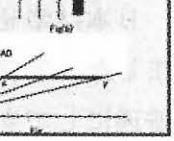
(d) (iii) A radar speed trap is placed 15m from the side of a road, its beam making an angle of 15° with the road. If the transmitting aerial has a horizontal width of 20cm and the wavelength used is 3cm, over what distance along the road can vehicles be detected?

Single-slit diffraction　$d\sin\theta = \lambda$ →

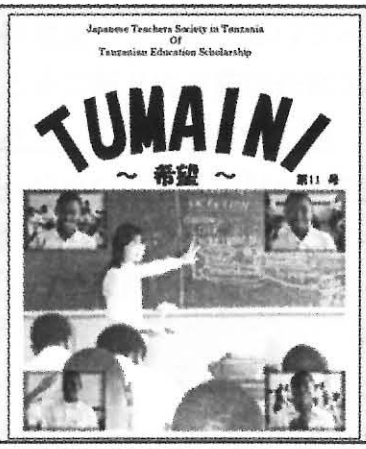
(Answer)diffraction angle

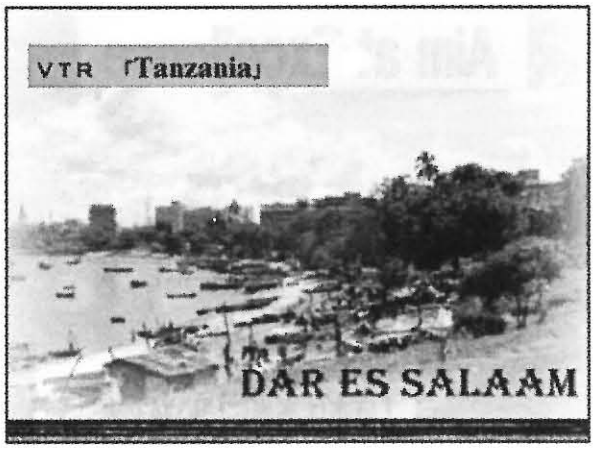
$\theta = \sin^{-1}(\lambda/d) = \sin^{-1}(0.03/0.2) = 8.63°$

- ox=15/tan(15+8.63)=34.3m ,
- oy=15/tan(15-8.64)=134.4m
- xy=oy-ox=134.4-34.3=100m

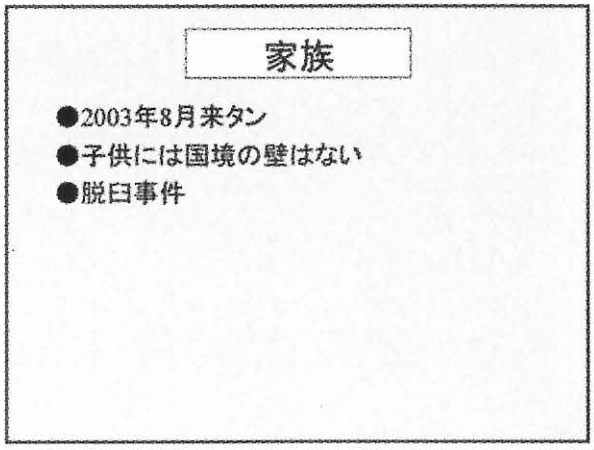


テキスト・問題集作成




VTR 「Tanzania」
DAR ES SALAAM

家族
2003年8月
2週間
来タン


家族
●2003年8月来タン
●子供には国境の壁はない
●脱臼事件

協力隊 らしさ？

出世魚？

隊員候補生 ⇒ 派遣隊員 ⇒

新隊員 ⇒ 先輩隊員 ⇒

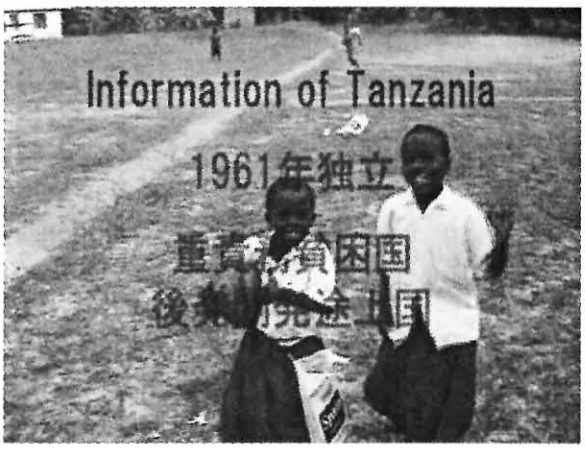
帰国隊員 ⇒ 隊員OB/OG ⇒ ？？？

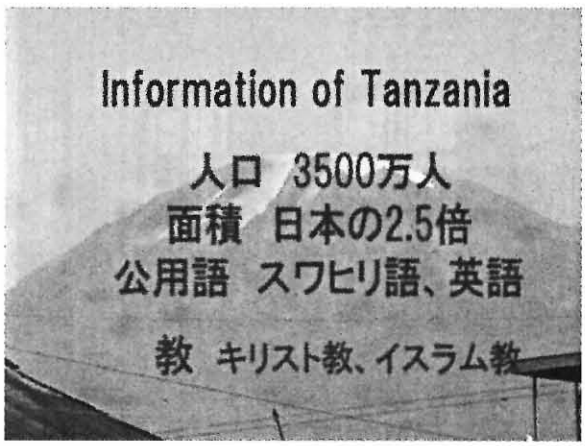
最後に

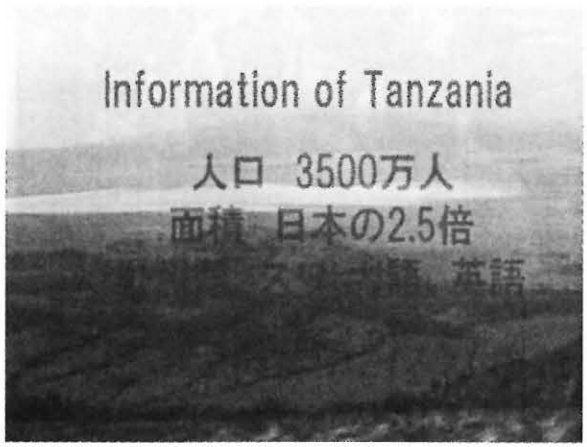
- 日本とどこが違いますか？
- 絶対はない。
- 「一見は百聞にしかず」より
  「一感・一体験は百見にしかず」
- ぜひアフリカに行ってみてください。
  (Karibu Tanzania na Africa)

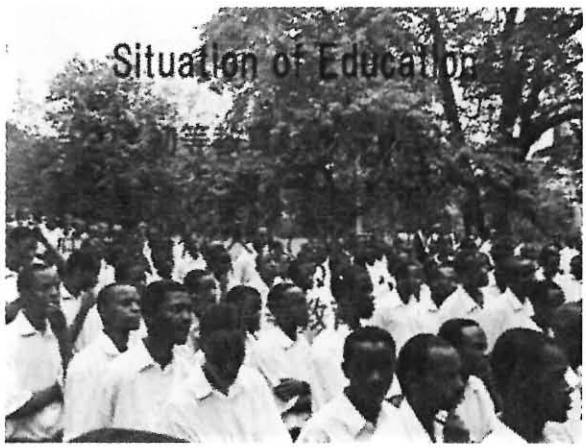
Asante Sana

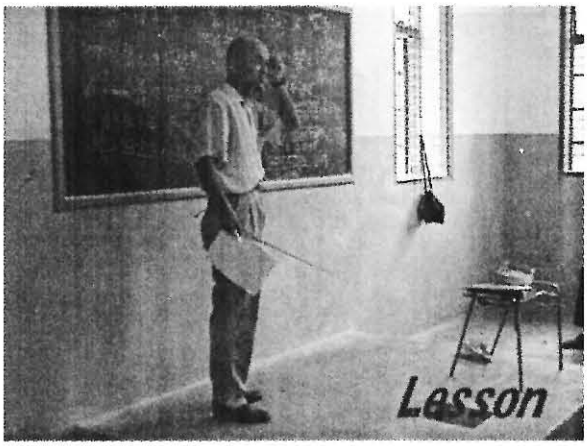
Masaaki TA
2002 - Mar /2004

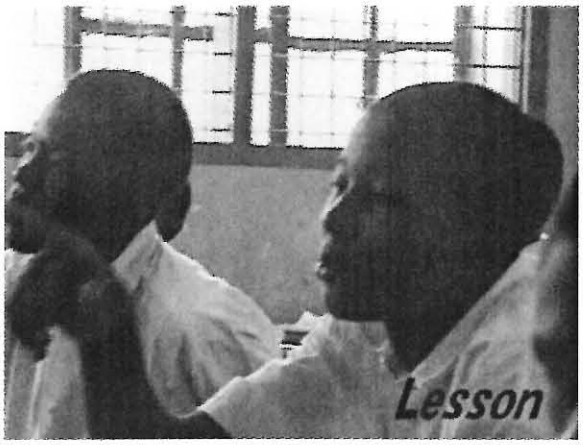

Information of Tanzania
1961年独立

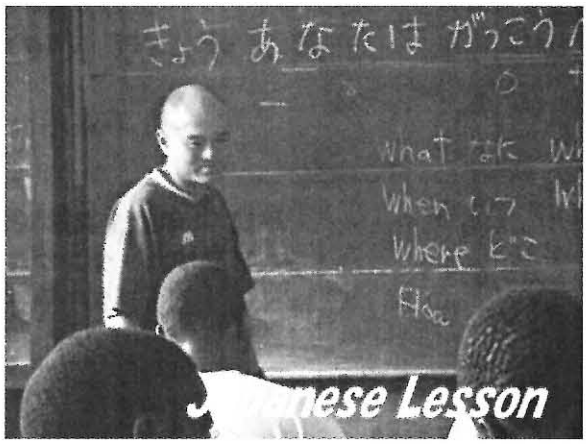

Information of Tanzania
人口 3500万人
面積 日本の2.5倍
公用語 スワヒリ語、英語
教 キリスト教、イスラム教


Information of Tanzania
人口 3500万人
面積 日本の2.5倍


Situation of Education


Lesson


Lesson



※発表ではDV(デジタルビデオ)も用いられました。この3ページ分の資料は，DV画面をもとにスライド風に編集しなおしたものです。

Jan./7th/2006

尼崎市立尼崎産業高等学校
電気科　　谷　昌亮

タンザニアでの教員経験を通して

～青年海外協力隊の活動より～

平成14年度1次隊（H14年7月　～H16年3月）
アフリカ・タンザニア国　ダルエスサラーム
プグ中等学校　理数科教師

□現地での主な活動

●日本の高校程度の生徒に週２０時間、物理を教授⇒ＶＴＲ
　このレベルでは3教科選択のコース制を行う
　（クラス例　ＰＣＢ・ＰＣＭ・ＥＧＭ・ＨＧＬ・ＨＫＦ等）
　国家試験は記述式の問題が多い。試験科目に実験あり
　大学教養レベル（流体力学・物性学等）の内容あり

　？日本の授業は何語を使うの？
　私と彼らの英語の問題　⇒　**資料Ｐ３（生徒の感想は）・資料Ｐ４（生徒の英語力）**
　タンザニア教師と日本人教師、日本人教師は必要？　⇒　**資料Ｐ３（生徒の感想は）**
　テキスト・問題集作成　⇒　**資料Ｐ３（生徒の感想は）**

●担任
　現地語で通知簿の記入と送付

●放課後の活動　⇒　ＶＴＲ
　ラグビー
　日本語教室（ソーラン節披露、文通）

●タンザニア教育研究会活動
　奨学金事業（8年間で150名以上の生徒に給付）⇒　**資料Ｐ５～６**
　他の国のボランティアやタンザニア教師との研修会の実施
　（模擬授業に対する評価と討論、生徒への授業アンケート等）

□家族を残して

●2003年8月に来タン
●子供には国境の壁はない
●脱臼事件　⇒　**資料Ｐ７（家族来タン！）**

□ＪＯＣＶの可能性と限界が、らしさ？

●出世魚？

隊員候補生⇒派遣隊員⇒新隊員⇒先輩隊員⇒帰国隊員⇒隊員ＯＢ・ＯＧ

●登山のような・・

ＪＯＣＶの難しさについて　　2003年11月13日現地にて

登山の景色のように、今から登ろうとする人と、今まさに登頂しようとする人では、見える景色も全く違うし、抱えている問題も全く違う。ただ、だいたいにして、見える景色も、抱える問題も同じようなものである。すなわち、それぞれが、継続的に後進の隊員に何か残していけば、自然と後進の登山の道のりも、到達点も違ったものになるはずである。

□最後に

●Aim at Excellence

⇒　資料Ｐ７　（最後に）

●生徒に対する報告会では

日本の生徒たちに　「日本は本当にいい国ですか」

本校人権教育講座　「タンザニアの大地より」の感想文より

～2年生女子～

日本は幸せですか？と言われて、私は、話を聞くまで、日本が一番幸せだろうと思っていました。アフリカのタンザニアの人達は、きれいな水や満足なご飯、他にもいっぱい私達が普通にしてきていることが出来ません。それを聞いて、やっぱり日本人でよかったと思いました。タンザニアに住む人達は、小学生・中学生・高校と上がるにつれて、学校に行くことの出来る人数が減っていき、しかも、卒業をしてもそれがどんなに頭がいい人でも就職が出来ないと聞いたとき、私は、じゃあどうして学校に行くの？と思ってしまいました。でも、学校に行っている生徒は、授業が終っても夜にまた勉強している映像を観て、自分たちでどうにかして自分の道を切り開こうとしていることに、すごく胸を打たれました。その映像を観終えて、私は最初の質問に、日本で生まれて幸せだけど、でも生まれ変わったとしたら、アフリカのタンザニアでいいかなって思えました。タンザニアの人達は貧しくても、十分食事を取ることができなくても、自分達はそれでも幸せだというあの笑顔が目に焼きついています。ハクナ　マタタ（問題ないよ）

●まとめは

①日本とどこが違いますか？

②絶対はない。

③「一見は百聞にしかず」より「一感・一体験は百見にしかず」

④ぜひアフリカに行ってみてください。　Karibu Tanzania na Africa

(生徒の感想は)

最後の授業の時に行った生徒へのアンケートの集計結果を紹介します。以前にも私の英語の能力についての報告は行いましたが、今回は主に日本人教師は生徒達にどう映っていたかをアンケートしてみました。特にコメントは付けませんが、前述したテキストに対する評価が完璧に近いのは非常に嬉しい限りです。

(Q1)Could you understand my English speaking?

☐all understanding [50%] ☐almost[34%] ☐sometimes[16%] ☐seldom[0] ☐never[0]

(Q2)Do you think any difference between my lesson and Tanzanian teacher's one?

☐Yes[51%] ☐sometimes[34%] ☐No[15%]

If you answer "yes", please write any different point.

(Note: T.T. means Tanzanian Teacher and J.T. means Japanese Teacher)

/Your explanation bases on how to apply physics in the for example technology but Tanzanian teachers teaches how to answer questions of NECTA and tricks to pass physics and not how is it able to the normal life.

/Language and you make things more summary.

/J.T. are more advanced on teaching especially on how to make the student to understand more.

/Your lesson you use more practical examples and you want the student to set ideas how to answer the questions.

/T.T. because they are Tanzanian. They have enough experience about Tanzania teaching example, they know much to concentrated during teaching but you, you are just directed by syllabus and your experience is not the same as them but you tried a level best.

/You have the spirit of being a teacher like some few T.T.

(Q3)Did my text book help your study?

☐Yes[98%] ☐sometimes[2%] ☐never[0%]

(Q4)Did Calculations help your study?

☐Yes[98%] ☐sometimes[2%] ☐never[0%]

(Q5)If there are enough teachers in Tanzania, what do you think about Japanese teacher?

☐Need[83%] ☐Not to need[17%]

Please write your comment about this question, if you have.

[Need] /We learn their attitudes, ideas and life experiences which are important to us.

/This is to bring relationship to Tanzanian and Japanese and also help to learn more things concern Japanese.

/Giving us a different ideal from Japanese and it is important for developing man.

/Presence of J.T has greater influence since we share ideas and ideology, this is more important in improving students ability.

/We need J.T. but not many. The T.T. would satisfy our aims. We need some teachers from Japan because it is better to change the teachers from various places because they have different techniques of teaching.

[Not to need]

/T.T knows how education is difficult in our county. But J.T. does not aware of this, they make things easy.

/T.T will fail to get employment since there are J.T. But if T.T have got no enough teacher we invite many J.T. to come and teach our students.

(Q6)Have you known something about Japan and Japanese though my working period?

☐a lot of[54%] ☐something[42%] ☐nothing[4%]

Please write something what you have known about this, if you have.

/Sense of responsibility, keeping time, being charming to student if I will be a teacher.

/I have known that keep time and usually sacrifice for the benefit of others.

/They are hard worker and kindly.

/Culture and language and Hiroshima destruction etc.

/To keep the promise and to take care and to follow timetable and to fill full the mission at the time required.

(英語と母国語)

以前にも書きましたが、タンザニア国における中等教育は概ね英語で行われることになっています。日本で言うと中学校へ入って英語の勉強が始まり、それと同時に他の教科の勉強を英語で行うというものです。特に理数科の教科はそれ自体が難解なものであるにも関わらず、その上、生徒達には英語の負担もかかり、2年生の終わりにある国家試験でも特に数学の不合格者数が際立って多く、問題となっています。このことを教員や行政の担当官と話したのですが、やはり一番の問題は、「スワヒリ語の教材がないこと」、「英語は公用語で国際語である」、というのが決まった答えです。1番目の問題は大学を始め、その気になればそんな難しいことでは無いという事を返答するのですが、なかなかかみ合った議論にはなりません。私がなぜこの議論がかみ合わないかを考えるとき、この国ではまだまだ中等教育はある一部の優秀な子供達のためのものであって、等しく機会が与えられ、この国の底辺の底上げを担うという考えかたでは無いのだろうと思います。世界からのサポートもあり、2年ほど前から小学校が無償、全入となりましたが、その子達が数年後中等学校に入学を希望するとき、これらの問題の答えが迫られると思われます。また英語は国際語という意見は、全く異論の無いところです。ただこの国のスワヒリ語は、英語を話すことなく2年間過ごす隊員もいる程、国の隅々まで行渡っています。これについては日本では当たり前のことなのですが、特にアフリカにおいては、もともと部族語があり、そこに英語、フランス語やポルトガル語等の占領言語が公用語として使われているケースが多くあります。他のスワヒリ語を使うケニア、ウガンダにおいても事情は違い、ケニアは部族間の対立の根が深く、今なお、英語、スワヒリ語、そしてそれぞれの部族語が混在しているとのことです。周りの国々から訪れる隊員達が言語について口を揃えて言うのが、「どこへ行ってもスワヒリ語だね。でも英語は自分の国に比べると通じないね。」　これは偶然ではなく、海岸地域で使われていたスワヒリ語を初代大統領ニエレレが国を統一するにあたり、政策としてタンザニアのスワヒリ語化を図った結果だそうです。私には、これはこの国の大きな財産であるように思います。同じ国の人たちが同じ言葉を喋れる。日本では全く当たり前のことが、すごく意味のあることだということを感じさせられます。日本においても、言葉の問題「喋れる英語教育」と「しっかりとした日本語の教育」という背反するような問題が取り上げられて久しいですが、何かこの国の問題と重なるところがあるようにも思えます。また日本に帰ってからゆっくり考えてみたいと思っています。

(生徒の英語力)

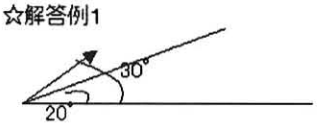
さて、英語での教育をある意味勝ち抜いてきた、私が教えているアドバンスレベルの生徒においては、基本的に、英語の能力については問題無いということになっています。逆に、過去にレポートした通り、生徒からすると英語の流暢さがそのまま教師の教科指導の力量の大きな判断基準になっているのも事実です。それには、さして異論は無いのですが、自分が若干英語について余裕が出てきたのか、実際の生徒の英語力について最近少々疑問を感じることが出てきました。例えば、授業中彼らからの質問を受け、私自身が質問を聞き取れないことがあります。その時は違う生徒に彼の質問が理解できるかと質問するようにしています。その答えがNOのことが結構あるのです。そのやり取りに多くの時間を割かれることもありますが、良いコミュニケーションの場と思って、辛抱強くやっています。

また練習問題を解法するにあたり、私が常々生徒に「問題を正確に理解して、まずは問題の状況の判断を的確に行うこと」、と言っています。これを徹底さすために、実際の解法より状況の理解に多くの時間を割く場合もあります。その問題の状況を尋ねるとき、一つであるはずの問題の理解が、幾多も出てきたことに驚きました。解法を行う以前であることは言うまでもありません。下に問題と生徒の状況認識の例を紹介します。この問題は単にボールを投げるという運動的もしくは物理的な難しさは全く無いことを考えると、これは彼らの英語力の不十分さが大きな原因と言えると思います。

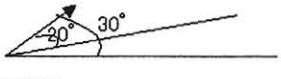
[問題　投射運動]

A ball is thrown upward with initial velocity Vo=15m/s at angle of 30° with the horizontal the thrower stands near the top of a long hill which slopes down ward at an angle of 20° . When does the ball strike the slope?

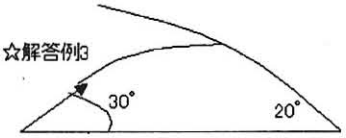
☆解答例1



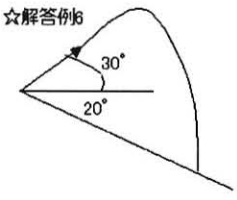
☆解答例2



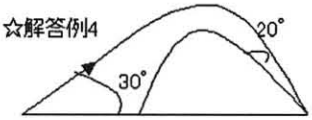
☆解答例3



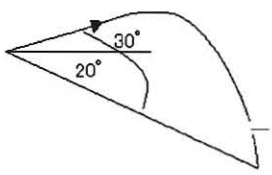
☆解答例6



☆解答例4



☆解答例5



(唯一の成果？)

タンザニアにおけるアドバンスレベルには教科書というものはありません。シラバス（日本の指導要領）に記載されている参考テキスト等を参考にしながら、学習を進めていくというのが生徒の標準的なやり方です。勿論テキストを購入できる生徒にとっては、そのようにできますし、家庭教師を雇える生徒達はそれを解説してくれる人までいる訳ですから、それでも問題はないと思います。しかし、私が教えるクラスでは、約８割の生徒はテキストと呼べるものを持っていません。またテキストを持っていて、それを参考に学習を進めている生徒でも、勿論その参考書はシラバス通りの順番には並んでいませんし、すべてを網羅している訳でもありませんので、個人的に学習するには非常に困難を要します。私自身、自分のレッスンノートを作成するに当たり、５冊の参考書を購入し、一番分り易いものはどれかを調べながら、シラバスに沿って作成して行きました。ある程度内容を理解している私ですら、骨の折れる作業なのですから、全く内容を理解していない生徒にとって、それを自ら行うことは困難を極めることとなります。テキスト作りを進めた大きな理由は上記したことですが、もう一つは、私が赴任したときのように、先生が全く居ないとき、自習用として使って貰えたらと思いました。もちろんレッスンノートの延長線的な位置づけですが、生徒達の学習をサポートするだろうという以下の工夫をしました。６部しか印刷できませんでしたが、先日学校の方へ引き渡し、教科主任からは感謝して頂けたので、唯一の成果になったかなあと思ったりもしています。

以下にこのテキストの作成にあたり工夫した点を挙げます。

（１）シラバスをより意識しながらできるように、
　　各トピックの始めにシラバスの目標を記載した。
（２）項目毎に出来るだけ Exercise を解答付きで記載した。
（３）トピック毎に 10 問程度の練習問題を記載した。
（４）トピック毎に国家試験の問題を示し、解答例を記載した。
（５）トピック毎に過去６年間の国家試験を分類し、
　　全部を記載した。
（６）すべての練習問題、国家試験に詳細な解答を記載した。

奨学金事業　機関誌　「ＴＵＭＡＩＮＩ～希望～」第 11 号より

2003年度(上半期)奨学生紹介

今回、10校から選出された24名の奨学生を紹介いたします。本年７月より奨学金を受けるメンバーです。

Mr. Mussa Ryoba (Musoma technical Secondary School)
推薦者：佐藤　由理隊員(13-1)
Male　19才　将来の夢：エンジニア

推薦者から	彼の家族は農業で生計をたてており、父母姉が主な働き手です。家族の総収入は、年間 55,000Tsh です。この収入では彼を含めた４人の子供を学校に行かせることは難しく、２人の叔父が、それぞれの家族を持ちながらも、学費の援助をしています。とはいえ全学費をカバーできるわけではないので学校の休み期間に、彼はいろいろな仕事をしながら学費の足しにしています。授業態度、生活態度、成績ともに、とても好感がもてる生徒で、学費の心配なしに Form6 の勉強に集中させてあげたいです。
選考方法	(1)朝礼で全校生徒にアナウンス（Division Ⅱ以上、クラス担任の推薦が必要と強調）→(2)集まった生徒に願書を配布、数度の下書きののち受理→(3)成績証明の記入とクラス担任の推薦の確認（成績の確認）→(4)教頭、アカデミックミストレス、生活指導主任、クラス担任を交えて面接→(5)校長の承認

Mr. Edward Kimaro (Minaki Secondary School)
推薦者：中和　悠隊員(14-2)
Male　22才　将来の夢　：法律家

推薦者から	1992年に母親を病気で亡くし、父親が物心付く以前より現在にに至るまで失踪中で、彼自身も尚、自分の父親が誰であるのかを知りません。実質孤児であり、年間収入も無く、本人Form3在学中、学費が支払えず勉強を中断しかけた経験もあります。Form5の学費については一部を休暇中に自ら稼ぎ、残りは地元の人々の寄付によって支払ってきたようですが、来期Form6からはスポンサーが居なくなり、支払いが非常に困難になります。しかしこの状況下、当生徒は非常に優秀な成績を収めており、更には、全校のAcademic Prefect、コンピュータクラブのChairmanまで務め、生徒達からの人望も非常に厚い人間であります。しかし本人は現状に満足しておらず更なる成績向上を望んでいて、この向上心は経済面と共に大きな推薦理由の一つです。将来は、自分のように経済的理由で学業に支障をきたしている生徒達に奨学金を支給してあげたいという意思を持っており、現在の彼の苦しみを理解することができます。上記の理由から当生徒を奨学生として推薦します。
選考方法	前記Alex Simon君と同じ

Mr. Maclean Mwamlangala (Minaki Secondary School)
推薦者：中和　悠隊員(14-2)
Male　21才　将来の夢　：教師

推薦者から	1999年に父親を、昨年2002年に母親を病気で亡くし、現在の家族構成は２人の妹との３人家族、孤児であります。更に、現在本人は入寮しているため、実家に幼い妹２人を残して来ている状況で、現在２人は近所の支えで何とか生活していますが、今後は本人が家計を支えていくことになります。当然家族の収入は無く、これまで本人は自分の学費を稼ぐためにTerm休みの度にメイズを売り歩いていました。このようなことから学費確保の為、休み明けに学校に戻るのが遅れることもしばしばあり、勉学に大きな支障をきたしています。更には、不幸にも今期のTerm休みには雨が降らなかった為、メイズを売ることが出来ず来期の学費獲得が非常に困難な状況であるのです。現在の学業成績は優れているとは言えませんが、この原因として、両親の死、そして深刻な経済状況にあるのは間違えありません。卒業後は経済を学び、国を立て直すべく教員を志しており、将来設計も明確です。上記の理由から当生徒を奨学生として推薦します。
選考方法	前記Alex Simon君と同じ

'Pole Pole,' from TANZANIA　No.4　29th/July/2003 より

＜奨学金事業＞

タン教研のもう一つの大きな活動として、タンザニアの生徒に対して奨学金の給付を行っています。タンザニアには勉強熱心で、成績優秀であるにもかかわらず、経済的理由により、学業の継続が困難な生徒がたくさんいます。実際に彼らの長期休暇は次学期の学資作りに追われているようで、遅れて学校に戻ってくる生徒に聞くと、学資を作るために、仕事をしていたという答えが返ってきます。学校で働くどの隊員にも、その様な状況にある生徒たちをなんとかサポートしてあげたいとの思いが強くあり、今から８年前に、有志が集まり、成績が優秀で、経済的理由により就学の継続が困難な生徒への資金援助を目的とし、この事業を設立しました。以来、８年間で合計150名を超える生徒の就学の継続をサポートしてきました。

今年度、私もこの事業のお世話をさせて頂いてますが、実際の事業継続には大変な労力が必要となります。まず何より資金面においては、隊員だけでは到底カバーできず、タンザニア在住の日本人の方々も主旨に賛同していただき、毎年ご協力をいただいています。また、帰国された隊員の方々が日本でも紹介して頂き、幾分かのサポートをして頂いています。決して大きく展開していけるものではありませんが、「自分達の目の前にいるタンザニアの子たちの就学をサポートして行きたい！」。「彼らの可能性という木を枯らすわけにはいかない！」という先輩諸氏の初心を大切にし、隊員活動の一つとしてしっかり継続して行きたいと思っています。

'Pole Pole.' from TANZANIA No.5 31/Oct./2003 より

(家族来タン！)

最後に個人的な報告で恐縮ですが、この８月に、妻と子供３人がタンザニアを訪問したときのことを少し書きたいと思います。

まず、２０時間以上、初めての飛行機に乗りやってきた子供達は、さぞかし疲れていることだろうと心配していましたが、全くその必要はなく、着いたその日から、近所の子供達と一緒に遊びまわっていました。もちろん我が子達は日本語で、近所の子達はスワヒリ語で。家族が帰ってからも、近所の子供達は、「とも、まー」と子供達の名前を呼んで、「また来ないのか？」という質問が１ヶ月くらい続きました。

滞在中、とにかく子供達の病気や怪我を心配していましたが、なんとか何事もなく、最終日を向かえ、いつものように近所の子供達と最後まで遊んでいましたが、突然、４歳の一番下の子が、泣いて家のなかに入ってきました。見ると肘を脱臼したようで、どうしようとアタフタしていると、見送りに来てくれた同僚が、いろいろ助言をくれました。助言とはこんなものでした。まずは、落ち着かせなさい。もし、鎮痛剤があれば飲ませよ。それから、落ち着いてきたら、体位を変えて寝かせました。それから、待つこと１０分くらい、子供の方も泣き止んでおり、また座らすと脱臼の方は、元通り入っていました。これを通して、私達はすぐに病院、病院と言ってアタフタしましたが、救急車や病院が十分に整備されていないこの国では、自分達で苦しんでる子供達になんらかの処置をしなければならなくて、その一番は落ち着かせこと、痛みを和らげてやることであり、逆に言うとそれしか出来ないのがこの国の実情なのだろうと思いました。

ここに来たときに家族を置いてきたというと、何でそんなことをするのか。自分には信じられない、と幾人からの同僚から言われたことを思い出します。それが私達のルールなんだ、なんて答えても何の解決にもなりませんでした。しかし、今回家族を通してのタンザニアの人達との関わりで、また違ったものを感じられたような気がします。まあ何より私達、家族にとっては日本では味わえない中身の濃い、２週間になったことは言うまでもないところです。

'Pole Pole&Asante sana' from TANZANIA No. 7 13/March/2004 より
＝スワヒリ語でポチポチとどうもありがとうの意味です。

(最後に)

最後にここの学校Ｔシャツの背面に書かれている言葉 [aim at excellence]について、以下のように生徒に問いかけて結びとしました。

「Go on aiming at excellence through your life and sometimes consider what that's meaning: "excellence". Off course, I will try to do so.」

その後、校長が私のこの挨拶を受けて、生徒達に、勉強にしても、生活にしても、すべて近道は無い。一つ一つの積み上げであり、それが成果となるのである。と付け加えてくれた事に、気持ちを共有できた喜びと深い感動を覚えました。

この２年弱の活動を通して、どこに住もうが、なに人であろうが、肌の色がどうであれ、生活の仕方が異なっても、「基本的に人はみんな同じなんだ」という当たり前のことを、終始感じていました。この活動を通して、就任の日に生徒に紹介した、「ONE FOR ALL , ALL FOR ONE」の言葉の意味に大きな広がりと可能性を感じ、今後世界がそうなっていく事を願ってやみません。ありがとうございました。

アサンテ・サーナ。

Reported by Masaaki TANI (E-mail:m6957tani@hotmail.com)

real Zambia

～１年９ヶ月のザンビアでの生活を通して～

宮村　香

（15-1，ザンビア，小学校教諭，三重県桑名市立深谷小学校）

（１）活動計画の達成度、全期間の協力効果

私は Prince Takamado Basic School（以下、タカマド）に小学校教諭として配属された。教える科目は体育。体育は専門ではないが好きな科目なので、ザンビアの子ども達に教えるのをとても楽しみにザンビアに来た。

赴任した時、すでに体育の授業は時間割にしっかりと組み込まれていた。Grade1～4（16クラス）をカウンターパートである Mr. Chitonena が教え、Grade5～7（9 クラス）を私が教えた。Grade8 は体育の授業がなく、校長にお願いして時間割の中に組み込んでもらった。Grade9 も体育の授業がなかったが、私が赴任した Term-3 は最終学期であり、Grade9 は最終学年として試験に合格しなければならないため、試験科目でない体育の授業を時間割に組み込むのは無理だと言われ、Grade5～8 の 12 クラスだけを担当した。

それぞれのクラスへは体育の授業がある前日に連絡をし、当日は授業の前に教室へ行って子ども達を着替えさせ、グラウンドへ移動させる。クラス担任は体育の授業の間、スタッフルームで休憩。Mr. Chitonena は酒臭いことが多く、「校長から頼まれているタイピングがあるから。」と体育の授業をほとんどしなかった。授業の度に声をかけ、教えるように促したが彼にやる気がないのでどうしようもない。子ども達の体育の授業がなくなるのは可愛そうだと思い、私が代わりに教えたこともあったが、現地語であるニャンジャ語が理解できないと授業するのは難しい。「このままでは自分が帰ったら体育の授業はなくなるだけだ。」と思い、クラス担任が体育の授業を教えていけるようにしようと思いたった。

まずクラス担任が教えやすいように体育の授業をパターン化した。ランニング、準備体操、メインアクティビティ、整理体操という流れで毎回授業を行った。準備体操と整理体操に関してはイラストの得意な調整員にお手伝い頂き、イラスト入りの説明書を作った。しかし、それでもタカマドの先生達は体育の授業をやらない。「香のコマだから自分達は教えない。」と言うのである。タカマドは日本の無償資金協力で建てられた学校である。建てられただけで今は他の公立学校と何ら変わりはないのだが、ザンビア人から“JICA スクール”と呼ばれていることからも分かるように特別視されているところがある。「無償資金協力で建てられた学校の中でも“Prince Takamado”という特別な名前がついているから。」ということもあるらしい。この特別意識をタカマドの校長や先生達はしっかり認識しており、「JICA に支援してもらって当然。」と勘違いしてしまっている。私が授業をするのは当たり前、ボランティアが

学校にいるのは当たり前、研修会の準備資金、何か買いたい物がある時は真っ先に JICA の名前が出る。

体育教育をザンビアで普及させていくためには、いつまでも自分達で頑張ろうとしないタカマドだけにこだわっていてはいけないと思った。タカマドを模範校として他校にも普及させていきたかったのだがそれは困難であった。そこで他の学校への巡回指導を開始した。

タカマドの周辺校を回り、タカマドと 100m も離れていない Bauleni Basic School（以下、バウレニ）と私の家から一番近い Kabulonga Basic School（以下、カブロンガ）、そしてタカマドの 3 校で教え始めた。この 2 校を選んだのは場所的なことだけではない。校長が巡回指導に対して理解を示し、体育教育に対して意欲的に取り組んでいこうとする姿勢をみせてくれたからである。バウレニもカブロンガも Grade 5〜7 だけをまず対象とした。バウレニ 15 クラス、カブロンガ 9 クラス、タカマドだけは Grade8,9 も含めた 16 クラスである。週 40 コマの授業を巡回しながら行うのは大変だったが、バウレニとカブロンガの先生は私を歓迎し、クラス担任主体の授業にも積極的に取り組んでいた。自分の意図していることを理解してもらえているのが目に見えて分かり、とても嬉しかった。しかし週 40 コマ、しかも 3 つの学校を巡回しながら授業を行うのは自分の体力的に無理があった。さらに他の Grade の先生達から「私のクラスにも来て欲しい。」という嬉しい悲鳴の声も聞こえる。どのようにしていけば体育教育を普及していけるのか悩んだ。

こう書いていると休みなく頑張り続けているように聞こえるかもしれないが、実際は体力的なことのほかにタカマドの校長ややる気のないクラス担任の先生達との人間関係にかなり悩まされ、学校に行けない時期もあった。何とかしなければ…ともがき、体育教育の普及どころか自分の授業もまともにできていない自分が不甲斐なかった。情けなかった。

そこへ同じルサカ市内の Secondary School で体育を教えている隊員（15 年度 2 次隊）から、Curriculum Development Centre（以下、CDC）の P. E. Specialist, Ms. Abigail と会うから一緒に会ってみないか、と誘われた。会ってみて驚いた。私が今まで考えていたようなことをザンビア人の彼女が真剣に語ってくれたのだ。私達は彼女に「体育教育普及のためのワークショップをやらないか。」と持ちかけ、そこからワークショップを開催するための準備を始めた。このことをタカマドの校長に話したがやはり理解してもらえず、「このタカマドでのあなたの仕事はどうなっているんだ。」と責められ、CDC から公式文書を書いてもらい、やっとワークショップの開催に向けて準備することを許可してもらえた。

自分の活動も残り 3 ヶ月となった 2005 年 1 月。首都ルサカ市内の約半数の学校を対象として体育教育普及のためのワークショップが行われた。私が巡回している学校を含む Chilenge Zone, Central Zone の他、隊員が関わっていたり、今後、巡回指導したりしていきやすい 4 つのゾーンを選んだ。ルサカ市内にある学校の半数の約 50 校である。このワークショップは私達 JOCV が主催したものではなく、CDC が主となって開催したことで、教育省、スポーツ省、UNZA の lecturer である Sports Specialist, Mr. Kakuwa や Edu Sports などからも来てもらい講義してもらうことができた。私達 JOCV も講義者として参加した。それぞれの学校

からは校長と2人の先生が参加した。

ワークショップは大成功だった。しかしここで終わってしまっては意味がない。それぞれの学校（特に Basic School）で全てのクラス担任を対象とした同様のワークショップを開催し、どの学校でも、どのクラスでも、どの先生も体育の授業を行うようにしていかなければならない。私が巡回していた学校を含め、5校からはすぐ連絡があり、ワークショップに参加した先生達が中心となってそれぞれの学校でしっかりワークショップを行った。このワークショップを始めてからの私の活動は、これらのワークショップに講義者として参加すること、そして今まで通りタカマドでの授業（Grade5～7、9クラス）とバウレニでの授業（Grade1～9、37クラス）をすることであった。バウレニの校長は、「香が帰る前に全ての先生に体育の授業を教えて欲しい。」という意向を示したので、1コマに2クラスを入れた時間割を組んだ。体がいくつあっても足りないと感じたが、多くの先生に出会えたことで「今後、自分がいなくなっても体育の授業は続いていく。」と希望を持つことができた。もちろん個人差はあり、全く教えていない先生もいる。

タカマドにいたってはワークショップさえ開催していない。何度か校長やカウンターパートに声をかけて促したが、校長曰く「お金がない。」からできないのだそうだ。「香がやりたいなら JICA にお金を出してもらったらどうだ。」どうして自分達の技術向上のため、子ども達のためを考えて行動することができないのか。やりきれない気持ちを抑えつつ、子ども達のため、その子ども達が将来、体育教育を担っていくかもしれないという希望を持ってタカマドでは私が一人で教え続けた。クラス担任の先生達に思いが伝わらなかったのは本当に残念でならない。

Basic School はつまり小学校である。クラス担任が全ての科目を教え、子ども達と1日中一緒にいる。Secondary School はそれぞれの科目の先生がそれぞれの時間に教えるのが当たり前となっているが、Basic School においてはクラス担任が体育の授業をやっていこうとしないと普及していかない。クラス担任の先生の協力、そして学校長の理解が不可欠となってくる。それだけではなく、Basic School における教師としての意識もこのことには関係してくると思う。Basic School の先生は Secondary School より給料が低い。Basic School の教師となってから大学に通い、単位を取って Secondary School の先生へと変わっていく人も多い。このような背景から、Basic School の先生達は自分が Basic School の先生だ、ということに対して誇りを持っていない人が多いそうだ。日本の場合、小学校教諭と中学、高等学校教諭は同じ教諭でも別の職種としてそれぞれがプライドを持って仕事をしている。初等教育も重要な教育である。その重要性はザンビアに派遣されている理数科教師隊員も常々言っている。教師になる際のこのザンビアの現状が変わらない限り、Basic School の先生達の教師としての士気を高めていくのは難しいだろう。

前任の方はタカマド1校で体育の授業、クラブ活動を行い、他の学校とのスポーツ大会も企画した。タカマドをベースとして様々な活動を展開していったのである。私はタカマドだけにこだわらずに活動したこともあり、クラブ活動に関しては一切関与しなかった。体育教

育に関しては素人であったが、現在ない科目を学校に普及させようとしているのだから、徹底して体育教育だけに関わったことは良かったと思っている。タカマドの校長の意に沿うことはできなかったのかもしれないが、長い目で見てザンビアの体育教育の小さな、そして大きな一歩を踏み出すきっかけを作ることができたと自負している。

（2）後任隊員への要望

タカマドに後任を呼ぶ、という形は取らなかった。巡回指導、そして CDC と協力して開催している体育普及ワークショップ（年 6 回開催する予定である。）をフォローしていくこともあり、郡の教育事務所に体育教育、そして巡回指導に理解のある学校を推薦してもらった。その結果、後任は私も巡回指導で行っていたことのある Kabulonga Basic School となった。この学校も日本の無償資金で建てられた学校だが、校長は JOCV の活動にとても理解がある人だ。私が巡回指導で来ていた時から整備するように声をかけていた学校裏の空き地も草が刈られ、とりあえず体育の授業ができるようになっている。さらに 3 年ほど前、日本人会から寄付という形で日本の無償資金で建てられた学校全てにスポーツ用品が配布されたことを確認し、それらの用品を他の学校とも共有して使うよう提案したところ、公式文書を出して他の学校に呼びかけてみる、と言ってくれた。これらのスポーツ用品は大事に保管されているだけであまり使われていないのが現状だ。同じことをタカマドの校長に提案した時は即、却下されたことを考えると、JOCV が活動していきやすいことが分かるだろう。

タカマドに対して随分悪いことばかり書いてしまったが、赴任して半年、朝から夕方までタカマドにどっぷり浸かって過ごせたことは、ザンビアの学校の仕組みや先生達、子ども達のことを理解するいい機会だったと思う。巡回指導をしていると体育に関してはいいが、学校行事や先生達、子ども達の様子がよく分からなくなるというデメリットもある。

1 次隊で赴任するということは、実際に活動を始めるのが Term 休み明けの 9 月からとなる。この Term は 11 月から授業がなくなる学校もある。テストが始まるからである。あくまでこれは私の思いなので後任隊員が自分で決めて活動すればいいと思うが、この Term-3 は巡回指導を行わず、CDC のワークショップ（来年も残り半分の学校を対象に同様のワークショップが行われる予定である。）とカブロンガの授業だけに専念したほうがいいだろう。ワークショップの中で先生達は用具不足、施設不足に対して不満を言っていた。しかし、チンポンブワァ（ビニール袋をぐるぐる巻いて作ったボール）や縄跳びなど、自分の身の回りで作れる体育用具はたくさんあるということを私もザンビアの先生や子ども達に聞いて学んだ。先生達の体育に対する「ちゃんとした道具がなかったらできない。」という先入観を崩していく必要性を感じた。そこで、それらの用具作りや未完成状態のグラウンドを整備していく等、他に頼らなくても自分達で体育の授業をやっていくことができる、ということをザンビア人の先生達に伝えていって欲しい。

CDC のワークショップに関してはもちろん体育連合の仲間（ザンビアのスポーツ、体育に関係している隊員で作っているグループ）にも協力をお願いするが、後任が中心となってや

っていくことになるだろう。小学校教諭は体育の授業だけを教えるのではない、ということを理解したうえで、やはり体育教育を普及させていくことに力を注いで欲しいと願う。

まだまだクラス担任が自ら進んで体育の授業をしている姿を見ることができるのはかなり稀である。これは当然のことだと思う。だからこそ、現場で動くことのできる私達 JOCV が先生達を励まし続ける必要がある。私は今まで「どのようにしたらクラス担任の先生にやる気を出させることができるのか。」を考えてきた。何故授業しないのか、とクラス担任を責めてばかりいても仕方ない。先生達にも体育の授業を楽しんで欲しい。

目に見える形で伝えるのが分かりやすいと考え、授業記録をつけることにした。これは今までも自分の記録用としてはやっていたことだが、この授業記録をレポートとして校長に提出することで校長も状況が把握できるし、先生達も「やらなくちゃ。」という気持ちにさせることができる。先生達の出欠状況、授業に参加した子どもの人数と体操服で参加した子どもの人数、授業内容を記録し、その週を通じて感じたことを付け加えて提出する。今のところ、この方法はかなりの成果を挙げている。

（3）今後の協力の見通し

日本でたった 4 年しか教諭経験のない私が、ザンビアの国全体における体育教育の普及を始めようとしたのである。無茶としか言いようがないだろう。しかし、私達は JICA、協力隊としてこの活動ができるという大きな後ろ盾がある。活動は個々で行っているが、やはり JICA の隊員として派遣されているとザンビアの人達は受け取っているだろう。日本では無茶かもしれないが、このような背景があって「ザンビア国における体育教育の普及」に取り組むことができたのだと思う。

ザンビアは理数科教師が多い。理数科教師は中学校、高校でその科目を教える。前述したが、中学校や高校ではそれぞれの科目で教える先生が違うというのは当たり前である。しかし小学校は違う。クラス担任が全ての科目を教えている。英語や算数といった主要科目は教えるのが当たり前とされているが、体育も含め音楽、図工といった情操教育はその重要性を多くの人が認識していながら、後回しにされてしまうことが多い。どういった経緯でタカマドに体育の授業をする隊員が派遣されたのか分からないが、途上国で情操教育を普及させていこうとする動きがあるのだろう。とても大事なことだと思う。しかしこのような状況下、Basic School において隊員はどのようにこれらの科目の普及に携わっていけばいいのだろうか。

ザンビアにおける体育教育は始まったばかりだ。伝統的な遊びやネットボールのようなアフリカ特有のスポーツも続けながら、私達のアイデアや技術をザンビアのやり方として新しく取り入れ、ザンビアの体育教育の基礎を作っていくといいのではないかと思う。ピラミッドの底辺である学校の体育教育が充実していけば、一人ひとりがスポーツに関わっていけるチャンスも増え、ピラミッドの頂点を目指すことのできる人も増え、国全体が活性化して

いくのではないだろうか。スポーツにはそれくらいの力があると思う。その第一歩として今、多くの体育、スポーツ隊員が各国に配置され、それぞれの場所で頑張っているのだと信じたい。

しかし、以前 Basic School に小学校教諭として配属されていて後任を呼ばなかった隊員のこと、そして何故そうなってしまったのかを考える必要もあるだろう。私が知っている限り、音楽、養護、そして地方の Basic School で小学校教諭として活動している隊員がいた。彼らの話を聞く限りでは、ザンビア人が自分達で何とかしていけるようになったから後任を呼ばなかったのではなく、違う理由があったように感じた。このことは Basic School で小学校教諭として活動する難しさを物語っているのではないだろうか。さらに必要、重要とされていない科目を教える難しさもあるだろう。

ザンビアの教育省、そして要請を出している JICA 事務所としてはどのような意図があってこれら情操教育を普及させていくための隊員をザンビアに派遣しているのか知りたい。その意図を知ることで、もっと効率的で一人ひとりの隊員が充実感を感じられる活動ができるようになっていくのではないだろうかと思う。今回、CDC のワークショップを隊員同士がと協力して行ったということを良い前例にして欲しいと思う。

隊員の活動は個々である。しかし個々で活動するだけでなく、JICA の隊員としていることをもっと利用し、お互いの活動を高めていけるような活動ができるようになっていくとザンビアのため、そして自分のためにもプラスになっていくだろう。体育教育を普及させていくプロジェクトを立ち上げ、グループ派遣のような形で JICA としても推進していけるようになるとなお良いのではないだろうか。

今後、ザンビアの体育教育がどうなっていくのか。楽しみである。

（４）現職教員派遣制度について

今回、私は現職教員派遣制度の２期生として派遣された。始めは派遣年月が「１年９ヶ月」ということに物足りなさを感じた。どうして「２年９ヶ月」ではないのか。やる気のあった派遣前はこの制度ではありえない「延長」さえ考えた。結果的なことからいうと、私はこの任期で満足している。「延長」がなかったからこそ、最後の３ヶ月で頑張れたとも思う。活動の充実度は派遣年月ではなく、その中味だと思う。

しかし、この制度がもっと現職教員の方が気持ち良く活動できるように改善されていくことを強く願う。教員が参加しやすいようにわざわざ作っていただいたこの制度なのに、私はとても日本の職場に迷惑をかけてしまった。４月、訓練前までの約２週間は私が勤務しなければならなかった。学校現場は４月の１週間でその１年間の仕事が決まるといっても過言ではない。その１週間も私の代わりに来てくださる先生は給料が支払われないために出勤できない。学校が始まってからも、本来は私が勤務しなければならないのに私はアフリカに行くと子ども達にも伝えたので教えることはできない。仮に教えられたとしても、子どもや保護

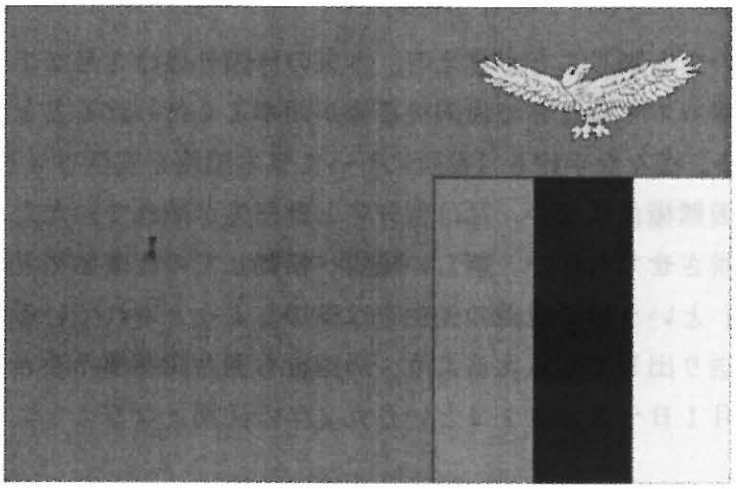
者からの不信感に繋がると思う。訓練終了後から派遣までの約１週間は派遣前準備期間と設定していただけるのだから、この制度が４月１日付けから何らかの形で JICA に拘束されるようにしていただきたい。それぞれの教育委員会裁量、ということになっていたが、結局いろいろなことがたらい回しとなり効率的ではなかった。教育委員会も職場も対応に大変困っていた。

帰国の日程についても同じことが言える。本来の帰国日程は３月２７日となっていた。現職教員が同じ日に帰ってくることで帰国後研修が効率よく行われることは望ましいが、その後、２日間の研修後、様々な手続き（役所に行って日本国籍を復活させる、引越しをする等）を終わらせるのは困難極まりない。私は留守宅と勤務先が離れていたため、帰国後１ヶ月は知り合いの家に居候させてもらい、新しい職場へ転勤しての仕事始めとなった。

「丸２年の任期」という形で現職の先生方は参加しようとされているであろう。参加するときは気持ちよく送り出してもらえるよう、帰国後も協力隊事業のことを前向きに理解してもらえるよう、４月１日～３月３１日という丸２年の任期となるようにしていただきたい。

これから訓練が始まり、任国へ派遣される方へ。自分が今、どんな活動をしてどんなことを思っているのか、リアルタイムで子ども達に、同僚の先生方に、いろいろな方に発信していって欲しいと思います。いろいろ欲張ろうとせず、ありのままの自分を任国でさらけ出し、日本へ伝えていってください。

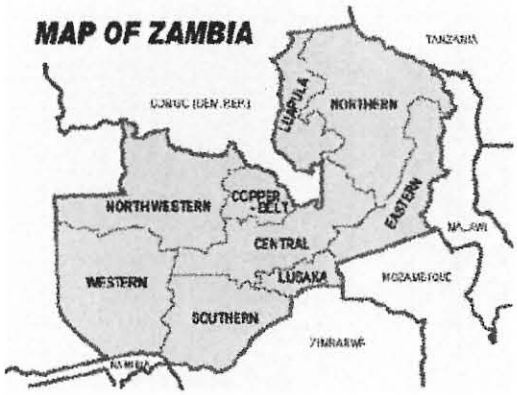
資料



ザンビアでの１年９ヶ月

～異文化に触れて～

宮村　香



Muli Bwanji！私はアフリカ大陸南部、ザンビアで青年海外協力隊員として活動していました。

ザンビアの人口は７３部族で構成されており、主に７つの部族語が日常会話として用いられています。冒頭の“Muli Bwanji”（ムリ ブワンジ）とは私が住んでいる首都ルサカ周辺で使われているニャンジャ語の挨拶です。英語で言えば“How are you?”です。公用語は英語なのですが、このニャンジャ語を使って会話をするとザンビアの人達はとっても喜んでくれます。しかし、私が覚えていくニャンジャ語は授業で子どもを叱る言葉ばかり。“チョンゴ!イーウェ!!”（うるさい!)、“チョカンコゥニ!”（どいて!)、“パンゴーノパンゴーノ”（ちょっとずつちょっとずつ)・・・。日本語と発音が似ているのでみなさんもすぐに覚えられると思います。

ザンビアでの私の活動はBasic Schoolへの体育教育の推進です。始めは１つの小学校で小学校１年生から中学３年生に体育の授業を教えていました。日本では各担任の先生が体育の授業をするのが当たり前ですが、ザンビアでは情操教育が重要視されておらず、体育の授業は時間割に書いてあるだけで実際には行われていませんでした。そこで、各担任の先生が体育の授業をしていけるよう、３つの学校の巡回指導も行いました。今まで体育の授業がなかった学校に行くと、子ども達は大喜びで大地を駆け回ります。グラウンドも整備されていない（グラウンドがある学校は良いほうです)、体育用具もほとんどない。そのような中、私の苦手な英語を使って体育の授業をするのはかなりのパワーが必要でしたが、子ども達の楽しそうな笑顔と体育教育の推進を一緒に進めていこうとしている先生達に励まされながら、頑張りました。

ザンビアで生活し始めたばかりの頃は、ザンビアもザンビア人も大嫌いでした。働いてもいないのに昼間から酔っ払って絡んでくる男の人、水が自由に使えず、すぐ停電になり、防犯のために鉄格子のドアを幾重にも閉めなければならない家・・・。でも、ここはザンビア。ザンビアの人達はそれでとても幸せに楽しく生活しているのです。ザンビアに協力隊なんて本当は必要ないんだと思います。自分自身の生活をするのに精一杯の毎日で逆に協力されてばかり。でも、ニャンジャ語で挨拶したり生活習慣を受け入れたりしながら、ザンビアの生活にも慣れ、優しく、気が良いザンビアの人達と毎日楽しく過ごすことができました。今ではザンビアが懐かしく、またザンビアで生活したいなぁと思う時があるほどです。

最後にザンビアの文化について。ザンビア人の主食は

“Nshima という、とうもろこし（メイズ）の粉（ミルミル）から作った柔らかい蒸し餅?のようなものです。そのシマを少しずつ手で握りながら、野菜やチキン、ビーフのスープをつけて食べます。これが結構おいしく、」私もよく食べていました。

服は“チテンゲ”という２ｍ×１ｍの色彩鮮やかな布を腰に巻くだけ。これはもちろん女の人だけですが、男の人もチテンゲシャツを作って着たりしています。女の人は巷に多くいるテーラー（仕立て屋さん）に頼み、スーツを作って着ています。

ザンビアについてもっと知りたい！と思った方、興味をもたれた方は私の兄が作っているホームページ（http://www011.upp.so-net.ne.jp/HappyLife-386/）をのぞいてみてください。きっと皆さんがイメージしているアフリカではなく、私の感じたリアルなアフリカを感じることができると思います。

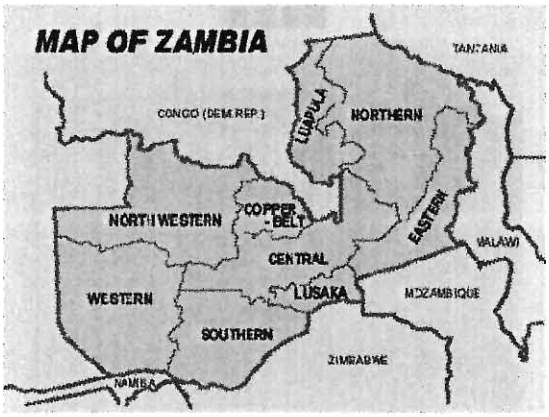
Tizaonana!　ティザオナーナ！（また会いましょう。）

real Zambia

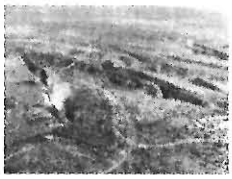
～1年9ヶ月のザンビアでの生活を通して～

配属先について

- 2000年に日本の無償資金協力で建てられた学校。
- Grade1～9(小学1年生～中学3年生まで)の子ども達が通うBasic School。
- 首都Lusakaのはずれ、"Bauleni Compaund"の中に位置している学校。



世界三大滝布"ビクトリアフォールズ"



- カナダ"ナイアガラの滝"、アルゼンチン"イグアスの滝"と並ぶ世界三大滝布。
- 幅1.7km、落差150m
- ザンビアとジンバブエの国境にあります。

ザンビア人の生活

- ミニバス(ハイエースの改造車)はザンビア人にとって欠かせない交通手段。20人くらい乗ります。
- 道ばたではおばちゃんたちが野菜を売っています。これがコンパウンドのマーケットです。

活動を始めてみて

〈要請内容〉

- 体育教育の推進

〈活動内容〉

- G5～9の体育の授業を行う。
- 公文書やテストなどのタイピングの手伝い。

ザンビアにおける体育教育の実態

- 「体育」は試験科目でないため、Basic Schoolでは時間割りに「体育」を組み込んでいない学校が多い。
- 配属先であるPrince Takamado Basic Schoolでは、前任者の方がしっかりと「体育」を時間割りの中に組み込んでくれていた。しかし、担任が教える教科としての位置づけはされていなかった。
- 体育がレクリエーションやスポーツを楽しむためにだけある、と捉えている教師が多い。

活動する上での信念

- 私がマンパワーとして授業をするのではなく、クラス担任が主となって授業を行う
- 準備体操、整理体操、ランニングを必ずどの授業でも行い、パターン化する。
- 必ず運動できる服装に着替えさせる。

巡回指導

- 配属先では担任が体育の授業をすることに対して理解してもらえなかったため、近隣の学校に声をかけ、巡回指導を始めた。
- 体育の授業をどう進めていけばいいのかが分からなくて困っている先生がたくさんいたため、先生達のための研修会を催した。
- 準備体操・整理体操をパターン化し、イラスト入りの説明書を作って配布した。

授業風景

運動場？

ランニングと準備体操の様子

P. E. Time Table - 2005

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
08:00-08:40	4-Orange/Blue	4-Red/3-Blue	2-Blue		
08::40-0920		1/3-Red	7-Red		
09:20-10:00	5-Blue	7-Green	2-White/Green	6-Blue	
10:00-10:40		3-Green/White	7-Orange/2-Green		
10:40-11:20	4-Pink/Green	2-Red/4-White	1-Blue/Orange	7-Blue/White	
11:50-12:25	7-Red	6-Green	7-Blue	7-Green	
14:15-14:50		5-Green	6-Red		
15:05-15:40		5-Red	6-Yellow		
15:40-16:15		5-Yellow			
14:00-14:40	6-Green/Red			2-Orange	
14:40-15:20	6-Blue/White			5-Blue/White	
15:20-16:00	5/6-Orange			1-White/Green	
16:00-16:40	5-Green/Red			GB/9	

体育教育普及ワークショップ

- Curriculum Development Centre(CDC)がJOCVの働きかけに応じ、主催した。
- Lusaka市内、約50校の公立学校が対象。
- 教育省、スポーツ省、UNZA (University of Zambia)から講師を招き、体育教育の重要性を講義した。

ザンビアの先生達の悩み

- Basic Schoolの先生は初等教育をやろうと志して教師になった人ばかりではない。
- 用具不足、施設不足、試験科目ではないので体育の授業をしてもどうしようもないと思っている。

今後の展望

- ワークショップだけでなく、現場で動くことのできるJOCVがそれぞれの学校を巡回指導する。
- 授業記録をとり、校長やスポーツマスターに報告書として提出する。
- ザンビア特有のトラディショナルゲームや体操等を積極的に授業の中に取り入れていく。
- 教育省、Examination Councilに働きかけ、用具、施設の整備、試験の作成を早期に行う。

『体育連合』

- 体育、スポーツ、養護教諭、エイズ対策など健康教育関係の隊員有志で作っている隊員グループ。
- ワークショップ(月1回)をしてお互いの活動を交流し合い、勉強会を開いている。
- 大会運営等、お互いに協力して行う。

現職教員特別参加制度

- 2年という任期で訓練、派遣となるため、教員は参加しやすい。

⇩

- 訓練前の2週間→勤務(各教育委員会裁量)
- 派遣終了時の帰国日時→猶予1週間ほど

⇩

- 4月1日～3月31日までの丸2年の任期
- 現場復帰しやすい帰国時の日程調整

ザンビアの聴覚障害児教育

加藤　嘉文
（15-1，ザンビア，養護，和歌山県立和歌山ろう学校）

ろう学校の児童生徒たちに社会科をまだ満足に教えられていない私は、もっといろんな世界を知るべく、もっと楽しい社会科の授業を創れないかとずっと思い続けていた。これまでの社会科の学習指導は資料の内容がどんなに豊富でも、活字の学習のみで覚えるだけの機械的な学習にしか至らない。実際にその国へ行き、言語・文化・慣習などを学んで初めてその人たちの生活実態を知り、机上の資料ではみることのできない貴重な体験が、社会科学習に大きく影響を及ぼし、指導する際に大きく寄与する。

職員室の机の上に、現職教員特別参加制度という資料を初めて目にし、これまでの自分が学校で何を教えてきたのだろうかと省み、外へ一歩踏み入れてみようと思い立った。教師生活７年を胸にし、ありのままの気持ちで面接試験に臨んだ。体力に自信がないのにアフリカ大陸のザンビアと決まるまで、はるか遠いアフリカ大陸というところまで考えていなかった。あまりにも驚き、さらなる不安が募り、協力隊員としてしっかり頑張ろうと決意を固めていたはずなのに、再び心が揺らぎ、躊躇していた。「世界の何処にいてもリスクは同じ。いい経験になるだろうから、行けよ。」という上司のことばが今でも忘れられない。そこまで言われた以上、協力隊としての活動を全うしなければならないという使命とプレッシャーを強く感じていたし、さらに私の場合は、聴覚に障害を抱えているため情報手段に限りがあり、緊急連絡に困るようなことがあった場合、どう対処していくべきかについても考えなければならなかった。何よりも現地の人たちとうまく付き合い、ともに楽しく生活できるように心がけていれば大丈夫だと確信を持ち、ザンビアへ向かった。

遥かなるアフリカ大陸のザンビアに着くと、すぐに１ヶ月間程の現地訓練が始まり、初日から緊張が高ぶっていた。一日中休むことなく、その訓練に集中していたし、環境の急変などで、体調を崩したが、何とかその訓練を終えた。任地はコッパーベルト州、銅資源が豊かで、大地が赤茶色で染まっている。首都ルサカから長距離バスで５時間行ったところの第二の都市キトウェで乗り換え、銅山が点在しているカルルシという町からさらに 15 キロ行ったところにセント・ジョゼフ教区（教会が開拓した村）がある。そこに配属先であるザンビア唯一の国立ろう教育センターがあり、その技術援助として係わってきた。センターの主な業務は、

写真１　パソコン指導

必要に応じて町へ行き、聴覚障害児の支援を行うが、件数がほとんどない。聴覚障害児の支援は病院、ろう学校あるいは聴覚障害児学級でも行えることができるからである。センターの業務のみではなく、その隣接にザンビアで一番大きいとされているセント・ジョゼフろう学校においても中高等部にパソコンを指導し、翌年、中学部に数学も教えてきた。公用語は英語だが、その児童生徒たちと教員との間では、ほとんど手話を用いている。その手話は、ザンビア手話とアメリカ手話が混ざっており、これも習得しないと彼らとコミュニケーションすることができないのである。

赴任初日、それぞれの教室に入り、ザンビアに来る前に少し学んでおいたアメリカ手話で生徒たちの前で簡単に自己紹介をすると、彼らはとても喜んでいた。彼らは「加藤先生の手話名は？」と、私のそばに付き添ってくれた同僚に訊ね、「これはどう？（嘉文の頭文字はＹなので、そのＹの指文字を表し、ひじの内側に2回当てる）」といって、彼らとともにいろいろと考え、「うん、そうしょう。」と1分もしないうちにすぐに決まった。彼らは、新しい人に出会うと、そのようにすぐに手話名をつけたがる。さらには、「加藤」という発音はザンビア人にとって覚えやすく、ベンバ語風に「カトー」を「カトンゴ」と付け加えるとまさにザンビア人の名前になるので、同僚や近所の間でお互いに笑い合い、こうして新しい名前を私にくれた。とても嬉しかった。

児童生徒たちともっといろんな話がしたくて、赴任当初から毎晩のように寄宿舎へ行き、彼らのする手話を真似ながら学び取っていった。そしてようやくその手話もできるようになり、時間を忘れるほど話に花を咲かせたり、勉強を教えてあげたりした。今想えば、毎日の彼らの会話がとても楽しかった。

ザンビアでは通常12年間の一貫教育が行われているが、第7学年と第9学年に進学するための統一試験が施され、最後に第12学年時に卒業試験がある。セント・ジョゼフろう学校では、1年間の幼稚部が置かれており、12学年の内、学習のさらなる積み重ねのために第8学年時のみ2年間就学することになっている。従って、聴覚障害児が卒業するためには14年間就学しなければならない。セント・ジョゼフろう学校はミッションスクールで、どの児童生徒にも教育の機会均等を与えてきているが、教室・寄宿舎が足りないほどで、学校に通えない児童生徒たちがまだたくさんいる。家族を失った児童生徒たちは教会によって支えられているが、第8学年から無償教育ではないので、親御さんや親族の方々は、苦労して自分の子どものための教育費を工面している。さらには経済的事由で年齢差が大きく、学力はとても厳しい。何とかある程度成績を収めることができれば、短期大学に進学し、教員免許を取得し、母校に戻って教鞭を執ることができるが、ごくわずかであり、それ以外、何ら卒業後の進路保障がなく、福祉制度は全くない。そんな背景の下でありながら、彼らは懸命に普通の人たちと同じように生きているのである。

年末年始に一人の卒業生がセント・ジョゼフろう学校に遊びに来た。すぐに仲良しになり、いろんな話に花を咲かせていた。彼は卒業生だから、ろう学校のことはよく知っているし、彼は首都ルサカに住んでおり、自宅の近くに自分で店を開いている。特に聴覚障害者にとってこうした社会の中で生きていくことが難しい境遇にあるのに、彼は違っていた。4月

下旬にターム休暇があるから、首都ルサカへ行くということを彼に告げ、彼と再び会える日を楽しみにしていた。

待ち遠しかったターム休暇が始まり、ようやくルサカに着いたのは夜の9時過ぎ。夜中に街中を徘徊するのは危険であるが、それでも彼は、ルサカのバス停で私が来るのをずっと待ってくれていた。そして、彼の家でしばらく過ごした。「君とこうして知り合え、親友になれて、僕はとても嬉しい。僕のこんな狭い部屋で日本人と一緒になれるなんて夢だ。みんなに自慢できる。」といって、夜が明けるまで、ザンビアのろう学校のことや日本のことなど、いろんな話をした。彼を含めて3人（聴覚障害者）で店を上手に賄っている。日用品や雑貨、お菓子、パン、飲み物などを売っているが、お客さんとどうやって彼らとコミュニケーションしているのだろうかと思い、彼らの様子を伺ってみた。お客さんの口元、表情などを読み取り、お客さんにとって分かりやすい身振りで互いにコミュニケーションを解しているところがとても感心した。日ごろのコミュニケーションの積み重ねによって、そうした成果が現れるのでしょう。ザンビアのろう者協会やルサカ郊外にある聴覚障害児学級を見に行ったり、彼の友達の家や彼の親戚の家に訪れたり、覚えたての手話やベンバ語で挨拶をすると、みんな喜んでくれた。友好的で親しみがあり、家庭のぬくもりを感じ、日本のそれらと共通している部分が散見できた。

セント・ジョゼフろう学校第8学年に一人の転校生が来た。普通校からで、難聴で手話ができなく、ずっと口話で生きてきたひ弱な少年。彼は、時々ホームシックにかかり、いつも家族を想う。「日本人が嫌い。」といって私を避けたり、反発したりしていた、ちょっと変わった少年だが、なぜか放っておけなかった。口げんかも多かったが、何とか興味をそそるような話題を持って彼に話しかけたり、冗談を言い合ったりしてきた。そんな彼も、次第に学校生活に慣れ、手話もできるようになり、みるみる明るくなっていた。私が、彼の教室をちらっと覗くと、「今は先生がいないので、どうぞ教室に入って僕たちに勉強を教えて下さい。」と彼は教室の入り口まで来て、私に丁寧にお辞儀をするので、賢い少年だなと思った。時間の許す限り、彼らに精一杯勉強を教えてきた。そんな少年がいたからこそ、同じクラスの生徒たちにも彼の影響を受け、どのクラスよりも明るい教室になっていった。

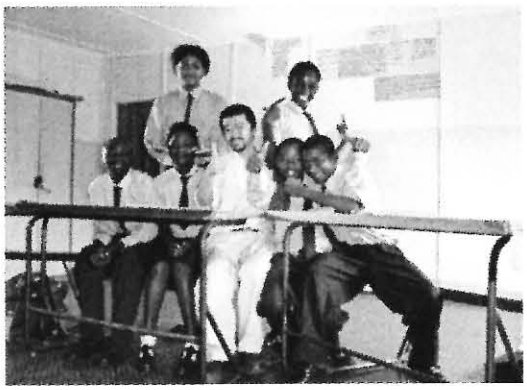


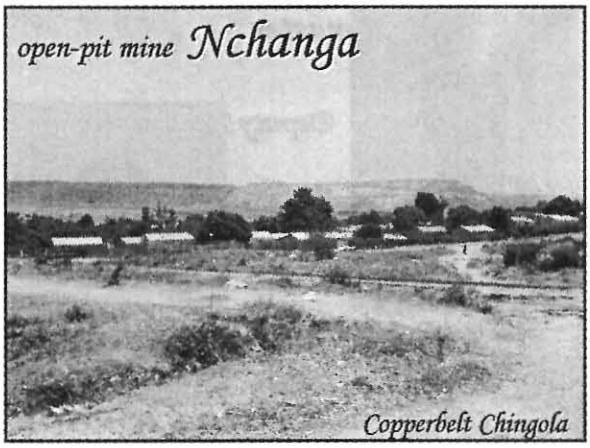
写真2　第8学年

そのころ、私もザンビアでの生活にすっかり慣れていた。ここからさらなる本格的な仕事ができると思っていたのに、帰国もだんだんと迫っていた。彼はたまに私の家に遊びに来たり、私の家の掃除の手伝いもしてくれたりした。ついにセント・ジョゼフろう学校を離れる日の前日にせまり、それぞれの教室を回って、別れの挨拶をしたが、特に彼の教室に入るのがとても辛かった。案の定、彼の教室に入ると、彼はなぜか教室の端に座って黙って下にうつむいていた。生徒一人ひとりに送る言葉をかけると、もうみんな泣いていた。最後に彼にいろんな思い出を語ってあげた。私もついに目が潤んでしまい、涙を堪えること

ができず、教室から出てしまったが、先生から呼び出され、またその教室に入り、もう二度と彼らと会えないと思うとますます苦しくなり、彼と泣きながら抱えた。

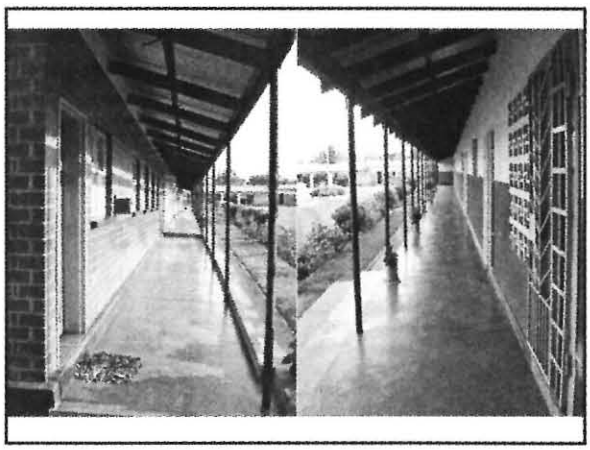
翌日、セント・ジョゼフ教区を離れ、首都ルサカで帰国の準備に取り掛かりながら、時間をみつけて、卒業生に何度か会えたが、あいにくお互いゆっくりしている間がなかった。

さらなる聴覚障害児教育の発展に貢献できるような活動は何一つできず、パソコンと数学の授業をなんとか消化していくという感じだけで終わってしまった。何より彼らと出会えた事で、生活していく上での不安をほぐし、こうして彼らから多くの友情を私にくれた。彼らには、聞こえないことで日本以上に不安や困難は多いのに、何とかなるだろうという気持ちで、心の寛大さが強く表れていた。教師や児童生徒たちの心が複雑になってきている昨今、機械的に教科を教えるだけではなく人間的にこうした心の教育を再度見直ししても、見直ししすぎることはない。



St. Joseph's School for the Deaf

- KALULUSHI -
-2004 -



Staff

Headmaster

Mr. Kalela Chileshe Alex

Deputy Headmaster

Mrs. Chilangwa Zillah Njobv

Manager

Sr. Malama Kangwa Florence

mantis

akakonkote

Class Teachers

Mr. Chanda Evans

Mr. Kamanga Goodson

Mrs. Chilangwa Zillah Njobvu

Mr. Jere
Raphael
Ackleo

Mrs. Chilengwe
Bauleni
Getrude

Mr. Chilengwe
Morton
George

Mr. Bwalya
Sampa
Lewis

Mr. Chalata
Chola
Charles

Mrs. Sikapizye
Ching'andu
Bwalya

Sr. Chewe
Musonda
Beauty

Ms. Mulenga
Kampamba
Yvonne

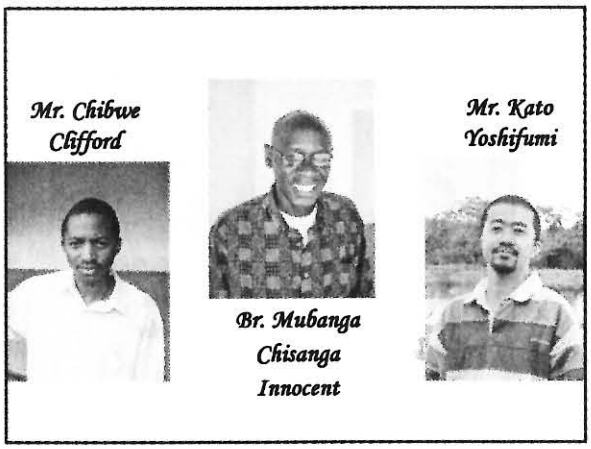
Ms. Chamina
Theresa

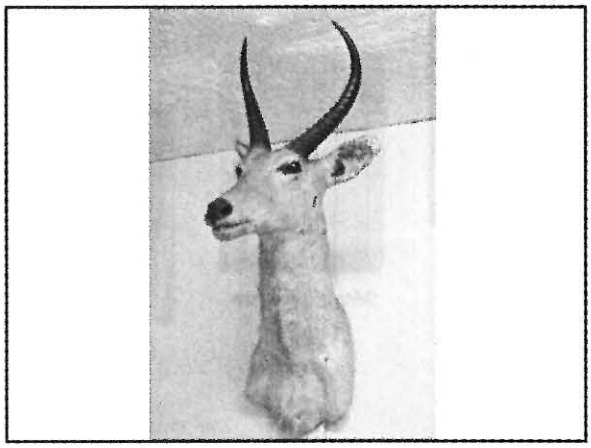
Mr. Chirwa
Dominic

Mr. Kapinga
Fabian
Anguya

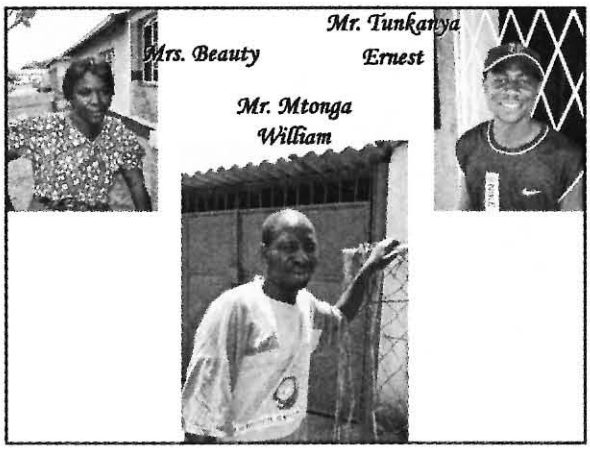
Mr. Chilengwe
Morton
George

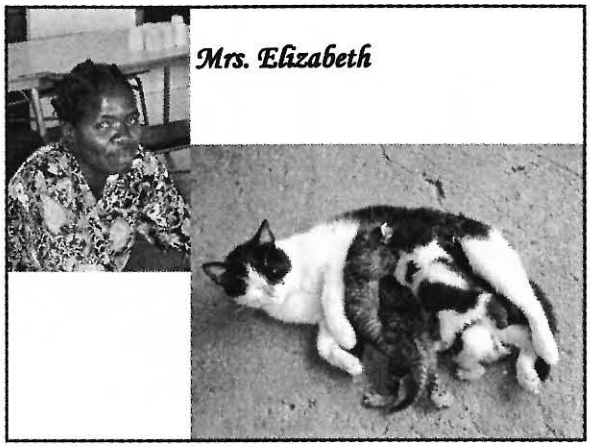
Mr. Salati
Willie

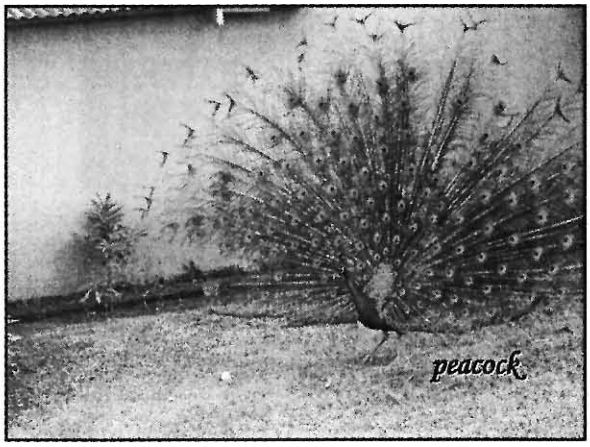




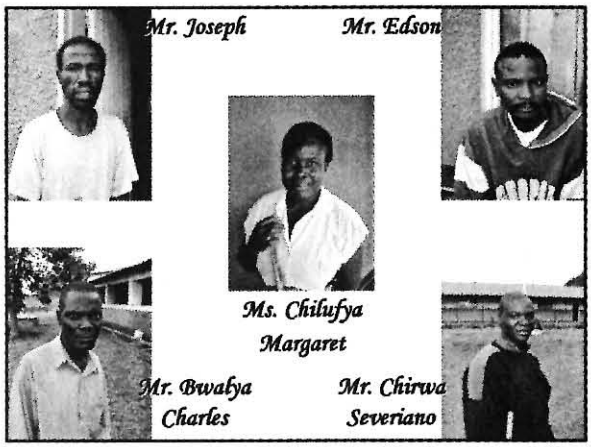
House Parents







Workers



Trainees

at ZAMISE

(Zambia Institute of Special Education)

Sr. Chabala Mukonde Angelina

Mr. Mulenga Albert

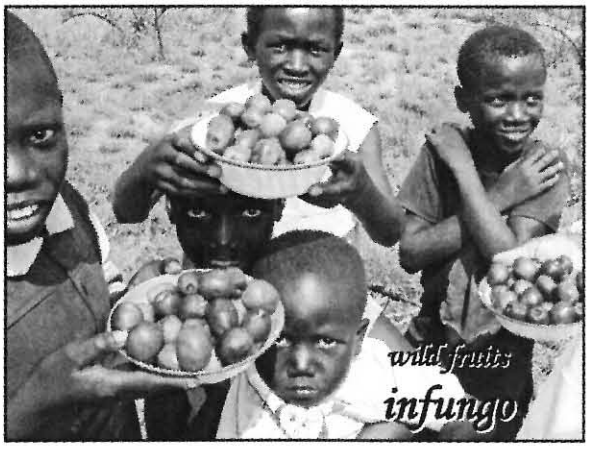
The former

Teachers

Ev. Laban Moses Sinyanga

Mr. Ngoma Paul

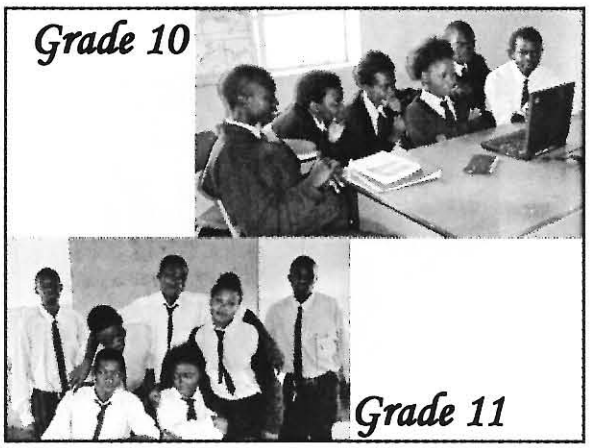
Ms. Nchimunya Adrina

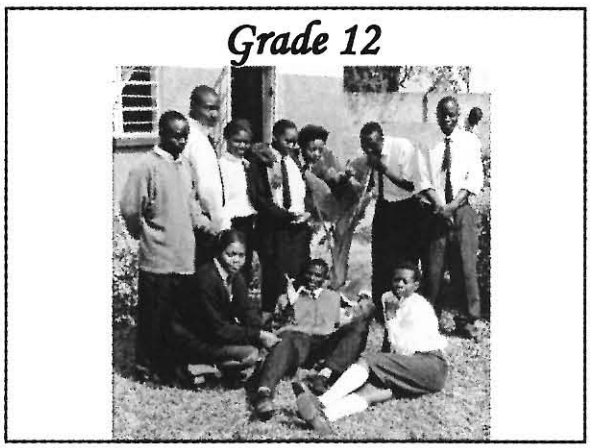


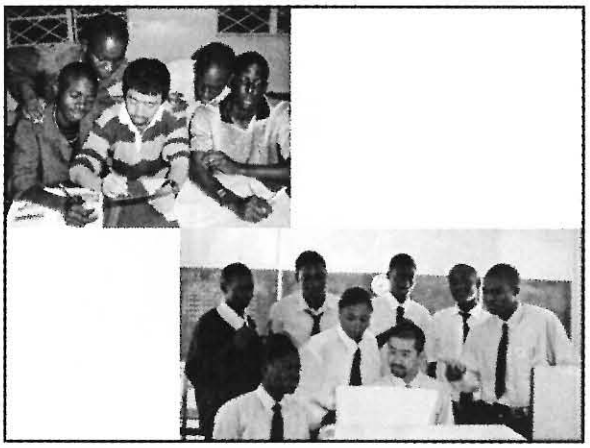
Memories

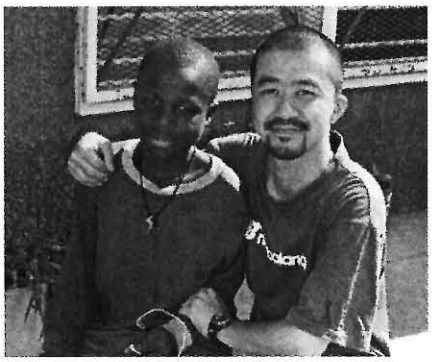
These were the days.....

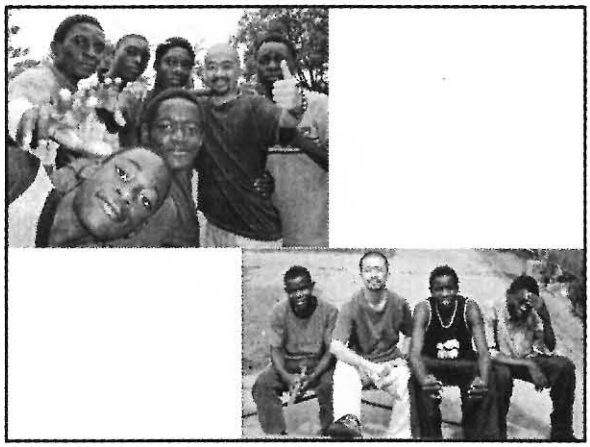
Grade 9

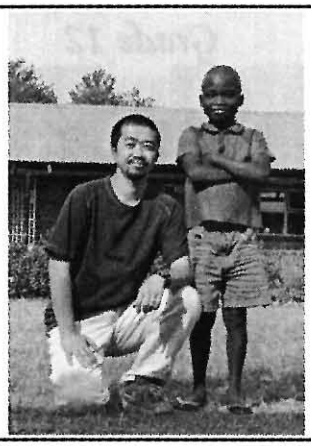




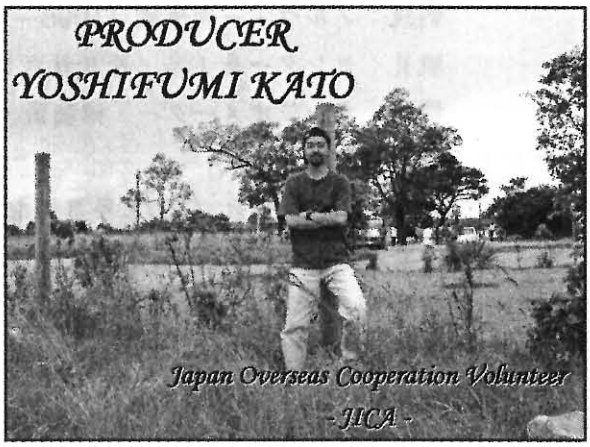








FIN.


PRODUCER
YOSHIFUMI KATO
Japan Overseas Cooperation Volunteer
- JICA -

Thank you for listening to me.

ザンビアにおける地理的背景・文化・生活
－聴覚障害児の実態を中心に－

２００６年１月７日

青年海外協力隊　現職参加

２つの事件：「人生にリスクはつきもの」

中央アフリカ・ザンビア

地理：首都、高原、サバナ、世界三大滝布（ビクトリア滝)、カリバダム

人口：1030 万人（2002 年）

言語：主にニャンジャ語、ベンバ語　　＊公用語：イギリス英語

資源：銅・鉛・コバルト・亜鉛

貨幣：クワチャ　１ＵＳ＄≒３３００クワチャ

現地訓練（一ヶ月間)：無線、携帯　　一時退避勧告

病気：マラリア、ジンマシン、アメーバ赤痢、

猫に噛まれる？　右太腿に化膿？　急性胃炎？

国立ろう教育センター

場所：コッパーベルト州／カルルシ／セント・ジョゼフ教区

創設：ノルウェー大使館（1996－1998)・教育省（1999－2004)

職員：センター長１名・手話教育２名・聴能訓練１名・技術援助（協力隊員）

機器：オージオメーター・補聴器・パソコン・ビデオ・自動車

セント・ジョゼフろう学校

創設：ルハンガ氏（1972 年３月 27 日）

公費助成学校：政府 75%、教会 5%

教育費：約 100 US$

学年：幼稚部、グレード 1/2/3/4/5/6/7、グレード 8n/8r/9、グレード 10/11/12

教員数：22 名＋協力隊員

児童生徒数：女子 59 名／男子 75 名　　全体数 134 名

聴覚障害の原因：先天性 53%、髄膜炎 41%、耳下腺炎 6%

補聴器装用児：なし

すべて手話で教育が施されている：アメリカ手話とザンビア手話が混ざっている

児童生徒・教員各々に手話名が付けられている

パソコン（G8-12）と数学（G8n/8r）を教える

＊ 聴覚障害児学校及び学校在籍児童生徒数：G1-7／9820 名（2003 年）

＊ 経済的な理由により未就学の子どもが多いといわれているが、どのくらいかは不明。

＊ 他に首都ルサカやソルウェジ、リビングストーン、チョマなどの地域に聴覚障害児のためのクラスがあるが、12 学年までのクラスを持つ学校はセント・ジョゼフろう学校とルサカのムナリ聴覚障害児学級の２つのみである。

＊ ザンビア聴覚障害者協会

＊ ZAMISE（ザンビア特殊教育研究所)、UNZA（ザンビア大学：障害児教育学部）

＊ 南アフリカのケープタウンに聴覚障害者のための南アフリカろう短期大学がある。

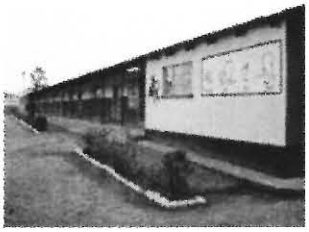
15－1　加藤嘉文

01 Kitwe

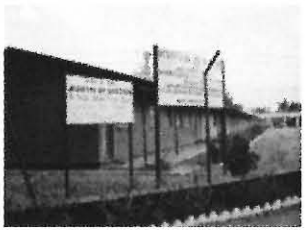
02 open-pit in Chingola

03 Kalulushi

04 Kalumbwa



05 NRCEHI



06 STJSD

07 Mr.Ngoma's family

08 deaf teachers

09 NRCEHI

10 Head masters

11 farewell party

12 morning greeting

13 grade 12

14 sport day in Chingola

15 pupils

16 entertainment

17 independence day

18 aids day

19 graduation ceremony 2003

20 pupils

21 eating

22 tv room

23 deaf association

24 ZAMISE

Photographed by Yoshifumi Kato

ジンバブエの美術教育－国際協力から見えたもの－

五傳木浩樹
（15-1，ジンバブエ，小学校教諭，新潟県立佐渡高等学校）

日本の教育現場で、十数年を過ごし、日々の中で生徒に「美術」を教え、「美術」の楽しさ、難しさを実感していた。毎年入れ替わる生徒との出会いはあるものの、変わり映えのしない日常の繰り返しとある種の物足りなさを感じていた。「美術とはいったい何か」という根本問題が頭をもたげ始めた。「人間にとっての美術とはいったい何か」「教育における美術とはいったい何か」という学生以来からの永遠のテーマが私の感情を刺激してきた。そうした中、JICA（国際協力機構）は平成１４年度から現職教員特別参加制度をスタートさせた。現職教員を国際協力の舞台に派遣し、帰国後の日本の教育現場での活動に生かすシステムを誕生させ活動の機会を与えた。この制度を知った時、私は「これだ」と心の中で叫んだのを憶えている。「美術とはいったい何か」さらに今まで培った自らの教師経験、教育指導技術や専門美術のスキルが異国の地でどこまで通用するか、またそこから見出される「何か」は新たな美術教育の方向付けの発見へと繋がるにちがいないという直感した。そして、新たな課題を見出し、今後の教師生活に役立てたいと感じた。実は高校時代に青年海外協力隊の説明会を聞きに行った経緯が私にはある。その時の印象は「やはり、自分で何か特別な技術や伝えたいものを持っていないと活動は難しい」というものであった。あれから、十数年忘れかけていた「国際協力」への情熱が再燃し、こうして活動に行くことができ、自分なりに成果を得ることができた。グローバルな視点でかつダイナミックに世界を感じることができたことは大きな収穫である。あの時の高校生だった私に戻ったような、昔の自分に出会えたような気がした。JICA とのこうした繋がりに何かしらの「運命」や不思議な「縁」を感じている。夢は叶うのである。

私は、平成１５年７月（２００２）～平成１７年３月（２００５）、南部アフリカに位置するジンバブエの首都ハラレにある Highlands School において Art Teacher として活動した。Highlands School はジンバブエが１９８０年に独立する以前の宗主国、英国時代のＡ　School、つまり白人学校である。開発途上国の教育現場というと何か田舎の学校で何もないようなところでの活動ばかりが目立つし、イメージされるが、私の活動先はそうした学校とはまるで正反対であった。Highlands School では今までいた専任美術教師が、ジンバブエの政情悪化で、国を捨て、オーストラリアに移住した。当然、美術を専門で学んだ白人教師であった。そのあと、採用した黒人教師はその美術指導の技術のなさから、保護者や生徒から不評を買い、２タームを待たずに解雇された。後任専任美術教師の依頼として、私がその役割を担うこととなった。そして活動先となった。ジンバブエの教育課程は英国式の教育を踏襲している。Highlands School はまさに英国のパブリック・スクールそのものであった。ジンバブエの教育

制度は英国の教育制度を受け継いでいるため、小学校ではGrade 7（日本では小学６年生）時には、全国統一試験が実施される。さらに、Secondary Schoolにおいては、Oレベル、Aレベルの統一試験が実施され、この成績結果によりその後の高等教育への進路や就職に大きく左右される。やはり、開発途上国においても教育は重要である。

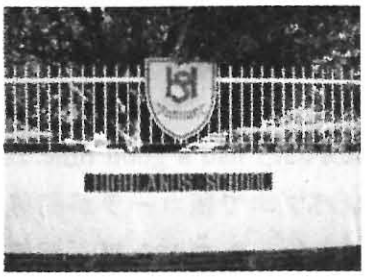
さて、私の活動は、Highlands SchoolのGrade 3(日本では小学２年生)～Grade 7(日本では小学６年生)までの５学年、各学年４クラス、合計２０クラスに教育課程の「Art／Craft」を各クラス週２単位時間、教えることである。当初からカウンターパートは存在しない。私は主任美術教師であり、美術のエキスパートとして学校長をはじめ同僚から見られていた。実際に「美術」を教えてみて、１番驚いたことは、Highlands Schoolでは、「専任美術教師」の席があり、カリキュラムの中で、週２単位時間「Art／Craft」の授業を実施しているが、ジンバブエの国中の他の小学校約４８００校では、実際問題「Art／Craft」という科目はほぼ１００%実施されていない。つまり、「美術」の授業がないのである。このことは、ある程度は予想されていたことであるが、こうして現状を実際に見てしまうと果たして、人間にとっての「美術とはいったい何か」という問題を真正面から考えさせられた。つまり、開発途上国の教育においての優先順位は「生死」に関わる教育、つまりそれは「生きる」ための教育であり、あるいは「生きていく」ための教育が最優先であることを意味する。「美術」を学ぶより大切なこと、それは「読み・書き・そろばん」である。つまりは、ジンバブエの大半の小学校、特にルーラル（地方）の学校では授業はそのほとんどを「ショナ語（母国語）・英語（公用語)・算数／数学」の獲得に費やし実施されているのが現状である。実際、ジンバブエの小学校で「専任美術教師」が存在したのは、私が活動したHighlands Schoolであり、ほぼ、９９．９９%の学校では「美術」の授業がなされていなかった。私の活動は、ごく限られた特殊な学校、特殊階級の子弟が学んでいるHighlands Schoolでの活動であったことをここに明記する。しかし、こうした学校であるにも関わらず、教育環境の現状はそんなに甘くない。教材がない、絵の具がない、材料がない。このような状況は私に「プロ意識」を奮い立たせた。日本で美術教師としてきた今までの経験や技術を総動員し、自らのテーマ「美術とはいったい何か」という「美術との対話」へと導いた。そして、Highlands Schoolで出会う子供たちに「美術」の楽しさを教えることであった。ものがなくても何かしらの工夫で「美術」を教えることの大切さを実感した。日本のように、画材や材料がすぐに手に入れることが難しく、いくらジンバブエNo.１スクールでも、絵の具の注文からそれを実際に手に入れるのに４ヶ月を要した。しかし、授業はしなくてはいけない。毎日、毎日が自分との戦いであった。週全体が４５時間中、私の持ち時間数が３８時間とほとんど毎日授業をしなくてはいけない。それも、５学年あるので、当然子供の発達段階を考えた美術教材を考えて授業実践しなくてはいけない。毎朝５時に起床し、授業の準備や教材の確認、授業の流れをイメージしながら、７時には自室を出て、美術室へと向う。１日の授業が終わり、学校内の寄宿舎（ホステル）の自室に戻るとぐったりとベッドになだれ込むのが常だった。汗臭いベッドの匂いの中、「明日の授業は何をしよう」といつも考えていた。とにかく、画材がなく、紙も「ブラウン・ペーパー」と呼ばれる粗悪な紙しか学校では入手できない。私の美術授業は「絵画」「デザイン」

「工作」「工芸」の４分野に分け、バランスよくそして体系的に美術指導することを自分のテーマとした。私が、Highlands School で、実施した美術教材の合計は１９４、美術教材の種類は１５１であった。成功した教材もあれば、失敗した教材もある。私にとって、この教材開発が活動における自分の大きな成果となっている。子供たちも実際に私の美術授業から学んだ美術教材や「美術」の楽しさを感じてくれたに違いない。それが自分の自信となっている。やはり、現職教員として参加していること、その「アイデンティティ」それは、「プロフェッショナリズム」を持ち、その意識でどのような状況でも自分の未知なる力をいかに発揮し実行できるかどうか。「美術とはいったい何か」という問いかけに対し、何かを掴んだような実感はある。成功した授業もあれば、失敗した授業もある。子供の楽しそうな笑顔もあれば、「Boring(退屈だ)」と言って、遊び出す子供もいた。

こんなエピソードもあった。活動を始めたある日、授業が終わってから、Grade３(日本でいう小学２年生)の男の子が、授業終了後私の所に来て、「Mr.GODNGI,I had a good time.Your Art Lesson was very nice.」と言って、私に ZW＄５０（当時、ジンバブエで瓶コーラが同等の値段）の紙幣を差し出した。始めは、その意味がわからず、お金でも拾ったのかと思ったが、これは、英国流のスタイルでチップを差し出したのである。英国人の特権階級がする日常のスタイルである。小学校２年生のちっちゃな子供が紳士らしく振舞ったのである。「ありがとう。でもお金はいらないよ」と言う私のことば聞いて、ちょっとがっかりした彼の顔を今でも覚えている。彼の何かを伝えたい気持ちがうれしかった。当時、Highlands School は白人の教師も多く、生徒も全校７００人のうち、２５０人くらいが白人生徒であった。こうして、アフリカにあるジンバブエでありながら、Highlands School にいると、ある種英国の名門パブリック・スクールにいるかのような錯覚に陥ることもしばしばあった。美術教育の活動以外にも、ジンバブエの辿った歴史や文化、それに当時の政治状況を目の当たりにした。さらに黒人コミュニティや白人コミュニティの両面を見ることができた。ジンバブエでの活動は予想以上に大きなものを学んだ気がする。その他、タームごとに実施される音楽会や演劇のための舞台美術を一人で描いた。その大きさは高さ５ｍ、幅２０ｍであり、この大きなキャンバスを一人２日間で描いた。学校長や同僚の驚愕の眼と感謝の念を今でも憶えている。現職の美術教師という自負がある。ハラレの郊外にある Seke Teachers College で特別美術講座を受け持ち、幼稚園や小学校の教員の卵に学校で使える教材などを教えた。

苦しい活動の中でも異国の地で私を支えられたものは「子供たちの笑顔」であり、子供たちの楽しそうに作品を作っている姿である。確かに、ジンバブエの０．０１%の名門学校での活動であったが、おそらく、私が教えた子供たちはこれから２０年後、ジンバブエを支える人物になり、中には、国を動かす人材になっているかもしれない。彼等の脳裏に Highlands School での美術授業、ほんの短い間だったが、「Mr.Godengi」という日本人から学んだ「美術のこころ」が残っていれば、これこそ「日本とジンバブエ」の国際協力の架け橋になるに違いない。彼らの中ではきっと「日本人美術教師、Mr.Godengi」の姿が焼きついているはずだ。ちなみに、２００４年にアテネ・オリンピックで、ジンバブエに２５年ぶりのゴールドをもたらした女子水泳選手、Kirsty Conventry は我が校の卒業生である。

平成１７年４月から現場に復帰し、今までに合計９回の講演や体験発表をした。佐渡高等学校や羽茂高等学校での「総合的な学習の時間」や JICA の主催するセミナーやシンポジウム、さらには、教育研究会での発表である。発表の機会を得ることは、自分の活動を客観的に見ることができる。自分の活動に対し新たな課題や問題点を考えることが可能である。現在、私は高校での美術授業で「五感を使った美術表現」というテーマで独自に教材を開発し、授業実践している。今度は、ジンバブエでの活動体験を生かし、日本の「美術」教育の中で、ジンバブエでのあの苦しくもギラギラとした日々を生かしていきたい。私自身もう一度「美術との対話」に挑もうと思っている。



－学校の概要－

●HIGHLANDS　SCHOOL　（INFANT・JUNIOR）　　創立　1945 年

●教員数（32 名）

Head(1)、Vice-Head(1)、Grade3(4)、Grade4(4)、Grade5(4)、Grade6(4)、Grade7(4)、Sports（2）、Music(1＋1)、Art(1:五傳木浩樹)、Shona(2)、Library(1)、Remedial(1)、Computer(1)

【2003 年】黒人教員：19 名、白人教員 11 名、日本人教員 2 名（JOCV）

【2004 年】黒人教員：29 名、白人教員　1 名、日本人教員 2 名（JOCV）

【2005 年】黒人教員：29 名、白人教員　1 名、日本人教員 2 名（JOCV）

●生徒数　約 700 名　　HIGHLANDS（JUNIOR）SCHOOL

●Grade3(4 クラス）Grade4（4 クラス）Grade5(4 クラス）Grade6(4 クラス）

Grade7(4 クラス）　　全 20 クラス

【2003 年 3rd Term】　黒人生徒 70%、白人生徒 30%

【2004 年　1st Term】　黒人生徒 85%、白人生徒 15%

【2004 年 2nd Term】　黒人生徒 90%、白人生徒 10%

【2004 年 3rd Term】　黒人生徒 93%、白人生徒　7%

【2005 年　1st Term】　黒人生徒 98%、白人生徒　2%

●1997 年ユネスコ主催『Children's Summit』英国参加ジンバブエ国代表校(1 校)

●2004 年アテネ・オリンピック　水泳ゴールド・メダリスト

Kirsty Conventry　出身学校

－活動の内容－

●役職：Art Teacher（主任美術教師）

●活動内容：Grade3～Grade7（日本の小学校２年～６年）

全２０クラスの美術授業担当（１クラス週 ２時間）Extra Art Lesson

●活動授業持ち時間：美術授業３６時間＋アッセンブリー２時間　合計３８時間

Highlands Junior School：Art Time Schedule　2004　Hiroki GODENGI

		Monday	Tuesday		Wednesday	Thursday	Friday	
1	7:45 8:15				Assembly		Assembly	
2	8:15 8:45		5T Mr. Tomu		4MT Mrs. Dongo	6H Mr. Hwindiri	4M Miss Mwenje	
3	8:45 9:15							
4	9:15 9:45	3MD Mrs. Madziwana	6C Mrs. Chiodze		7G Mrs. Gambara	7T Mr. Tarangeyi	4MB Mrs. Mabika	
5	9:45 10:15							
	10:15 10:45	B R E A K						
6	10:45 11:15	4J Mrs. Jenami	Hymn singing		7M Mr. Mhlanga	3R Mrs Rubaba	3MK Mrs. Makombe	
7	11:15 11:45							
8	11:45 12:15	5C Mrs. Chikonyora	5Z Mrs. Zhou	7V Mrs. Vilika	5D Mr. Dutlow	6CA Mrs. Chirau	6M Mr. Muza	3ML Miss Mlambo
9	12:15 12:45							
	12:45 13:00							

授業実践した美術教材（194 の美術教材、151 種類の美術教材）

●3rd Term 2003（３２種類の美術教材）

【絵画】　自由画、リアル・ドローイング、案山子の絵、蝶つくり、私の眼には何が映る？ジャカランダの木　⑥

【デザイン】マーブリング、スパッタリング、スクール・ユニフォームデザイン、リーフプリンティング、コラージュ、象形文字から発想する、名前を使ったデザイン　⑦

【工作】　動くおもちゃ、風車つくり、ねずみ凧、面つくり、キャンドルつくり、フルートつくり、葉っぱつくり、テレビつくり　⑧

【工芸】　紙飛行機（長距離タイプ・長飛行タイプ）、折り紙（鶴、風船、容器、孔雀、帽子、兜）、ラッピングカード、動く折り紙、雪型つくり　⑫

●1st Term 2004（２６種類の美術教材）

【絵画】　長い紙を使ったグループ絵画、リアルな表現（動物）、リアルな表現（友達）、リアルな表現（雑誌）、リアルな表現（花）、リアルな表現（学校）、リアルな表現（木炭を使った表現）、抽象絵画、笑い（私は誰かと笑うのが好き）、笑い（私を笑わせるのは何）、笑い（世界はあなたと一緒に笑う）、友情（ベスト・フレンド）、友情（友達と一緒にどこかに行った）、友情（必要な友達こそ真である）⑭

【デザイン】スパッタリング（昆虫）、スタンピング（昆虫）、デカルコマニー（昆虫）③

【工作】　めがねを作ろう（サングラス・めがね）、竹とんぼを作ろう、家やホテルを作ろう、鋏を使ったデザイン（蝶・帽子・花）⑦

【工芸】　スピニング・ペーパー（編むタイプ・切るタイプ）②

●2nd Term 2004（４４種類の美術教材）

【絵画】　テレビには何が映っている、リアルな表現（日本の新聞を使用）、リアルな表現（雑誌）、現在の私１５年後の私、車、バス、コンビ、家を作ろう（窓・ドア）ホテルを作ろう（窓・ドア）、フェンスのある家、フェンスの後ろに見えるもの、好きなスポーツを描こう、日本とジンバブエ、コラージュ絵画、⑭

【デザイン】　レタリング（ゴシック）、レタリング（変形ゴシック）、バルーン・レター、カタカナとひらがなを使用した構成デザイン、アルファベットを使って面白い顔を描こう、フロッタージュ（葉っぱ）、バチック、マーブリング　⑧

【工作】　ボート制作、町を作ろう、竹とんぼを作ろう、山を登る人、ピストル・拳銃、パラシュート、お面、指輪、ヘッドホン、バッグ　⑩

【工芸】　カラー風船、カッティングペーパー（くらげ）、カッティングペーパー（網）カッティングペーパー（ハート）、孔雀、羽ばたく鶴、容器（星）、容器（ペンケース）、容器（四角）、容器（蓋開く）マジック絵画、紙鉄砲　⑫

●3rd Term 2004（４６種類の美術教材）

【絵画】　音楽を聴いて描く「春よ、来い」松任谷由実、音楽を聴いて描く「アリよ、さらば」矢沢永吉、コラージュと絵画の融合表現、ビクトリア・フォールズをつくろう　④

【デザイン】　転がし版画、コラージュ：雑誌から文字を切り取る、コラージュ：動物、コラージュ：雨、発泡スチロール版画、迷路をつくろう、内側と外側、コララージュと絵画、（昆虫）、スタンピング（昆虫）、デカルコマニー（昆虫）⑩

【工作】　剣、マッチ箱で箪笥を作ろう、衣服、凧、財布、帽子：王様、帽子：お姫様、帽子：料理人、帽子：兵隊、新聞紙でバッグをつくる、新聞紙でバッグをつくる、めがねを作ろう（サングラス・めがね）、竹とんぼを作ろう、家やホテルを作ろう、

鋏を使ったデザイン（蝶・帽子・花）、⑱

【工芸】　クリスマス・カード、ポップ・アップ・カード：糸、ポップ・アップ・カード：開く、カッティングペーパー（くらげ）、カッティングペーパー（網）、カッティングペーパー（ハート）、孔雀、羽ばたく鶴、容器（星）、容器（ペンケース）、容器（四角）、容器（蓋開く）、容器（四角）；バッグ、容器（四角）：ディバッグ　⑭

●1st Term 2005（４６種類の美術教材）

【絵画】　リアル・ドローイング：友人の顔、自由制作：複合表現、自由画、リアル・ドローイング、毛糸を使った絵画：ボール、毛糸を使った絵画：木　⑥

【デザイン】　立体カード：星、立体カード：ハート、立体カード：クラブ、立体カード：スペード、立体カード：ダイヤ、立体カード：ケーキ、立体カード：男の子、女の子、立体カード：ハイランズ・スクール、立体カード：オリジナル、砂のアルファベット、糸を使ったデカルコマニー、三原色、コラージュ　：面白い顔、リーフプリンティング、コラージュ、⑯

【工作】　箱を使ったバッグ：クロス、箱を使ったバッグ：　一つ入れ、箱を使ったバッグ：二つ入れ、

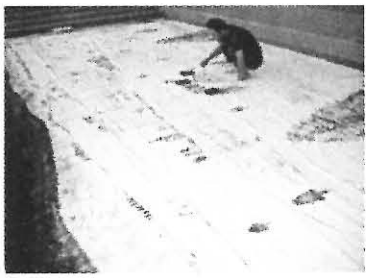
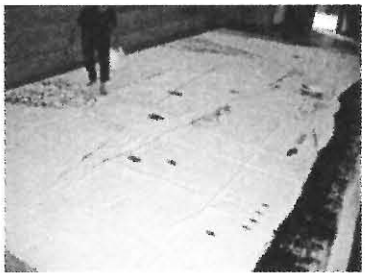
箱を使ったバッグ：オリジナル　④

【工芸】　紙飛行機（長距離タイプ・長飛行タイプ）、折り紙（鶴、風船、容器、孔雀、帽子、兜）、ラッピングカード、動く折り紙、雪型つくり、編み物、紙を使った編み物ベルト、女王冠、バングル、リング、イヤリング、ノースリング、レッグリング、ティースブロック、ペーパーワーク：オープン箱、星の箱　22

舞台美術制作（２０ｍ×５ｍ）

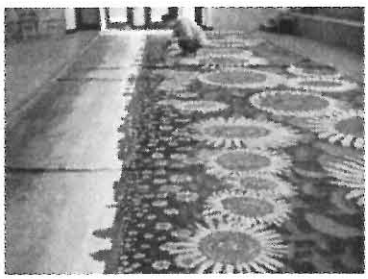
● **3rd Term 2003『雪山』（クリスマス・コンサート）**

制作：平成 15 年 11 月 14 日（金）15 日（土）16 日（日）

● **1st Term 2004『ひまわり畑』（音楽会）**

制作：平成 16 年 3 月 26 日（金）27 日（土）28 日（日）



● **2nd Term 2004『ノアの箱舟』（演劇）**

制作：平成 16 年 7 月 24 日（土）25 日（日）

● **3rd Term 2004『キリスト誕生』（クリスマス・コンサート）（演劇）**

制作：平成 16 年 11 月 6 日（土）7 日（日）

ジンバブエの美術教育
ー国際協力から見えたものー

新潟県立佐渡高等学校

美術科　教諭　五傳木　浩樹

アフリカ

ジンバブエ

ジンバブエの国旗

ジンバブエ事情

- 国名：ジンバブエ共和国
  (Republic of Zimbabwe) 2005.4現在
- 面積：39万km2(日本よりやや大きい)
- 人口：1,257万人(2003年推定)
- 人口増加率：1.7%(99～2000年：世銀)
- 首都：ハラレ(187万人:97年推定)、
  標高1,500m
- 人種：ショナ族(75%)、ンデベレ族(20%)、
  白人(1%)
- 言語：英語、ショナ語、ンデベレ語
- 宗教：部族宗教，キリスト教
- 国祭日：4月18日(独立記念日)

ジンバブエの歴史

1923年英国の自治植民地としての南ローデシア成立
1953年ローデシア・ニアサランド連邦成立
1963年連邦解体
1965年白人スミス政権の一方的独立宣言
1968年国連安保理対ローデシア経済制裁決議採択
1972年ローデシア解放団体、ゲリラ活動開始
1979年独立に向けて平和的解決合意
1980年ジンバブエとして独立、ムガベ首相就任
1987年ムガベ大統領就任
1990年ムガベ大統領再選
1996年ムガベ大統領三選
2002年(3月)ムガベ大統領四選

ジンバブエの経済

経済(単位 米ドル)
(農)たばこ、砂糖、メイズ、綿花
(鉱)クローム、アスベスト、ニッケル、金
(工)食品加工、金属製品、機械
57億米ドル(2003年:世銀) 450米ドル(2003年:世銀)
12.1%(2002年推定) 395.6%(2004年6月:政府統計)
71%(2001年:政府統計)
(1)輸出 2,124百万
(2)輸入 1,713百万
(1)輸出 たばこ、金、鉄合金、綿花
(2)輸入 機械類、化学品、石油、自動車
(1)輸出 南ア(10.4%)、英(9%)、マラウィ(8.1%)、ボツワナ(7.5%)
(2)輸入 南ア(46%)、英(5.6%)、中(3.8%)、独(3.6%) ジンバブエドル(ZWD) 1米ドル=824ZWD(2005年1月公定レート)

Ⅰ 現地の様子、現地での活動

1 ジンバブエの教育
2 Highlands School
3 美術授業の実際
4 Seke Teachers College
5 特別美術講座の実際
6 現地の芸術家との交流

ジンバブエの教育

Pre-School (3~5歳程度)
Primary School Grade1~Grade7 (6歳~12歳)
Secondary School Form1~Form6 (13歳~18歳)
O Revel : Form4修了(全国統一テスト:中卒程度)
A Revel : Form6修了(全国統一テスト:高卒程度)
College 2年
Technical 2年
University 3年~4年

Highlands Junior School
Harare, ZIMBABWE

ART TEACHER
Hiroki GODENGI

2006/3/16 10

学校概要(教員)

- HIGHLANDS SCHOOL (INFANT・JUNIOR)
- 創立 1945年
- 教員数(32名)
  Head(1)、Vice-Head(1)、Grade3(4)、Grade4(4)、Grade5(4)、Grade6(4)、Grade7(4)、Art(1:五條木浩樹)、Sports(2)、Music(1+1:)、Computer(1)、Shone(2)、Library(1)、Remedical(1)、
  【2003年】
  黒人教員:19名、白人教員11名、日本人教員2名
  【2004年】
  黒人教員:29名、白人教員1名、日本人教員2名
  【2005年】
  黒人教員:29名、白人教員1名、日本人教員2名

2006/3/16

学校概要(生徒)

- 生徒数 約700名
- Grade3(4クラス)Grade4(4クラス) Grade5(4クラス) Grade6(4クラス) Grade7(4クラス)
  全20クラス
  【2003年】
  黒人生徒70%、白人生徒30%
  【2004年】
  黒人生徒90%、白人生徒15%
  【2005年】
  黒人生徒98%、白人生徒2%
- 1997年 ユネスコ主催『Children's Summit』参加
  ジンバブエ代表校

活動の実際

- 役職：Art Teacher
- 活動内容：
  Grade3～Grade7
  全20クラスの美術授業担当（1クラス週2時間）
- 持ち時間：美術授業36時間
  ＋アッセンブリー2時間
  合計38時間
  特別活動　Extra Art

2006/3/16

		Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
1	7:45 8:15			Assembly		Assembly
2	8:15 8:45		6T Mr. Tanzi	4MT Mrs. Mutangadura	6H Mr. Hwindiri	4M Miss Mwanje
3	8:45 9:15					
4	9:15 9:45	3MD Mrs. Madziwana	6C Mrs. Chiodze	7G Mrs. Gambara	7T Mr. Tarangeyi	4MB Mrs. Maleka
5	9:45 10:15					
	10:15 10:45	B R E A K				
6	10:45 11:15	4J Mrs. Jenami	Hymn singing	7M Mr. Mhlenga	3R Mrs. Rubaba	3MK Mrs. Makombe
7	11:15 11:45					
8	11:45 12:15	5C Mrs. Chikonyora	7Y Mrs. Vilika / 5Z Mrs. Zhou	5D Mr. Dudlow	6CA Mrs. Chirau	6M Mr. Musa / 5ML Miss Mlambo
9	12:15 12:45					
	12:45 13:00					

美術授業1

美術教材

- 3rd Term 2003（32種類）

【絵画】 自由画、リアル・ドローイング、案山子の絵、蝶つくり、私の眼には何が映る？、ジャカランダの木

【デザイン】 マーブリング、スパッターリング、スクール・ユニフォームデザイン、リーフプリンティング、コラージュ、象形文字から発想する、名前を使ったデザイン

【工作】 動くおもちゃ、風車つくり、ねずみ凧、面つくり、キャンドルつくり、フルートつくり、葉っぱつくり、テレビつくり

【工芸】 紙飛行機（長距離タイプ・長飛行タイプ）、折り紙（鶴、風船、容器、孔雀、帽子、兜）、ラッピングカード、動く折り紙、雪型つくり

美術授業2

美術教材

- 1st Term 2004（26種類）

【絵画】 長い紙を使ったグループ絵画、リアルな表現（動物）、リアルな表現（友達）、リアルな表現（雑誌）、リアルな表現（花）、リアルな表現（学校）、リアルな表現（木炭を使った表現）、抽象絵画、笑い（私は誰かと笑うのが好き）、笑い（私を笑わせるのは何）、笑い（世界はあなたと一緒に笑う）、友情（ベスト・フレンド）、友情（友達と一緒にどこかに行った）、友情（必要な友達こそ真である）

【デザイン】 スパッターリング（昆虫）、スタンピング（昆虫）、デカルコマニー（昆虫）

【工作】 めがねを作ろう（サングラス・めがね）、竹とんぼを作ろう、家やホテルを作ろう、鋏を使ったデザイン（蝶・帽子・花）

【工芸】 スピニング・ペーパー（編むタイプ・切るタイプ）

美術授業3

美術教材

- 2nd Term 2004（44種類）

【絵画】 リアルな表現（日本の新聞を使用）、リアルな表現（雑誌/コラージュ）、現在の私と15年後の私、車を作ろう、バスを作ろう、コンビを作ろう、家を作ろう（窓・ドア）、ホテルを作ろう（窓・ドア）、フェンスのある家、フェンスの後ろに見える、好きなスポーツを描こう、日本とジンバブエ、マジック絵画、ボート制作、町を作ろう、紙鉄砲、山を登る人、ピストル・拳銃、パラシュート、お面、指輪、ヘッドホン、バッグ、カラー風船、ジンバブエから想像する

【デザイン】 フロッタージュ（葉っぱ）、バチック

【工作】 ねずみ凧、面つくり、フルートつくり、葉っぱつくり、テレビつくり

【工芸】 紙飛行機（長距離タイプ・長飛行タイプ）、折り紙（鶴、風船、容器、孔雀、帽子、兜）、ラッピングカード、動く折り紙

美術授業4

美術教材

- 3rd Term 2004（46種類）

【絵画】 音楽を聴いて描く「春よ、来い」松任谷由実、音楽を聴いて描く「アリよ、さらば」矢沢永吉、コラージュと絵画の融合表現、ビクトリア・フォールズをつくろう

【デザイン】 転がし版画、コラージュ：雑誌から文字を切り取る、コラージュ：動物、コラージュ：雨、発泡スチロール版画、迷路をつくろう、内側と外側、コララージュと絵画、（昆虫）、スタンピング（昆虫）、デカルコマニー（昆虫）

【工作】 剣、マッチ箱で箪笥を作ろう、衣服、凧、財布、帽子：王様、帽子：お姫様、帽子：料理人、帽子：兵隊、新聞紙でバッグをつくる、新聞紙でバッグをつくる、めがねを作ろう（サングラス・めがね）、竹とんぼを作ろう、家やホテルを作ろう、鋏を使ったデザイン（蝶・帽子・花）、

【工芸】 クリスマス・カード、ポップ・アップ・カード：糸、ポップ・アップ・カード：開く、カッティングペーパー（くらげ）、カッティングペーパー（網）、カッティングペーパー（ハート）、孔雀、羽ばたく鶴、容器（星）、容器（ペンケース）、容器（四角）、容器（蓋開く）、容器（四角）；バッグ、容器（四角）：ディバッグ

美術授業5

美術教材

- 1st Term 2005（46種類）

【絵画】リアル・ドローイング：友人の顔、自由制作：複合表現、自由画、リアル・ドローイング、毛糸を使った絵画：ボール、毛糸を使った絵画：木

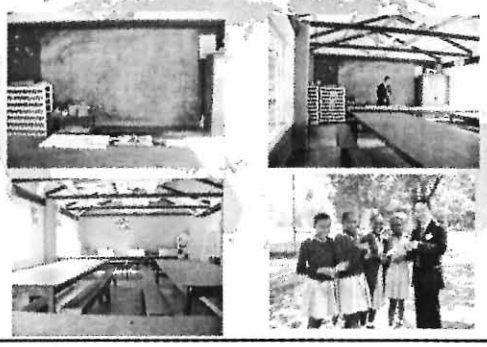
【デザイン】立体カード：星、立体カード：ハート、立体カード：クラブ、立体カード：スペード、立体カード：ダイヤ、立体カード：ケーキ、立体カード：男の子、女の子、立体カード：ハイランズ・スクール、立体カード：オリジナル、砂のアルファベット、糸を使ったデカルコマニー、三原色、コラージュ　：面白い顔、リーフプリンティング、コラージュ、

【工作】箱を使ったバッグ：バングル箱を使ったバッグ：一つ入れ、箱を使ったバッグ：二つ入れ、箱を使ったバッグ：クロス、箱を使ったバッグ：一つ入れ、箱を使ったバッグ：二つ入れ、箱を使ったバッグ：クロス、

【工芸】紙飛行機（長距離タイプ・長飛行タイプ）、折り紙（鶴、風船、容器、孔雀、帽子、兜）、ラッピングカード、動く折り紙、雪型つくり、編み物、紙を使った編み物ベルト、女王冠、バングル、リング、イヤリング、ノースリング、レッグリング、ティースブロック、ペーパーワーク：オープン箱、星の箱

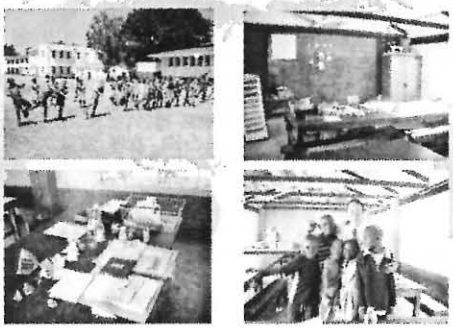
授業の実際1

2003年9月（3rd Team）



授業の実際2

2003年9月（3rd Team）



授業の実際3

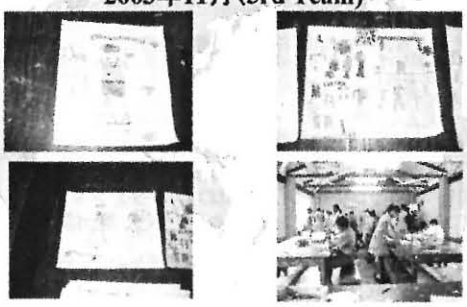
2003年9月（3rd Team）

授業の実際4

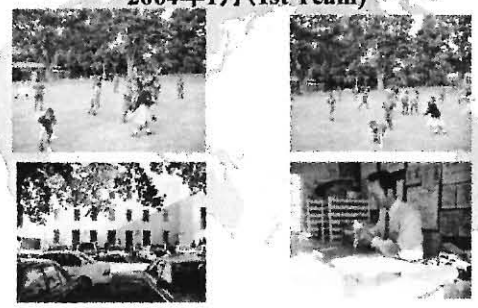
2003年10月（3rd Team）

授業の実際5

2003年11月（3rd Team）



授業の実際6
2004年1月（1st Team）



授業の実際7
2004年1月（1st Team）

授業の実際8
2004年2月（1st Team）

授業の実際9
2004年2月（1st Team）

授業の実際10
2004年2月（1st Team）

授業の実際11
2004年3月（1st Team）

授業の実際12
2004年3月（1st Team）

授業の実際13
2004年3月（1st Team）

授業の実際14
2004年3月（1st Team）

授業の実際15
2004年3月（1st Team）

授業の実際16
2004年3月（1st Team）

授業の実際17
2004年3月（1st Team）

授業の実際18
2004年3月（1st Team）

授業の実際19
2004年3月（1st Team）

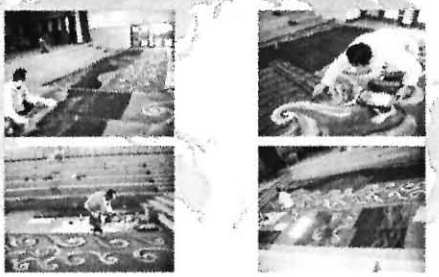
授業の実際20
2004年4月（1st Team）

授業の実際21
2004年4月（1st Team）

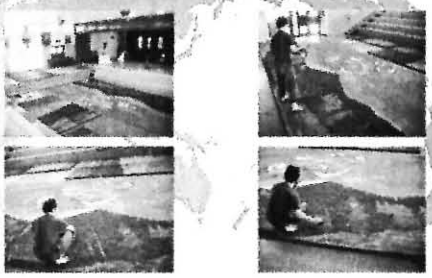
舞台美術・大壁画制作（20m×5m）
2003年11月（3rd Team）「雪山」

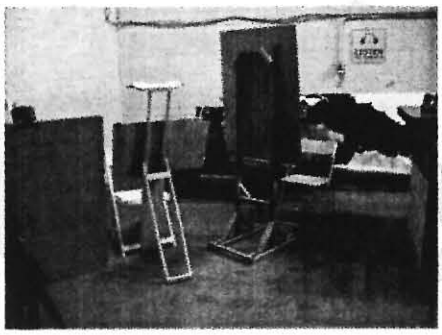
舞台美術・大壁画制作（20m×5m）
2004年3月（1st Team）「ひまわり畑」

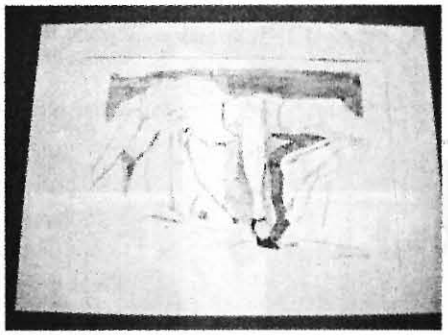
舞台美術・大壁画制作（20m×5m）
2004年7月（2nd Team）「Noah」

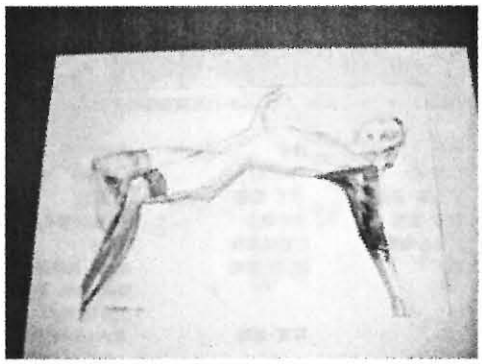


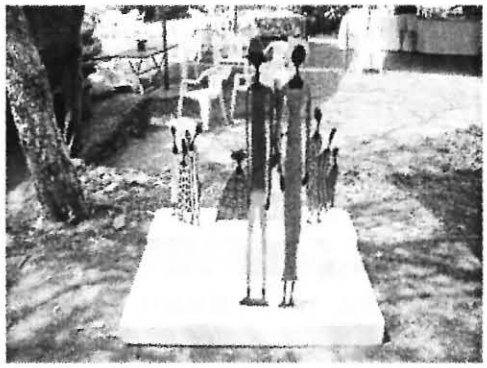
舞台美術・大壁画制作（20m×5m）
2004年11月（3rd Team）「キリスト誕生」











特別美術講座
SEKE TEACHERS COLLAGE
31/01/2005

特別美術講座
SEKE TEACHERS COLLAGE
08/02/2005

活動計画

2003年における美術授業計画
【3rd Term】 発達段階把握と現状把握
絵画・デザイン、工作・工芸表現を中心とした美術授業の展開

2004年における美術授業計画
【1st Term】 絵画表現を中心とした美術授業の展開
【2nd Term】 デザイン表現を中心とした美術授業の展開
【3rd Term】 工作・工芸表現を中心とした美術授業の展開

2005年における美術授業計画
【1st Term】 複合表現を中心とした美術授業の展開

2004年における美術指導計画
①こどもの「発達段階」を考慮に入れた美術教材開発、美術教材つくり並びに一人一人とのコミュニケーションを大切にした美術指導
②体系的な美術教材の開発並びに指導法の実践
③実際に指導した美術教材のテキスト作成
④各クラス担任との指導内容や指導法についての相談並びに意見交換

体系的な美術教育

- 【絵画】 1st Term 2004　Grade6-7(写実表現の芽生え)

想像	→	模写	→	実物・実際
(1時間)		(1時間)		(1時間)
想像画・自由画		模写・臨画		写実画
想像・空想		物を視る		物をよく視る
スキルの差		仮想の実物		本物
線		線・色・明暗		線・色・立体感・明暗・動勢・量感
		写真・雑誌		空間(五感)
				友人・花・風景

活動の成果

- 自由な創造性の経験
- 発達段階における美術のスキルの習得
- 体系的な美術教育の経験
- 「美術との対話」

実施授業総時数 2300
美術教材実施 194　　美術教材 151種類

ジンバブエの世界遺産

1 マナ・プールズ国立公園、サピとチュウォールのサファリ地区
自然遺産

2 大ジンバブエ国立遺跡
文化遺産

3 カミ遺跡群国立公園
文化遺産

4 マトボ丘陵
文化遺産

5 ビクトリアの滝
自然遺産

SEKE TEACHERS COLLAGE

現地の芸術家との交流

- Mikeとの出会い
  ジンバブエのデザイナー

「Hiroki, Art Teacher is an Artist ,so you must make many works .you should...」

Ⅱ ジンバブエの美術教育

1 学校教育における美術教育
2 英国式美術教育
3 日本式美術教育
4 ジンバブエの美術教育

学校教育における美術教育

- 学校教育に美術教育が存在することの意義
- 学校教育に美術教育が存在することの必要性
- 開発途上国においては学校教育に美術教育は存在しないという現実
- 日本の学校教育におけて美術教育がめざすもののリアリティーの模索

英国式美術教育

- 理念:「技能」習得優先と模写教育
- 美術＝「技能」(スキル)という感覚

日本式美術教育

- 芸術科の指導目標
  「芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、豊かな情操を養う」

①幅広い活動
②芸術を愛好する心情
③感性を高める
④芸術の諸能力を伸ばす
⑤豊かな情操を養う

ジンバブエの美術教育

- ジンバブエ独自の「美術教育」は存在しない。
- ジンバブエにおいては、旧宗主国の英国式の「美術教育」が存在する。
- 英国式の「美術教育」は、もともとはA School(白人学校)のために存在した。
- 1980年(ジンバブエ独立)以前、B School(黒人学校)には、「美術教育」は存在しなかった。
- 現在のジンバブエの学校教育における「美術教育」は英国式の「美術教育」を基本とし、それを踏襲している。
- 「Art／Craft」の授業はカリキュラムに存在するが、99.99%授業は実施されていない。

Ⅲ 今後の日本における美術教育のあり方

1 現状と課題
2 「技術」と「創造」
3 人間にとっての「美術」とは
4 「美術」との対話
5 新たな教科指導への試み

現状と課題

- 学校教育における「美術」教育の意義
- 「美術」教育がめざすもの
  こどもに「何」を見出すか
  教師としての「研鑽・修練」の必要性
- 「美術」教師としての存在意義
- 「美術教師」は「作家」なのかどうか

「技術」と「創造」

- 基礎基本としての「技術」の習得
- 一人一人の個性を導き出す「創造」的造形活動の経験

人間にとっての「美術」とは

- 「表現」
- 「鑑賞者」「作家」
- 「売り手」「買い手」
- 永遠の課題
- 自らに常に問いただす
  「人間にとっての美術とは」
  「美術教師とは」

「美術」との対話

- 「美術」との対話
- 「自分」との対話
- 「他人」との対話
- 「時代」との対話
- 「社会」との対話
- 「神」との対話(グローバルな視点)

新たな教科指導への試み

- 2005年からの美術指導
  佐渡高等学校　美術教育教材開発
  『五感を使った美術表現の試み』

五感：視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚
六感：直感

国際協力で見えたもの

- 「持続可能な」協力「持続可能な」援助
- 日本とは、日本人とは
- 日本の中における世界、
  世界の中における日本
- 自分を知る、他者を知る
  （未知なる世界との遭遇）
- 国際理解、グローバルな視野

平成１７年度　文部科学省・筑波大学　国際教育協力シンポジウム
「開発途上国における派遣現職教員の活躍」　－帰国隊員報告会－

日時：　平成１８年1月７日（土）　１４：１５～１４：４５
会場：　一橋記念講堂　学術総合センター内

体験発表：『　ジンバブエの美術教育　－国際協力から見えたもの－　』
発表者：　新潟県立佐渡高等学校　美術科教諭　五傳木　浩樹（ＧＯＤＥＮＧＩ　Ｈｉｒｏｋｉ）
平成１５年度１次隊　ジンバブエ　小学校教諭　（現職教員特別参加制度）

２００３年４月～２００５年３月までの２年間、JICA（独立行政法人　国際協力機構）の現職教員特別参加制度により、新潟県教育委員会から推薦を受けて海外派遣。

現地の教育現場、現地の学校で教鞭をとる。アフリカ南部に位置するジンバブエの首都ハラレにある、ジンバブエ随一の名門公立小学校（かつての宗主国英国においての A　School：白人学校）の ART TEACER（専任美術教師）として活動。現地の子供たちに、現地の学校で、現地語を使って美術（ART／CRAFT）を教える。いわゆる日本国の所有管理運営する海外の日本人学校ではない。その他、ジンバブエの教育大学で特別美術講座を担当。

国名　ジンバブエ共和国　（Republic of Zimbabwe）　2005.4 現在
面積　39 万 km2（日本よりやや大きい）
人口　1,257 万人（2003 年推定）
人口増加率 1.7%（99～2000 年：世銀）
首都　ハラレ（187 万人:97 年推定）、標高 1,500m
人種　ショナ族（75%）、ンデベレ族（20%）、白人（1%）
言語　英語、ショナ語、ンデベレ語
宗教　部族宗教，キリスト教
国祭日　4 月 18 日（独立記念日）

【ジンバブエの歴史】

1923 年	英国の自治植民地としての南ローデシア成立
1953 年	ローデシア・ニアサランド連邦成立
1963 年	連邦解体
1965 年	白人スミス政権の一方的独立宣言
1968 年	国連安保理対ローデシア経済制裁決議採択
1972 年	ローデシア解放団体、ゲリラ活動開始
1979 年	独立に向けて平和的解決合意
1980 年	ジンバブエとして独立、ムガベ首相就任
1987 年	ムガベ大統領就任
1990 年	ムガベ大統領再選
1996 年	ムガベ大統領三選
2002 年（3 月）	ムガベ大統領四選

【ジンバブエの教育制度】

Pre-School		（3 歳～5 歳程度）
Primary School	Grade1～Grade 7	（6 歳～12 歳）
Secondary School	Form1～Form 6	（13 歳～18 歳）
O　Revel：Form 4 修了（全国統一テスト：中卒程度）（13 歳～15 歳）義務教育終了		
A　Revel：Form 6 修了（全国統一テスト：高卒程度）（16 歳～18 歳）		
College	2 年	（18 歳～）
Technical	2 年	（18 歳～）
University	3 年～4 年	（18 歳～）

Highlands Junior School : Harare, ZIMBABWE

独立行政法人国際協力機構（JICA）/青年海外協力隊（JOCV）　五傳木浩樹（平成15年度第1次隊）

－学校の概要－

- HIGHLANDS　SCHOOL　（INFANT・JUNIOR）　　創立　1945年
- 教員数（32名）

Head(1)、Vice-Head(1)、Grade3(4)、Grade4(4)、Grade5(4)、Grade6(4)、Grade7(4)、
Sports (2)、Music(1＋1)、Art(1:五傳木浩樹)、Shona(2)、Library(1)、Remedical(1)、Computer(1)

【2003年】黒人教員：19名、白人教員11名、日本人教員2名（JOCV）
【2004年】黒人教員：29名、白人教員1名、日本人教員2名（JOCV）
【2005年】黒人教員：29名、白人教員1名、日本人教員2名（JOCV）

- 生徒数　約700名　　HIGHLANDS（JUNIOR）SCHOOL
- Grade3(4クラス) Grade4（4クラス）Grade5(4クラス）Grade6(4クラス）Grade7(4クラス）
  全20クラス

【2003年 3rd Term】　黒人生徒70%、白人生徒30%
【2004年 1st Term】　黒人生徒85%、白人生徒15%
【2004年 2nd Term】　黒人生徒90%、白人生徒10%
【2004年 3rd Term】　黒人生徒93%、白人生徒　7%
【2005年 1st Term】　黒人生徒98%、白人生徒　2%

- 1997年　ユネスコ主催『Children's Summit』英国参加ジンバブエ国代表校(1校)
- アテネ・オリンピック　水泳ゴールド・メダリスト　Kirsty Conventry　出身学校

－活動の内容－

- 役職：Art Teacher（主任美術教師）
- 活動内容：Grade3～Grade7（日本の小学校2年～6年）
  全２０クラスの美術授業担当（１クラス週 2時間）Extra Art Lesson
- 活動授業持ち時間：美術授業３６時間＋アッセンブリー２時間　合計３８時間

授業実践した美術教材（194の美術教材、151種類の美術教材）

- **3rd Term 2003（３２種類の美術教材）**

【絵画】　自由画、リアル・ドローイング、案山子の絵、蝶つくり、私の眼には何が映る？ジャカランダの木　⑥
【デザイン】　マーブリング、スパッタリング、スクール・ユニフォームデザイン、リーフプリンティング、コラージュ、象形文字から発想する、名前を使ったデザイン　⑦
【工作】　動くおもちゃ、風車つくり、ねずみ凧、面つくり、キャンドルつくり、フルートつくり、葉っぱつくり、テレビつくり　⑧
【工芸】　紙飛行機（長距離タイプ・長飛行タイプ）、折り紙（鶴、風船、容器、孔雀、帽子、兜）、ラッピングカード、動く折り紙、雪型つくり　⑫

- **1st Term 2004（２６種類の美術教材）**

【絵画】　長い紙を使ったグループ絵画、リアルな表現（動物）、リアルな表現（友達）、リアルな表現（雑誌）、リアルな表現（花）、リアルな表現（学校）、リアルな表現（木炭を使った表現）、抽象絵画、笑い（私は誰かと笑うのが好き）、笑い（私を笑わせるのは何）、笑い（世界はあなたと一緒に笑う）、友情（ベスト・フレンド）、友情（友達と一緒にどこかに行った）、友情（必要な友達こそ真である）⑭

【デザイン】　スパッタリング（昆虫）、スタンピング（昆虫）、デカルコマニー（昆虫）③

【工作】　めがねを作ろう（サングラス・めがね）、竹とんぼを作ろう、家やホテルを作ろう、鋏を使ったデザイン（蝶・帽子・花）⑦

【工芸】　スピニング・ペーパー（編むタイプ・切るタイプ）②

- **2nd Term 2004（４４種類の美術教材）**

【絵画】　テレビには何が映っている、リアルな表現（日本の新聞を使用）、リアルな表現（雑誌）、現在の私１５年後の私、車、バス、コンビ、家を作ろう（窓・ドア）ホテルを作ろう（窓・ドア）、フェンスのある家、フェンスの後ろに見えるもの、好きなスポーツを描こう、日本とジンバブエ、コラージュ絵画、⑭

【デザイン】　レタリング（ゴシック）、レタリング（変形ゴシック）、バルーン・レター、カタカナとひらがなを使用した構成デザイン、アルファベットを使って面白い顔を描こう、フロッタージュ（葉っぱ）、バチック、マーブリング　⑧

【工作】　ボート制作、町を作ろう、竹とんぼを作ろう、山を登る人、ピストル・拳銃、パラシュート、お面、指輪、ヘッドホン、バッグ　⑩

【工芸】　カラー風船、カッティングペーパー（くらげ）、カッティングペーパー（網）カッティングペーパー（ハート）、孔雀、羽ばたく鶴、容器（星）、容器（ペンケース）、容器（四角）、容器（蓋開く）マジック絵画、紙鉄砲　⑫

- **3rd Term 2004（４６種類の美術教材）**

【絵画】　音楽を聴いて描く「春よ、来い」松任谷由実、音楽を聴いて描く「アリよ、さらば」矢沢永吉、コラージュと絵画の融合表現、ビクトリア・フォールズをつくろう　④

【デザイン】　転がし版画、コラージュ：雑誌から文字を切り取る、コラージュ：動物、コラージュ：雨、発泡スチロール版画、迷路をつくろう、内側と外側、コララージュと絵画、（昆虫）、スタンピング（昆虫）、デカルコマニー（昆虫）⑩

【工作】　剣、マッチ箱で箪笥を作ろう、衣服、凧、財布、帽子：王様、帽子：お姫様、帽子：料理人、帽子：兵隊、新聞紙でバッグをつくる、新聞紙でバッグをつくる、めがねを作ろう（サングラス・めがね）、竹とんぼを作ろう、家やホテルを作ろう、鋏を使ったデザイン（蝶・帽子・花）、⑱

【工芸】　クリスマス・カード、ポップ・アップ・カード：糸、ポップ・アップ・カード：開く、カッティングペーパー（くらげ）、カッティングペーパー（網）、カッティングペーパー（ハート）、孔雀、羽ばたく鶴、容器（星）、容器（ペンケース）、容器（四角）、容器（蓋開く）、容器（四角）；バッグ、容器（四角）：ディバッグ　⑭

- **1st Term 2005（４６種類の美術教材）**

【絵画】　リアル・ドローイング：友人の顔、自由制作：複合表現、自由画、リアル・ドローイング、毛糸を使った絵画：ボール、毛糸を使った絵画：木　⑥

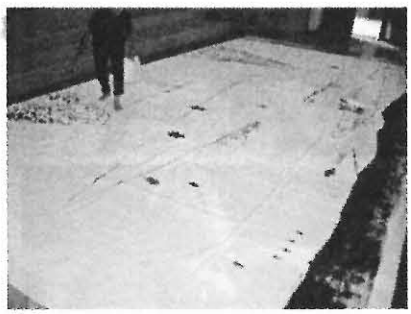
【デザイン】　立体カード：星、立体カード：ハート、立体カード：クラブ、立体カード：スペード、立体カード：ダイヤ、立体カード：ケーキ、立体カード：男の子、女の子、立体カード：ハイランズ・スクール、立体カード：オリジナル、砂のアルファベット、糸を使ったデカルコマニー、三原色、コラージュ　：面白い顔、リーフプリンティング、コラージュ、⑯

【工作】　箱を使ったバッグ：クロス、箱を使ったバッグ：　一つ入れ、箱を使ったバッグ：二つ入れ、箱を使ったバッグ：オリジナル　④

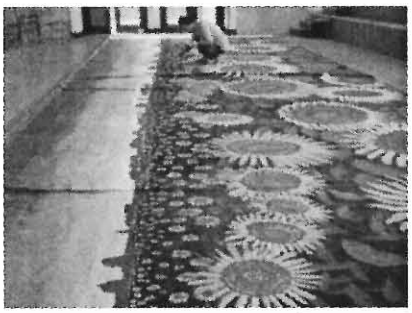
【工芸】　紙飛行機（長距離タイプ・長飛行タイプ）、折り紙（鶴、風船、容器、孔雀、帽子、兜）、ラッピングカード、動く折り紙、雪型つくり、編み物、紙を使った編み物ベルト、女王冠、バングル、リング、イヤリング、ノースリング、レッグリング、ティースブロック、ペーパーワーク：オープン箱、星の箱　22

舞台美術制作（２０ｍ×５ｍ）

● 3rd Term 2003『雪山』（クリスマス・コンサート）
制作：平成 15 年 11 月 14 日（金）15 日（土）16 日（日）



● 1st Term 2004『ひまわり畑』（音楽会）制作：平成 16 年 3 月 26 日（金）27 日（土）28 日（日）



● 2nd Term 2004『ノアの箱舟』（演劇）制作：平成 16 年 7 月 24 日（土）25 日（日）

● 3rd Term 2004『キリスト誕生』（クリスマス・コンサート）（演劇）
制作：平成 16 年 11 月 6 日（土）7 日（日）

Highlands Junior School : Art Time Schedule 2004 Hiroki GODENGI

		Monday	Tuesday		Wednesday	Thursday	Friday	
1	7:45 8:15				Assembly		Assembly	
2	8:15 8:45		5T Mr. Tomu		4MT Mrs. Dongo	6H Mr. Hwindiri	4M Miss Mwenje	
3	8:45 9:15							
4	9:15 9:45	3MD Mrs. Madziwana	6C Mrs. Chiodze		7G Mrs. Gambara	7T Mr. Tarangeyi	4MB Mrs. Mabika	
5	9:45 10:15							
	10:15 10:45	B R E A K						
6	10:45 11:15	4J Mrs. Jenami	Hymn singing		7M Mr. Mhlanga	3R Mrs. Rubaba	3MK Mrs Makombe	
7	11:15 11:45							
8	11:45 12:15	5C Mrs. Chikonyora	5Z Mrs. Zhou	7V Mrs. Vilika	5D Mr. Dutlow	6CA Mrs. Chirau	6M Mr. Muza	3ML Miss Mlambo
9	12:15 12:45							
	12:45 13:00							

ウズベキスタンでの活動

藤田　昌美
（15-1，ウズベキスタン，青少年活動，長野市立鬼無里中学校）

１．ウズベキスタンの概要

（１）ウズベキスタンの位置

ウズベキスタンは、中央アジアにあります。日本人の多くは、アフガニスタン？パキスタン？と聞き返すか、「どこにあるか分からない。」という人たちが多いです。周りを～スタンという国で囲まれています。カザフスタン、トルクマニスタン、タジキスタン、クルグジスタン（キリギスのことです）です。

（２）ウズベキスタンといえば

ウズベキスタンと言って思いつくのが、シルクロードでしょうか。アトラスは、絹でおられた民族衣装になる布です。独特の模様は、クジャクの羽だそうです。今は、色々な模様にアレンジされ、主産物の綿花や花の模様でも織られています。ラクダも、ウズベキスタンになくてはなりません。昔のキャラバンを思い出させてくれるラクダは、のんびりとしたウズベキスタンによく似合います。ウズベキスタンの観光地と言えばサマルカンドです。シルクロードのオアシスとして栄えた町です。レギスタン広場は、神学校でした。人々は夏を待ちます。というのは、大好きなスイカとメロンが熟すからです。１個２０ｋｇもあるスイカとメロンがごろごろしています。

２．活動について

（１）活動場所

サマルカンド孤児院Ｎｏ．５

児童・生徒は７才から１７才

孤児院の生活スケジュール

６：００	起床
７：００	朝食
８：００	学校始業
１２：００	学校終業
１：００	昼食
２：００	宿題
４：００	クラブ活動
７：００	夕食
９：００	就寝

※ウズベキスタンでは、２部制なので午後から学校に通う子ども達は、１時までに学校へ行きます。孤児院の子どもの多くは、午前中に学校へ行っていました。

私は、１２時に孤児院に行って子どもたちが、学校から帰って来るのを迎えて、一緒に昼食をいただき、２時からの宿題の時間に、日本語を４時からのクラブ活動の時間に英語を教えました。時間の合間を見たり、子どもが授業に飽きてきたら、折り紙や工作の時間に代えて子どもたちと過ごしました。

（２）活動内容

①日本語

日本語の授業では、文法や会話だけでは集中できないので、単語カルタや童謡を随時入れました。１年半教えましたが、会話ができると言うところまではいきませんでした。簡単な自己紹介文を言ったり、カルタや物を見て単語をいったり、痛い！嬉しい！などの単文を言えるくらいにはなりました。

②英語

英語の授業は、１年半前から初めて学校で行われたと言うことです。４年からＡＢＣを習うというのですが、６年生は６年生の教科書を使い、７年生は７年生の教科書を使って授業をすると言うので、６，７年の子ども達はＡＣＢもあやふやなのに、現在完了形ががんがんでて来て、私の所に詰めかけ、一時は、英語授業だけを１ヶ月くらいしたこともありました。

③折り紙

折り紙も最初は教えていましたが、そのうち本を見て色々な物を作れるようになり、恐竜も作れるようになりました。６０回くらい折ったり曲げたりするのもへっちゃらになった子どももいて、今度は、その子達が私に代わって他の子ども達に教えてくれました。

④日本文化紹介

笹に代わる木がなかったので、模造紙に絵を描き、そこに願い事を書いて貼りました。中には、「お母さん、泣かないでね。お父さん、お酒飲まないでね。僕たちいつか幸せに暮らそうね。」と書いた子どもがいたり、「学校で勉強頑張って５をもらったら、お母さん喜んでね。」と書いたりする子もいて、心がじ～んときました。笑顔の裏にも、私の知らない顔があることを改めて知りました。

（３）桃太郎

①日本語の学習で、ひらがなを読めるようになったので、昔話を読みました。ちょうどその時、サマルカンド市内で日本語学習発表会があるのを聞いて、私達も参加しようと思い、劇で発表することにしました。子ども達と色々お話しを読んで、一番気に入ったのが「桃太郎」でした。実際におむすびを食べてどんな物かを知ったり、段ボールや枝、布を集めて大道具、小道具を作

ったりと劇に向けて始まりました。子どもたちは普通でも２言語を話せるので、日本語を覚えるは、比較的簡単のようでした。しかし、練習に来なかったり、子どもが家に帰っていたり、他の子の練習を見ていたら飽きてしまってどこかに行ってしまったりと、全員集まっての練習がなかなか進みませんでした。当日は、何とか発表することができ上位入選を果たす事ができました。

②今度は、首都に昇っての発表です。子ども達も首都は憧れの的です。なんとしも、優勝目指して頑張ろうと練習に励みました。当日は、思わぬ観客の多さで急遽マイクを持ちながらでないよ声が届かないような状態になりったり、ステージが練習中よりも大きかったため、段取りが上手くいかなかったなりにも、見事優勝することができました。

（４）同期隊員との活動

ウズベキスタンにはアラル海があります。昔は、漁業で栄えた町でしたが、ウズベキスタンの主産物である、綿花に膨大な灌漑をしたため、今日では、海に水はなく、村人の生活は大変厳しくなってしまった場所です。夏休みということもあって、１０人か１５人来てくれたら嬉しいな、と考えていた私達ですが、１０時からのスタートでは、村のどこにこんなに人がいたんだろう？と思うくらい、教室は満杯になりました。

内容は、

１．あいさつ。やはりあの訓練所時代にならった折り紙の口は役に立ちました。

２．隊員一人一人の手品

３．新聞紙でかぶとと警察帽子

４．折り紙「金魚と風船」

５．子どもの歌の「手をたたきましょ」です。

大人も子どももこんなに一生懸命見てくれるなら、もっと新聞紙や折り紙をもってきて、内容もしっかりと考えるべきだったたと反省をしました。

（５）巡回劇

以前、サマルカンド市内の５つの障害児施設を廻り、あまりの施設の悪さにショックを受けました。また、ウズベキスタンには孤児院の数がとても多く、市内だけでも５つありました。何かできることはないかと考え巡回劇をすることにし、孤児院の子ども達だけでは、２時間の講演は難しいので、サマルカンド隊員の力を借りました。

内容は

１．あいさつ

２．隊員一人ひとりからの手品

３．子ども達のサルカニ合戦
４．隊員のディズニーダンス
５．「手をたたきましょ」
６．子ども、隊員合同のソーラン節

子ども達は、一度演劇をやったことがあるので役決めも大道具、小道具も、本を見てせっせと進めること事ができました。隊員に婦人子ども服の仲間がいたのでディズニーの服もあっという間に縫ってもらいました。やはり、隊員も仕事があり、子ども達もなかなか集まり通しての練習はできませんでしたが、なんとか発表することができました。この巡回劇は、本当ならば全ての孤児院や施設の子ども達の所へ行って見せたかったのですが、広い場所がなかったり、私達の孤児院まで来れるバスを手配できなかったりと色々な問題があり、結局、４回発表しました。

（６）エイズ撲滅運動

１２月１日はエイズデーです。サマルカンドの看護士隊員がエイズデーに向けて、看護士学校や病院でエイズに関するセミナーを開いていました。その話を聞いて、また孤児院の子ども達と何かできないだろうか相談をしたところ、１２月１日に首都のタシュケントで、エイズ撲滅運動を学校や地区２０ヶ所ぐらいで活動を行うということを聞いたので、ぜひ私達も参加したいと申し出をしました。まず、エイズといってもパットは浮かばない子ども達に、看護士隊員から子ども達用に性教育からのセミナーを開いてもらいました。エイズと名前は知っているものの、それがどういうものなのか知らなかった子ども達は、熱心に話を聞いていました。

当日は、首都のある学校２ヶ所へ行って、ＨＩＶに関する基礎知識を伝えました。そして、子ども達の中でも、民族が違い、言葉が違い、隊員も混ざって年齢も性別も違うけれど、思いを一つにすれば何かできることを、ソーラン節で披露しました。この活動では、命の大切さ、一人ひとりの大切さを子ども達が考え、伝えることのできた活動になりました。

３．最後に

活動後半には、教育委員会にも足を運び、何とか孤児院の現状を知ってもらったり、システムの改善をするよう教育長や係りの人とも話し合いをもちました。しかし、時間が足らず中途半端で終わってしまいました。今、こうやって振り返ってみると、もっと子ども達のためにこれができたのに、ああすれば良かった。と反省ばかりです。

ウズベキスタン

15年度1次隊
H15. 7 ～ H17. 3
青少年活動　藤田 昌美

ウズベキスタン概要 1

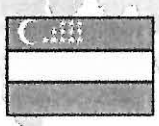
中央アジア

ウズベキスタン概要 2

1.国名　ウズベキスタン共和国
2.面積　44万7,400平方km（日本の約1.2倍）
3.人口　2,475万人（2001年7月推定）
4.首都　タシケント
5.民族　ウズベク人80%、ロシア人5.5%、タジク人5%、
　カザフ人3%、カラカルパク人2.5%、タタール人1.5%、
　その他（イラン、トルコなど）2.5%
6.言語　ウズベク語、ロシア語、各民族の言葉など
7.公用語　ウズベク語
8.宗教　イスラム教 88%（スンニー派多）、ロシア東方正教会 9%
　その他 3%

ウズベキスタン概要 3

9.ウズベキスタン国旗



青　・・・・ 空と水
白　・・・・ 平和と主産物の綿花
緑　・・・・ 自然と農業
赤　・・・・ 国を守る決意と命の象徴
三日月 ・・・・ 伝統に基づいたもので、
　イスラム教の影響です。
12の星 ・・・・ 県を表しています。

ウズベキスタンの概要 4

民族生地のアトラス

ラクダ

ウズベキスタン概要 5

レギスタン広場

スイカとメロン

孤児院概要 1

1. 活動場所　サマルカンド孤児院No. 5
2. 児童・生徒　7才～17才　約150人
3. 孤児院生活スケジュール

6:00 起床
7:00 朝食
8:00 学校始業
12:00 学校終業
1:00 昼食
2:00 宿題
4:00 クラブ活動
7:00 夕食
9:00 就寝

孤児院概要 2

1. 活動内容　日本語、英語、日本文化紹介
2. 活動時間　12:00～19:00
3. 授業時間割

2:00～2:50　日本語 上級
3:00～3:50　日本語 初級
4:00～5:00　英　語 上級
5:10～6:00　英　語 初級
6:00～7:00　談話、折り紙、工作など

日常生活 1

あ～おいしい！

庭のブロック敷きを手伝っています！

日常生活 2

祝日や正月は必ずお祝い

踊りやパフォーマンスはお見事！

普段の授業の様子

習字の授業

英語の授業

折り紙

かぶとや警察帽子は大人気

お相撲さんや動く折り紙も大人気

七夕

笹の葉がないので・・・・

歌も歌いました。

桃太郎 1

おむすびって、おいしい～

大道具、小道具作り

桃太郎 2

着物って動きにくいね～

ひっかくぞ～！！ウッキー

桃太郎 3

優勝、おめでとう！

憧れのタシュケント！

合気道

礼儀もにつけなくっちゃな

女の子の防衛にも

モイナック 1

昔、漁業で栄えた町

車もない寂れた町

モイナック 2

一つひとつに見入る子どもたち

1. あいさつ
2. 手品
3. 新聞紙で帽子作り
4. 折り紙
5. 童謡

モイナック 3

午前と午後の2回に分けました

目を丸くして見てくれました。

モイナック 4

大人も子供もみんな集まって来ました。

巡回劇 1

やっぱりこの口から

1. あいさつ(子どもと隊員)
2. 手品(隊員)
3. サルカニ合戦(子ども)
4. ディズニーダンス(隊員)
5. 童謡(隊員)
6. ソーラン節(子どもと隊員)

巡回劇 2

サルカニ合戦

サマルカンド隊員

巡回劇 3

練習に練習を重ねた
ヨッチョレ

楽しんでくれたかな？！

エイズ撲滅運動　1

性教育

赤ちゃんの誕生

エイズ撲滅運動　2

感染経路　クイズ

感染経路

エイズ撲滅運動　3

子どもが主体ですすました

満足げの顔

ありがとう

いつかまた会いましょう！

すべての子どもたちに笑顔と自信とつながりを

～音楽教育活動を通して出会った子どもたちから～

枝重　美香

（14-1，バヌアツ，小学校教諭，滋賀県草津市立老上小学校）

1、はじめに

学校へも通えず、お腹をすかせて涸れた地面に座り込んでいるやせ細った子どもたち

・・・小学生のときに見た映像が頭から離れず、いつか現地に行って自分のできることをしたいという思いがかない、２００２年度から始まった「現職教員特別参加制度」に第一期生として参加させていただくことができました。派遣国は大洋州に位置するバヌアツ共和国。そこで音楽教育を中心とした活動をしていくことになりました。

日本とは大きく異なった生活や文化はとても楽しく興味深いものでしたが、教育への考え方や教育制度の違いには戸惑うことが多く、一体何のために来たのだろうと悩みながらの活動でした。しかし、子どもたちの笑顔に励まされて初心に立ち戻り、自分のできることを精一杯やっていこうと思うことができました。そこでの模索しながらの活動を報告させていただきたいと思います。

2、バヌアツ共和国の概要

（1）自然を生かし、自然に生かされた生活

オーストラリアの東、南太平洋に浮かぶ８２の島々からなるバヌアツ共和国はすべての島を合わせても新潟県とほぼ同じ面積で、人口はおよそ１９万人という小さな国です。首都や州都など一部の地域には電気や水道が通り、先進国から輸入した工業製品を使って生活しているところもありますが、ほとんどの地域では雨水を溜めて飲み、薪を拾って食事を作り、バナナやココナッツの実、葉などをうまく利用して生活に必要なものを作り出すというような自然と共存した生活を営んでいます。美しい海に囲まれた緑豊かな国なので、

色とりどりの果物など一年中食べ物に困ることはなく、人々はたいへんおおらかで陽気に暮らしています。

（2）バヌアツの子どもたち

自然を生かして生活していくことは、人々の協力なしにはありえません。子どもたちもその一員として、家族のために仕事をします。薪き拾いや水汲み、洗濯、数キロメートル離れた畑から作物を運んでくることなど、子どもとはいえかなりの重労働を課せられます。

酋長制の残るバヌアツは厳しい縦社会なので、子どもは大人の言うことに従い、家庭や地域の中で生きるすべや社会のルールを学んでいくのです。

そのため、子どもたちは幼いうちからブッシュナイフを使って生活に必要なものを作り出

すなど、たくましい生活力を身につけていきます。しかし、大人の言うことに黙って従うことが当然とされているからか、自分の思いを表現することは苦手で、人前では萎縮してしまう姿を目にすることがたくさんありました。正面を向いて話ができない、大好きな歌も下を向いてしか歌えず、前に立ってもみんなに背を向けてしまう・・・こんな姿をなんとかしたい、もっと自信をもって表現できるようになってほしいという思いで活動に取り組んでいきました。

（3）バヌアツの音楽

①カスタムソング

バヌアツは村や島ごとの伝承文化が色濃く残り、生活に大きな影響を与えている国でもあります。世界的に知れ渡ったバンジージャンプもその一つですが、他にも村独自のお祭りや儀式があり、そこで代々伝わっている歌や踊り、タムタムという木彫りの太鼓によるリズムなどは大変すばらしいものです。しかし、これらはすべて口承文化であるため、伝わっていく過程で変容してしまうことや、また、新しい音楽の流行などによって若者が離れていく傾向にあることも危惧されています。

②教会での合唱

約９割の人たちがキリスト教徒であるバヌアツでは、ことあるごとに教会に集まり、讃美歌などを合唱しています。伴奏する楽器がなくても人々は美しいハーモニーで歌うことができます。各家庭でも食事の前に感謝の気持ちを込めて歌ったり、団欒のひとときに家族そろって歌を楽しんだりするなど、人々の生活からは歌を切り離すことができないのではないかと思います。

③ストリングバンド

どこから伝わってきたのかはわかりませんが、弦楽器を中心としたストリングバンドが流行し、各島でも自分たちでギターやウクレレ、ベースなどを作りだし、それらを演奏しながらリズムよく歌をうたうことが楽しまれています。子どもたちも大好きで真似をして歌ったり、木を削って自分たちで楽器を作り、感覚だけで音を合わせて演奏を楽しんだりしていました。人々のものを作り出す力と耳のよさにはいつも驚くばかりでした。

④学校での位置づけ

このように日常的に親しみ、愛されている音楽ですが、学校では「芸術」の中の一つで、教科としては成り立っていませんでした。音楽は学ぶものではなく、遊びでするものだと考えられていたこと、楽譜が読めないことや楽器が演奏できないなどの理由で先生たちが教えようとせず、学校で子どもたちが音楽を学ぶことはほとんどありませんでした。

３、任地での活動

首都から約１００キロメートル離れた島の小学校に赴任した私は、１～６年生と併設する中学校の３年生までの全９クラスの音楽科の授業を受け持つことになりました。前校長が日本の学校を訪問した際、そこでの音楽科の授業に感銘を受けて指導者を要請したそうで、私はその学校の二代目の隊員として活動することとなりました。

（1）新しい曲の指導

前任の方が授業にふさわしいと思えるほとんどの曲を全学年に指導されていたため、初めのうちは既習の曲を二部合唱にしたり、歌いながら手遊びやリズム打ちができるようにしたりするなどアレンジを加えて楽しめるようにしていたのですが、それでは間に合わなくなってきました。教材を探そうにも書店やＣＤショップがあるわけもなく、自分で作り出すしかありません。リズム打ちをするのにも打楽器がなかったため、植物の種を集めてきてシェーカーを作ったり、ココナッツの殻をたたいて音を出したり、砂浜に落ちているコーラルなどでもおもしろい音がでないかと試してみたりしました。

また、歌については子どもたちが好きそうな日本の曲をビスラマ語というバヌアツの公用語に訳して紹介したり、自分で作詞作曲して指導したりもしました。赴任して間もない頃はビスラマ語がうまく使えず、同じ学校の先生に教えてもらいながらの作業だったのでとても難しく、長い時間を費やすこととなりました。

（2）楽器の演奏指導

その学校にはＪＩＣＡから購入していただいたキーボードや前任の方が日本から送ってもらわれた鍵盤ハーモニカ、リコーダーが当初からあったのですが、私の日本の所属校の子どもたちにもバヌアツとのつながりをもってほしいと願い、家庭に眠っている使わなくなった楽器はないかと呼びかけ、それらを送ってもらうことにしました。

その結果、さらに鍵盤ハーモニカやリコーダー、また学校の廃棄処分となるタンバリンやトライアングル、すずといった打楽器も集まり、随分と楽器を充実させることができました。鍵盤ハーモニカも一クラス全員分の台数が確保でき、低学年からの指導を始めることができるようになりました。

一年生から指導を始め、どの子も毎回しっかりと練習することができるようになったことで、子どもたちはどんどん技能を上達させていきました。また、放課後にも一人ひとりのニーズに合わせ、個別に練習できるようなクラブ活動の時間を設けたところ、キーボードで好きな曲の伴奏をしながら歌うことを楽しめるようになる子どもも現れました。

「コードを覚えたい」「楽譜が読めるようになりたい」そんな思いから、音階や音符について学習する指導も始めていきましたが、読譜については日本の子ども同様、苦手意識をもつ子どもたちが多く、効果的な指導法を模索するにとどまりました。

（3）現地のものを取り入れて

教材開発を進めていく中で、日本や西洋の曲を取り入れているだけで、はたしてよいのだろうかという疑問がわきおこってきました。私の赴任先は州都であったため、各島から仕事のために移り住んできている人たちが多く、その土地代々の文化はほとんど見ることができませんでした。赴任校で尋ねても、カスタムソングやダンスを知っている子どもたちは全くと言っていいほどいなかったのです。せっかくバヌアツには独自のすばらしい文化が存在するのにこのままでは廃れてしまうのではないか、もっと自分たちの国の文化を大切にし、誇りをもって残していってほしい、そんな思いからバヌアツの伝統的な音楽を授業でも取り入れていくことにしました。

そこで、他の島から来ていた先生に自分の島でのカスタムソングを教えてもらい、楽譜に起こしていきました。指導はその先生から直接子どもたちにしてもらったのですが、これは音楽の指導に逃げ腰だった先生にも授業に関わってもらえるよい機会となり、彼女の自信にもなりました。また子どもたちにとっても初めて出会う自分たちの国の伝統的な歌だったので、とても喜んで学習することができました。

（4）音楽会の開催

「ミュージックナイトを開くので、子どもたちに歌の発表をさせてほしい。」校長からこう頼まれたのはその日の数週間前のことでした。ミュージックナイトとは、夜に開く音楽会のことなのですが、子どもたちのがんばりを発表する場というのではなく、学校運営のための資金集めが目的で、音楽は人集めのために利用するということだったのです。でも、これは子どもたちにとっても周りの人たちにとっても、音楽をより楽しんでもらえる絶好のチャンスだと思い、この機会を大いに活用していくことにしました。そこで、それではよい発表ができないと日を二ヶ月も延ばしてもらい、発表への練習を進めていきました。

4、子どもの変容

（1）特別な場での発表

ミュージックナイトでは、小学生の各クラスとも歌と合奏の２曲ずつ、中学の３クラスは歌を１曲ずつというようにどの学年も発表できるようにしたのですが、子どもたちは初めのうち、あまり乗り気ではなく、前述のように人前に出ることに戸惑う子も少なくありませんでした。しかし、練習を続けていくに従って子どもたちの意欲は高まり、「もっとやろう！」「もう一回！！」などという声も増えるようになっていきました。それまであまり気にしていなかった休符や終わりをぴったりそろえることなどにも意識が高まり、全員の息がそろったときには自分たちで拍手をして喜び合えるようにもなりました。

また高学年の児童や中学生の中からは、個人で歌いたいという声も現れ、一人でステージに上がることを自ら希望する子どもも現れました。もともと楽器の演奏に興味のあった先生たちはこれらの伴奏をしたいと練習を始め、放課後から夜にかけては連日このための練習でずっと音楽が鳴り響くようにさえなっていったのです。

「ミュージックナイトはあと何回寝たら来る？」「考えたらどきどきする！！」

そんな話をしながら子どもたちはその日を楽しみに待っていました。バヌアツでは大変異例なことに、リハーサルを３回も行い、本番に臨みました。

そして迎えた当日、州で一番大きな野外ステージがその発表の場となり、中学生たちはたくさんの花で会場を飾り、先生たちはどこからか照明器具を借りてきて雰囲気を盛り上げてくれました。発表する子どもたちもはりきって衣装を工夫したり、いつもよりおしゃれをしてステージの上に登場。このような行事であっても来たり来なかったりする子どもたちですが、この日は自分の意思で全員参加していたことが、何よりうれしかったです。

ステージの下には島全体、そして他の島々からもうわさを聞いて集まってきた人たちでいっぱいになっていました。子どもたちは、そのたくさんの人たちの前で堂々と前を向き、体

を動かしながら歌ったり友だちと息を合わせて合奏したりすることができたのです。

発表前に緊張していた顔がたくさんの拍手をもらって一気にほころび、ステージを降りた後、友だちと飛び跳ねて喜んでいる姿が本当に印象的でした。偶然に何かを得たときのうれしさとは違う、本当の喜びを味わうことができたのではないかと思います。

一人で歌う中学生たちもマイクを持って、ステージ上で気持ちよさそうにリズムにのりながら歌い、その下では子どもたちや会場に来ていたひとたちもいっしょに踊りながら聴き入っていました。会場はまさしくダンスパーティ、この大盛り上がりは深夜まで続いていきました。

（2）見通しを持って練習することの大切さ

子どもたちがこれだけの変容を遂げたのは、大きな会場での発表という特別な場が子どもたちの気持ちを高揚させたということもあったかもしれませんが、やはり大きな要因は、それまでの過程にあったのではないかと思います。

バヌアツでは、学校や国の行事であっても思いつきのように何かが始まってなんとなく終わってしまうことが少なくありませんでした。「明日、州知事がやってくるので歓迎の歌を歌ってほしい。」「今日は村の祭りで授業はやめ。」などと突然言われることが何度あったかわかりません。入学式もなければ、卒業式もなく、運動会のようにみんなで力を合わせてがんばるような行事もありません。見通しを持って何かに向かって努力し、達成する喜びが得られるような経験をこれまでバヌアツの子どもたちはほとんどしたことがなかったのではないでしょうか。またスクールフィーが払えないなどの理由で、学校に行くことが途中でできなくなってしまう子どもたちも少なくない状況の中で、自分の思いを大切にして最後までがんばることよりも、周りの状況に合わせてあきらめていくことの方が自然と身についてしまったのかもしれません。

初めに見た自信をもてずに下を向いていた子どもたちの姿は、決して表現することが苦手であったり嫌いであったりするわけではなく、自信をもてるような経験を積んでこなかったためであり、社会のしくみや学校での教育の不十分さのしわよせではないのだろうかと考えています。言い換えると、子どもたちが何かに向かっていっしょうけんめいに練習を続け、それが達成できたとき、子どもたちは自信をもって自分を表現することができるのではないでしょうか。それは、どの国の子どもであっても同じだと思います。

5、つきない悩み

こうして、順風にのったように思えた音楽教育でしたが、そううまくいくものではありませんでした。ミュージックナイトの成功で予想以上の資金が集まったことに先生たちは満足してしまい、また音楽の授業へは見向きもしてくれなくなりました。先生たちにとって、音楽はお金を集める手段でしかなかったのです。このときすでに、私を要請した校長は異動し、音楽教育の意義など考えようとしない校長へと変わっていたので、他の先生たちも同じような考えに変わっていました。声を掛けても家に帰って寝てしまう先生たちの姿に、このままバヌアツで音楽を教えていてもいいのだろうか、隊員が帰国したらもう学校での音楽は存在

しなくなるだろうし、そんな中でわずかな期間だけ授業を行っても、意味などないのではないだろうか…そんなことさえ考えるようになってしまいました。

それでも、子どもたちはあのとき得た自信と喜びから、もっと音楽の学習をしたいという思いをもっていたので、子どもたちに対して自分のできることをやるしかないと、活動を進めていきました。しかし、授業をするにも、新しい教材を見つけ出すのに限界がきてしまい、子どもたちの意欲に相反して、満足できるような授業が提供できないのではないかと気持ちはどんどん焦っていくのでした。

その一方で、ミュージックナイトを見に来ていた他校の先生たちから、うちの学校にも音楽を教えにきてほしいという依頼があり、巡回指導を増やしていきました。一人でも多くの子どもたちに音楽の楽しさを知ってほしいという思いから、四校で指導をすることにしたのですが、ここでも大きな問題がありました。それは交通手段です。近隣校を選んだとは言え、車でも 20 分～40 分間ほどかかるところにある学校なので、楽器を担いで歩いていくわけにはいきません。しかし、その車というのはいつ通るかわからない乗り合いのトラックなので、道端で延々と待つしかないのです。伴奏用の大きなキーボードと児童用の鍵盤ハーモニカを両脇にかかえながら、あるときには 3 時間も待ち続け、学校に着いたらもう子どもたちはすでに帰っていたということもありました。電話もなく連絡のしようもなかったので、この巡回指導は続けていくのがとても困難でした。

6、それでもやっぱり広めたい！

（1）ねらいの再確認

こんなとき、首都で隊員総会があり、音楽部での話し合いの場ももたれることになりました。当時小学校で音楽を指導していたのは私を含め 5 人だけだったのですが、島も異なっていたので普段は会うこともなく、いっしょに活動することもありませんでした。しかし、このときそれぞれの任地での活動状況を報告しあう中で、5 人が同じような悩みをかかえていることがわかりました。「先生たちは少しも音楽の授業に理解を示してくれない。」「もうよい教材が見つからない。」「隊員のいない学校では音楽の授業がされていないのに、いるところだけでどんどん進めていっていいのか。」「人々は音楽の楽しさを知っているし、歌も日常的に歌っている。音楽教育の必要はないのではないか。」「このままバヌアツで音楽教育を続けていく意義があるのだろうか。」・・・そこで、私たちはもう一度自分たちがこの国へ来た意味を考えながら、『音楽教育のねらい』について考えていくことにしました。

＜音楽の授業を通して、バヌアツの子どもたちにどんな力をつけたいか＞

1、 表現力…声や全身で自分の思い・感情を表せるように

2、 音楽的な能力…高まった方がより楽しさを味わえる

3、 集中力…最後までがんばる力のもととして

4、 自信をもつこと…できる喜びは自分を高める意欲につながる

バヌアツの文化、民族への誇り

⇒音楽教育は、子どもの人生を豊かにする
- 子どもたちの心を開放し、楽しい時間をもつことできるようにする
- 達成感や満足感を味わうことができるようにする
- みんなで声や息や心を合わせて、一つのものを作り出す喜びを味わうことができるようにする
- 自分の可能性を広げることができるようにする

このような確認をしあい、やはりどの子どもにも音楽教育が受けられるようにしたいという思いを改めてもつことができました。そしてそのためには、隊員がいないところでも、帰国してからでも音楽の授業が行われることが必要であり、バヌアツの先生たちが自分たちで授業を進めていけるようにならなければならないということがはっきりと見えてきました。そして、どの先生たちも音楽の授業をすることができるようになるには、指導の手引きとなる指導書とカリキュラムの整った教科書が不可欠であることを確認しあいました。

（2）教科書づくり

そこで私たちは、バヌアツ全体で使うことができるように教科書作りをすることにしました。以下にその手順をしめします。

①アンケートの作成・実施・集計	自分たちの思いだけで進めてしまわないよう、現地の先生たちの意見を取り入れていけるようにした。
②カリキュラムの作成	各学年のねらい・活動内容を明確にし、それにふさわしい曲を集めて配列を考えていった。（歌唱・楽器演奏共） ※日本や西洋の曲だけでなく、バヌアツの文化も取り入れていけるようにした。
③教材の収集・作成	楽譜を集め、ないものについては自分たちで作成した。
④指導法の明記	初めて音楽を指導する先生たちにもこれさえ見れば進めていけるよう、１時間の授業の流れや歌や演奏の指導のしかた、音符の読み方や指導法などを明記した。 ※挿絵を多くし、わかりやすく親しみやすいものにした。 ※英語版・フランス語版の両方を作成し、どの学校でも使えるものにした。各指導の説明はビスラマ語で記述した。
⑤教育省との連携	自分たちの思いを教育省にも伝え、音楽教育に対する協力を求めた。
⑥印刷・製本	できるだけ低コストで製本できるよう業者に掛け合った。
⑦範唱テープの作成	楽譜が読めない先生たちや初めて出会う子どもたちのために各校で歌を録音し、学年ごとの範唱テープを作成した。

作業は５人で分担し、Ｅメールで連絡を取り合いながら作業を進めていきました。長期休業には首都にあがり、ほとんどの時間をこの教科書づくりのために費やしましたが、初めて取り組むことであったので試行錯誤を繰り返し、ようやくできあがったのは約８ヵ月後のこ

とでした。経費の都合で1～6年生の一学期の内容が一冊にまとまった形になってしまったのですが、こうしてできあがった教科書を手にしたときは本当にうれしく、自分たちも達成感を得ることができました。

そして、これをバヌアツの先生たちに広めていくために教育省でワークショップを開き、教育省の役人や教員養成校の校長、各校の先生たちなどに参加してもらって、音楽教育のねらいや教科書のよさ・使い方などをアピールしていきました。

（3）先生たちによる授業

できあがった教科書をさっそく任地へ持ち帰り、先生たちの理解を得るために校内でのワークショップを開きました。音楽教育のねらいと必要性、そして先生たちによる指導がいかに重要であるかということ、まずは授業に参加してほしいということを伝えました。

先生たちもこの教科書に興味を示し、これなら自分にもできそうだと授業へも参加してもらえるようになりました。そして、事前に打ち合わせをし、少しずつ指導を進めてもらえるようになっていったのです。

先生たちも本当は音楽が好きで、教えることができるようになりたいとの思いを持っていたのですが、自分も音楽の授業を受けたことがなく、どのようにしていけばよいかわからなかっただけなのだということがわかりました。こうして手引きとなるものがあり、いっしょに授業を作っていくことができるようになると、次は自分で伴奏ができるようになりたいので教えてほしいと意欲を高めていく先生もいるほどでした。

子どもたちも真新しい教科書を手に、目を輝かせてページをめくっていきました。楽譜はまだまだ読めませんが、音楽を学習する気分に十分ひたっていた子どもたちです。

7、帰国にあたって

このようにして一学期分の教科書を作成したところで、私の任期は終わることになりました。できることなら延長して、もっともっと子どもたちとも先生たちともいっしょに学習を進めたかったのですが現職参加制度で参加させていただいているため、かなうことはできませんでした。十分な活動はできませんでしたが、自分なりにはできることをがんばったつもりです。しかし、胸を痛めるだけで自分にはどうしようもないこともたくさんありました。その一つが学校に来ることのできない子どもたちのことです。すべての子どもたちに音楽の楽しさを味わってほしい、音楽で自分の可能性をもっと伸ばしてほしい、そう思っても、学校に来ることができなければどうしようもありません。音楽だけではなく、すべての子どもが学ぶ権利を持っているのに、それが守られていないなんて・・・

帰国前にはお世話になった教育省や政府へもあいさつにいったり、新聞社からの取材を受けたりする機会に恵まれました。私はそこで、バヌアツで本当にたくさんの方々に支えていただいたこと、とても楽しく有意義な時間を過ごさせていただいたことへのお礼を述べると共に、すべての子どもたちが学校で勉強することができることを願ってバヌアツでの義務教育制の確立を求めました。どの子どもも目を輝かせて笑顔いっぱいにたくさんのことを勉強したいのです。他国からやってきた一隊員がえらそうに言えることではないのですが、あき

らめずに声を出していくことで少しずつ変わっていくものがあることをこの国で学ばせていただいたので、どうしても伝えたいと思ったのでした。

8、おわりに

自分ができたことはほんの小さなことでしたが、バヌアツで学んだこと、人々から教えていただいたことはずっとずっと大きかったと今でも思っています。

帰国後は、たくさんのクラスや学校から依頼を受け、バヌアツの話をする機会に恵まれました。バヌアツの人々、子どもたちの笑顔をいつも思い浮かべながら、少しでも日本の子どもたちがバヌアツのことを好きになってくれたらいいな、バヌアツの人たちへ思いを寄せて気持ちを近づかせることができたらいいな、他の国々の人々に対しても、同じ地球のなかまとして大切に思う気持ちが芽生えればいいな…そんな思いで話していきました。

ありがたいことに、筑波大学の先生方の全面的なご協力を得て、インターネットライブ授業に取り組ませていただく機会にも恵まれました。やはり、生で相手の顔が見えることや、声が聞こえてくることは、私の説明をはるかに超えて子どもたちの気持ちをバヌアツへと向かわせました。いっしょに一つの歌をうたったことは日本の子どもたちにとっても本当に感動的な体験で、「心がつながった！」という思いにもつながりました。

海を越え、遠く離れた国にいる子どもたちともつながっているという感覚は、その人たちのことを大切にしたいという気持ちにもつながっていくものだと思います。どの国に住むどんな人たちも自分たちと同じなかま、どの人のことも大切にしたいという思いは、国際協力の面だけでなく、生きていくなかで最も大切なことのひとつだと思います。

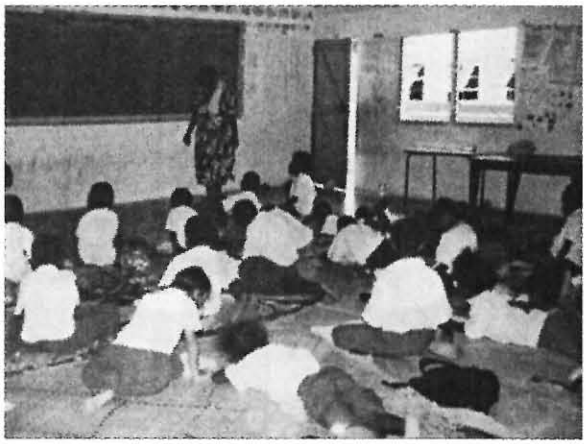
すべての子どもたちがいつも笑顔でいられること、自分を大切にし、自信をもって自分の力を発揮していけること、そしてまわりの人たちを大切にし、ともに歩んでいけること

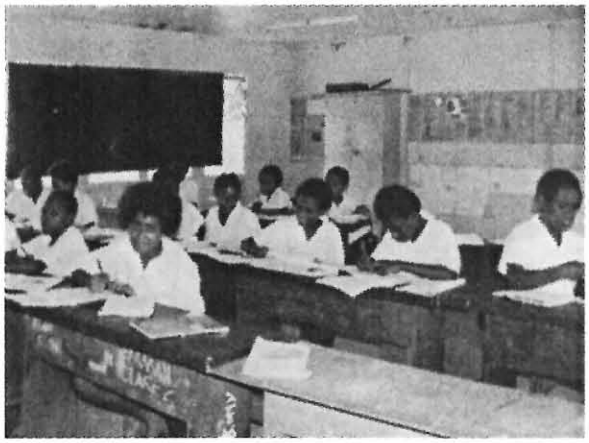
・・・小学生のときに見た映像とバヌアツで出会った子どもたち、そして今いっしょに過ごしている日本の子どもたちは、この願いに向けて自分のできることを進めていくことの大切さを今も毎日教えてくれています。子どもたちの笑顔に支えられて、毎日の自分の仕事があるように、自分のできることを一つずつやっていくことで子どもたちに少しでも返していけるよう、努力していきたいと思っています。

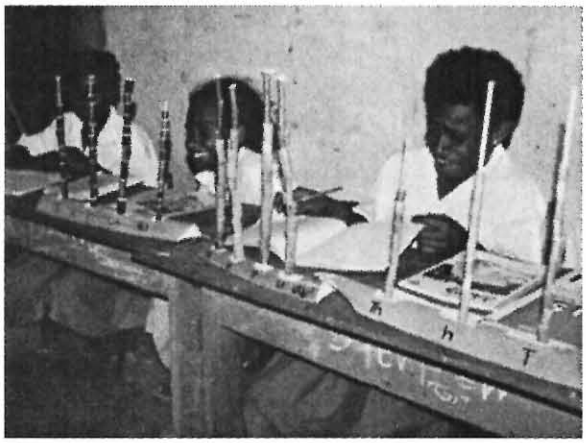
最後になりましたが、このような機会を与えてくださり、支えてくださったすべての方々に感謝します。本当にありがとうございました。

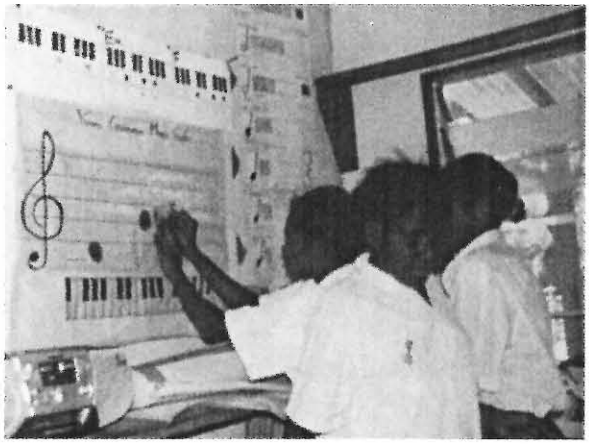
すべての子どもたちに笑顔と自信とつながりを
～音楽教育活動を通して出会った子どもたちから～

14年度1次隊　バヌアツ共和国派遣
滋賀県草津市立老上小学校
枝重　美香





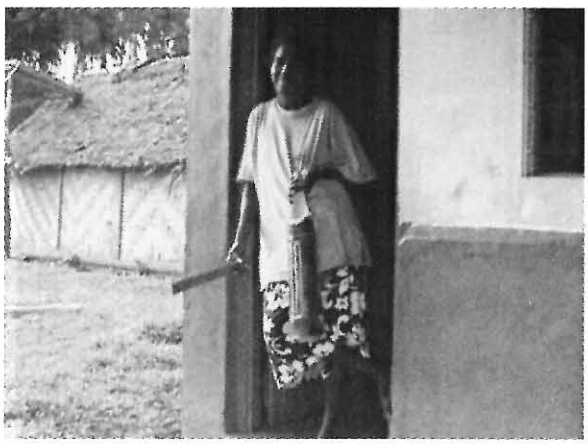


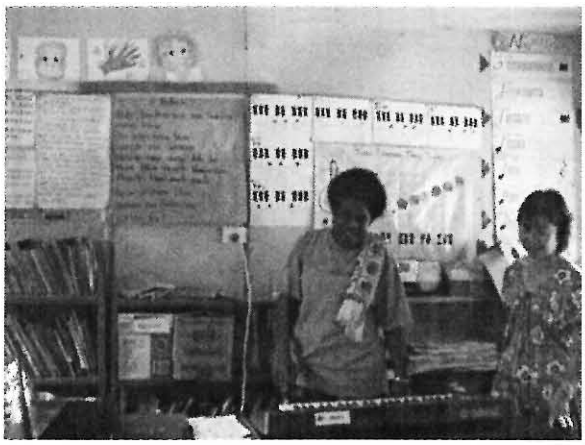


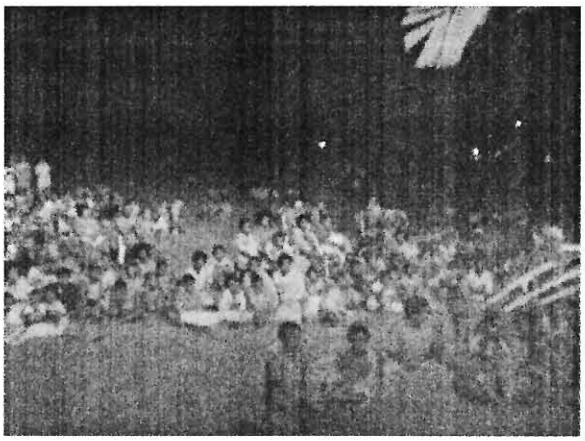
YAMAHA

SONY
VEGA

SONY
YAMAHA







※発表はDV(デジタルビデオ)を用いて行われました。この資料は，DV画面をもとにスライド風に編集しなおしたものです。

すべての子どもたちに笑顔と自信とつながりを

～音楽教育活動を通して出会った子どもたちから～

１４年度１次隊　バヌアツ共和国派遣
滋賀県草津市立老上小学校　枝重美香

1、 バヌアツの子どもたち

・たくましい生活力
・とてもシャイ・・・自信がなくてあきらめがち　←
・音楽大好き！

2、 バヌアツの音楽

・村ごとのカスタム
・教会での合唱
・ストリングバンド・・・楽器へのあこがれ
・学校での位置づけ・・・芸術教科の中のひとつ

3、 任地での活動

・赴任校（小中学校）での音楽科の授業
・放課後のクラブ活動
・近隣の小学校への巡回
・先生たちへの技術移転
・音楽会の開催

4、 悩み続出･･･

・教材開発の難しさ
・教室に来ない先生たち
・巡回の厳しさ
・音楽教育への疑問

5、教科書づくりへ

・隊員での話し合い・・・音楽教育の必要性　→　やっぱりひろめたい！
・アンケート作成
・教育省との話し合い
・教材収集
・教師用指導書
・ワークショップ

6、 帰国にあたって

・歌集の作成・配布
・お礼と願い
・宣伝活動

7、 帰国後の活動

・きっかけづくり
・歌を通した交流
・「つながり」を感じること

ルーマニアにおけるストリートチルドレン保護活動

～子どもたちの笑顔を増やす～

堀口　かえで
（15-1，ルーマニア，ソーシャルワーカー，大東市立谷川中学校）

１．はじめに

７年間の中学校での勤務経験後、平成１５年４月から派遣前訓練を受け同年７月から平成１７年３月までルーマニアに派遣されていた。ソーシャルワーカーとしてストリートチルドレンの保護活動がその活動内容である。

活動の目標は「子どもの笑顔を増やす」「生きる力を育てる」「一人ひとりとの出会いを大事にする」であった。これは現在の教育活動でも変わらない、私の信念にも通じている。

１年７ヶ月の刺激的で濃厚な経験が語り尽くせるとは思わないが、活動の一部を紹介したい。

２．派遣国及び派遣先の概要

(1)ルーマニア　コンスタンツア

ルーマニアは本州と同じくらいの大きさで、黒海に面する東欧の国である。民族は東欧唯一のラテン系民族国家である。ローマ帝国やオスマントルコに支配された歴史を持ち、社会主義時代はチャウセスク大統領の下で独裁的政治が１９８９年まで行われた。宗教はルーマニア正教が９割を占める。言語はルーマニア語が使われている。

コンスタンツアは黒海のリゾート地がある地方都市である。夏には国内外から観光客が訪れにぎわう。また、トルコ系、タタール、ギリシャ系、中国系、マケドニア系、ロシア系、ドイツ系、ロマ族、ルーマニア人といった多くの民族が住む町である。

(2)コンスタンツア社会福祉子ども保護局（配属先）

ルーマニアには主要な５都市に子ども保護局がある。その一つがコンスタンツア社会福祉子供保護局である。本局は成人対象の社会福祉局と１８歳以下を対象とする子供保護局に分かれる。さらに、子ども保護局は孤児、小児エイズ、障害児、ストリートチルドレン、養育家庭と専門部署に分かれ、子ども保護施設も１２施設を運営している。１９９７年頃に７人のスタッフで子供保護局を開局し現在では約１０００人のスタッフが働いている。

私の所属先は、ストリートチルドレンの為の一時保護所を併設するストリートチルドレンの為の情報案内センターである。ここでは保護された子どものファイルを作成し、必要に応じて各保護施設等へ送致する機関である。また各ＮＧＯ団体とも連携をとっている。

(3)ルーマニアにおけるストリートチルドレンの状況

ルーマニアにおける子どもの保護状況は（ストリートチルドレンだけではない）、２００

４年の時点で、保護施設数１，３６３施設、保護人数（０～１８歳）２９，８２１名である。年齢別の割合を見ると、１歳未満は養育家庭に引き取られる為、幼児の割合は少ないが、１０歳以後保護割合は増加し、１４～１７歳の少年が最も多い［参考１］。このうち、コンスタンツア子ども保護局で扱う子どものファイル数は２，７４１名分と約１割を占める。

ストリートチルドレンの数は把握できていないのが現状である。コンスタンツアの場合でも、観光シーズンである春から夏にかけて増加し、冬は減るというように季節的な変動が大きい。

ストリートチルドレンになる理由としては、家族の暴力（飲酒）や貧困が多い。生活場所は、マンホールや建物の階段や廃屋が多く、特に零下になる冬にはマンホールに入る場合が多い。生活の糧は、物乞いや窃盗、売春等犯罪率が高く、一般の人からも敬遠されている。シンナー乱用の例も多い。首都の地下鉄等駅付近では、シンナーの袋を口に当てた姿も多く見られる。

２００７年ＥＵ加盟をめざし、ストリートチルドレンの問題も海外からの支援を受けながら、取り組まれつつある。

３．派遣中の活動（資料１参照）

私の活動は、子ども保護局内のストリートチルドレンの情報案内センターを拠点として、ストリートチルドレンに関わっていくことである。最初の活動計画は、①ストリートチルドレンの現状把握②施設（併設の一時保護所）内における子どもの活動の充実③ルーマニアの子どもたちとその社会環境の把握であった。活動していくうちに、自分のできること、したいこと、必要なことに少しずつ気づき、活動が展開していく。

途中から、活動計画を①子ども保護局とＮＧＯとの関係強化②子どもの保護・施設への定着率の強化③国民のストリートチルドレンに対する理解へと変更した。具体的には各ＮＧＯと連携をとり、１回／２月のペースでイベントを実施した。イベントは、主に次の５つの利点があった。①各施設のスタッフ同士をつなげ、アクティビティの交流や質の向上を図る②子ども同士をつなげ、友達をつくる③活動を通じ、子どもをほめ、自信や達成感を感じさせ、自己肯定感を育てる。④施設が悪くないところであることを感じさせ、定着を促す（子どもたちは施設で規則正しい生活をし、十分な睡眠と栄養と清潔を得ることで、心が落ち着き、生きる力や学習へとつながる）⑤イベントを実施することで、マスコミの取材を受ける機会となり、一般へ、施設の様子やＪＯＣＶ（青年海外協力隊の略称）の活動を伝えることができる。

活動を、展開する中で、特に気を遣ったことは、イベント準備段階では、スタッフが、自分がイベントの主体であると感じること、またイベントに参加したスタッフや子どもが参加して楽しかった、やってよかった、また参加したいと感じることである。そのような雰囲気作りを大事にした。よい雰囲気を繰り返し経験していくことがスタッフにとっては仕事への意欲に、子どもには自己肯定観につながると考えた。

帰国４ヶ月前頃になって、周囲が大きく動き始め、活動の具体的な可能性が見え始めた頃、

活動のまとめをおこない、終了し、後任隊員へと引き継いだ。これらのイベントを通して、私自身、多くの子どもたちの笑顔に出会うことができた。

また、保護局外の活動として、日本文明・文化センターでの指導や柔術クラブの支援、日本語教室、ＪＯＣＶ有志のキャラバン隊活動があった。

４．青年海外協力隊としての役割

「新しい風をふきこむこと」が役割であったように考える。日本という国の文化と価値観を背負い日本人ボランティアとして、現地人の中で生活し、活動する。ルーマニア人の中に日本人が入ることだけでも、異文化の戦いがあり、その中で互いに理解し合えるところを見つけ、変化していく。新しいやり方や価値観がその居場所を作っていき、新たなものへ発展していくには、時間と忍耐と労力が互いにとって必要である。しかし、新たなものへ発展したときには、互いにとって、充実感や喜びを感じ、新たな可能性が見えてくる。

５．帰国後の活動

帰国後着任した本校では、派遣教員としての私にとってよい条件に恵まれていた。

なぜなら、校長先生が、ＪＯＣＶを支援するプラザ大阪の理事を務めておられ、新任教員にケニアの理数科教師で派遣されていたＪＯＣＶのＯＢがおられたからである。

校長先生が学校便り等で意識的に私の活動を紹介してくださったり、プラザ大阪からの情報を通じて、学校教育活動に巻き込んでくださったり、いろんな形での指導・支援を得ている。

またＯＢである教員とは、一緒に地域の祭りでインターナショナルフェイスペインティングを行った。ひとりでは踏み出せない一歩もたったひとりの仲間がいるだけで簡単に踏み出すことができる。

また他の職員も気軽にルーマニアや協力隊経験について質問してくださったり、雰囲気よく受け入れてくださっている。そういった学校全体の雰囲気が私の情熱を後押ししている。

(1)写真展（地域の生涯学習施設において、夏期休業日中に実施した。）

(2)「谷川まつり（地域教育協議会主催）」でのインターナショナルフェイスペインティング（ケニアとルーマニアの民族衣装をそれぞれ身にまとい、子どもたちにフェイスペインティングをしながら交流した。ケニアとルーマニアの写真も飾った。）

(3)文化祭でのルーマニアコーナー（写真、ルーマニアの子どもの書道作品、民芸品等を展示し、民族衣装を着ながら、ルーマニアについて紹介した。）

(4)人権選択学習（富田林市立明治池中学校にて、中学校３年生に２時間の授業を行った。ルーマニアや世界のストリートチルドレンをテーマに、フォトランゲージを利用しながら授業をした。）

(5)ルーマニアへ野球道具や文具を送ろう活動（ルーマニアからの要請によって、生徒会や地域の方の協力を得ながら物品を集めた。ルーマニアの元野球隊員も来校し、生徒会役員と話をした。）

６．派遣現職教員としての役割

大阪府では現在帰国した現職派遣教員は高校の教員と２名である。派遣中の隊員は複数名いると聞いている。これから、徐々にこの制度を利用した、経験ある教員が増えてくるだろうし、増えてほしいと願う。

派遣現職教員としての役割は大きく２つある。

一つは経験を語ることである。同僚に、地域の方に、そして子どもたちにである。ルーマニアの方々が私を通じて日本を見たように、日本の方々も私を通じてきっとルーマニアに触れることができるだろう。

もう一つは、異文化を、実生活を通じて経験したからこそ持つ、発想の豊かさや多様な価値観への理解を学校教育活動に生かしていくことである。

大阪では「ぬくもりのある教育」が大事にされてきている。「いじめ・不登校、高校中退」といった課題を抱える中、大阪らしい教育改革が行政から行われようとしている。２年ぶりに復帰した大阪の教育現場でも、スクールカウンセラーの活用の度合いや警察との連携、特別支援教育への具体化、学校評価の導入など、その変化を感じるところである。[参考２]

ルーマニアで子どもたちと関わっていたとき、印象的なことがいくつかあった。

一つはシンナーの乱用についてである。生きる希望や見捨てられたと感じているルーマニアの子どもは、シンナー乱用によって、廃人のようになっていく。数か月前まで話をしていたのに、次に会ったときには、手が震え、その次には、焦点の合わない目になっている。私が知らないだけかもしれないが、日本の子どもはここまで乱用しないのではないか。日本の子どもは寂しいが、自分をつぶすほどの一線を越える子はほとんどいないのではないかと感じた。

また、施設で、６・７歳の子どもたちとお母さんごっこをしようとしたとき、あるひとりの子どもが他の子どもを叩きながら、「あなたは悪い子。だからお母さんがおこります」と言いだした。初め、何をしているのか分からず観察していると、この子どもが家で受けていたことをやっているのだと把握した。ストリートチルドレンは虐待を経験している子どもが多く、体の傷だけでなく、落ち着きのなさ、怒りっぽさといった精神的不安定や成長の悪さ（もちろん喫煙も影響しているが）を共通して感じた。また場面操作が上手く、生きるためのずるがしこさ・たくましさもあった。

そのようなストリートチルドレンたちも一時保護所に入り、シャワーを浴び、散髪し、服を着替え、３回の食事と規則正しい睡眠を続けていると１週間くらいからほんの少し落ち着いてくる。表情もやわらかくなってくる頃から、鉛筆を持たせ、字を教える。はじめは５分間集中できればよい。線が書けるようになると「○や△」、次は数字、アルファベットと進む。ほめながら一つできるようになると自信が芽生え、子どもは変化を見せ始める。

このような経験を通して、子どもたちは愛情をもって育てれば成長する可能性を持つ存在であること、生活リズムと健康の上に心の健康と生きる力の学習意欲が育つということを確信している。養護教諭として、その確信をもって、本校の学校教育活動に参加していきたい。

7．最後に

現職という形でボランティア活動に参加することができ、安心して、活動に没頭することができた。多くの方々のご協力の下に、このようなすばらしい経験があり、本当に心から感謝している。

この２年間の経験は私にとってとても刺激的な時間であった。日本では受けたことのない差別（中国人と間違えられ、からかいや中傷を多く経験した）を受け、なんともいえない悔しさと怒りも経験した。言葉の未熟なとき、自分の感情さえも相手に伝えられない孤独も味わった。自然の厳しさの前に人間の小ささも実感した。本当の優しさに多く出会い、優しさが大きな力や人の心を動かし、つながっていくことにも触れた。そして、たくさんの子どもたちがくれた愛情は、今思い出しても胸が熱くなる。そのような経験が、今の私のたくましさと情熱と笑顔につながっている。

日本の教育現場の多忙さにその情熱もしょっちゅう萎えそうになるが、自分の経験を振り返り、「こんなことで、めげてたらアカン。私にはルーマニアがついてる。」と自分に叱咤激励している。

谷川中学校の子どもたちも、本当に愛すべき存在である。子どもたちとともに、あったかい雰囲気のあるすてきな中学校になればと願う。

［参考文献］

1．AUTORITATEA NATIONALA PENTRU PROTECTIA DREPTURILOR COPILULUI (2005), In the INTEREST of the CHILD.

2．大阪府教育委員会事務局スタッフ（2005），大阪は教育をどうかえようとしているのか，明治図書

隊員活動の経過（２００３年４月～２００５年３月）

月日	活動の概要	活動の実際			隊員・周囲の様子
		子供保護局	保護局以外の活動	その他	
2003.4 ～6	訓練所入所 事前訓練				
2003.7	ルーマニアへ派遣				
2003.8	現地語学訓練 ホームステイ				＊買い物、散歩が冒険の様に感じる。ホームステイ先や語学の先生とぶつかりながらも、たくさん話をする。
2003.9	コンスタンツア子ども保護局で活動開始	＊子どもたちと共に１日を過ごす。午前中はアクティビティに参加			＊現地の方の勤務スタイルに戸惑いながら活動。
2003.9	「互いを知る時期」 ＊町や子どもの様子 ＊信頼関係	＊サッカー大会（４施設参加） ＊折り紙やオモチャ作りといったアクティビティの提案	柔術クラブ訪問		＊子どもを窘めようとしても、自分の語学力が低く、子どもを諭すことができない。アクティビティを提案しても子どもをコントロールできず悩む。子どもたちとともにルーマニア語や習慣を学ぶ。
2003.10	「小さな事から少しずつ自分をアピール期」	＊Ｃ新聞社が隊員を取材		＊ルーマニアの結婚式参加 ＊冬に向けて、隣人に教わりながら食料の貯蔵を始める	＊アクティビティの材料（文具等）の絶対的不足から調達方法を探し始める。 ＊事務所ではカードや折り紙、工作等アクティビティの提案も兼ねて、いろんなものを飾りはじめ、スタッフに自分の出来ることをアピール。 ＊いろんなスタッフとひたすらおしゃべりをする。
2003.11	「配属保護施設情報収集期」	＊Ｃ新聞社へ高校生記者の活動中にゲストとして訪問 ＊A 保護施設の閉鎖により子ども保護数急増	＊町を散歩しながら、アクティビティに必要な材料を集め始める。 ＊日本文明・文化セン	＊他隊員日本文化イベント応援	＊スタッフとも馴染み、話に広がりが出てくる。 アクティビティや子どもの対応についての話題が増える。 ＊誕生日に日本料理を振る舞うが子どももスタッフも食べず、互いの理解への道のりを感じる。

		＊インフルエンザワクチン接種 ＊子供保護局の概要、スタッフの職種ごとの役割、衛生・健康管理等を中心に情報収集	ターという俳句の会に参加、指導開始。		＊文具を現地人や外国人などから少しずつ集めるが、スタッフがまず文具を欲しがり、生活の厳しさとモラルの低さを感じ、物品提供を慎重に行う。 ＊他隊員のイベントに参加し、孤独な日々の活動とは違う、協力して大きな力となるイベントの良さを知る。 ＊いろんな地方を訪ねるたびに、ルーマニアの素敵なところを発見して、日常のマイナス面にとらわれず、新たな気持ちで配属先に戻ることが出来た。
2003.12	「配属保護施設一歩踏みだし期」	＊施設でのクリスマス ＊クリスマスのお祝いで各保護施設を訪問 ＊他県の子ども保護施設及び病院訪問	＊柔術クラブ訪問	＊近所の子どもたちと話し始める	＊日常会話には困らなくなったが、仕事遂行にはまだ不十分。 ＊各保護施設の訪問により、各施設のスタッフと知り合い、人間関係が広がる。
2004.1	「ルーマニアの宗教と家族にひたる期」	＊C新聞高校生記者が取材 ＊「世界の笑顔のために」プログラム申請		＊宗教の祭に参加 ＊他隊員ジャンプ大会応援	＊ルーマニアの習慣、宗教にどっぷりひたりながら、ルーマニアの冬の生活を体験。
2004.2	「有志キャラバン隊企画準備期」	C新聞高校生記者が通う高校へストリートチルドレンについての授業のため、同僚と訪問	＊柔術クラブが青少年の健全育成を目的としていることを理解し後方支援開始	最屓の店が増え、道や店での立ち話が増える	＊他隊員の日本文化紹介イベントに参加する中で、日本文化に興味のない普通の人たちの興味を引き、両国を理解し合えるイベントをしたいと考え始める。
2004.3	「必要なこと気づき期」	＊NGOとの会議に参加するようになる。 ＊MGO訪問開始		＊近所の方と「女性の日」を祝う 芸術学校で絵や宗教絵を学び始める。 ＊他隊員日本文化イベント応援	＊一般の子どもたちとの出会いが増え、学校や教員との輪も広がる。 ＊NGO訪問により、各施設で働くスタッフとの関係が出来る。アクティビティ等に参加しながら、各施設のスタッフがそれぞれの知識で働き、他の施設でどんな風に実施されているのかを知らないと気づき、スタッフ同士の横のつながりの必要性を感

					じる。 ＊芸術学校でスタッフ以外のルーマニア人の価値観・考え方に出会う。絵画が自分の時間となり、ストレス解消となる。
2004.4 ～5	「活動展開期」	芸術週間、食週間、よいマナーとスポーツと健康週間（４施設参加、３５人／日） ＊他県の子ども保護施設訪問 ＊「世界の笑顔のために」プログラム申請	＊俳句教室・日本語教室 ＊柔術クラブ訪問	近所の子どもたち１０人が毎日迎えてくれるようになる。	＊初めての企画実施 ＊芸術週間という企画の楽しさ、スタッフ同士や子ども同士の出会い作り、マスコミのとりあげ方等でスタッフが私に興味を持ち始める。また、各施設の子どもたちの間でも「カエデ」の名が売れだした。 ＊他県の施設見学等「カエデはいろんなことを見ているし、知っている。話は聞いた方が面白そうだ」といろんな話を聞き、企画に対する意見を求められるようになるが、十分ルーマニア語で説明できず、上手く理解し合えない。
2004.5	「隊員への期待明確化、議論期」	＊ボランティアによるエイズ予防教育開始 ＊こどもの日、施設裏で小さなピクニック ＊子どもの遠足場所探し	＊隊員を通じ、日本文明文化センターのある高校と子ども保護局がパートナー契約を結び、子ども保護局スタッフによる高校での講演や高校から保護施設への寄付等が行われた。	＊他隊員日本文化イベント応援 ＊他隊員日本文化イベント応援	＊施設長と話す中で、「NGO との関係強化」「子供の保護、定着率の向上」「国民のストリートチルドレン保護に対する理解の向上」「マスコミの利用」について話し合い、確認する。その後、この点について意識した活動を展開する。 ＊保護施設のスタッフとアクティビティについて会議を提案した。保護局長まで巻きこみ、予算等を確認しながら、計画を立案するが、継続しない。 ＊子どもたちにとって狭い施設の中にいる時間が長いため、外につれだし、ストレス発散の機会の必要性を感じ、遠足の企画を始める。しかし、外国人ボランティアの責任範囲や子どもの状態、資金がないことから断られる。 ＊外国人ボランティアや外国人との輪が広がる・

2004.6	「ルーマニアを外から振り返り、自分を確認期」 「ストリートチルドレンの生活理解期」	＊路上で生活する子どもたちを訪問する活動に参加 ＊遠足 ＊NGO 会議	＊俳句教室・日本語教室	任国外旅行(オーストリア・ポーランド・ドイツ) ドイツの日本人中学校で講演。各国で幼稚園、高校等を訪問。	＊路上の子どもたちと出会い、彼らの生活の様子が分かり始める。 ＊田舎に祭を兼ねて泊まったとき、その生活の貧しさからストリートチルドレンとなっていく状況を現地の人から聞かされる。 ＊日本の子どもたちへの講演や先進国の教育をみて、揺らぎつつあった信念を改めて確認する。 ＊反対されていた遠足もスタッフの協力と無料入場が許可され、実施した。
2004.7	「子どもとの信頼実感期」	＊遠足 ＊NGO 会議 ＊「世界の笑顔のために」プログラムで在籍中学校から文具が届く ＊他県の子ども保護施設訪問	＊俳句教室・日本語教室 ＊柔術クラブ訪問		＊私と子どもたちとの約束を施設長が破ったことがきっかけで、子どもたちがクーデターを起こし、施設長と子どもたちの話し合いがもたれた。その後、私の立場やスタッフへの教育、子どもたちの心をうけとめるといったことが確認され、施設内の雰囲気が少し変わる。
2004.8	「隊員活動展開期」	＊首都にある子ども保護施設で劇を通して交流する（１００名参加） ＊遠足 ＊NGO 会議	＊俳句教室・日本語教室 ＊ルーマニア日本人学校で授業	＊有志キャラバン隊結成（JOCV 有志） ＊他隊員のジャンプ大会応援	＊町を歩いていると、必ずストリートチルドレンと会い、集まるようになる。子どもたちの路上での本当の様子が分かり始める。 ＊有志キャラバン隊で各隊員の充実感と手応えがあり、隊員間の雰囲気がよくなる。
2004.9	「営業活動期」	＊絵画コンクール（７施設、２幼稚園、９学校、個人の計１４５名参加）＊新聞でも広報 ＊遠足 ＊NGO 会議 ＊在ル日本人の方々に物品寄付協力のお	＊幼稚園・学校・子ども保護施設等の訪問活動を開始 ＊俳句教室・日本語教室		＊積極的な訪問活動によって、ルーマニアの学校・幼稚園の様子、授業への参加、先生方との交流など、活動範囲の幅が広がった。 ＊子ども保護施設も、市内だけでなく県内の施設も訪問。ストリートチルドレンだけでなく、孤児、エイズ等の施設も訪問。その為、子ども保護局内の他のソーシャルワーカーとの人間関

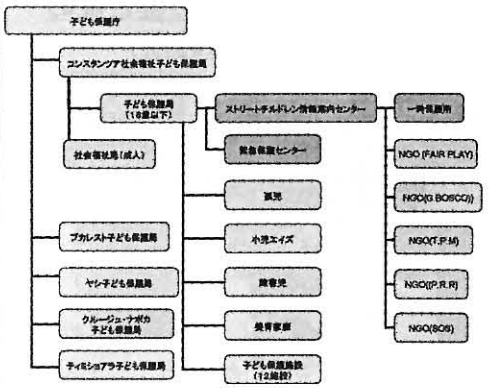
		願い訪問開始			係もひろがり、ストリートチルドレン以外の部署へも自由に出入りするようになり、子ども保護に関する幅広い情報が入るようになった。 ＊訪問活動により、語学力のレベルが上がる。
2004.10	「充実・第２準備期」	＊遠足 ＊NGO 会議	＊俳句教室・日本語教室	＊第３回の有志キャラバン隊の訪問先探しにエイズ子ども病院訪問	＊NGO との会議で、議論に参加できるようになる。
2004.11	「第２展開期」	＊有志キャラバン隊 １日目：４施設、路上から計２４０名 ２日目：養護施設１８０名 ラジオ・テレビ・新聞取材。 ＊NGO 会議 ＊選挙により体制変更しスタッフの多くが入れ替わる ＊「世界の笑顔のために」プログラムにより寄贈品届く ＊以前訪問したドイツ日本人幼稚園より寄贈品届く ＊在ル日本人会の方から物品や寄付金が届く	＊俳句教室・日本語教室 ＊NGO でも日本語教室の要望が上がり、開始。 ＊高校と隊員の連携（日本文明文化センター）について教員のための高校教育研究大会で発表＊テレビ・新聞取材 ＊JOCV について興味をもった高校数校を訪問。これまで連携してきた高校に JOCV 派遣が検討される。	＊他隊員のダンス教室応援 ＊他隊員日本文化イベント応援	＊イベントをやる度に子どもたちとの距離が縮まり、広い地域で子どもたちに声をかけられるようになる。このイベントのボランティアはコンスタンツアの方を巻きこんだ。子どもからも、関わった方からも反響が大きかった。 ＊イベントは成功であった。しかし、参加した隊員の充実感が足りず、準備期間中の議論不足により、隊員間に不和が生じた。 ＊NGO 会議で私の提案に協力的な雰囲気ができる。 ＊研究大会の発表で自分の言葉で話ができ、語学に自信をもつ。高校教員との関係がひろがる。
2004.12	「周囲が大きく動き出す期」	＊全体クリスマス（５施設、計１８５名） ＊ラジオ・テレビ・新聞取材。	＊俳句教室・日本語教室		＊全体クリスマス企画についても、各 NGO の責任者が積極的に役割分担をし、食材料等経済面でも協力を得る。

		＊施設クリスマスでラジオ・テレビ・新聞取材。 ＊在ルＮ日本人会の方々の子ども保護活動協力組織ができる。 ＊NGO に対する草の根無償プログラムに関わる。			＊これまで、子ども保護局と距離のあった NGO が初めてイベントに参加した。 ＊子どもの心を育てたいという意図を各スタッフが理解したイベントとなり、子ども保護局を中心とした各 NGO との連携の雰囲気がよくなった。 ＊子ども保護局のスタッフは最低限の労働しかしたくないというという様子で、責任者からの指示でしか動けず、イベントの持ち方について、論議する。 ＊社会状況から見える問題「１８歳以上の子どもたちの進路」等が法律上、活動上、生活上分かるようになってくる。それが草の根無償の話へと具体化し始める。 ＊多くの日本人会の方が主旨に賛同し協力して下さり、人の力の大きさに感動。優しい心が物事を動かすと実感。
2005.1		＊盆踊り講習会（１施設、２０名）と日本文化紹介番組テレビ出演、新聞取材。 ＊NGO 会議 ＊子ども保護に関する法律改正 ＊スタッフの研修について話し合う	＊俳句教室・日本語教室	任国外旅行（ブルガリア）隊員の活動を訪問してまわる。	＊子どもたちの要望とテレビ記者との話がつながり、講習会と番組の企画となった。 ＊川向こうの隣国を訪ね、ルーマニアと比較しながら、隊員活動を見学し、自分のこれまでの活動を振り返り、ルーマニアと日本にとって大切なことについて考える。 ＊施設長からスタッフ研修について企画を求められるが、活動期間がなく、口頭のアドバイスで終わる。
2005.2	「活動のまとめ期」 「後任隊員への準備期」	＊各施設訪問し、最後のアクティビティとして書道やひらがなを教える。 ＊書道展（４施設、１００名）を芸術高校と県立図書館で開催＊ラジオ・テレビ・新聞取材。	＊俳句教室・日本語教室		＊いろんな人に別れを告げながら、いつの間にか第２の故郷となり、離れ難いことに気付く。自分の愛するルーマニアを日本で紹介したいと強く思う

		＊ラジオ生出演 ＊各施設にてさよなら会			
2005.3	活動終了、帰国				＊ボランティアでなく言葉の通じる母国で責任ある仕事に就けることをうれしく思いつつ、現任校へ着任。

ルーマニアにおける
ストリートチルドレン保護活動

大阪府大東市立谷川中学校
養護教諭　堀口　かえで
15年度1次隊　ソーシャルワーカー



ルーマニアの子ども保護状況（2004年）

- 保護施設：1，363施設
- 保護人数（0～18歳）：29，821名
- 割合：　1歳未満　19.0%
  - 1～2歳　2.5%
  - 3～6歳　7.3%
  - 7～9歳　10.1%
  - 10～13歳　22.4%
  - 14～17歳　38.0%
  - 18歳　17.0%
- ・小児エイズ感染・発生数　3，558名
  （うちエイズ発症者2，217名）
- ・コンスタンツア子ども保護局　子どもファイル数　2，741名分

コンスタンツアのストリートチルドレン

1，ストリートチルドレンになる理由
　①家族の暴力（飲酒）
　②貧困
2，春から秋にかけて増加する
3，生活場所：マンホール、団地や建物の階段、廃屋
4，生活の糧：①駅や市場で物乞い、
　②窃盗（バスや市場の人混み、古鉄、路上駐車の車内等）
　③売春
　④通所施設での食事
5，施設来所理由：
　①自ら来所
　②警察による保護
　③通報（近所の住人）

派遣時の目標

- ・子どもの笑顔を増やす
- ・生きる力を育てる
- ・ひとり一人との出会いを大事にする

隊員の役割

・最初の活動計画
①ストリートチルドレンの現状把握
②施設内における子どもの活動の充実
③ルーマニアの子どもたちとその社会環境の把握

⇒

・変更した活動計画
①NGOとの関係強化
②子どもの保護・定着率の向上
③国民の理解

人と人をつなぐ

ストリートリルドレンの為の昼と夜の保護施設(一時保護所)

芸術週間

施設での活動・遠足

クリスマス

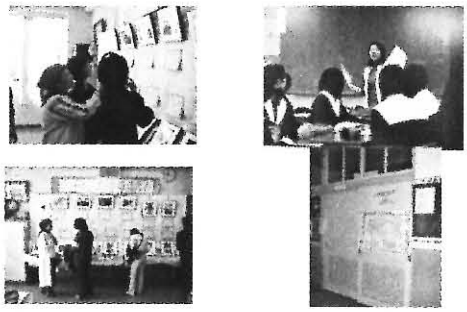
有志キャラバン隊:大きなカブ

訪問活動

書道展

日本文明文化センター:俳句・日本語

帰国後の活動



帰国後の活動:谷川まつり

平成18年1月7日
平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

「開発途上国における派遣現職教員の活躍」帰国隊員報告会
分科会　派遣現職教員の活躍

大阪府大東市立谷川中学校
養護教諭　堀口　かえで
15年度1次隊
ルーマニア　ソーシャルワーカー

1．はじめに

2．派遣国及び派遣先の概要
(1)ルーマニア　コンスタンツア
(2)コンスタンツア子ども保護局
(3)ルーマニアにおけるストリートチルドレンの状況

3．派遣中の活動（資料1参照）
(1)子ども保護局での活動
(2)日本文明文化センター
(3)絵画コンクール
(4)日本とルーマニアの幼稚園交流
(5)日本語教室
(6)柔術クラブ支援
(7)有志キャラバン隊

4．青年海外協力隊としての役割

5．帰国後の活動
(1)写真展
(2)「谷川まつり（地域教育協議会主催）」でのインターナチョナルフェイスペインティング
(3)文化祭でのルーマニアコーナー
(4)人権選択学習
(5)ルーマニアへ野球道具や文具を送ろう活動

6．派遣現職教員としての役割

7．最後に

チャレンジ

ー隊員時代から，現在に至るまでの活動ー

荻野　晃子
（15-1，マーシャル，小学校教諭，岡山市立南輝小学校）

はじめに

「マーシャルってどこにあるの。」私が経験した協力隊の話をする時，たいてい聞かれる質問である。日本では，認知度の低いマーシャルだが，実にすてきな国である。マーシャルは，グアムとハワイのちょうど中ほどにあり，１０００を越える小さな島がたくさん集まってできた島国である。島のほとんどは，環礁という真珠のネックレスを広げたような珍しい形をしている。海は透き通っていてとても美しく，島のあちらこちらにはココナッツが生えている。人々は，のんびりとしていてのびやかに生きている。南の島と聞いて誰もが想像する風景が，そこに広がっていのではないだろうか。（写真１）

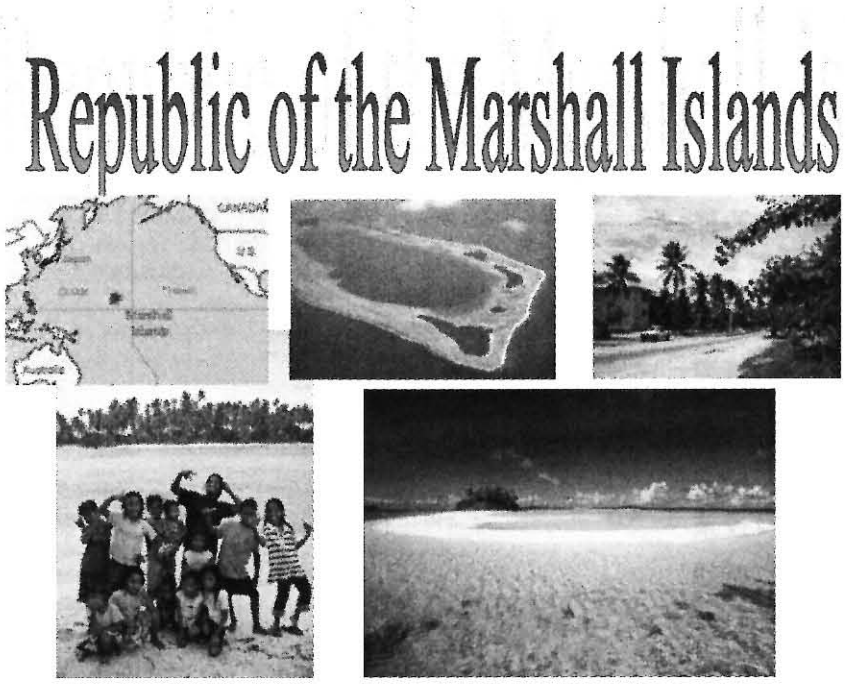


写真１　　美しいマーシャル

私は，そんなマーシャルの首都「マジュロ環礁」のリタ小学校に赴任し，算数教師として青年海外協力隊の活動を行った。子ども達への算数指導に軸足を置きながら，先生方への算数指導の支援やごみ問題，日本の子ども達との交流など，自分の目で実際に見て，放っておけないと思ったこと，自分のやりたいことなどにどんどん取り組んでいった。振り返ってみ

ると，いろいろなことにチャレンジした日々だった。マーシャルでの隊員時代から現在勤務している小学校での様々な取り組みをここに紹介する。

１．個人での活動

（１）算数指導（子ども達）

マーシャルの子ども達は，のびのびとしていて明るい。しかし，学習規律ができていないため集中力が低く，理解力に乏しい傾向がある。そこで，分かりやすく，楽しい授業をめざして学習指導にあたることにした。計画的に学習を進めるために学習指導案を作ったり，子どもにとって楽しく，理解の助けになるように補助教材を作ったり，学習規律を作ったりした。学習規律は，「一生懸命勉強する」「ものを食べない」「口笛を吹かない」「時間通りに来る」という四点である。裏を返せば，それまでの子ども達の実態であり，ひどい状態だった。しかし，毎日繰り返して指導することにより，子ども達は学習規律を概ね身に付けることができた。その結果，子ども達は落ち着いて学習に取り組めるようになり，集中力が高まった。

（２）算数指導支援（先生）

マーシャルの先生方はとてもゆったりしていて，元気なのがいいところである。しかし，やる気がなかったり，指導技術が十分でなかったり，学習内容が理解できていなかったりといくつかの問題を抱えている。そこで，事前に準備し，働く喜びを実感できることをめざして先生方を支援していくことにした。

まず，指導技術を補うために，授業は必ずティームティーチングで行うようにした。Ｔ１とＴ２を交代して行い，互いの指導の様子を直接見て，参考にするためである。よさや課題をはっきりさせるために，Ｔ２は授業中にメモを取り，授業後に感想をＴ１に渡して，互いのよいところを学びあうようにした。(表１）また，学習内容の理解不足を補うためにワークショップを開いたり，一年が終わるまでに教科書が全くこなせていないなどの実態があったことから，年間計画を提示し，それに従って

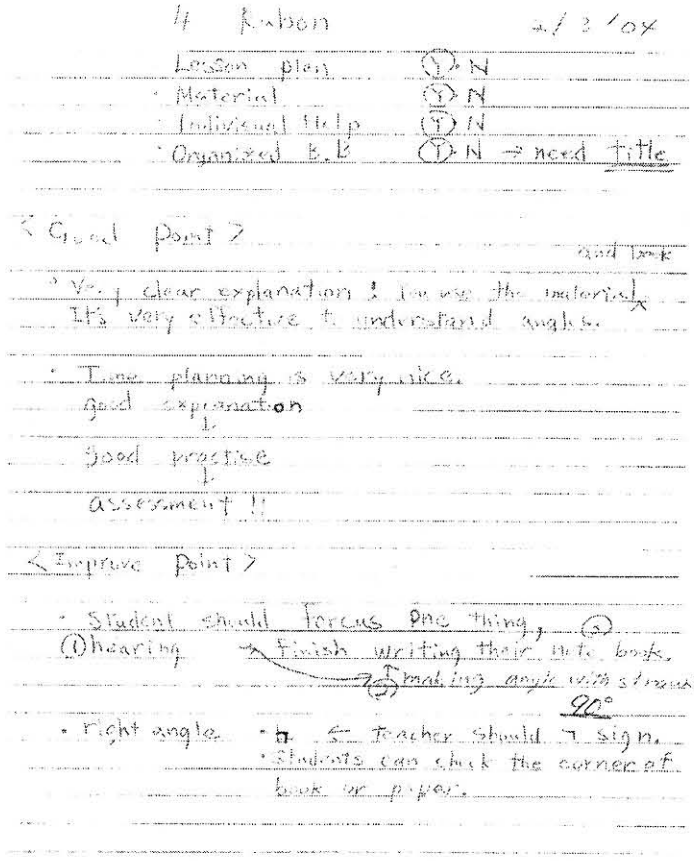


表１　授業後の感想

計画的に授業を進めてもらったりするようにした。

２．他のＪＯＣＶと連携しての活動

それぞれの配属先で点として活動するのではなく，力を合わせ線として活動し，より効果的な活動がしたいと考え，教育省配属の算数担当のシニア隊員が中心となって，小学校算数部会を立ち上げた。部会は月に１・２回開き，配属先での様々な情報の交換や，連携して行っている様々な活動の打ち合わせや準備などを行った。

（１）公開授業

それまで公開授業形式の算数指導の研修の場がなかったことから，月に一度ＪＯＣＶが配属されている小学校を会場に輪番制で公開授業を行うことにした。一年目は，この取り組みを軌道に乗せるため，授業や授業検討会の様々な役割は全てＪＯＣＶが分担して行った。二年目は，現地の先生方自身で公開授業を持続していけるよう，授業や様々な役割はほとんどマーシャル人が行い，ＪＯＣＶはその支援をするようにした。三年目である現在は，算数指導者全員が公開授業をし，自分の担当学年を参観する形態をとっていると聞いている。公開授業は，普段の授業の活性化に役立ち，とても有効な研修の場となっている。

（２）広域研修

２００４年８月，パラオやミクロネシアと共に三カ国で広域研修会を開き，カウンターパートと共にパラオでの会議に出席した。その場で，パラオの年間指導計画やミクロネシアの指導法，マーシャルの公開授業など，互いによいところを学びあうことができた。また，共通テストを実施して，自国の算数レベルの低さに気づき，カウンターパートが大変意欲的になったり，三国の共通課題としてレッスンプラン（一時間の流れ・年間指導計画）の充実を設定し，それに向けての取り組みができたりして，大変有意義であった。準備をカウンターパートと共に進めていく中で，とてもよい人間関係ができたのも大きな成果だった。（表２）

②広域研修

パラオでパラオ・ミクロネシアと共に，広域研修会を開いた。（2004年8月）

＜背景＞歴史（USAからの独立）や現在の状況（USAの教科書を使用，課題など）には共通点が多いにも関わらず，各国のつながりがなかった。

＜目的＞・互いによいところを学びあう。（パラオの年間指導計画など）
・共通課題を見つけ，それぞれのアプローチの仕方で問題解決に迫る。
進捗状況を情報交換することで，モチベーションを継続し取り組みの活性化につなげる。

＜成果＞・カウンターパートととてもよい人間関係ができた。
・共通テストを実施・分析したことで，自国の算数レベルに気づき，カウンターパートが大変意欲的になった。
・互いによいところが学びあえた。
（パラオの年間指導計画・ミクロネシアの指導法・マーシャルの公開授業）
・自分たちの課題について考える，よい機会となった。
・共通課題＝レッスンプラン（一時間の流れ・年間指導計画）の充実
・レッスンプランの充実に向けて，具体的な取り組みを進められた。

＜課題＞次の開催につなげるのが難しい。（取り組みの進捗状況・時期等）

表２　広域研修

（３）計算大会

子どもの基礎基本の定着をはかったり，教師の意欲をあげたりするため，学期に一度，クラス対抗計算大会を開き，結果を発表した。出題は四則計算が中心で，学年ごとに問題を設定し，練習問題やテストを事前に余裕をもって配布して，テスト結果よりも練習していく過程を重視した。（表３）テストの実施後は，その結果を分析し，気づいた点をアドバイスして，意欲の継続を促した。（表４）子どもも教師も意欲的に取り組むことができ，子どもの算数の基礎基本の力の向上につながった。

3rd JOCV Math Competition

2nd Graders <Practice>

+	0	5	4	8	2	6
3						
6						
7						
5						
9						
8						

<Test>

+	2	7	8	6	9	5
1						
9						
6						
7						

表３　計算大会　テスト問題

< 2 Graders > 1 Digit Addition

Some students calculate addition very well. Some students don't have t enough time to finish calculation.

Some students calculate writing bars. Many students calculate using their fingers. I guess some students calculate mentally. Every way is good. Students should study step by step.

Judging from their answer sheets some students has time trouble. To solve this problem teacher can encourage them to calculate mentally. Teachers need to know many strategies. I'd like to introduce one of the ways which I believe will be the best way. Teacher can use make 10 materials board when teacher made JOCV math material workshop.

Application of "Make a Ten" to Addition

Let's use your memory instead of your fingers!!

Step 1

Let's memorize the number which is the difference between 10 and the number.

$10-1=9$
$10-2=8$
$10-3=7$
$10-4=6$
$10-5=5$
$10-6=4$
$10-7=3$
$10-8=2$
$10-9=1$

If you can memorize you are ready to move to the next step now.

Step2 You subtract from the make 10.

表４　計算大会　テスト

３．算数以外の取り組み

（１）栄養指導

甘いものをとりすぎないことや，三食きちんとごはんを食べることの大切さなどを，朝礼で子ども達に呼びかけたり，学期に一度の保者会で保護者に呼びかけたりした。

（２）ごみ問題

一年目には，環境省と連携して，ポイ捨てをやめようという意識を高めたり，他校とポスターコンテスト行ったりした。また，ピックをして，海岸掃除を行った。

二年目には，環境問題を扱うアメリカ人ボランティアグループに入り，マーシャルの環境問題やその改善策などについていっしょに検討した。また，学習指導案や教材である本を作り，誰もがごみ問題についの授業ができるように形を整えた。

いくつかの取り組みをしたが，ごみ問題の現状は変わらず，ポイ捨ては続いている。習慣

化してしまっているので，長期的粘り強い取り組みが必要だと感じた。

（3）さまざまな提案

気が付いたことは，積極的に校長先生に直接話したり，職員会議で提案したりした。受けれられなかった提 案もたくさんある。

（事例１）

以前，朝礼は校長先生の長い話を聞くだけの，子どもにとっては受け身的な内容で，話の聞き方もよくなかった。そこで，校長先生の話を短くしてもらうことや，国家を歌うこと，学習したことを学年やクラスで発表することなどを提案した。自分たちも参加するようになったため，朝礼が楽くなり，話の聞き方もよくなった。

（事例２）

学校には行事がほとんどないという状態だったので，現地のＮＧＯに依頼し，「教育はなぜ必要なの。」というタイトルの劇をしてもらった。観劇したり，いっしょに歌ったり踊ったりしながら，教育の大切さにふれることができた。

（4）マーシャルと日本のかけはし

自分がマーシャルと日本のかけはしになり，子ども達同士が文化交流をして，互いの国について関心をもってもらいたいという思いから，様々な活動を行った。マーシャルでは，毎回「おはようございます。」と，日本式のあいさつをして授業を始めた。日本には，マーシャルの民芸品やＣＤ写真集などを送ったり，月に一度マーシャル新聞を作って，日本の所属先の学校や岡山県のホームページに載せてもらったりして，多くの人に読んでもらうことができた。また，日本からは，算数セットや，折り紙作品などを届けてくれた。いろいろなやり取りを通して，互いの国を身近に感じ，関心をもつことができたようだ。（図１）

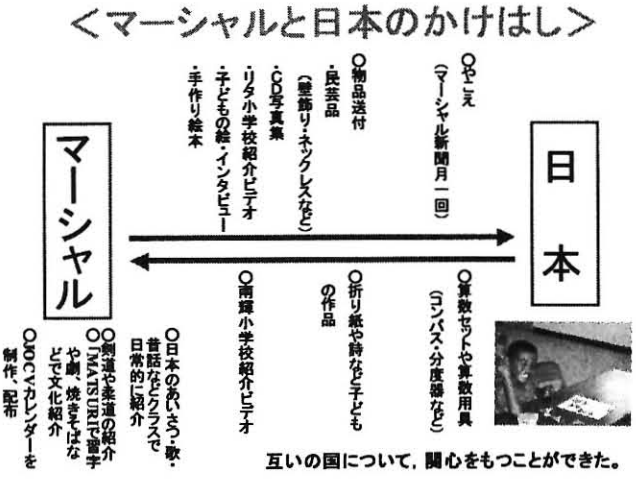


図１　　マーシャルと日本のかけはし

４．帰国後の活動

帰国しても，日本とマーシャルとのかけはしになりたいという思いは変わっていない。自校や他校での職員研修や国際理解のイベントで講師を務めたり，自分のクラスの子ども達に，マーシャルの言葉や歌，絵本などを紹介している。また，クラスだけでなく，他のクラスや学年からの要望があれば，出向いて授業ができるように，自分ができることを指し示し，人材バンクとして登録してもらっている。（表５）

また，委員会を中心として全校児童に呼びかけ，絵や習字などの作品募集をして，マーシャルに送る活動をしている。日本とマーシャルの子どもの作品交流につなげていきたい。

マーシャル、出前します！

マーシャルについて何をどう伝えていけばいいのかまだ考えがまとまっていないのが現状なのですが、国際理解の一助になれば幸いと考え、貴重な経験をさせていただいたことを何らかの形で還元していきたいと考えています。何かご要望があれば、学年・クラス単位などでお気軽にお申し出ください。

＜出前リスト＞　＊お話（トピック）

・国の概要　・暮らし　・私の仕事
・学校や子どもたち
・社会問題（ごみ問題・核問題・温暖化による海面上昇）
・感じたこと（家族の絆など）

＊言葉（マーシャル語・英語）　＊歌　＊遊び　＊絵本　＊料理　＊ハンディ・クラフト（かごあみ）（材料あるのかな？）

＜持ち物リスト（貸し出しOKです）＞

＊本・雑誌　＊ビデオ　＊CD

・核問題について/
・子ども
・海
・マーシャル新聞（手作り）

・リタ小学校紹介（手作り）
・マジュロ紹介（手作り）
・第５福竜丸の被爆
・マーシャル紹介
・海
・歌や踊り

・歌

＊ハンディ・クラフト　＊服　・写真

＊出前を希望される方は、下記の申込書を荻野までお願いします。尚，申し込みはいつでも・いつまでも受け付けます。

・・・・・・・・・・・　切り取り・・・・・・・・・・・・・・・

お名前　（　　）

1　単　位　（　　）
2．要　望　（　　）
3．時　期　（　　）
4．回　数　（　　）

表５　人材バンク登録

終わりに

マーシャルでの協力隊活動を通して，たくさんのことを学ぶことができた。この経験を生かして，これからは，日本とマーシャルのよさを合わせもつような教師になりたいと考えている。

協力隊を経験する前と後では，自分自身が教師としてかなり変容しているが，特に以前にも増して，子ども達に，だれとでもなかよくしてほしいと強く願うようになった。（表６）私が，そう強く願うのは，国際理解教育や異文化理解は人権教育と深く関わっていて，だれとでもなかよくできたり，相手の喜びや痛みを自分のことように引き寄せて考えられることがとても大切だと思うからである。だれとでもなかよくできるということは，異文化を受け入

れることである。異文化を違いとするならば，その対象は，クラスの友達，障害者，男女，老人，外国人など，実はどこにでもある。それらの違いに対して排除する方向に進めば，いじめや差別となって表れていく。生きにくい世の中になってしまう。しかし，それらの違いを受け入れた時，世界は豊かに広がっていくに違いない。

たとえ身近に外国人がいなくても，工夫や心がけ次第で，国際理解や異文化理解，またはその素地作りはできる。一歩ずつ丁寧に，まずは，子ども達がクラスの友達を大切にすることから取り組みを進めていきたい。

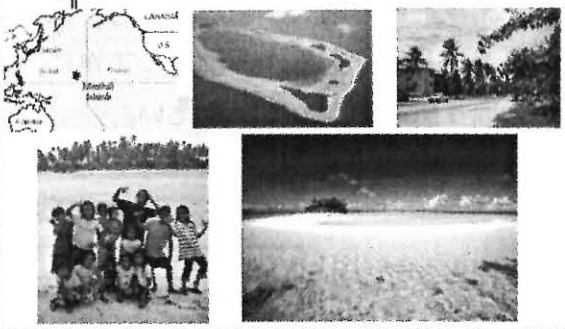
以　前	以　後
・がんばるのは当たり前という見方。 ・うまくいかない時＝なんとかしなくちゃ。 ・特に疑問をもつことは少なかった。	・がんばっていてすごいなという見方。 ・うまくいかない時＝そういう日もある ・うまくいく方法をその子にあわせて考えるようになった。 ・客観的な見方ができるようになり，当たり前だと思ってきたことに疑問をもつようになった。 ・日本的な教育だと感じるようになった。
・仕事は無理してでも精一杯する。	・基本的に無理はしない。 ・「だれとでもなかよくやってほしい」「その子にもっとあった道はないだろうか」という思いが強くなった。

表６　教師としての自分の変容

青年海外協力隊
派遣現職教員の活躍

15－1 マーシャル
小学校教諭
荻野　晃子

Republic of Marshall Islands



1．マーシャルでの活動

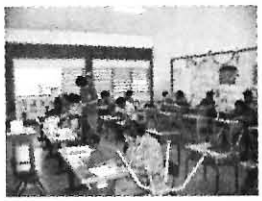
（1）個人での活動
＜算数＞マジュロ環礁・リタ小学校

（2）他のJOCVと連携しての活動
＜算数＞

（3）その他

（1）個人での活動＜算数＞

①算数指導（子ども達）　②算数指導支援（先生）



①算数指導（子ども達）

分かりやすく，楽しい授業をめざして

- 指導案作成
- 補助教材作成
- 学習規律づくり

＜ルール＞
1．一生懸命勉強する
2．ものを食べない
3．口笛を吹かない
4．時間を通りに来る

②算数指導支援（先生）

事前に準備し，働く喜びを実感できることをめざして

T　T

・毎学期（4学期制）担当学年を変え，できるだけ多くの先生と関わる。
・必ず目的を話す。
・どのような入り方をするのかを相談の上，決める。
・授業中に気になったことをメモし，授業後に感想を交換する。

ワークショップ

・大きな数，かけ算，立体，コンパスの使い方についてなど。
・希望を聞いたり，様子を見たりして決定する。
・JOCVの伝達
（広域研修での内容・振り返り・週案使用のモニター）

年間計画の推進

・1年目は，JOCVが以前作成していた年計を使用。
・2年目は，自分で作った年計を進める。教育省に，サンプルとして提案。
・現在，教育省が年計を作成。今年度より，各校で実施。

(2)他のJOCVと連携しての活動

月に1～2回程度，小学校算数部会を開き，情報交換や，連携して行っている様々な活動の打ち合わせ，準備を行った。(教育省・算数担当のシニア隊員も含めて)

①公開授業
②広域研修
③計算大会

①公開授業

算数指導者が研修できる機会をつくるため，月に1度，JOCVがいる小学校(6校)を会場に輪番制で行った。

年度	授業者	授業検討の役割分担	その他
2003 (6校)	JOCV	JOCV	手作り教材の紹介 (授業検討に続いて)
2004 (7校)	カウンターパート	各校で	手作り教材の作成 (別の日を設けて)
2005 (7校)	算数指導者 全員	各校で	

＊最後の1時間を公開授業にあて，その後検討会を開いた。

＊参加者数は，各校長の理解度によって，違っていた。

②広域研修

パラオでパラオ・ミクロネシアと共に，広域研修会を開いた。(2004年8月)

＜背景＞歴史(USAからの独立)や現在の状況(USAの教科書を使用，課題など)には共通点が多いにも関わらず，各国のつながりがなかった。

＜目的＞・互いによいところを学びあう。(パラオの年間指導計画など)
・共通課題を見つけ，それぞれのアプローチの仕方で問題解決に迫る。
進捗状況を情報交換することで，モチベーションを継続し取り組みの活性化につなげる。

＜成果＞・カウンターパートととてもよい人間関係ができた。
・共通テストを実施・分析したことで，自国の算数レベルに気づき，カウンターパートが大変意欲的になった。
・互いによいところが学びあえた。
(パラオの年間指導計画・ミクロネシアの指導法・マーシャルの公開授業)
・自分たちの課題について考える，よい機会となった。
・共通課題＝レッスンプラン(一時間の流れ・年間指導計画)の充実
・レッスンプランの充実に向けて，具体的な取り組みを進められた。

＜課題＞次の開催につなげるのが難しい。(取り組みの進捗状況・時期等)

②広域研修

③計算大会

子どもの基礎基本の定着をはかったり，教師のモチベーションをあげたりするため，学期に一度，クラス対抗計算大会を開き，結果を発表した。

・参加は，算数指導者の希望とした。

・出題は四則計算が中心。学年ごとに問題を設定し，練習問題やテストを事前に配布し，結果よりも過程を重視した。

・結果を分析し，気づいた点をアドバイスして，意欲の継続を促した。

＜成果＞・基礎基本の向上につながった。
・子どもも教師も意欲的になった。

＜課題＞テストの実施や採点方法などが徹底しにくい。

(3)その他

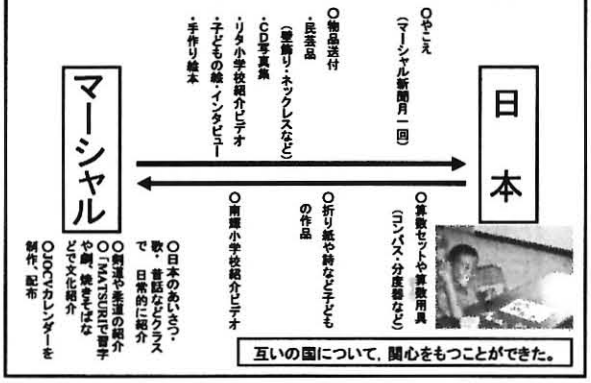
・栄養指導・・・朝礼で子ども達に呼びかけ
学期に一度の保護者会で保護者に呼びかけ

・ごみ問題
(1年目)・環境省にプレゼンを依頼
・環境省と連携し，他校とポスターコンクール→ピクニック＋海岸掃除

(2年目)・環境問題を扱うアメリカ人ボランティアチームに入り，いっしょに検討
・環境省にプレゼンを依頼
・授業案作り
・本作り

・さまざまな提案
(朝礼のもち方や観劇についてなど)
・マーシャルと日本のかけはし

<マーシャルと日本のかけはし>



2. 帰国後の活動

（1）クラスの子どもにマーシャルの紹介

（2）日本とマーシャルの子どもの文化交流

（3）人材バンクとして登録してもらう→「出前授業」

（4）勤務先・他校での職員研修や国際理解のイベントで，講師を務める

教師としての自分の変容

以　前	以　後
・がんばるのは当たり前という見方。 ・うまくいかない時＝なんとかしなくちゃ。 ・特に疑問をもつことは少なかった。	・がんばっていてすごいなという見方。 ・うまくいかない時＝そういう日もある ・うまくいく方法をその子にあわせて考えるようになった。 ・客観的な見方ができるようになり，当たり前だと思ってきたことに疑問をもつようになった。 ・日本的な教育だと感じるようになった。
・仕事は無理してでも精一杯する。	・基本的に無理はしない。 ・「だれとでもなかよくやってほしい」「その子にもっとあった道はないだろうか」という思いが強くなった。

教師としての自分の変容

青年海外協力隊現職参加活動報告

池田一成
（14-1，ポーランド，体育，東京都立第一商業高等学校）

現職教員として、国際協力の現場の経験が必要だと考え、青年海外協力隊に応募した。国際社会への貢献について語られることが多くなったが、今後、その中心となっていく生徒たちに、国際協力の重要性や基本となる精神を、単なる知識としてではなく、実体験をもとに伝えることが必要だと考えたからである。

配属先は、ポーランド東部のザモシチという町から少し離れた、ビソキエという農村の小中学校（図１）で、生徒数は小学０年生から中学３年生まであわせ、約３００名であった。この村はEUのなかで最も経済的に貧しいといわれる地域にあるが、日本同様、都会よりも人情味が厚く、面倒見の良い人たちが多い。多くの村人に、ほんとうに世話になった。しかし、その反面、排他的な考え方が根強く残っていると感じるような場面も数多く経験した。主要都市から離れているため、異なった人種が極端に少なく、異文化と直接ふれあうチャンスがほとんどない。村人も子供たちも、他の人種や、異文化に対する考え方に、かなり偏りがあると感じた。

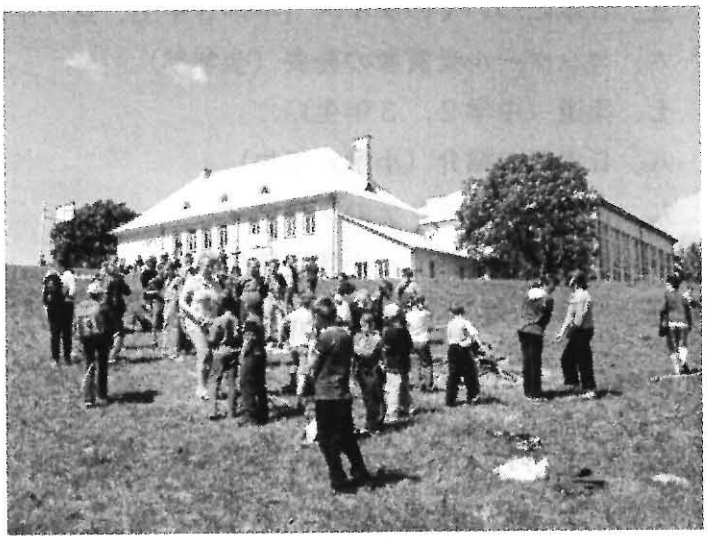


図１　　ビソキエ小中学校

さて、そのような環境での教員生活が始まって、まもなく、校長より「日本の日」の開催を要請された。当初、校長は、他の隊員にも協力を依頼し、日本人による日本文化紹介を中心に考えていたようだが、自分としては、生徒による活動を中心としたイベントにしたいと考えた。校長には、ただ単に「日本文化ショー」を見るだけに終わらないように、生徒たちが主体となって関わるようなものにしたいと伝えた。また、異文化を考えるイベントということで「日本とポーランドの日」という名前に変更してもらった。具体的には、各クラスに、企画を考えてもらい、担任と生徒が中心となって準備を進め、発表するという形となった。日本の文化祭、学園祭のような形式だが、多少うまくいかないことがあっても、子供たちが企画、運営することに意味がある。小学１年生から中学３年生まで、全てのクラスが参加した。私は、自分が協力できそうな企画をいくつか提案したが、柔道と、日本語に関するもの

以外は、ほとんど関わる必要がなかった。このイベントを通じ、子供たちは、日本文化に触れ、日本に興味を持ち、異文化について考え始めるきっかけとなったと思う。

以下、プログラムの概要を紹介する。

日本とポーランドの日

第一部

一、歓迎の言葉（校長）

二、フォークダンス（伝統的なダンス。小学１、２、４年生。図２）

三、インターネットを通じて日本、台湾、イギリスと会話

（英語でチャット。中学２年生）

四、きらきら星（日本語で。小学４年生）

五、日本についてのクイズ（中学３年生、全学年）

六、コンクール受賞者の発表（全学年）

七、柔道（中学２，３年生）

八、日本語の紹介（小学４年生）

九、合気道（ザモシチのクラブ）

十、島唄（日本語で。小学４年生）

試合　　日本 対 ポーランド

（中学１年生男子。各国のユニホームを着て試合）

第二部

一、教室にて作品の紹介（小学３年生、教職員）

二、ポーランド料理の紹介（教職員）

三、体育館にて

日本食の紹介（小学６年生）

折り紙（小学５年生他）

ポーランドのお菓子（中学１年生女子）

日本伝統のおもちゃ(展示)

日本文化の紹介については、このイベントだけではなく、日常の生活の中で日本文化にふれる機会を作るよう心がけた。就学前の子供たちから中学生まで、チャンスがあれば、折り紙を折ったり、日本語の挨拶を教えるなど日本に関する授業を行った。

また、放課後の課外活動では、柔道以外に、中学生の学校対抗競技会の練

図２　ポーランドのフォークダンスを踊る１，２年生

習にも参加した。競技会に向けての練習といっても、競技会の１週間ほど前に、メンバーを募集、体育教員がその中から出場者を選考し、２ー３日ゲーム形式の練習をして、すぐ本番という、東京では考えられないような形だ。したがって、もともとスポーツが得意な生徒たちが全ての競技に参加することになる。日本の「部活」のように、スポーツが得意でなくとも３年間の継続的な努力で、一般生徒より、うまくなるというような経験は、この学校ではできないだろう。

日本では、何年か前から、地域のスポーツクラブに関心が高まっているようだが、改めて、日本の部活動の教育的な意義を感じた。

このように、「部活」もある、「競技会」もある、しかし、全く異なった方法で行われている。授業にしても学校行事にしても同様である。発展途上とは言い難い、また、表面上日本との差などほとんど感じない社会で、異なる未知の文化のなか、教員として仕事をしたことは、自分のこれからの教員生活にとって、とても貴重な経験であった。さまざまな場面で、子供たちを取り巻く問題を考えたとき、自分の解決策のベースとなっているのは、東京での教職経験である。歴史も文化も宗教も異なる任地で、相手を理解しようとしない、独りよがりの解決策は全く通用しない。

日本においても、教育に関する問題は数え切れないが、自分の考えを押しつけず、個々の子供たちの生い立ち、生活環境を十分理解し、すべてを受け入れた上で、生徒とともに解決策を考えていきたい。とても時間がかかり効率的ではないかもしれないが、それは、全ての子供たちのために、最も大切にしていかなければならない考え方であると、今回の経験を通じ再認識した。

最近、日本では、経済の競争原理の中で成功してきた企業経営を、そのまま取り入れようとする公立学校もあると聞く。もし、そのなかで、子供たちを犠牲にするようなことがあるならば、授業よりも家族や宗教的行事を大切にする、この村の学校の生徒のほうが、より幸せだとは考えられないだろうか。

「学校は閉鎖的である」とか、「一般社会では通用しない」などの批判が、ここ数年、多く寄せられるようだが、理想とは言い難い現代社会に振り回されない学校でありたい。

ポーランドの農村に派遣され、本当に良かったと思う。学校行事には、宗教的なものを含め、ほとんど全て参加した。結婚式、葬式を含め、日常の生活を村の人々とともに過ごすことができ、ポーランドの農村の生活を深く経験することができた。異なる人種、異なる文化のなかで生活するには、どうしたらよいかを学んだ。日本とポーランドは、他の人種が少ないという点で類似している。アジア人に対する蔑視を体験できたおかげで、この問題に対しても深く考えることができた。日本でも他民族に対する蔑視、偏見はまだ存在している。難しい問題だが、ポーランドとの交流を続け、日本の子供たち、ポーランドの子供たちと共に、国際交流、他民族との共生について、さらに、１人ひとりの人間を大切にするとはどういうことかをともに考えていきたい。

図３　現任校の生徒が集めてくれたプレゼントに喜ぶ、小学０年生。

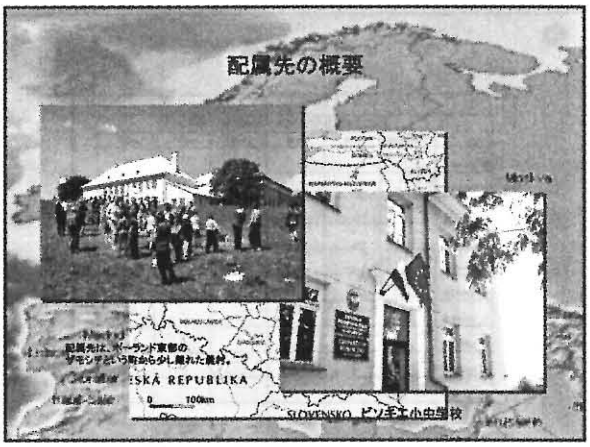
文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

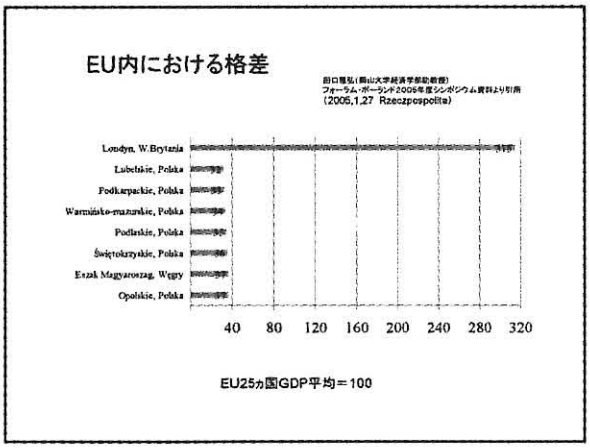
活動報告

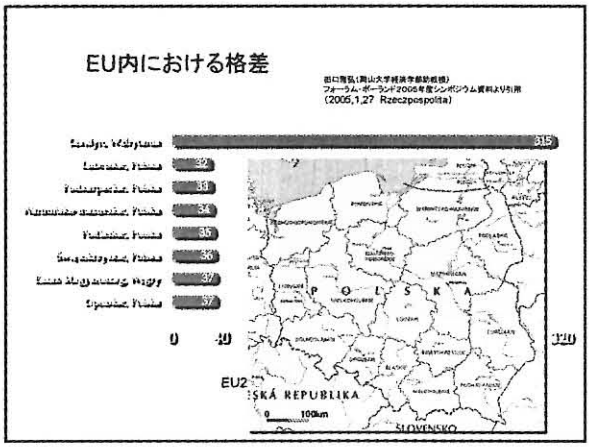
平成18年1月7日

隊次：平成14年度1次隊
派遣国：ポーランド派遣
職種：体育
所属：都立第一商業高等学校

池田一成







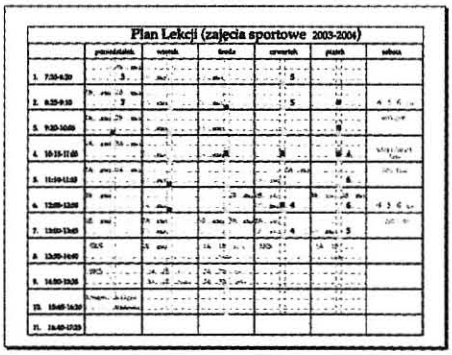
小学0年生から、中学3年生まで、
合計約300人の小さな学校。

活動内容

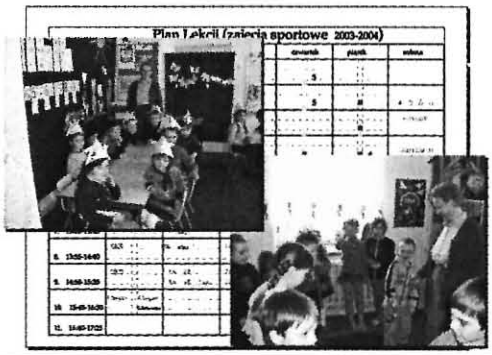
- 通常の授業
- 課外活動
- 日本文化紹介
  - -配属先
  - -Kraków (Centrum Sztuki i Techniki Japońskiej "manggha")
  - -Zamość 第2高校

・帰国から現在まで

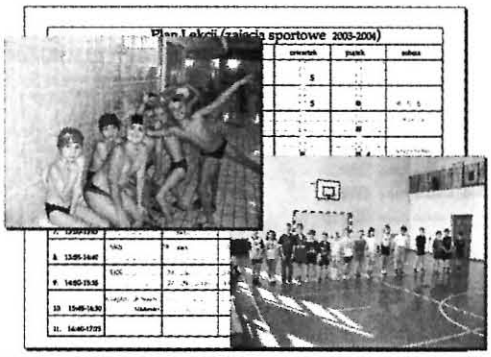
通常の授業



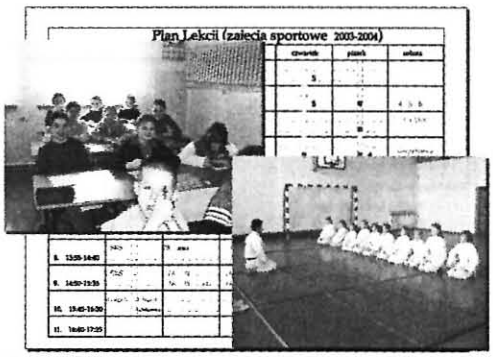
通常の授業



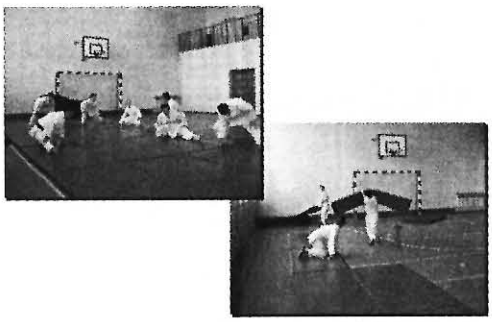
通常の授業



通常の授業

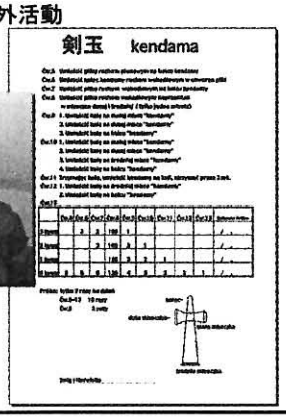


課外活動

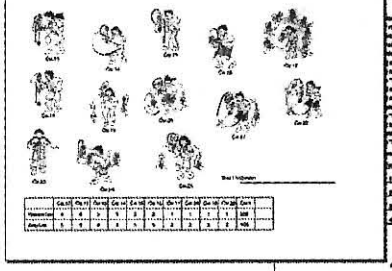


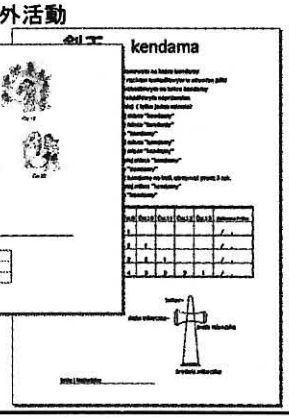
課外活動

課外活動



課外活動





課外活動

課外活動

日本文化紹介(配属校)

日本とポーランドの日　(6月12日)

第一部

壱、歓迎の言葉(校長)＆自己紹介
弐、フォークダンスと歌(小学1、2、4年生)
参、インターネットを通じた日本との会話(イギリス、台湾、日本)
四、きらきら星(4年生、日本語とポーランド語で)
五、日本についてのクイズ(小中学生全員)
六、コンクール受賞者の発表
七、長道(中学生)
八、日本語会話の紹介(4年生)
九、合気道(ザモシチのクラブ)
十、品唱(4年生、日本語)

休憩
　試合(サッカー)　日本　対　ポーランド

第二部

壱、教室にて作品の紹介とポーランド料理の紹介
　(子供たちの組と、ポーランド伝統料理)
弐、体育館にて
　日本食の紹介(6年生、日本料理)
　折り紙(5年生)
　ポーランドのお菓子(中学1年女子)
　日本伝統のおもちゃ
　書道

日本文化紹介(配属校)

日本とポーランドの日　(6月12日)

第一部

壱、歓迎の言葉(校長)＆自己紹介
弐、フォークダンスと歌(小学1、2、4年生)
参、インターネットを通じた日本との会話(イギリス、台湾、日本)
四、きらきら星(4年生、日本語とポーランド語で)
五、日本についてのクイズ(小中学生全員)
六、コンクール受賞者の発表
七、長道(中学生)
八、日本語会話の紹介(4年生)
九、合気道(ザモシチのクラブ)
十、品唱(4年生、日本語)

休憩
　試合(サッカー)　日本　対　ポーランド

第二部

壱、教室にて作品の紹介とポーランド料理の紹介
　(子供たちの組と、ポーランド伝統料理)
弐、体育館にて
　日本食の紹介(6年生、日本料理)
　折り紙(5年生)
　ポーランドのお菓子(中学1年女子)
　日本伝統のおもちゃ
　書道

日本文化紹介(配属校)

日本とポーランドの日　(6月12日)

第一部

壱、歓迎の言葉(校長)＆自己紹介
弐、フォークダンスと歌(小学1、2、4年生)
参、インターネットを通じた日本との会話(イギリス、台湾、日本)
四、きらきら星(4年生、日本語とポーランド語で)
五、日本についてのクイズ(小中学生全員)
六、コンクール受賞者の発表
七、長道(中学生)
八、日本語会話の紹介(4年生)
九、合気道(ザモシチのクラブ)
十、品唱(4年生、日本語)

休憩
　試合(サッカー)　日本　対　ポーランド

第二部

壱、教室にて作品の紹介とポーランド料理の紹介
　(子供たちの組と、ポーランド伝統料理)
弐、体育館にて
　日本食の紹介(6年生、日本料理)
　折り紙(5年生)
　ポーランドのお菓子(中学1年女子)
　日本伝統のおもちゃ
　書道

日本文化紹介(配属校)

海外とのチャット

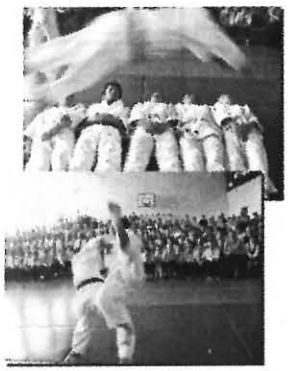
イギリス

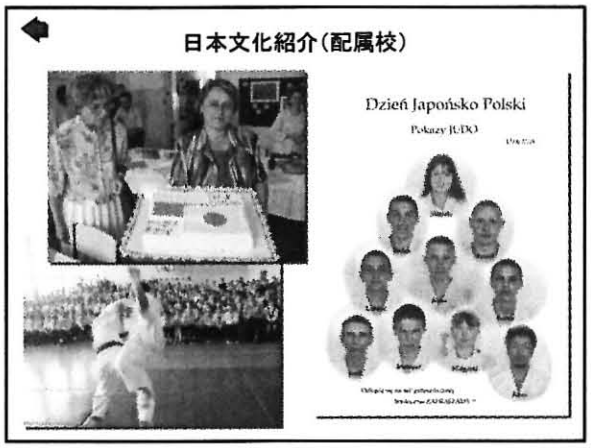
日本

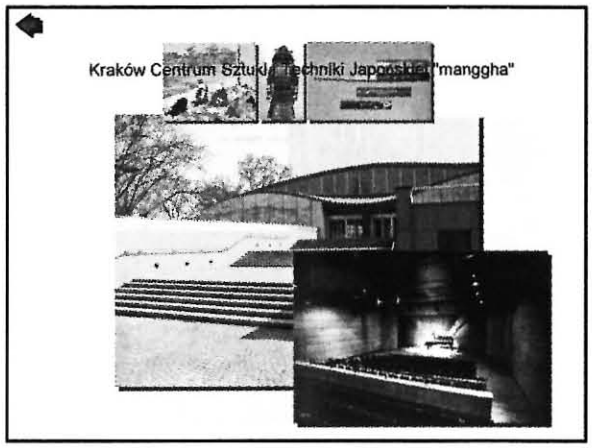
台湾

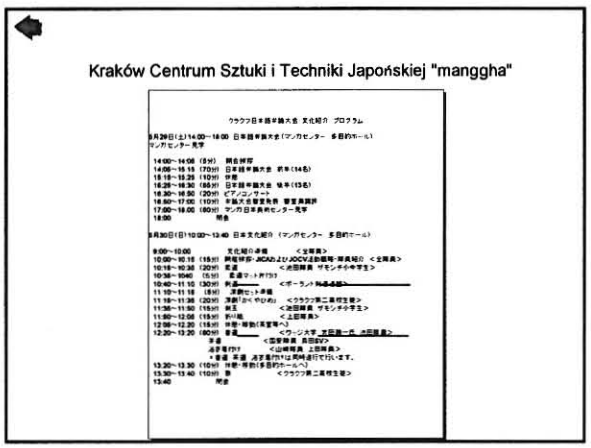
日本文化紹介(配属校)

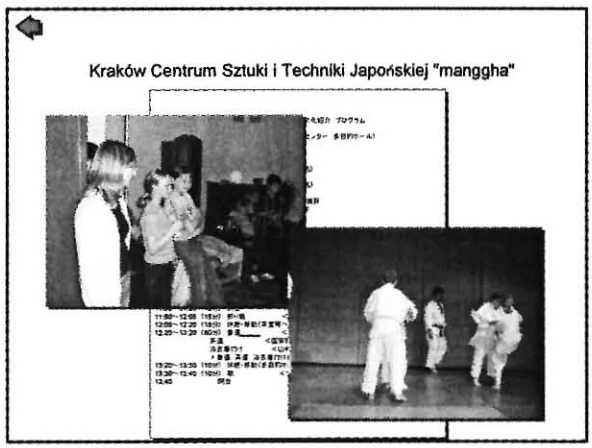
日本文化紹介(配属校)

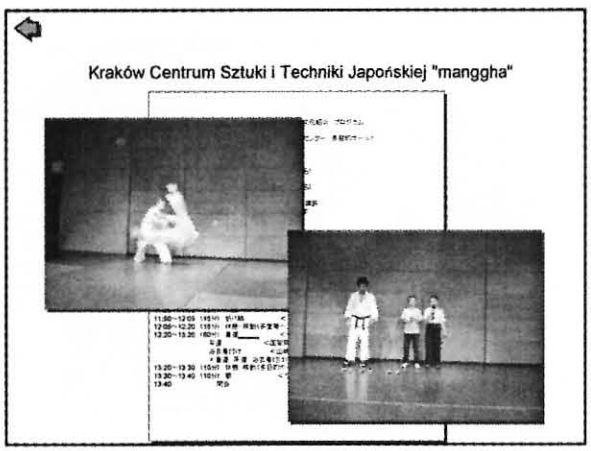


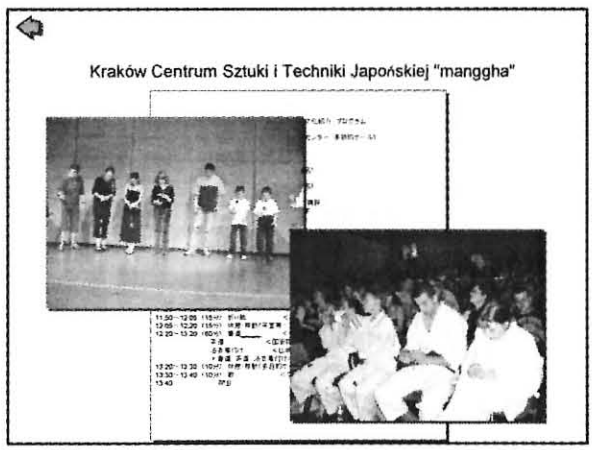

日本文化紹介(配属校)
Dzień Japońsko Polski
Pokazy JUDO


Kraków Centrum Sztuki i Techniki Japońskiej "manggha"


Kraków Centrum Sztuki i Techniki Japońskiej "manggha"


Kraków Centrum Sztuki i Techniki Japońskiej "manggha"


Kraków Centrum Sztuki i Techniki Japońskiej "manggha"


Kraków Centrum Sztuki i Techniki Japońskiej "manggha"

Kraków Centrum Sztuki i Techniki Japońskiej "manggha"

帰国後

・国際交流、異文化理解

現任校で特別授業の実施

帰国後

・ポーランドとの交流

生徒がぬいぐるみを
持参し
0年生のクラスに
プレゼント

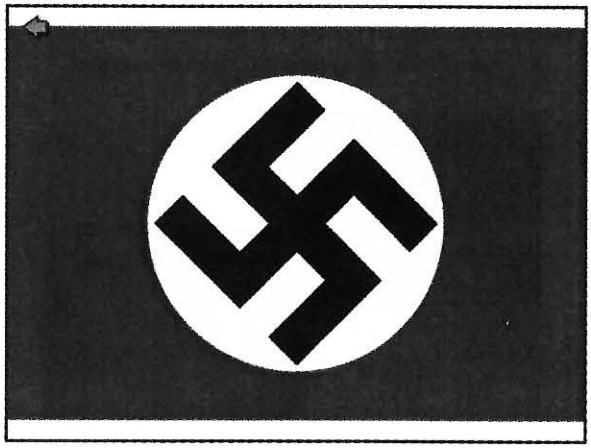
帰国後

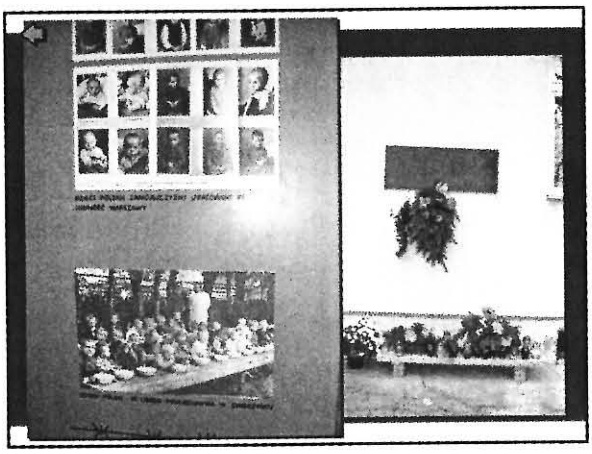
・ポーランドとの交流

最後に、

- 異なる民族、文化（歴史、宗教）
  - 理解すること
  - 偏見、蔑視
  - 人間関係
- 日本について
  - 日本人らしさ？
  - 学校教育の変化

ありがとうございました。





プログラム３

帰国後の活動と協同

派遣経験を生かした帰国後の教育活動事例報告

渡部和江 教諭（久万高原町立美川中学校）

（15-1，ガーナ，家政）

永月明子 教諭（城山町立川尻小学校）

（15-1，パラグアイ，音楽）

「インターネットライブ授業」の報告

関野貴之 教諭（泰野市立鶴巻小学校）

（15-1，バヌアツ，小学校教諭）

派遣経験を生かした教育活動事例報告

渡部　和江
（15-1，ガーナ，家政，久万高原町立美川中学校）

1　はじめに

15年度1次隊でガーナへ家政隊員として派遣。

2　現地での活動

職業訓練学校の被服科での技術指導。現地で学んだこと。

・創意工夫　・技術協力の可能性　・コミュニケーション　・助け合うこと

・専門性

3　新任校で

任期を終えて帰国。新任校で私は家庭科ではなく国語を受け持つことになりました。専門でない教科を担当するため、教材研究に追われる日々でした。

4　私たちにできること。

あるとき、校長先生がガーナの人のために何か私たちにできないかだろうかと声をかけてくださいました。相談の結果、現地の方を日本に招待することになりました。日本の企業や学校を見学していただくとともに、生徒と交流ができればと考えました。費用は趣旨に賛同していただいた地元企業の方に寄付していただきました。

5　配属先のニューエブアイセスについて

地域の青少年に職業訓練の機会を与える目的で作られ、被服科、調理科、大工科、石　工科、電気科、コンピュータ科がありました。しかし、資金不足のため設備は全く整っ　ておらず、生徒の家庭も貧しく、やめていく生徒も多くいました。

6　エリックさん訪問のねらい

本校生とは全校生徒わずか３２名です。素直で優しい生徒が多いのですが、限られた人間関係の中で、多様な思考が育ちにくい面や消極的な面が見られます。そのような生徒たちが視野を広げ、興味がもって取り組む機会にしたいと考えました。

(1)　生徒たちとの交流

・心のふれ合う交流　　・異文化理解　　・コミュニケーションの力

(2)　研修

・学校運営のヒント　　・日本の技術

表１　エリックさんとの交流内容（本校関係分）

①	校内施設見学・給食への参加　（３年生）
②	ガーナトーク（２年生）
③	ガーナ料理　（１年生）
④	ガーナ集会　（全校生徒、教職員、保護者）
⑤	合唱練習見学　（アフリカ民謡）

7　交流活動

(1)　活動事例１　海外活動報告会

対象　本校生徒、保護者、教職員　　時間５０分

内容　ガーナの概要、協力隊活動、エリックさんを迎えるために

(2)　活動事例２　ガーナトーク（５０分）

対象　２年生１２名　　時間　５０分

内容　ガーナやエリックさんについて知ろう。

表２　「ガーナトーク」会話の一部

生徒		エリックさん
・カカオがたくさんありますか？	→	・はい。日本にもたくさん輸出しています。
・日本で驚いたことは？	→	・みんなの制服がきれいこと。 学校の設備がガーナの大学と同じくらい。 トイレのウォシュレット、地下鉄
・日本からもって帰りたい物は？	→	・コンピューター、今の学校には１００人の生徒がいて２台しかないから。
・ワールドカップ出場。	←	・ガーナではサッカーが盛んなのを知っていますか？

生徒の様子

生徒は興味あるようでしたが、なかなか勇気がないようでした。何を聞いたらよいかわからない、英語が間違っていたら恥ずかしいと消極的でした。

テーマを絞るなど展開方法を工夫する必要がありました。また、事前に質問カードなどに書かせておくとよかったと思います。

(3)　活動事例３　ガーナ料理づくり

対象　１年生８名　　時間　５０分×３コマ

内容　ガーナ料理（フーフー＆ライトスープ）をエリックさんと一緒に作る。

ガーナ料理の特徴を知る。

フーフー・・・・キャッサバやヤム芋をゆでて、おもちのようについたもの。

ライトスープ・・トマトやタマネギをすりつぶして魚や肉といっしょに煮込んだスープ。

写真１　ガーナ料理づくり

① 料理を通して学んだガーナの生活。

・ ガーナでは大きなさらにもってみんなで分け合いながら食べる。食事をとても大切にしている。

・ ガーナでは子どものころから家事を手伝うのでほとんどの人が基本的なガーナの料理を作ることができる。家族で助け合って生活している。

② 生徒の感想

○ どんな味なのか全く予想できなかったけれど、みんなと楽しくできたのでよかったです。味も食べやすかったです。

○ エリックさんの包丁の使い方がとてもうまかったです。みんなに優しく接してくれました。

(4) 活動事例４　ガーナ集会

対象　全校生徒３２名、教職員、保護者　　時間　５０分

表３　ガーナ集会の内容

1　民族衣装紹介
2　ガーナの国旗
3　ガーナの生活習慣
4　ガーナのびっくり
5　ガーナの音楽・ダンス
6　日本の印象・生徒たちへのメッセージ

写真２　ガーナ集会でダンス披露

① 生徒へのメッセージ

日本の生徒さんは大変まじめですが、ちょっとおとなしいです。日本の学校はどこに行っても設備が整っていて、教育が重視されていることがわかりました。私は日本でたくさんのことを学びましたし、みなさんもガーナのことをたくさん知ってくれたと思います。そして、これからもガーナと日本の交流が続くことを願っています。

② 生徒の感想

○言葉は違っても人を尊敬する気持ち、歌などを楽しむ気持ちは一緒だと思います。
○まずしいけれど、支え合って生活しているというのを聞いて、優しい国なんだなと思いました。
○本場の言葉も聞けてよかったです。言っている言葉はわからなかったけど、「うれしい」とか「楽しい」という気持ちが伝わったので心が温かくなりました。
○今まで全く知らなかった異国の文化に触れることができてすごくうれしかったです。

7　今回の交流の成果と課題

成果

・コミュニケーションの大切さを知った。
・異文化に触れることができた。
・客観的に自分たちを見ることができた。

課題

・生徒の状況にあった授業展開の工夫
・今回の交流を生かした、今後の教育活動

写真３　エリックさんとのお別れ会

8　今後の活動

生徒たちの生き方に響く活動ができればと思います。

(1)　国語科　　異文化やボランティアをテーマにしたディスカッション、作文
(2)　家庭科　　ガーナ料理、民族衣装、生活
(3)　総合的な学習の時間　異文化体験やボランティア活動の体験談
(4)　他教科との連携　民族音楽、フェアトレード、ガーナの歴史（奴隷貿易）

9　まとめ

体験は何よりの教材だと思います。また、私たち教師は一年一年が勝負です。どのような状況でもやれること、その時しかできないことがあり、チャンスを逃さずやっていければと思います。また、学校内外を問わず周囲の連携も大切です。そして、日本とガーナの交流がこれからも続くよう、私にできることをやっていきたいと思っています。

派遣経験を生かした教育活動事例報告

愛媛県久万高原町立美川中学校
教諭　渡部　和江
（15－1　家政　ガーナ）

任地での活動

職業訓練学校被服科での技術指導

- 創意工夫
- 技術協力の可能性
- コミュニケーション
- 助け会うこと
- 専門性

新任校赴任後　専門外の教科担当への戸惑い
↓
派遣体験を生かせず

校長先生の発案「私たちにできることは？」
↓
ガーナのエリックさんを招聘しよう
（職業訓練学校校長）

ニューエブアイセス職業訓練学校

- 地域の青少年に職業訓練の機会
- 被服科、調理科、大工科、
  石工科、電気科、ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ科
- 資金不足

エリックさん招へいのねらい

① 生徒との交流
- 心のふれ合う交流
- 異文化理解
- コミュニケションの力

エリックさんとのお別れ会

② 研修
- 学校運営のヒント
- 日本の技術

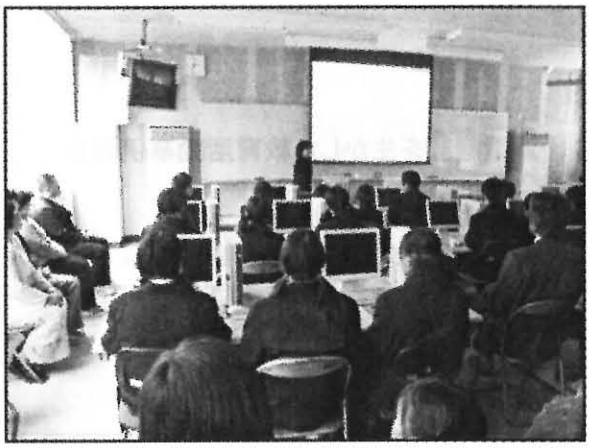
職業訓練学校縫製コース見学

エリックさん招へい計画

11月28日	月	本校（学校内見学）
11月29日	火	本校（2年生ガーナトーク）
11月30日	水	企業見学
12月　1日	木	高等技術専門校見学（縫製・建築）
12月　2日	金	郡音楽発表会参加（日本太鼓・アフリカ民謡）
12月　3日	土	子ども会　木材加工見学
12月　4日	日	山林見学
12月　5日	月	
12月　6日	火	
12月　7日	水	本校（1年生ガーナ料理、ガーナ集会、寮宿泊）
12月　8日	木	愛媛大学
12月　9日	金	愛媛大学
12月10日	土	文化交流会　子ども会
12月11日	日	中学校訪問
12月12日	月	企業見学
12月13日	火	小学校見学　文化交流会
12月14日	水	本校（雪体験）　美術館見学
12月15日	木	本校（パソコン）
12月16日	金	本校（お別れ会）小学校見学

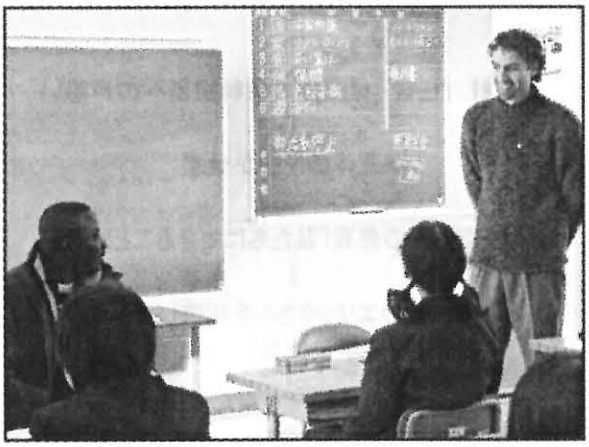
活動事例1　海外活動報告会

- 対象　全校生徒、保護者、教職員
- 時間　50分
- 内容　ガーナの概要、協力隊活動
- エリックさんを迎える前に



活動事例2　ガーナトーク

- 対象　2年生　12名
- 時間　50分
- 内容　ガーナやエリックさんについて知ろう
- 生徒の様子　興味はもっているが、発言することに消極的。
  ガーナ人から見た日本について知った。



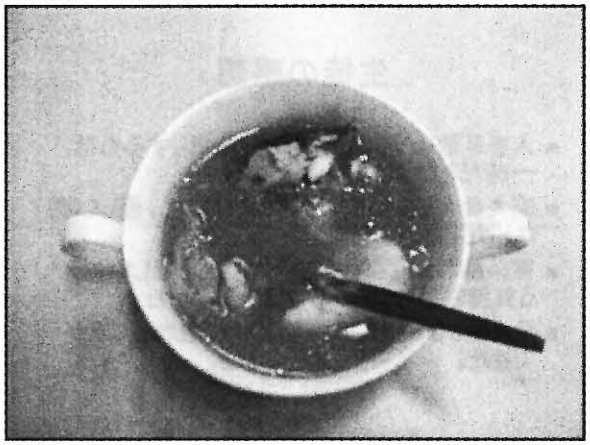
会話の一部

生徒		エリックさん
・カカオがたくさんありますか？	→	・はい。日本にもたくさん輸出しています。
・日本で驚いたことは？	→	・みんなの制服がきれいこと。学校の設備がガーナの大学と同じ。ウォシュレット、地下鉄
・日本からもって帰りたい物は？	→	・コンピューター、学校には2台しかないから。
・ワールドカップ出場。	←	・ガーナではサッカーが盛んなのを知ってますか？

活動事例3　ガーナ料理

- 対象　1年生　8名
- 時間　50分×3コマ
- 内容　ガーナ料理（ﾌｰﾌｰ&ﾗｲﾄｽｰﾌﾟ）づくり、試食、ガーナ料理の特徴

フーフー＆ライトスープ



ガーナ料理から学んだこと

- キャッサバやヤム芋が主食。
- 手で食べる。
- 生の物は食べない。
- 1日2食のことが多い。
- 大きな皿にもって分け合って食べ、食事を大切にする。
- ガーナの子どもは家事をよく手伝う。

活動事例4　ガーナ集会

- 対象　全校生徒　保護者　教職員
- 時間　50分
- 内容　・民族衣装
  - ・国旗
  - ・生活習慣
  - ・民族音楽・ダンス
  - ・日本の印象、生徒たちへのメッセージ

右手を使う習慣

エリックさんからのメッセージ

- みなさんは大変まじめですが、ちょっとおとなしいですね。
- 日本の学校はどこに行っても設備が整っていて、教育が重視されていることがわかりました。
- 今回、お互いの国のことが学べましたね。これからも日本とガーナの交流が続くことを願っています。

生徒の感想

- 人を尊敬したり、音楽を楽しんだりする心は一緒だと思う。
- 支え合って生活をしていると聞いて、優しい国なんだなと思った。
- 言葉はわからなくても「うれしい」「楽しい」という気持ちがわかり、心が温かくなった。
- 全く知らなかった異国の文化に触れることができた。

今回の交流の成果と課題

- 成果
  - コミュニケーションの大切さを知った。
  - 異文化に触れることができた。
  - 客観的に自分たちを見ることができた。
- 課題
  - 生徒の状況にあった授業展開の工夫
  - 今回の交流を生かした、今後の教育活動

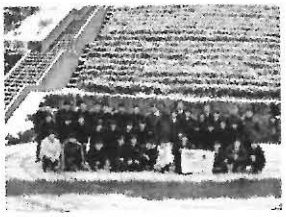
今後の教育活動

生徒たちの生き方に響く活動をめざして。

- 国語科　異文化やボランティアをテーマにしたディスカッション、作文
- 家庭科　ガーナ料理、民族衣装、生活
- 総合的な学習の時間　異文化体験やボランティア活動の体験談
- 他教科との連携　民族音楽、フェアトレード、ガーナの歴史

まとめ

- 教育活動のアイデア。
- 私たちにできることは？



エリックさんを囲んで全員で記念撮影

派遣経験を生かした教育活動事例報告

久万高原町立美川中学校　教諭　渡部　和江

1　はじめに

15年度１次隊でガーナへ家政隊員として派遣。職業訓練学校の被服科での技術指導。

2　新任校で

新しい生活に戸惑い。教材研究に追われる日々。

3　私たちにできること

ガーナの校長先生を招聘することに。

4　配属先のニューエブアイセスについて

地域の青少年に職業訓練の機会を与える目的で作られた。厳しい運営状態。

5　エリックさん招聘のねらい

(1)　生徒たちとの交流

(2)　企業や職業訓練学校見学による研修

6　交流活動

エリックさんとの交流内容（本校関係分）	
①	校内施設見学・給食への参加　（３年生）
②	ガーナトーク（２年生）
③	ガーナ料理　（１年生）
④	ガーナ集会　（全校生徒、教職員、保護者）
⑤	合唱練習参加　（アフリカ民謡）

7　今後の活動

生徒たちの生き方に響く活動ができれば。

(1)　国語科　　異文化やボランティアをテーマにしたディスカッション、作文

(2)　家庭科　　ガーナ料理、民族衣装、生活

(3)　総合的な学習の時間　異文化体験やボランティア活動の体験談

(4)　他教科との連携　民族音楽、フェアトレード、ガーナの歴史（奴隷貿易）

8　まとめ

体験は何よりの教材。日本とガーナの交流を今後も続けたい。

子どもたちに海外への興味を持たせよう！

～パラグアイを中心に広がる南米音楽の世界～

永月　明子
（15-1，パラグアイ，音楽，城山町立川尻小学校）

1，はじめに

みなさん、パラグアイという国がどこにあるか知っていますか。南米の真ん中、アルゼンチンと、ブラジル、ボリビアに囲まれた海のない内陸国です。（図１）私はそこで１年９ヶ月間音楽教師として、地元の幼稚園から教員養成校までの子どもたちを教えてきました。

２００５年３月にパラグアイから戻ってきて、この経験を日本でどう生かそうかと色々考えてきました。日々の学校生活の中で、なかなか時間をとることができませんし、子どもたちの実態により内容も考えなければいけません。そうなると紹介できないまま時間が過ぎていきます。だから、堅く考えずに、ちょっとした時間に気楽に楽しく紹介をしようと思いました。

国際理解の第一歩はまず「知る」ことです。それも楽しくです。道ばたの草でも草の名前を知ると親しみがわくように、いろいろな国を知ることで親しみがわき、それにより、「仲良くしたい」「日本を紹介したい」「助け合いたい」という気持ちが育っていくと思います。

だから、私はどんな機会でも「パラグアイっていう国があるんだ、なんだかおもしろい」という気持ちをまず持ってもらえるように子どもたちや先生方にパラグアイを紹介したいと思います。

図１　南米の真ん中、アルゼンチンと
ブラジル、ボリビアに囲まれた内陸国

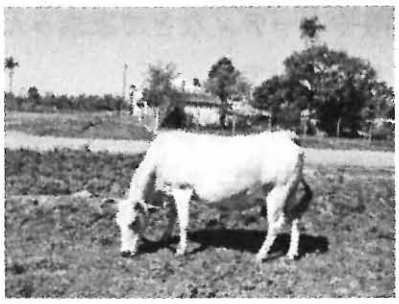


写真１　町の様子（のんびり、ゆったり）

写真２　マテ茶セット（テレレ）

2，パラグアイってこんな国

さてパラグアイは、だいたいが暑い国です。夏は北部では４０度を超えます。南半球にあるので、１２月が真夏で、７月には何日か冬になります。北風が吹くとすごく暑いのが不思

議です。(日本と南北の感覚が逆になるので) 冬はかなり寒く、２度にまでなることもあります。寒暖の差が激しくて、真冬でも昼には２０度ぐらいになったりしてＴシャツで過ごす人もいます。

道ばたには牛や馬、にわとりがのんびりしています。(写真１) 人々ものんびりしています。

パラグアイ人に欠かせないのがマテ茶というお茶です。写真２のコップにお茶の葉をたくさん入れて、茶こし付きストローのようなものをさして飲みます。一人が飲み終わったらまた同じ入れ物にお湯を注ぎ次の人に回します。こうやって５，６人が家の前の道にいすを出して、おしゃべりをしながら１時間も２時間もお茶を飲むのです。

写真３　貧富の差が激しい

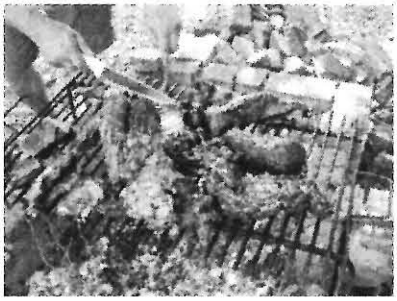


写真４　牛肉が安い。(１kg 180 円ぐらい)

写真５　市場 (何でもある。少し治安が悪い)

貧富の差が激しくて、首都ではベンツに携帯を持っている人もいますが、一方田舎では、窓がなく土の床の家で裸足でぼろぼろの服で生活している人もいます。(写真３) でも、果物 (バナナやマンゴー、パパイヤ) が道ばたの木になっている国なので飢えて死ぬ人は少ないそうです。

パラグアイでよく食べられているのは牛肉です。(写真４) 写真の包丁で切っているお肉で２キロぐらいでしょうか。日曜やパーティなどで家族みんなでアサードという焼き肉をします。少し堅いのもありますがおいしいです。

首都には大きな市場があります。(写真５) 少し東南アジアのような雰囲気ですね。何でも安くそろいます。左に写っているバナナは一房 30 円ぐらいです。少し治安が悪いので、カメラを出したり、財布や携帯電話を出したりするときは気をつけましょう。

３，派遣経験を生かして

そんな経験を以下のように紹介してきました。

(１) 担任を持つ４年生に対して

①日頃の朝や帰りの挨拶を各国語で (日直と何語にするか相談する)

	おはよう	さようなら
英語	グッド　モーニング	グッバイ、シーユー
スペイン語	ブエノス　ディアス	アディオス、チャウ

イタリア語	ボン　ジョルノ	アッリデベルチ、チャオ
ドイツ語	グーテン　モルゲン	アウフビーダーゼン
フランス語	ボン　ジュール	オッルボワー
中国語	ニイハオ	サイチェーン
ロシア語	ズドラーストビーチェ	ダスビダーニャ
グアラニー語	ンバエイシャパ	ジャジョエシャペベ

②授業の中での紹介（旗のクイズ、ニャンドウティドレス、パラグアイハープ体験）・
１時間

旗のクイズとは・・

パラグアイの旗は世界で唯一の裏表のある旗です。（図２）裏にはある動物がかかれています。さて何でしょう。

１，　ライオン
２，　ワシ
３，　ねずみ　　（答えは次のページ　図３）

図２　パラグアイの旗（表）

③運動会でパラグアイ人、ドミニカ共和国の人（JICA 研修員）を紹介

日本の文化にふれる機会として運動会に招待しました。大きなパラグアイ人と肌の黒いドミニカ共和国の人に子どもたちは興味津々で取り囲み、「おはよう」、「さようなら」と早速スペイン語で挨拶していました。手がとても大きかったので手と手を合わせて大きさにびっくりしていました。パラグアイ人とドミニカ共和国人の二人も「とてもすばらしい経験ができてうれしい」と話していました。

④町の音楽祭りでの企画（総合を利用して「南米スペシャル」を展開）・３５時間

「南米スペシャル」

曲目・１「メロディアス　デ　アメリカ」４年全（１０８名）国旗や国の名物などを調べて作ったプラカードを上げながら歌う（写真７、８）
２「花祭り（ボリビア）」１組（３５名）ボリビアの楽器を使って（写真６）
３「パラグアイのクリスマス」２組（３６名）
４「コンドルは飛んでいく（ペルー）」３組（３７名）
５「ラ　バンバ（メキシコ）」４年全（１０８名）スペイン語で、振り付けもつけて

写真６「花祭り」（ボリビア）を演奏
左端がボンボ、次がチャフチャフ、マトラカ（ボリビア隊員に借りました）

図３　旗のクイズの答え：１ライオン
ライオンは正義のシンボルです

写真7　国名を書いているところ

写真８　歌いながらプラカードをあげる練習。うまくできました。

以下は指導案です。たつごとは我が校の総合の名称です。

４年　たつご指導案　　国際理解にふれる活動　２学期

１．単元名　　「南米スペシャル」

２．単元の目標

・南米の国々の名前や国旗を知ることにより、南米の国々に興味を持つ。

・どこかで聞いたことのある南米の音楽を中心に知り、南米音楽の身近さを知る。

・協力し、楽しみながら一つのものを作り上げ、発表を通して他者に伝える喜びを知る。

３．観点別評価の規準

・探求心（関心・意欲）・・・・南米の音楽の中にはテレビなどで聞いたことのあるのも多いことを知り、それらの曲がどのような国のものか積極的に調べようとする。

・問題解決（問題解決力）・・・・課題解決に向けて、家の人に聞いたり、図書室の本や、インターネットを使ったりして自分なりの方法で課題に取り組む。

・人との関わり（関わりの力）・・・・家の人に聞く活動や、友だち同士で協力しながら国のことを調べたり、音楽を作ったりする活動を通して人との関わりの良さを知る。

・表現（表現力）・・・・いろいろな楽器やその演奏の仕方、歌い方、動きなどを工夫して表現しようとする。

４．指導計画（計３５時間）

次	学習内容・指導（時間）	評価の観点	評価規準	評価の方法
みつめる8	・南米の音楽について、子供たちが興味関心を持って本単元に取り組められるような話を聞く。（1） ・「メロディアス・デ・アメリカ」という曲を練習し、この曲を通して南米の国々の名前や国旗に興味を持つ。（7）	◎探求心 ・問題解決 ・人との関わり ・表現	・南米の身近な曲がどのような国のものか積極的に調べようとする。	・振り返りカード ・白地図プリント
もとめる6	・南米の国々の名前や国旗を調べ、さらに表現したい国を決め、表現方法を考える。（例：旗作りなど）（6）	・探求心 ◎問題解決 ・人との関わり ・表現	・進んで表現したい国を決めて、楽しく調べている。	
ふかめる10	・ボリビアの楽器と音色、その音楽を聞き（1）さらに南米の音楽に興味を持ち、クラスごとにどのように各国の音楽を表現するか話し合う。（5） （ボリビア、パラグアイ、ペルーなど） ・学年としてのまとめるためのメキシコの曲「ラ・バンバ」を練習する。（5）	・探求心 ・問題解決 ◎人との関わり ◎表現	・進んで楽器にさわったり仲間と感想を言い合ったりしている。 ・仲間と協力して音楽を作ろうとしている。 ・話し合いや練習に意欲的に関わっている。	
うごきだす11	・「南米スペシャル」という組曲として各国のつなぎの言葉を考え（1）、学年でまとまったひとつの作品に仕上げる。（5） ・音楽祭りで発表する。（4） ・自分たちの活動をまとめ、ふりかえる。（1）	・探求心 ・問題解決 ・人との関わり ◎表現	・楽しく堂々と表現しようとしている。	

（2）全校児童に対して

①朝会を利用してパラグアイの旗のクイズ、ニャンドウティドレス、ハープのクイズと紹介・２０分

ハープのクイズとは・・

パラグアイハープ（アルパ）の曲には自然を模したものが多いのですが、次の曲は何の

動物の鳴き声を表した曲でしょう。（写真９）

１，ピリリータの最初の部分を演奏する

答え：鳥（ピリリータという鳥の鳴き声を表している）

２，カスカーダの最初の部分

答え：滝（カスカーダはスペイン語で滝）

３，トレンレチェロの最初の部分

答え：列車（トレンレチェロは牛乳列車という意味）

写真９　ハープの演奏

（３）教職員に対して

①津久井郡小学校音楽部研究会においてパラグアイの教育事情、スペイン語の簡単な挨拶、文化（食べ物、国民性等）、ハープ演奏と体験の講座を持つ・１時間半

②職員研修会３回（配属校教員対象１５分、湘北地区教員対象４５分（写真１０，１１）、神奈川県教員対象２５分）でパラグアイの配属校の子どもたちと日本の教え子たちの「笑顔のために」のプロジェクトによる交流とパラグアイの教育事情、文化（食べ　物、国民性など）、ハープを紹介

写真１０　旗のクイズ（湘北地区研究会）

写真１１　湘北地区教員研究会

４，まとめ

これから派遣される人たちへ

・写真よりビデオ（現地の授業の様子、祭りの様子など）、さらに実物。（ハープ、衣装、日本でパラグアイ人の友達を作って子どもたちに紹介するなど）

やはり子どもたち（大人でも）には１００話をするより１見せ、ふれさせるのが一番です。

・衣装があるといい（ダンス、祭りの衣装など）お面やかぶり物も楽しい。

ニャンドウティドレスは高かったので（日本円で２万円）迷ったのですが買って良かったです。派手なぐらいでも楽しいです。任地にいる間も祭りの時など着て交流を図るといいと思います。

・ダンスや現地の楽器、現地の料理などを習ってみては。

専門外でも、何かできると紹介しやすいです。料理の場合、日本で手に入る材料でできるかも重要になります。

・日本に戻ってから地域の国際行事にアンテナを張ろう。

地域の国際行事に目を向け、参加してみましょう。市役所、駅などの公共の建物に行事の宣伝があるときがあります。私はそれでＪＩＣＡの研修員（パラグアイ人、ドミニカ共和国人、ペルー人）と友達になり、そのつながりで創価大学の留学生（ボリビア人、キューバ人、イスラエル人、アメリカ人）とも友達になりました。

また、八王子市では通訳ボランティアを募集していたので登録しました。人の輪を広げることで、子どもたちにも紹介できる機会が増えるかもしれませんし、何より自分が楽しいです。

先生が生き生きと国際的な目を持って楽しんでいることが一番大切だと思っています。

派遣経験を生かした教育活動事例

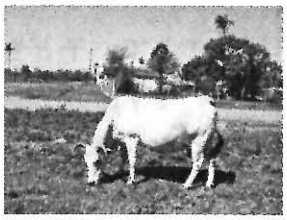
子どもたちに海外への興味を持たせよう！

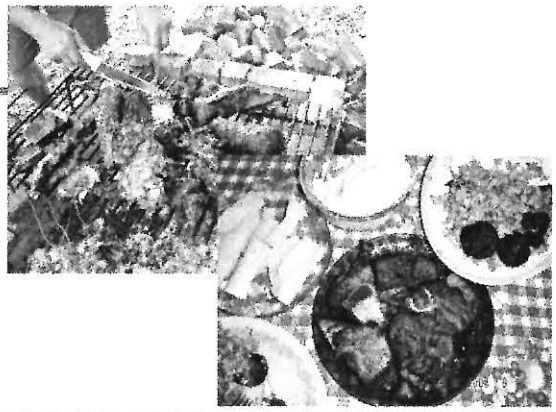
～パラグアイを中心に広がる南米音楽の世界～

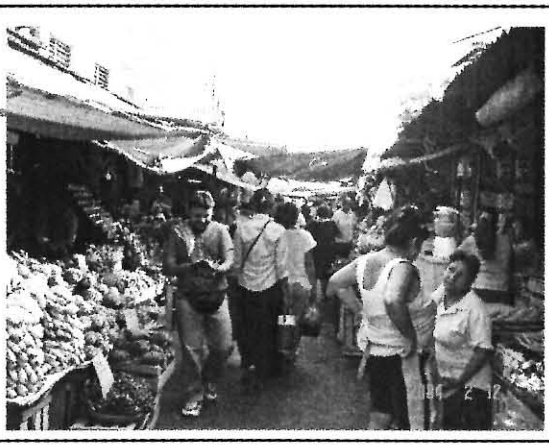
15－1　パラグアイ・音楽

永月　明子

1．パラグアイってこんな国







2. 派遣経験を生かして

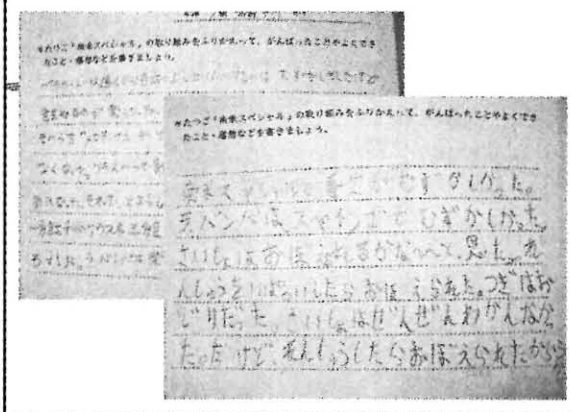
①担任を持つ4年生に対して

- 朝の挨拶、帰りの挨拶を各国語で
  （英語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、グアラニー語）
- 授業の中での紹介（旗のクイズ、ニャンドウティドレス、パラグアイハープ体験）
- 運動会でパラグアイ人、ドミニカ共和国の人（JICA研修員）を紹介
- 町の音楽祭りのための「南米スペシャル」を企画

南米スペシャルの様子

メロディアス　デ　アメリカ

ラ　バンバ



②全校児童に対して

- 朝会を利用して
  （旗のクイズ、ニャンドウティドレス、ハープのクイズ）

③教職員に対して

- 津久井郡小学校音楽研究会において
- 職員研修会3回

5. パラグアイハープの紹介

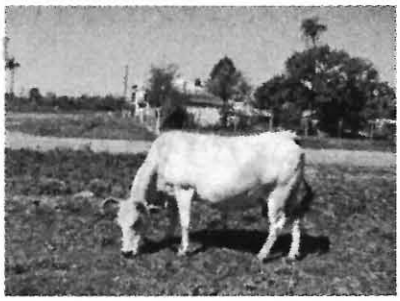
派遣経験を生かした教育活動事例

子どもたちに海外への興味を持たせよう！

～パラグアイを中心に広がる南米音楽の世界～

１５－１　パラグアイ・音楽　永月　明子

1，　パラグアイってこんな国　（海外青年協力隊の音楽教師として１年９ヶ月間、赴任）



・気候（寒暖の差が激しい。平地。）
・町の様子（のんびり、ゆったり）

・貧富の差が激しい

・南米の真ん中、アルゼンチンと
ブラジル、ボリビアに囲まれた内陸国。

・牛肉が安い。（１kg１８０円ぐらい）

・市場（何でもある。少し治安が悪い）

・マテ茶セット（テレレ）

2，　派遣経験を生かして

①担任を持つ４年生に対して

「花祭り」（ボリビア）を演奏

・日頃の帰りの挨拶を各国語で（英語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、グアラニー語）
・授業の中での紹介（旗のクイズ、ニャンドウティドレス、パラグアイハープ体験）・１時間
・運動会でパラグアイ人、ドミニカ共和国の人（JICA 研修員）を紹介
・町の音楽祭りでの企画（総合を利用して「南米スペシャル」を展開）・３５時間

「南米スペシャル」

曲目・1「メロディアス　デ　アメリカ」4年全（108名）国旗や国の名物などを調べて作ったプラカードを上げながら歌う

2「花祭り（ボリビア）」1組（35名）ボリビアの楽器を使って

3「パラグアイのクリスマス」2組（36名）

4「コンドルは飛んでいく（ペルー）」3組（37名）

5「ラ　バンバ（メキシコ）」4年全（108名）スペイン語で、振り付けもつけて

②全校児童に対して

・朝会を利用してパラグアイの旗のクイズ、ニャンドウティドレス、ハープのクイズと紹介・20分

③教職員に対して

・津久井郡小学校音楽部研究会においてパラグアイの教育事情、スペイン語の簡単な挨拶、文化（食べ物、国民性など）、ハープ演奏と体験の講座を持つ・1時間半

・職員研修会3回（配属校教員対象15分、湘北地区教員対象45分、神奈川県教員対象25分）でパラグアイの配属校の子どもたちと日本の教え子たちの「笑顔のために」のプロジェクトによる交流とパラグアイの教育事情、文化（食べ物、国民性など）、ハープを紹介

湘北地区の教員対象の研修会

3，　まとめ

・写真よりビデオ（現地の授業の様子、祭りの様子など）、さらに実物（ハープ、衣装、日本でパラグアイ人の友達を作って子どもたちに紹介するなど）

・衣装があるといい（ダンス、祭りの衣装など）お面やかぶり物も楽しい

・ダンスや現地の楽器、現地の料理などを習ってみては

・日本に戻ってから地域の国際行事にアンテナを張ろう

子どもの学びを深め、広める
～　協力隊の経験からいかせる教育活動　～
ネットライブ授業

関野　貴之
（15-1，バヌアツ，小学校教諭，秦野市立鶴巻小学校）

1、教師としてできること

小学校6年生社会の後半では、「国際社会の中の日本」といったような単元を学ぶ。それは、学習指導要領の内容にもある「我が国の国際交流や国際協力の様子及び平和な国際社会の実現に努力している国際連合の働き」に由来する。今年度、6 年生を担任している。指導要領を念頭に置きながら、教科書をぺらぺらとめくると、社会の教科書下巻には「国際」をイメージさせる多くの写真が掲載されている。授業の流れとして考えられるのは、「教科書の写真を見ながら子どもが感想を言い合い、教科書を読む。」「子どもが図書室やインターネットを駆使して、世界の国々を調べ、日本との関わりや日本がどのように貢献しているかをまとめ、発表する。」「新聞から国際的な時事問題を取り上げ、学級で話し合う中で学習内容を網羅する。」などであるが、多くの教師は苦労をする。

教師は、子どもを指導する中で、子どもと共に学び、一緒に考えていくことができる。そうすることで、子どもが学習することを推進させる。だが、世界に目を向けて学習を展開することは、子どもだけでなく教師でも難しいであろう。それは、教師自身も世界を知らないことが多いからである。

2、派遣現職教員だからできること

派遣現職教員の強みは、なんと言っても経験である。協力隊は、誰もが自負する経験を積んできている。様々な条件から誰もが参加できるわけではない。また、厳しい環境から誰もが成功し、無事に任期を終えることができるわけでもない。その協力隊に参加した教師が日本の教育現場に戻り、その経験を生かす場は少なくないはずである。

教師同士の研修の場、PTA 総会での活動報告、これから参加される方への実践報告、やはり一番は、子どもの学習活動範囲を広く受け止めることができる。裏返せば、授業を大きく展開できるのである。それは、派遣現職教員の話に説得力があるからである。経験を基にした言葉には伝える力があろう。教科書に載っている協力隊の人々が担任の先生であるというだけで、子どもの関心は膨れ上がる。前述したような授業以上のことができる。

3、インターネット・ライブ授業

（1）きっかけ

前置きが長かったが、上記のことが根底に流れていたということを知っていてほしい。さて、インターネット・ライブ授業を行っているきっかけとしては、「日本に経験を還元したい」「子どもに世界を伝えたい」と常に思っていたことから始まる。ただ、どのような形をとるのかを探っていた状態である。

そんな時、これから参加される方への報告会に顔を出したこともあり、筑波大学教育開発国際協力研究所センターの方からインターネット・ライブ授業をしないかとのお誘いがあった。なぜ、僕なのか？　主な理由は２つ。「バヌアツと日本の時差が２時間しかない」「バヌアツ派遣現職教員が過去・現在共にいる」ことであろう。

しかし、学ぶのは教員ではなく、大人でなく、子どもである。教員の想いも大切だが、どうやって子どもの学びに沿う形でインターネット・ライブ授業をするのかが初めの課題であった。

（２）活動内容

①1 回目　(2005.7.12)

年度当初立ち上げた総合的な学習の学級プランは「キャンプをしよう！」である。「自然」「昔の暮らし」「野菜」「外国の料理」「星座」の 5 グループがキャンプに向かって活動する中で学びを展開する。

その中、「外国の料理を調べ、キャンプで食べたい！」という想いを持った子どもがバヌアツに興味を持ち始めた。担任が 3 月までバヌアツにいたのだから、自然な流れである。ただ、調べたい内容を担任に聞くだけでは学びが深まらない。担任にも限界がある。全てを話しきれないし、見せきることができない。伝えきることもできない。そこで、インターネットを使って、バヌアツと交流ができるかもしれないということを伝えてみたところ、半数の子どもの反応は良かったものの、残りの半数は、よく分からないようであった。このような学習形態を経験したことがないので、想像しがたかったのであろう。

まず、考えたのは「めあては？」「どんなことをしようか？」「どんなことができるか？」である。話し合いの末、出てきた子どもの想いは、まずは「日本のことを知ってもらおう！」(写真１)「バヌアツのことをもっと知りたい！」ということである。その先に、バヌアツの料理を視野に入れながら活動できたことは、立派であった。突然、核心を突くよりも、交流をして、親しんでからの方が良いと判断したのである。

写真１　日本のことを知ってもらおう

子どもの想いと、担任の想いをすり合わせていくことが一番難しかった。子どもは自由な発想をする。担任にもやってみたいこと、子どもに学んでほしいことがあるからである。その上、ハード面でも壁があった。細かいことは後に記すが、準備に時間がかかる。学校現場で

は、まだまだ環境が整っていないからだ。
当の子どもはというと、「あんなに離れているのに、そんな気がしなかった」と言うように、手紙でも、電子メールでも、ビデオレターでもないような感想がいくつも出てきた。また、さらに聞きたいこと、伝えたいことが増え、次への意欲を高める結果が出た。子どもが自ら課題を持ち、解決していこうとする姿は、教員としてうれしいものであった。

②２回目　(2005.9.29)

「次はいつできるの？」と多くの子どもが意欲を持ったのと同時に、この活動の焦点をどこに置くのか、目的はなんなのかがぼやけてきた。一度、経験してしまえば、ものめずらしさは消える。そこで、この課題を子どもにぶつけてみた。「時間は限られている」「この授業で何を知りたいのか？学びたいのか？」など。すると、子どもから食文化というキーワードが出てきた。食文化について、もっと交流をしたいということになった。これが決まってしまえば、進むことは難しくない。PTA のお祭りでの出店もあり、カルメ焼きを作って見せることを中心にしようということになった。

今回は、環境面で苦労することはなかった。子どもでもタイピングすることができ、さらに、子ども主体の活動になった。(写真２) どうやったら、離れたバヌアツに伝えることができるかを考え、実物を見せながらクイズ形式でのやりとりにした。「カルメ焼きが膨らむ瞬間をバヌアツのみんなに見せたい！」という想いから、学級がまとまり、達成した瞬間の拍手は何とも言いがたい感動を生んだ。

写真２　子どもがタイピングをする

バヌアツからは、ブッシュナイフを使っている様子を見せてもらった。(写真３) 暗いニュースが多い日本では考えられないような大きなナイフを紹介するかどうかは、現地の派遣現職教員や僕らも事前に検討した。バヌアツでは生活必需品のブッシュナイフ。大きさが問題なのではなく、使い方が問題なのだということを伝えたかったこともあり、交流に加えられた。このような配慮も文化が違う国同士では必要になってくる。

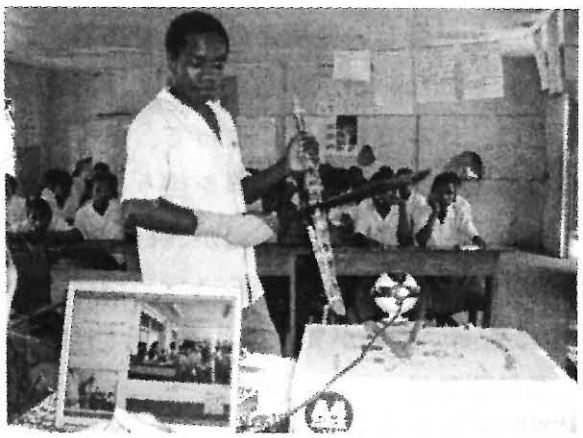


写真３　ブッシュナイフの紹介

（３）成果

クイズ形式でバヌアツから紹介された現地料理「シンボロ」は、実際にキャンプで食べるために、子どもが実際に自宅で作ってみるということまで発展した。もう一つの料理「ラッ

プラップ」も試しに作ってみたところである。子どもが家庭に戻っても、学校活動以外でも、「さらにやってみたい！」「もっと学びたい！」となれば、この活動は成功ではないだろうか。

インターネットを使っての授業は、子どもの活動をダイナミックにし、気持ちの距離を短くさせる。映像が初めてやってきたときの感動は今でも残っている。（写真４）また、次への意欲を芽生えさせる。誰かに言われたからするのではなく、自分がやりたいので活動する。この学びの方法が学校教育の選択肢の一つとして加われば、やり方によっては、子どもでも、大人でも大きな成長につながる。

また、世界の中の日本という立場では、視野が広くなるだけでなく、その国に親しみを感じ、「地球に生きている我ら」と捉える足がかりになろう。子どもの感想では、「教室の大きさは日本と同じぐらいだし、制服まであった」と、イメージとの格差がなくなったことがうかがえた。同じ人間、同じ小学生であるが、違った環境に住んでいるだけなのかもしれない・・・。こういった国際理解・異文化理解だけでなく、自分の価値観と向き合って考えるきっかけになったかもしれない。

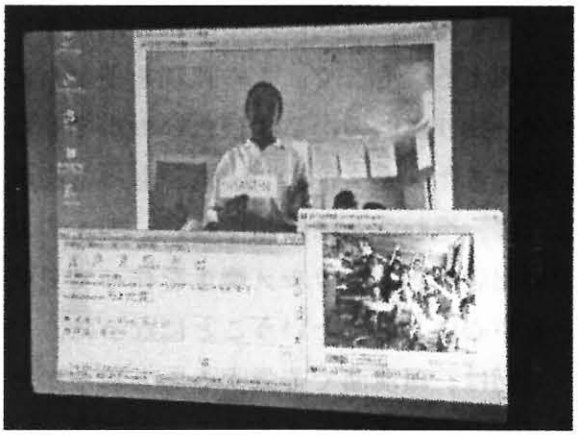


写真４　映像がある感動

（４）課題

①ハード

やはり、インターネットを充分使える環境が必要である。そもそもインターネット自体、使うことが難しい環境との交流である。いくら日本側の設備が良くてもあきらめざるを得ないかもしれない。だからと言って、あきらめてはいけない。

逆に、日本でも地域によって、学校によって、IT 環境は違う。今回、市の規定により、我が校のインターネット回線を使うことができなかった。セキュリティーが主な原因である。チャット自体はできるのだが、映像をやりとりするまで回線速度を上げることが難しかった。これから推測するに、全国、いつでも、どの学校でもできるわけではないと言えよう。また、PC にも高いものが要求される。今回は、個人用のものを使わざるを得なかった。

②学習効果

子どもの成長を見る限り、様々な学習形態の一つとして、授業に取り入れられるべきであろう。しかし、子どもの成長をどこで評価するかは、総合的な学習の時間を評価するのと同じようにやさしくないものである。日常的にインターネット・ライブ授業が可能になれば、目新しさの範囲から越えて、さらに学びを深めることができよう。そのためには、もっと多くの実践が行われ、公に検討し合う必要がある。

③今後の展開

この授業を始めるに当たって、一度では、ただ舞い上がって終える授業になってしまうよ

うな気がしていた。案の定、2回目の授業を終えている今、1回目とは比べられないほど、落ち着き、学習が成立しているようである。今年度中に3回目の授業を行いたいと子どもも、担任も考えているが、相手国の事情、主に日程の設定と派遣現職教員の入れ替わりにより、困難になってきている。

4、そして

この実践は、まだ未熟である。重なる試みにより、さらに大きな学習活動へ展開できることから、我々の挑戦も終えてはいけないだろう。このような実践を伝え、いつでも、どこでも授業として行えるようになれば、みんなの学びとなり、国際理解・異文化理解など、子どもの成長へとつなぐことができるのである。日本も、世界も成長するように教育活動を進めよう。

子どもの学びを広め、深める

～協力隊の経験からいかせる教育活動～
ネットライブ授業

神奈川県秦野市立鶴巻小学校
教諭　関野貴之
15－1　バヌアツ　小学校教諭

2006.1.7　1

バヌアツはどこ？

2006.1.7　2

2006.1.7　3

2006.1.7　4

教師としてできること

- 一緒に考える

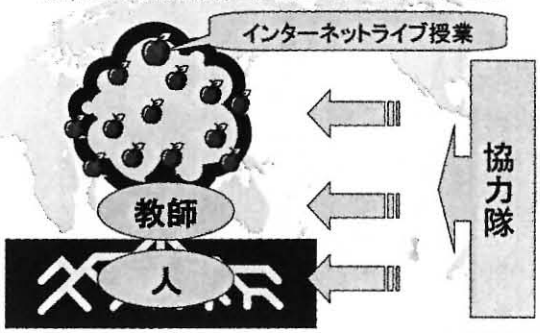
2006.1.7　5

派遣現職教員としてできること

- 一緒に考える
- 経験を伝える

2006.1.7　6

派遣現職教員だからできること



インターネット・ライブ授業

1. きっかけ
2. 活動内容
3. 成果
4. 課題

2006.1.7 8

1. きっかけ

- 日本に還元したい
- 子どもに伝えたい
- 筑波大学からのアプローチ

2006.1.7 9

2. 活動内容

- どんな形の活動にしようかな？

総合「キャンプをしよう！」

自然　昔の暮らし　外国の料理　野菜　星座

<担任の思い> 紹介

<子どもの思い>
「バヌアツのことが知りたいな！」
「関野先生が行っていたバヌアツの料理ってどんなの？」
「日本を紹介しよう！」

2006.1.7 10

2. 活動内容

- ライブ授業のめあては？
- どんなことしようかな？
- どんなことができるかな？

日本を知ってもらおう！
バヌアツのことをたくさん知りたい！！

2006.1.7 11

2. 活動内容

Part1
05.07.12

準備
- 交流先の決定
- 日程決定
- 指導案作成
- 電子メールでの調整
- インターネットの環境整備
- 子どもの願いとの兼ね合い

2006.1.7 12

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006.1.7 13

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006.1.7 14

2. 活動内容

Part1
05.07.12

- 自己紹介をし合う

2006.1.7 15

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006. 16

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006.1.7 17

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006. 18

2. 活動内容

Part1
05.07.12

- 自己紹介をし合う
- 日本紹介をする

2006.1.7 19

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006.1.7 20

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006.1.7 21

2. 活動内容

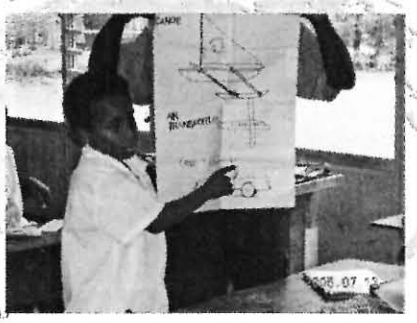
Part1
05.07.12

- 自己紹介をし合う
- 日本紹介をする
- バヌアツを紹介してもらう

2006.1.7 22

2. 活動内容

Part1
05.07.12



2006.1.7 23

2. 活動内容

Part1
05.07.12

2006.1.7 24

Part1
05.07.12

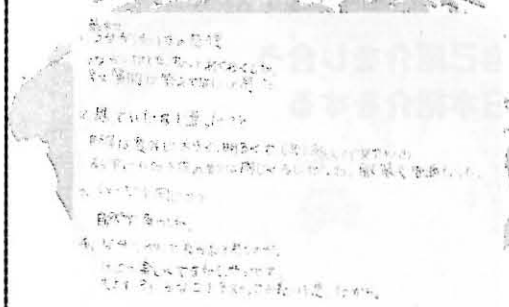
2. 活動内容

- 自己紹介をする
- 日本紹介をする
- パヌアツを紹介してもらう
- 質疑応答

2006.1.7 25

Part1
05.07.12

2. 活動内容



2006.1.7 26

Part2
05.09.29

2. 活動内容

- 食文化について意見を交わそう

<子どもの思い>
日本にある食べ物をクイズにしよう！
カルメ焼きが膨らむ瞬間を見せよう！
キャンプで作る食べ物の
ヒントを見つけよう！

2006.1.7 27

Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 28

Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 29

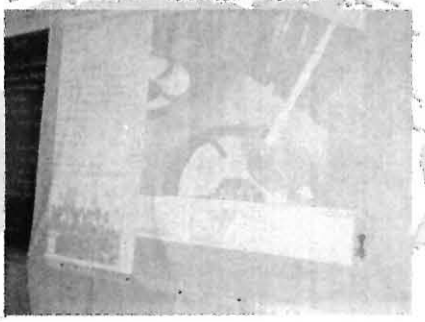
Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 30

Part2
05.09.29

2. 活動内容



2006.1.7 31

Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 32

Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 33

Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 34

Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 35

Part2
05.09.29

2. 活動内容

2006.1.7 36

3. 成果

- 親しみが強くなる・身近に感じる
- 自分の想いを持つ
- ダイナミックな活動を展開する
- 次への意欲を高める

2006.1.7 37

3. 成果

2006.1.7 38

3. 成果

2006.1.7 39

3. 成果

- 親しみが強くなる・身近に感じる
- 自分の想いを持つ
- ダイナミックな活動を展開する
- 次への意欲を高める
- 自分の価値観と向き合う

2006.1.7 40

4. 課題

- ハード面　→　適した環境作り
- 学習効果　→　学びとするには
- 今後の展開→　日程の設定

派遣現職教員の入れ替わり

2006.1.7 41

そして・・・

- チャレンジしていきたい
- 伝えていきたい

誰もができる授業
みんなの学び

2006.1.7 42

2006.1.7 43

子どもの学びを深め、広める
～　協力隊の経験からいかせる教育活動　～
ネットライブ授業

１５－１　バヌアツ
神奈川県秦野市立鶴巻小学校教諭　関野貴之

１、教師としてできること

２、派遣現職教員だからできること

３、インターネット・ライブ授業

（１）　きっかけ

（２）　活動内容

①　１回目　(2005.7.12)

②　２回目　(2005.9.29)

（３）　成果

（４）　課題

①　ハード

②　学習効果

③　今後の展開

４、そして

プログラム４

派遣隊員へのe-支援事業等と拠点システムの取り組み

筑波大学教育開発国際協力研究センター
礒　田　正　美

文部科学省拠点システム事業

派遣隊員へのe-支援事業等と拠点システムの取り組み

礒田 正美

筑波大学CRICED
教育開発国際協力研究センター

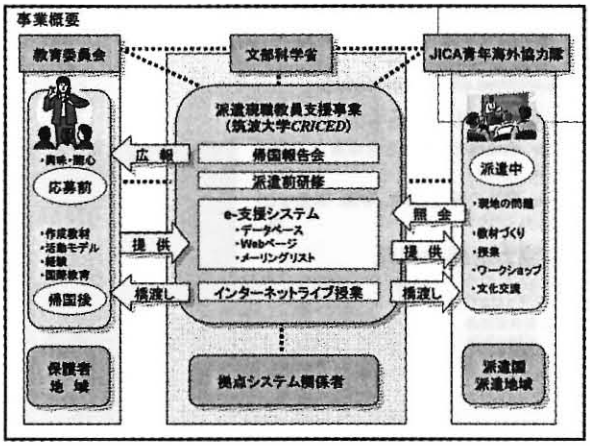
本事業の目的

教師としてできること
派遣現職教員としてできること を支援する

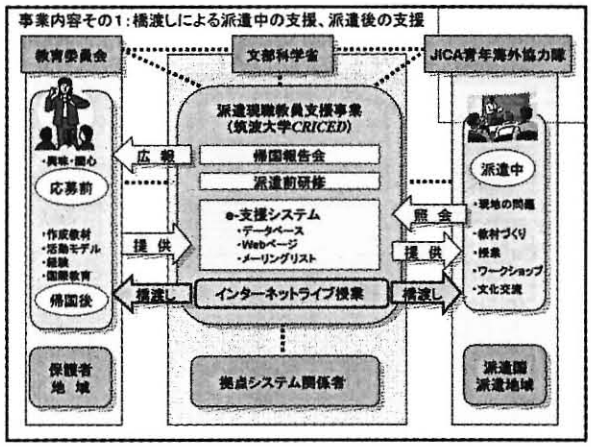
派遣現職教員がその職務を一層効果的に実現しえるように、
◆派遣前(研修等)
◆派遣中
◆帰国後(経験還元)
という3つの側面において、派遣現職教員の活動を継続的に支援していくこと。

キーワードは皆さんとのネットワーク

事業概要



事業内容その1:橋渡しによる派遣中の支援、派遣後の支援

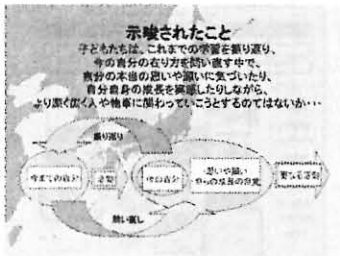


「インターネットライブ授業」

平成17年度は、現在まで、
7月12日 ラカトロ小学校ー鶴巻小学校, 9月27日 アンバエブル小学校ー老上小学校,
9月29日 ラカトロ小学校ー鶴巻小学校, 10月3・4日 ラカトロ小学校ー老上小学校, において実施。

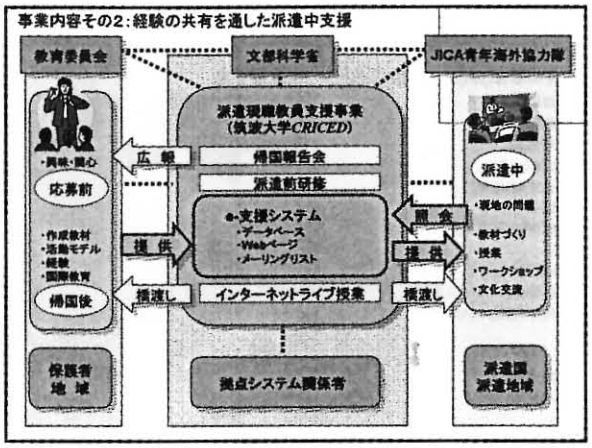
「インターネットライブ授業」

- ねらい
  - 異文化体験を通して国際社会人を育む。
- 特色
  - リアルタイム
  - 派遣経験の活用

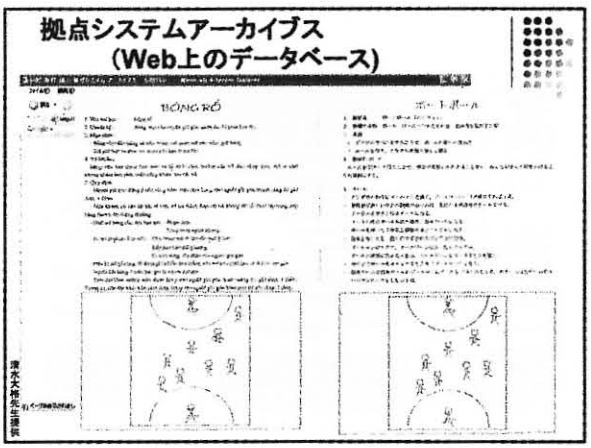


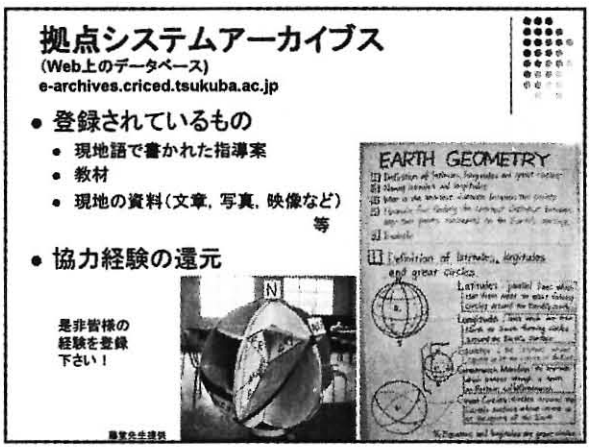
中山晴美先生スライドより

還元したい、子どもに伝えたい。

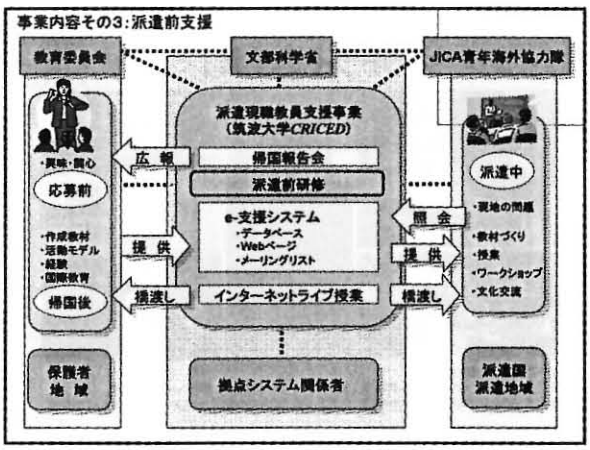

事業内容その2：経験の共有を通した派遣中支援
教育委員会
文部科学省
JICA青年海外協力隊
派遣現職教員支援事業
（筑波大学CRICED）
広報
帰国報告会
派遣前研修
e-支援システム
・データベース
・Webページ
・メーリングリスト
インターネットライブ授業
提供
照会
橋渡し
応募前
帰国後
派遣中
保護者
地域
拠点システム関係者
派遣国
派遣地域

拠点システムアーカイブス
（Web上のデータベース）
http://e-archives.criced.tsukuba.ac.jp/


拠点システムアーカイブス
（Web上のデータベース）


拠点システムアーカイブス
(Web上のデータベース)
e-archives.criced.tsukuba.ac.jp
• 登録されているもの
• 現地語で書かれた指導案
• 教材
• 現地の資料（文章，写真，映像など）
等
• 協力経験の還元
是非皆様の
経験を登録
下さい！
EARTH GEOMETRY

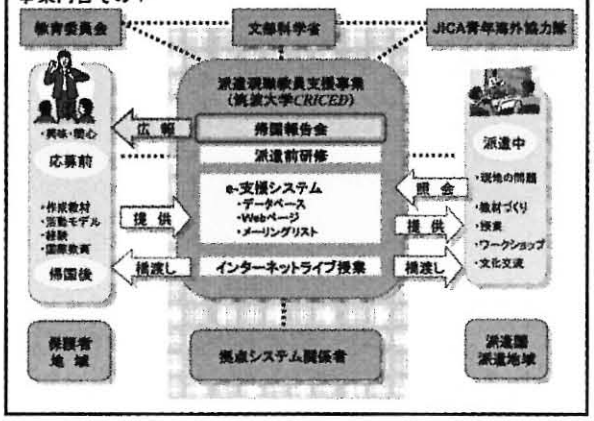
Webページ
独自共有教材の開発
学習指導要領の翻訳
フリーソフトウエアの翻訳
http://www.criced.tsukuba.ac.jp/jocv/


事業内容その3：派遣前支援
教育委員会
文部科学省
JICA青年海外協力隊
派遣現職教員支援事業
（筑波大学CRICED）
広報
帰国報告会
派遣前研修
e-支援システム
・データベース
・Webページ
・メーリングリスト
インターネットライブ授業
提供
照会
橋渡し
応募前
帰国後
派遣中
保護者
地域
拠点システム関係者
派遣国
派遣地域

派遣前研修
主催：青年海外協力隊、文部科学省、筑波大学

- 心構え，及び職務能力・専門性の向上
  - 激励
  - 開発教育・国際教育セミナー
    （帰国後の経験還元）
  - コンピュータ及び情報活用研修
    （含む：拠点システム事業の成果講習）
  - 帰国現職教員による体験談　他

事業内容その4



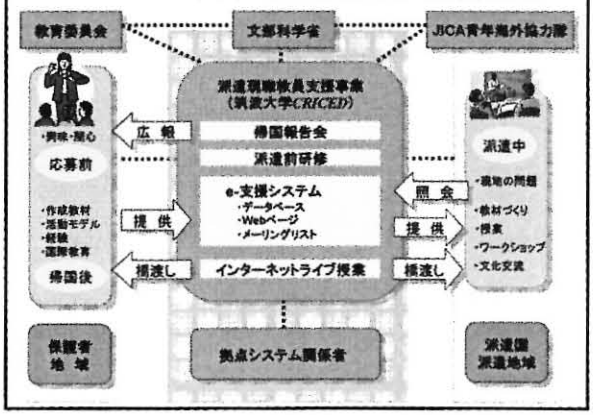
シンポジウム・帰国報告会
『開発途上国における派遣現職教員の活躍』

『開発途上国における派遣現職教員の活躍』
―文部科学省主催、JICA協力―

- 派遣現職教員の
  優れた活動を共有する
  - 現職教員特別参加制度の紹介
  - 国際教育経験の共有
  - 国際教育の推進
  - 職務能力・専門性の向上
  - 国際教育協力への環境づくり

平成17年度：活動資料集作り
春：派遣前研修→秋：科学教育学会年会、
夏・秋：インターネットライブ授業
→冬：帰国報告会
延べ35名が派遣先での経験・成果を報告

各学校からはじまる国際教育・国際協力のネットワークの拡充のハブ



資　　料

1．「The Independent」記事　(July 24, 2005)

Nouvelles Locales

EN DIRECT DES ILES

Internet : Lakatoro liée directement à une école japonaise

L'école primaire de Lakatoro s'est initiée la semaine dernière à une nouvelle technologie, celle de correspondre en direct par internet avec les écoles au Japon.

Grâce au travail très sophistiqué d'un groupe de coopérants japonais mutés dans écoles du centre de Mallicolo, dont Lakatoro, ayant mis en place un dispositif nécessaire, les 35 élèves de la classe de 6ème Année ont pu se faire connaître et de faire connaître le Vanuatu en direct sur l'écran à leurs 30 correspondant japonais de la classe de 6ème Année de l'école primaire de Tsurumaki. Les moyens mis en place ont permis d'apporter une réussite à cette première expérience : ordinateur, micro, projecteur, écran, caméra liée au web et un équipement de son. Six élèves ont été placés successivement dans chaque côté et tous se sont présentés l'un à autre en voyant les images transmises en direct sur l'écran.

Les étudiants japonais ont présenté leur mode, les saisons que traverse leur pays durant l'année et la nature. De leur côté, les élèves de Lakatoro ont présenté les îles du Vanuatu, la vie traditionnelle, le drapeau, la coutume et la culture. Ce qui a beaucoup impressionné leurs correspondants est le laplap et son préparatif, issu d'un montage effectué quelques jours auparavant.

Les petits Vanuatais ont été pendant quelques heures ambassadeurs puisqu'ils ont fait connaître le Vanuatu aux petits japonais, sa ligne domestique Vanair et l'environnement attractif aux touristes.

La session s'est déroulée pendant environ deux heures mardi 12 juillet. D'autres sessions sont prévues dans l'avenir avec d'autres écoles du Vanuatu. Les élèves vanuatais ont exprimé leur satisfaction et ont demandé qu'il y ait de suite à ce nouvel échange.

Les participants à cette première session sont du côté du Vanuatu : la classe de 6ème Année, le directeur de l'école primaire Kelson Tolish, le professeur Kimiho Chino de l'Université du Japon, une coopérante japonaise mutée à l'école de Lakatoro Yuko Tokikuni et une autre coopérante mutée au bureau provincial de l'éducation Yoko Sakoda.

Du côté japonais, la classe de 6ème Année de l'école primaire de Tsurumaki et leur maître Takayuki Sekino étaient au rendez-vous. Cet échange a été possible grâce à la collaboration de Takayuki Sekino qui travaillait deux ans à Tanna il y a quelques années. Il était devenu man Tanna.

バヌアツ共和国のカラー刷新聞　フランス語による記事

2．「The Independent」記事　(July 24, 2005)

The Independent
L'Indépendant
SILVA JUBILI 36 PEJ SPESEL
Issue N° 89
Sunday 24 July 2005
B.P. 1555 - Tél: 29999 / Fax: 29991 - 200 Vt (Port-Vila)
200 CFP (Nouméa)

Klas 6 blong Lakatoro i toktok daerek long Internet wetem Japan

Gratien Tiona i raetem

Ol studen blong klas 6 blong Lakatoro oli bin gat bigfala janis blong pas tru long niufala teknoloji, emia blong lanem samting tru long internet wetem pikja we i laef long skrin.

Long tusde namba 12 julae, olgeta 35 pikinini blong klas 6 ia oli bin toktok wetem olgeta 30 pikinini blong klas 6 blong Tsurumaki emia long Japan.

Olgeta volontia we oli stap wok long ol skul long sentrol blong Malekula oli bin mekem i posibol blong olgeta pikinini blong Lakatoro oli go tru long experiens ia. Oli bin setemap insaed long klasrum blong olgeta wan komputa, wan maekro, wan projekta, wan web kamera, wan spika mo wan skrin.

Olgeta volontia oli bin seraotem ol studen long six grup. Wan studen blong Lakatoro i bin gat wan wok blong mekem, semak long emia long Japan mo taem internet i 'on', evriwan i bin save wanem blong mekem. Wanem we ol studen blong Lakatoro oli mekem i bin kamaot laef long skrin long klasrum blong ol studen blong Tsurumaki.

Olgeta studen blong Japan oli bin soem stael blong laef mo klos blong olgeta, ol kaen wetha we oli gat evri yia mo ol samting we i raonem olgeta long taon mo long bush. Long saed blong ol studen blong Lakatoro, oli bin soemaot ol aelan blong Vanuatu, laef long ol aelan blong yumi, flag blong Vanuatu, kastom mo kalja.

Samting we i bin pulum interes blong ol studen blong Tsurumaki emi 'laplap' blong Vanuatu mo ol wei blong priperem. Long wan taem blong 2 haoa, olgeta 35 studen oli bin mekem ambasada blong Vanuatu from we oli bin soem plante samting we i save pulum ol turis blong Japan i kam long kaontri. Oli bin soemaot tu wok blong kampani ia Vanair mo ol ples we i mekem ol pipol blong ol narafala kaontri oli interes long hem.

Ol pikinini blong klas 6 blong Lakatoro oli bin lanem plante samting long smol taem ia mo oli bin askem sapos oli save go tru long ol kaen 'lesson' olsem bakegen. Olgeta we oli bin tek pat long wok ia i gat olgeta 35 studen wetem hedmasta blong olgeta Kelson Tolish, profesa Kimiho Chino blong Univesiti blong Japan, volontia blong Japan we i stap wok long skul blong Lakatoro, Yuko Tokikuni, mo wan nara volontia we i stap wok long saed blong edukesen long Malampa, Yoko Sakoda.

Long saed blong olgeta blong Japan, i gat ol studen blong Tsurumaki, titja blong olgeta Takayuki Sekino. Titjia ia i bin stap wok bifo long Tanna mo emi kam finis olsem man Tanna.

バヌアツ共和国のカラー刷新聞　ビスラマ語による記事

3．「京都新聞」記事　（平成17年9月28日付）

05.9.28 京都

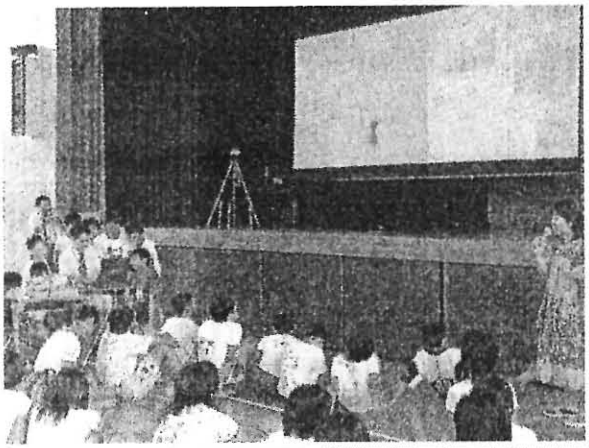
南太平洋・バヌアツ共和国児童と老上小

ネット中継通じ交流

互いに体操やダンス披露

草津

スクリーンを通じ、バヌアツ共和国の児童と交流する6年生たち（草津市野路町・老上小）



草津市の老上小の六年生は二十七日、インターネットのライブ中継で、南太平洋のバヌアツ共和国の児童と交流した。遊びや勉強について質問したり、体操やダンスを披露し合い、地球の裏側にある遠い国への理解を深めた。

バヌアツ共和国は、オーストラリア・シドニーの北東約二千五百キロに浮かぶ島々からなり、人口は約十九万人。交流は、二〇〇二年七月から二年間、青年海外協力隊員として同国のアンバエブル小で音楽を教えた老上小の枝重美香教諭（三七）が橋渡しした。

老上小の六年生百五人は、体育館のスクリーンにアンバエブル小の五、六年生二十人の映像が流れると、あいさつをした後、事前に学習した現地の言葉で「学校ではどんな勉強や遊びをしますか」と質問。アンバエブルの児童は「総合学習のほか、歌ったり踊ったり、草のボールであて合いもします」と答えていた。組み体操の様子を映像に流すと、お返しにダンスが披露された。

林宏祐君（一一）は「違う国が分かっておもしろかった」と話していた。

4．「中日新聞」記事　（平成17年9月29日付）

パソコン画面で、バヌアツの小学生と交流する児童＝草津市野路町の老上小学校で

南半球の島国

バヌアツの児童とネット交流

草津の老上小

6年生、理解深める

9/29日

草津市野路町の老上小学校（寺尾信一校長）の六年生百五人が二十七日、インターネット回線とムービーカメラを使い、オーストラリアの東にある島国バヌアツのアンバエブル小学校の児童二十人と交流した。

バヌアツは八十二の島々からなり、人口約二十一万人、総面積は新潟県ほど。老上小の枝重美香教諭が二〇〇二、三年度に青年海外協力隊の一員として現地の小学校で音楽を指導していたため、交流が実現。筑波大教育開発国際協力研究センター（茨城県つくば市）の協力を得て、ネットを用いての交流を行った。

パソコンからの動画をスクリーンに映して行われた交流会では、老上小の児童がカメラを前に「どんな遊びをしていますか」などと質問。バヌアツの子どもからは「海で泳ぐのが好き。木の陰に入るととても涼しい」などと答え、互いに交流を深めた。

岩本鈴菜さん（二）は「自然がいっぱいで楽しそうな国。いつか訪れてココナツを食べてみたい」と話していた。

（池田　知之）

5．「神奈川新聞」記事　（平成 17 年 9 月 30 日付）

神奈川新聞　2005年（平成17年）9月30日　金曜日

ネット通じ交流学習

秦野・鶴巻小とバヌアツの小学校

ネットを介し、ラカトロ小の児童にカルメ焼きを紹介する鶴巻小の6年生

インターネットを活用した海外の小学校とのライブ授業が二十九日、秦野市鶴巻の市立鶴巻小学校（下山一夫校長）で行われた。相手校は南太平洋に浮かぶ群島国のバヌアツ共和国のラカトロ小学校（マレクラ島）で、児童同士がネット画面を通じてじかにやりとりする交流学習に励んだ。（狩野　武夫）

両校のライブ授業が実現したのは、鶴巻小の関野貴之教諭（30）が今春まで青年海外協力隊員として同国の小学校に教諭派遣されていたのがきっかけ。

文部科学省の事業委託を受けて派遣教職員を支援する筑波大学教育開発国際協力研究センターの仲立ちで実施された。全国でも二カ所だけの取り組みという。

ライブ授業は六年生を対象に行われ、両校が互いの国の「食」をクイズ形式で紹介した。鶴巻小ではカルメ焼きを取り上げ、オタマにザラメを入れて火にかけて作るところから披露した。

一方、ラカトロ小からは同国の伝統料理でバナナやココナツなどを使ったシンボロを教えてもらった。

互いのやりとりでは、鶴巻小が日本語、ラカトロ小が公用語のビスラマ語を現地にいる協力隊員が通訳した。映像で伝わるライブの互いの反応に子供たちは興味津々。

西村沙耶さん（12）や渡辺萌子さん（11）らは「知らない国の人たちとおしゃべりできて楽しい」と授業に熱中していた。

ライブ授業は七月にも行われ、今回が二回目。担当の関野教諭は「子供たちの学習にどう生かすかを探りながら、年内をめどに三回目を行いたい」と話していた。

ライブ授業に興味津々

6．「日本教育新聞」記事　（平成18年1月23日付）

日本教育新聞　平成１８年（2006年）１月２３日（月曜日）　（１０）

国際教育協力シンポ

文部科学省と筑波大学が主催する「国際教育協力シンポジウム」が七日、東京都内で開かれた。現職教員を開発途上国に派遣する青年海外協力隊に参加した教員や、これから派遣される教員らが集まり、その経験を共有するのが狙い。その中で、異国で得た知識や人脈を、復帰後の学校現場で子どもたちへの教育に還元しようとする事例が報告された。

青年海外協力隊の経験と人脈生かす

ガーナの教員招き国際理解教育

愛媛・久万高原町立美川中　渡部和江教諭

エリックさんと一緒にガーナの料理を作る生徒たち

平成十五年から二年間、ガーナ共和国に家政隊員として赴任した愛媛県の渡部和江教諭。セントラル州のニューエファイセス職業訓練校で被服科の技術指導に携わった。本年度は久万高原町立美川中学校（田窪徹校長、生徒三十二人）で国語を担当している。

「隊員として得られた経験を子どもたちにどう伝えようか」と渡部教諭が考えていたところ、田窪校長も「ガーナの人たちのために、学校としてできることはないだろうか」と質問。地元の企業に働き掛けたところ、寄付が集まり昨年十一月から十二月にかけて職業訓練学校校長のエリック・アンジー・ガンサーさんの招へいが実現した。

エリックさんは三週間の滞在中、町内の学校や工場などを視察したほか、NPO主催の学習会で、住民を対象に、渡部教諭と共にガーナについて講演を実施するなど精力的に活動した。

英語で違い質問　現地の料理作る

美川中では、校内施設の見学や給食に参加。また、二年生を対象にガーナについて知る時間を設けた。生徒の「日本で驚いたことは？」という英語での質問にエリックさんは「みんなの制服がきれいなこと。トイレの温水洗浄便座や地下鉄にも驚きました」と答えていた。

一年生八人は、キャッサバやヤム芋をゆでてもちのようについた主食「フーフー」と、トマトやタマネギをすりつぶして魚や肉と一緒に煮込んだ「ライトスープ」を、エリックさんと共に調理。ガーナでは料理を大きな皿に盛り、みんなで分け合って食べることや、子どものころから家事を手伝うため、ほとんどの人が料理を作ることができることなど、生活様式の違いに触れた。

渡部教諭は「子どもたちにとっても、体験は何よりの教材。また、学校内外との連携も大切だと実感した」と話す。今後は、国語で異文化やボランティアをテーマにしたディスカッションや作文を取り入れたり、民族音楽やフェアトレード、奴隷貿易などをテーマに他教科と連携したりといった「生徒たちの生き方に響く活動ができれば」としている。

本年度は89人派遣　文科省

文部科学省は国際教育協力の一環として、独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）の青年海外協力隊に協力している。十七年度は八十九人の教員が海外に派遣される予定だ。

また、筑波大学の教育開発国際協力研究センターは、Ｗｅｂページやメーリングリストなどの「ｅ－支援システム」を整備。教員の事前研修や派遣中のサポートのほか、帰国後も継続的な支援を行うなど、派遣教員同士のネットワークづくりで中核的な役割を果たしている。

7．「教育新聞」記事　（平成18年2月9日付）

教　育　新　聞　（第3種郵便物認可）　第2600号

国際理解

現職教員が海外で教育支援

帰国後の活動なども紹介
JICAがシンポジウムと報告会

独立行政法人国際協力機構（JICA）が推進している青年海外協力隊の「現職教員特別参加制度」に参加した教員が集い、開発途上国での教育支援や帰国後の活動などを紹介するシンポジウムと報告会（文科省、筑波大学共催）が1月7日、東京・千代田区の一橋記念講堂で開かれた。同制度は、帰国後に教職復帰が可能で、会では、アジア、中南米、アフリカ、大洋州、欧州の各派遣校での教育活動が報告され、現地でのとまどいや楽しかったエピソードを交えた取り組みが報告された。

◇

報告会で体験を語った鳥取県鳥取市立湖東中学校の村上かおり教諭は、エクアドルの小学校で図工や音楽指導にあたり、落ちている枝を画材に使うなどの工夫をこらしながら、子どもたちのそれぞれの夢を絵で表現する絵画授業を進めた。

アフリカ・ジンバブエでの美術教育支援を説明する五傳木教諭

機、竹トンボづくりをしたり、身近な素材の活用としてペットボトルを使ったサンクラス制作などを進めた。

新潟県立佐渡高校の五傳木浩樹教諭は、アフリカ・ジンバブエのハイランドスクールで小学生への美術教育を担当した。

同国では、小学校段階の美術教育を実施する公立校は同校だけという現状の中で、授業では、折り紙による兜や紙飛行機、竹トンボづくりをしたり、身近な素材の活用としてペットボトルを使ったサンクラス制作などを進めた。

また、松任谷由実が歌う「春よ来い」を子どもたちに聞かせ、自由にイメージを膨らませて絵を描いてもらった。子どもたちからは様々な絵が提出され、中には、銃を構えた人々を描く子もいて、日常生活に影を落とす戦争との関係も浮き彫りにさせていたという。

さらに、現地では、日本からの支援に、まず物質的なものを期待する感覚が定着していることを問題視し、「教材開発や指導も現場で調達できる工夫できる手法を徹底したり、教育大学に赴いて現地の教員に指導スキルを教える活動を重視した」と報告した。

帰国後の教育活動に、派遣経験を生かしたという発表もあった。

神奈川県城山町立川尻小学校の永月明子教諭はパラグアイの小学校で音楽指導を生かした授業を展開してきた。帰国後、担任する4年生児童に、派遣国の中心言語となるスペイン語や英語など外国語での挨拶を教えたり、国旗、民族衣装のニャンドゥティドレス、パラグアイハープなどのパラグアイにちなんだ文化紹介をクイズなどを交えて楽しく紹介したという。

現職教員派遣制度については、JICA青年海外協力隊事務局／℡03（5352）5574。URL＝http://www.jica.go.jp

パラグアイハープを手にする永月教諭。現地での活動を帰国後の教育にも生かした

【訂正】2月9日号3面の「現職教員が海外で教育支援」の記事で「JICAがシンポジウムと報告会」とあった見出しは「文科省、筑波大学が主催でシンポと報告会」でした。訂正します。

8．「JOCV NEWS」記事　（平成18年2月15日付）

国際教育協力シンポジウム

――開発途上国における現職派遣教員の活躍

1月7日、一橋記念講堂（東京）において、文部科学省・筑波大学主催、JICAの協力で、「国際教育協力シンポジウム」が開催されました。これは、現職教員特別参加制度で参加した教員の活動内容を共有するとともに、国際教育協力のための環境作りを推進する目的のシンポジウムで、全国から多数の教員や教育関係者が出席しました。

全体会での発表

教員経験を協力隊で活かす

現職教員特別参加制度は、一人でも多くの経験豊富な現職教員が協力隊に参加できるよう、平成13年度春募集から導入されました。派遣期間を一般隊員より短くし、4月の新学期開始に間に合うよう帰国できるのが特徴です。

同制度により派遣された現職教員は、平成17年度までで256名にのぼり、帰国した現職教員119名は、それぞれ国内の教育現場で活躍しています。

分科会

分科会は、アジア、中南米、アフリカ、大洋州・欧州の4ブロックに分かれ、それぞれ5名ずつ帰国隊員が報告を行いました。

バングラデシュに理数科教師として派遣された工藤昭正OB（15-1）は、使われていなかった教室を理科実験室として再利用したことや、他の隊員と協力して現地の教科書の翻訳などの活動を紹介。聴講していた18年度1次隊として派遣予定の現職教員たちは、真剣に聞き入っていました。

全体会

帰国後の活動報告のパートでは、ガーナに家政隊員として派遣された渡部和江OG（15-1）が、帰国後にカウンターパートだった職業訓練学校の校長エリック・アンジー・ガンサーさんを地元の中学校に招いた事例を紹介しました。

エリックさんは、一年生たちと、日本とガーナの共通点や異なる点を話し合ったり、ガーナの料理を作ったりして交流を深めました。渡部OGは、「これをきっかけに、今後はボランティアや異文化交流についての授業を増やしていきたい」と話していました。

また、開発途上国と日本の学校の間で行われた交流授業の実践例の紹介も行われました。

9．速報つくば　2005年15号

速報つくば SB Staff Bulletin, University of Tsukuba

2005
15

2005年15号（通巻1107号）
発行：　筑波大学
編集：　総務・企画部
発行日：平成17年9月7日

本号の内容

・第1学期末卒業式・学位記授与式
・第2学期入学者入学式
・筑波大学開学30周年（創基131年）記念事業後援会から筑波大学に寄附
・キャンパス交通システム運行開始
・国立科学博物館と連携
・第2回大学院教務関係勉強会開催
・科研費に関するシンポジウム開催

バヌアツと我が国の教室間を結ぶインターネットライブ授業を実施

―教育開発
国際協力研究センター―

教育開発国際協力研究センターは，文部科学省国際教育協力のための拠点システム構築事業「青年海外協力隊派遣現職教員支援課題」(代表:磯田正美助教授（人間総合科学研究科)）の一環として，7月12日，バヌアツと秦野市の小学校間でインターネットを利用した国際交流授業を実施しました。この課題では，派遣現職教員による教育協力経験を日本の教育へ還元するモデル事例の開発を進めています。今回の授業では，バヌアツのラカトロ小学校と秦野市立鶴巻小学校の6年生間で，派遣教員・帰国教員の通訳を介して地理や食物についての子ども間での交流を行いました。その結果，子どもたちは双方の文化に触れる意欲を高め，自国の文化や自分自身の生活や社会について振り返ることができ，次回授業への継続課題を設定できました。

文部科学省では，現在進行中の教育課程改定に臨んで，「国際理解教育」から「国際教育」への転換を謳い，派遣現職教員の経験の活用を提案しています。今回の授業は，その提案に対する先進的モデルを提供します。

バヌアツの家屋根の材料（ナタングラの葉：中央）と日本の浴衣で自己紹介しあう子ども(右)

10. 速報つくば　2006年　2号

速報つくば SB Staff Bulletin, University of Tsukuba

2006
02

2006年02号（通巻1117号）
発行：　筑波大学
編集：　総務・企画部
発行日：平成18年1月25日

本号の内容

・平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム開催
・筑波大学ベンチャービジネスラボラトリー総括報告会開催
・附属病院内売店リニューアルオープン
・鳥山由子教授と浜田志津子教諭がインドで視覚障害者の理科教育ワークショップ講師を務め好評を博する

平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム「開発途上国における派遣現職教員の活躍」－帰国隊員報告会－が開催される
－文部科学省・筑波大学主催　国際協力機構（JICA）協力－

筑波大学は，文部科学省とともに，国際協力機構（JICA）の協力を得て，青年海外協力隊派遣現職教員支援制度にかかるシンポジウム「開発途上国における派遣現職教員の活躍」を，1月7日に一橋記念講堂にて開催しました。教育開発国際協力研究センター（CRICED），文部科学省国際教育協力のための拠点システム事業「派遣現職教員支援課題」（代表：礒田正美助教授（人間総合科学研究科））のもとで実施された今回のシンポジウムには，平成18年度に途上国へ派遣される派遣現職教員25名をはじめ，教育関係者，国際協力関係者171名が参加しました。

シンポジウムでは，文部科学省初等中等教育局国際教育課課長補佐齋藤晶子氏による講演「国際教育の推進」の後，4分科会（アジア，中南米，アフリカ，大洋州・欧州）に分かれての派遣現職教員による任地での活動報告，帰国後の派遣経験を生かした教育活動事例報告，拠点システム事業「派遣現職教員支援課題」の紹介が行われました。

また，文部科学省国際統括官井上正幸氏は挨拶の中で，青年海外協力隊文部科学省現職教員特別参加制度の意義を述べました。協力機関である国際協力機構理事松岡和久氏はJICAとしての学校教育分野における派遣の拡大の必要を述べました。主催者として，油田信一副学長（研究）は，派遣現職教員の活躍を称え，本学の国際貢献・社会貢献事業の一環として派遣現職教員支援課題を推進することの大切さを述べました。

青年海外協力隊現職教員特別参加制度の意義を述べる井上正幸文部科学省国際統括官

日　時：　平成18年1月7日（土）10：00～17：00
場　所：　一橋記念講堂（学術総合センタービル内）
（〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2）
東京メトロ半蔵門線／都営地下鉄三田線・新宿線「神保町」A8,9出口　徒歩3～5分
東京メトロ東西線「竹橋」1b出口　徒歩3～5分
主　催：　文部科学省、国立大学法人筑波大学
協　力：　独立行政法人国際協力機構（JICA）

●プログラム1　派遣の制度と意義
―国際教育の推進―
文部科学省国際統括官
国際協力機構理事
文部科学省初等中等教育局

●プログラム2　派遣現職教員の活躍（分科会）
派遣現職教員による任地での活動報告

●プログラム3　帰国後の活動と協同
派遣経験を活かした教育活動事例報告
「インターネットライブ授業」報告

【参加申し込み先】
〒305-8572　茨城県つくば市天王台1-1-1筑波大学教育開発国際協力研究センター
文部科学省拠点システム委託事業「派遣現職教員支援課題」
http://www.criced.tsukuba.ac.jp/jocv/20060107/
Tel:029-853-6573　Fax:029-853-7288　E-mail:jocv@criced.tsukuba.ac.jp

文部科学省拠点システム構築委託事業実施報告書

平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における派遣現職教員の活躍

―帰国隊員報告会―

報告書

発　行：平成18年２月
発行者：礒田　正美（CRICED）
筑波大学教育開発国際協力研究センター（CRICED）
文部科学省 拠点システム構築委託事業
派遣現職教員支援課題
〒305-8572　茨城県つくば市天王台1-1-1
電話　029-853-7287　　FAX　029-853-7288
E-mail: jocv@criced.tsukuba.ac.jp
http://www.criced.tsukuba.ac.jp
編　集：茅野　公穂（CRICED）
印　刷：前田印刷株式会社　筑波支店